
マジ レボ！ ～ 剣と魔法と革命と～

星峰 月輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジ レボ！ ～剣と魔法と革命と～

【Nコード】

N0366Q

【作者名】

星峰 月輝

【あらすじ】

「あなたを迎えに来たのよ」

銀月の夜、物語は突然現れた銀髪少女との出会いから始まる。

戸惑う俺をよそに、謎な美少女は強引にとある場所へと導くのだが……。

なんとそこは異世界にある学園の女子寮、彼女の部屋だった！？

平和系異世界リユミシアルを舞台に紡がれる、ドタバタ学園生活＆魔法バトルファンタジー。

さあ、まだ見ぬ世界で新たな一歩を踏み出そう。

Prologue 0 - 1 【始まりと運命の銀夜】

Prologue 0 - 1 【始まりと運命の銀夜】

凍てつく冬夜の風に吹かれた俺を銀の満月が見下ろす。

今宵は皮肉にも今まで見たこともないくらい綺麗な満月だ。

「ほんと、神様からの嫌がらせだなこりゃ」

なんとも言えない黒い感情で心が染まる俺を美しい月が嘲笑う。

——ざまあ見ろと。

とある丘、木々が生い茂る道無き道の先を越えたこの場所を、いつどうやって見つけたのか自分でさえ覚えていない。

ただ星と月があまりにも綺麗に浮かぶこの夜天を拝みに来るのは、いつになっても“此処だけ”が俺の居場所である証拠だろう。

悲しきかな、そんな大切な場所で俺はついにしでかしてしまったのだ。

「うう、寒いな。やっぱり制服の上にコレだけまずかったかね」

マフラーと手袋はもう2日着けずにこのままだ。凍える風に指の先まで赤く染まっているのはそのせいだろう。

両手に感じる刺激は寒さを通り越してもはや痛みである。

近くに座れそうな平らな岩を見つけて腰を下ろし、太腿の上でそっと両手を摩擦する。

古典的なやり方だが暖かい。そんな小さなことで1人笑みを浮か

べてみた。

「いやいや、普通に笑っていられる状況じゃないぞ。何やってんだよ俺は……」

戒める気持ちで軽く右頬をつねり、さらに捻ってグリグリしてやる。

もちろん自分でやっても全然痛くないので意味が無いのだが。

よし作戦変更だ。落ち着いて大きく深呼吸。

今置かれているこの状況を、最初からよくよく整理するために。

「すう、はあゝ、すう、はあゝ」

俺を苦しめる冬の空気はどういうことか新鮮で美味しく感じる。そしてろくな感触がない両手を口の前に持ってきて、白い息を吐き出す。

うん、やっぱり落ち着くには深呼吸が一番かも。

——さあ、冷静になったところで早速独り語りを始めようか。俺のことは置いておいて、まずは魔法についてお話しよう。

この地球という星にはマホウと呼ばれる技術が存在する。魔術とも言われるそれは、この世界で起こりゆる現象を人為的に再現できるのだ。

例えば道具を使わずに火を作り出したり、電気を起こしたり。他にも違う場所へレポートしたり、空を飛んだりなどと、とにかく色々できる。

もちろん人は魔法が使えなくても、日常生活に支障はない。
実際魔法を使わずとも豊かだった過去の歴史がそれを証明している。

だから魔法はあくまで“使えたら便利なもの”と言うのが相応しいな。

しかし数百年前から発達した魔科学によって世界は変わった。

ありとあらゆる魔法は魔法構成式フォーミュラによってシステム化され、各国の都市部を中心に現代魔法は急激に発展していったのだ。

それこそ、魔法が使えないと満足に生活して行けないように。

ちなみにちゃんとしたステップさえ踏めば子供でも簡単に魔法は行使できるようになっている。

必要なモノは人の生命力であるエーテル、空間に満ちている魔力、そして行使する魔法のフォーミュラ。

この3つを組み合わせるだけ。小学生レベルで教わることだ。

エーテルで魔力を統制し、魔法構成式を元に魔法を行使する、といった具合に。

とにかく人間なら誰でも使える魔法ほど簡単で便利なものはない。
結果的に魔法と魔科学の発展は人々の暮らしをより良いものに変えたのだ。

俺の住んでいる日本も、当然例外ではない。

——それを前提にやっとな俺自身の話へ繋がられる。

そんな素晴らしき世界で面白いことに“俺だけ”が魔法を使えない。

何十億人もいる人間の中で“俺だけ”な。

言い忘れたが御剣^{ミツルギ} 拓磨^{タクマ}、俺の名前だ。

名前のとおり日本人で都市部の中に住んでいる16歳。

魔法を使えないことの理由はいたって簡単。エーテルの生産量が極端に少なくなったこと。

ご察しのとおり俺の作り出せるなけなしのエーテル量じゃ、魔力の制御ができずに魔法が使えないという具合だ。

しかしそうだった理由が未だによく分からないんだけどな。4年前の誕生日ぐらいに気付いたらそうになっていた。

詳しく思い出そうとしてもその辺の記憶は曖昧だし、なぜか酷い頭痛に襲われる。

まるで呪いにでもかけられたかのように。

もしくは今夜のように神様の嫌がらせかもしれないけど。

とにかくも、そんな俺の扱いを想像するのは難くないだろう。

比較的イレギュラーな俺の存在は、全世界に公表され嘲笑の的となった。

そりゃそうだ。人類に1人の超欠陥人間だからな。

——いや、そうじゃないか。

正しくは『人の姿をした下等動物』だっただけか。まったく酷い話だ。

全国テレビで本当にそう取り扱われてたんだからな。

そんなこんなで友人はあつという間にいなくなり、両親には家の恥だのなんなのと罵倒されるように。

『何かヤバい黒魔法を使ったからそうなったんだ』っていう当時の噂は今なお健在。

無論俺はそんなことはしていない、と信じたい。記憶ないけど。

それでも変わらず接してくれたのは慕ってくれる妹と付き合いが長い奴らぐらい。

だが中学に上がって物心付いた妹は次第に俺を嫌悪するようになり、古い友人たちも俺を見限って離れて行った。

仕方ないといえば仕方ないんだけど、やっぱり寂しいな。

家や学校は生きるために最低限の世話はしてくれるが、やはり落ち着いた居場所にはできない。

そもそもこの世界に俺の居場所となる場所があるのかも怪しいものだが。

……もしあるのだとすればこの場所ぐらいだろうか。

さっきも言ったが、ここから見上げる星空は本当に最高だ。

だが今夜はあまりいい気持ちで夜空を見上げることはできない。なぜなら隣には、3人の男たちが息をせずに倒れているのだから。

・
…

転がる死体にはどこにも外傷がない。

当たったのは鉛玉ではなく、実体を持たない魔力そのものだから

なのだろう。

「まったくお前らはいつも人を馬鹿にしすぎだよ」

返事が返ってこないのを知っていて俺は宙を睨んで語りかける。
自分のしでかしたことを釈明するように。

「急に刃物を向けられたら、普通こうしちまうだろうがよっ！」

月と同じく白銀に輝く護身用の魔銃は見事にその役目を果たした。
改造に改造を重ねて作ったこの魔銃は、ほんの僅かな魔力を装填
するだけで強大な魔力弾を放てる。

「……なんでだよ」

俺は人を殺した。自分自身の手で。

もちろん俺は人を殺すことで快感を得る異常者じゃない。

それに人に向けて撃つたのはこれが初めてだからな。

間抜けな顔をして死んでる金髪の男を改めて見るが、どこからど
う見てもやっぱり知らないヤツだ。

ただ脅かして面白がるだけのつもりだったのか、コイツらはここ
に向かっている俺の後をつけてきたらしい。

情けないことに後ろから声をかけられるまで気付かなかった。

品のない声に振り返るとそれはもう見るからにチンピラで。

わざわざこんな時間まで相手をしてくるなんて相当な暇人なのだ
ろっつ。

相手にするのも嫌なので、俺は適当に聞き流してさっさとその場を離れようとした。

が、その味気の無い反応が癪にさわってしまったのか、この方々はいきなりナイフを取り出して襲ってきたのである。

後はもう説明する必要はないだろう？

少し魔力を集めて引き金を引くだけ。その作業の3秒後にはもう事切れていた。

それが数十分前の出来事で、どうしようかと今に至るわけだ。

もしも4年前、力を失っていないければどうなっていただろうか。

俺は魔法が好きだった記憶がある。

友人と魔法構成式の暗唱を競いあうのが好きだったハズだ。
それだけじゃない。妹が、両親が、友人が、先生が、街の人も、みんな大好きだった。

きつとそれはずっとそのまま変わらないはずだったのだろう。
そして今みたいに人に殺されそうになることも、殺すこともなかっただろう。

「……俺はもう、全部失くしてしまったんだな」

生きるための信念も、仲間も、本当に全部な。
でもそんなことに気付いたのは別に今の話じゃない。

誰かが1人、また1人と俺の元から消えて行くたびに。
1人でこの丘に足を運んで夜空を見上げるたびに。

この悪意に満ちた世界で一步ずつ歩み出すたびに。

とつくに気付いてたさ。そんなことは。

「俺の人生、お先真つ暗。一寸先も闇ばっかりだよ」

捻り潰してやりたくなるほどに綺麗で。

神様の嫌がらせにしか見えない銀月に向かって言い捨ててやった。

「そう、それはとても悲しいことね」

「——ッ!？」

それに答えるように、不意に少女の呟くような声が聞こえた。

驚いて振り向くとやっぱりそこには1人の女の子が立っていて。
不自然すぎるぞオイ、何で女の子がこんな場所に。

少女は地面に倒れる男達を一瞥すると、今度は魔銃を握る右手に
力をいれる俺の瞳を覗き込む。

「それにしても今宵の旅立ちには最高の銀月じゃないかしら？」

溢れる月光を短い銀の髪に浴びながら、彼女は静かにそう告げる
のだった。

ああ、神様。アンタは相当俺のことが嫌いらしいな。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Prologue 0 - 2 【異界への誘いと】

Prologue 0 - 2 【異界への誘いと】

「それにしても、今宵の旅立ちには最高の銀月じゃないかしら？」

そう言い放つと少女はこちらに歩き出す。

倒れる男達には全く興味を示さず、澄んだ紫の瞳には俺だけが映っていた。

なんだチンピラさんたちのお知り合いじゃないのか？

俺と同じ黒いローブを中途半端に羽織る彼女。

この辺りでは見かけぬ制服を、その黒衣の隙間から覗かせて。

妹よりも背の低い少女は揺れる銀髪で月光を誘う。

その月光ではつきりと顔を確かめるが、なんとまあ皮肉なこと。

——凛々しいその顔立ちは美少女そのものだった。

「悪いけどそれ以上近付かないでくれるか？」

動けば撃つぞと。

俺はついに美少女に魔銃を構えていた。まるで悪者みたいに。

「……それは冗談かしら？ 笑ってあげるわ」

言い放つ俺に不気味な笑みを浮かべ、ゆつくりと。

少女は立ち止まる素振りを全く見せずに、こちらに進み続ける。

……おいおいアンタの冗談は一向に笑えないぜ！？

「てめえ本当に撃つぞ、止まれ！」

「なら、撃てばいいじゃない？」

目を見開き、声を荒げた俺の警告を鼻で笑う。

そんな勇気があるのか？ と。

「——ざけんなよッ！」

そんな安い挑発に乗せられてしまった俺は、辺りに浮遊するありつたけの魔力を装填してトリガーを引く。

もちろんすぐに『ああしまった』と後悔することになった。

これであんな少女にまで手をかけることになってしまったのだから。

ほんの少し動けなるほどに加減すればよかったのに。

いくら魔力の制御ができない俺でも、それくらいはできたはずだ。

——クソッ！

…… 本当に、俺は駄目なヤツだな。

奥歯を強く噛み締めながら、俺は銀髪的美少女からそつと目を逸らした。

どんなに後悔したところでもう遅いのだから。

俺の放った無色の魔弾は少女の左胸に一直線。——そして命中。

後はそこに転がるチンピラどもと同じように死ぬだけだ。

「——残念無念。あなたの負けよ」

そのはずなのに、到底信じられない声が。冷たい風に乗って耳に届いた。

「あなたの扱えるどんな力でも、今の私には届かないのだし」
「なっ！？ そんな——」

そんな、馬鹿なことが！？視線を彼女に戻して驚愕する。

何事もなかったかのように苦しげな表情は一切なく。

それどころか軽口を吐き、無傷の体を披露して見せたのだから。

魔法障壁で防いだのか？ いやいやいや……。

一瞬であの魔力弾の威力を完全に無効化するほどの障壁って。
もしそうならコイツは只者じゃないぞ！？

どんなに安く見積もっても国家魔導師クラスは確実だ。

こんな少女がなんて信じがたいが、そう考えざるを得ない。
今度はさつきとは違う意味で『ああしまった』と思った。

こんな娘を見せつけて、神様は俺にどうさせたいのだろうか。

そんなことを思考している間に、少女はすぐ目の前にいた。
手を伸ばせば届いてしまう距離にまで。

「くっ……」

言葉が出ない。こんなに寒いというのに額に汗を感じる。

「そんなに怖がらないで欲しいものね。別に私はあなたに危害を加えに来たわけじゃないわ」

落ち着いた少女の声に初めて、さっきから感じる不思議な感覚が恐怖だと気付いた。

「あ、あんたは何者？ ……俺をどうするつもりだ？」

俺は少しずつ冷静になり言葉を繋げていく。

それを聞いているのかいないのか、銀髪少女は俺の瞳をじっと見つめ続けていた。

「あなた、やっぱり覚えてないのね？」

彼女の口から問いの答えではなく、よく意味が分からない疑問文が返ってくる。

ハテナマークを浮かべる俺に一瞬少女は表情を暗くするが、すぐに顔を上げて言葉が続けた。

「私の名前は冬霞。あなたを迎えに来たのよ」

「トウ力？」

全く知らない名前だ。って、それより凄い問題発言じゃないのか今の！？

怪訝な顔を浮かべて俺は少女の言葉の続きを待つ。

「ああ、“冬の霞”^{かすみ}でトウ力よ。由来は――」

「ちげえよそっちじゃなくてっ！」

何故か自分の名前について語り出したトウ力を止める。
俺が今訊きたいのは……。

「俺を迎えにってどういうことなんだよ？」

「リリス学園長はあなたを“ 改变者の鍵 ” だと言ったわ」

大変ださっきから会話がキャッチボールじゃない！？

「すなわち私たちに必要な存在。だから私が迎えに来た」

改变者、鍵？ この娘は本当に何を言ってるんだ？

トウ力の口から出される単語でさらに頭が混乱してしまう。

「何を言ってるのか分からないと言いたげな顔ね」

「うつ……、確かにそうだが当然の反応だと思うぞ」

だってもう会話のドッジボールじゃないか今の。

しかも俺の質問スルーされてるし。

「大丈夫。もつと詳しい説明は、“ 向こう ” で嫌というほど聞くことになる」

「おい、だからどこに連れて行く気なんだ？」

「……そうね」

今度はちゃんと答えるよと再度質問する。

すると銀髪少女は、トウ力はいりえないところを指さした。

「——え、月？」

コクコクと頷くトウ力さん。んなアホな。

アンタは月から来たというのですか？

「あなたは何もする必要はないわ、そこに立ってるだけでいい。私の転移魔法と一緒に向こうまで飛ぶから」

「ちょ、ちよつと待て！ 俺はまだ行くなんて一言も――」

「残念ながらあなたに拒否権はない。それに、まだこんな世界にいたいと思うの？」

「――ッ!？」

少女の凍るような言葉が俺の心臓を貫いた。

俺の動揺を知ってか知らずか少女は構わず続ける。

「あなたは言った。全て失ってしまった、一寸先も闇と。何か思い残すことでもあるのかしら？」

「……それは、でも」

「どうしても抵抗するなら、力づくでも連れていくわ。ちなみに私、かなり強いわよ？」

「わ、分かった！ 行くよ、行けばいいんだろ!？」

再び不気味な笑みを浮かべる少女に、俺はそう答えることしかできなかった。

彼女の言うことは的を射ていたし、第一勝てないと確信していたのだから。

俺の返事に満足気に頷いた後、

「準備があるから少し待ってて」と少女は満月に向かって何かを呟きだした。

足元に小さな白の魔法陣が展開するところを見るに、どうやら本当に転移魔法を詠唱しているようだ。

……マジで月に連れて行かれるのか、俺？

——あれから30分ほど時間が経った。

俺は先ほどまで座っていた岩に腰掛けて銀髪少女を見守っている。さっきから逃げる絶好のチャンスなのだが、なんだかとてもなく嫌な予感がするので実行に移せない。

だってもし捕まったら……。想像したくない。いろんな意味で白い溜息が出た。

その時、銀髪少女が『終わったわ』と小さな声で呟く。何が終わったとはもちろん“行く準備”のことだろう。結局俺は逃げ出せずにトウカの元へ足を進めた。

「なあ、ほんとに月に行くつもりなのか？」

案外真剣に尋ねた俺を、トウカは呆れた顔をして睨んだ。

「あなたはバカなのかしら？ 月に酸素はないわよ」

「いやそれは知ってるけど！？」

「何を勘違いしてるのかは知らないけど、目的地は月じゃない」

「うん？」

「なんか話が違っ……。アンタさっき月を指差して頷いてたじゃないかよ？」

「残念。それは月を、月光を利用するという意味でしたさ」

「酷いジョークだな」

さっきのは狂言だったようで、どうやら行き先は月ではないらしい。

とりあえずハハハと笑っておく。

「で、月じゃないとすれば結局何処へ？」

アメリカの国際魔術機構、ヴァチカンの星煌庁。

他にも俺をオモチャにしたい魔術結社なんて腐るほどある。

一体この銀髪少女トウカはこの使者なのだろうか。

「私たちの住む世界は地球とは違う次元体よ」

「へえ」

コイツまた狂言を。

確かに月光にはかなりの量の魔力が付加されていると聞くけれど。

「次元体を超える転移魔法は莫大な魔力を消費するの」

「お、おい？ お前本気で……」

そう言つてトウカは俺の両手を握り、目を瞑つて魔法構成式の詠唱を始めた。

ちよつと待てよ。まだ俺は納得がいていないぞ。

今の説明じゃ、まるで異世界にでも連れて行かれるみたいじゃないか！？

冗談にしか聞こえない内容だが、そうにしか聞こえない。

こんなヤバい状況、普通ならこの手を降り切つて逃げ出すだろう。

——だが人間とは不思議なもので。

そんな恐怖心より俺の心の奥ではどこか嬉しさがあつた。

そうかそうか、俺はやはり待ち望んでいたんだ。

こんな少女がどこか知らない世界へ連れ出してくれる日を。

だってそうだろう？　俺はとつくの昔に気付いてたんだから。

この世界に俺の居場所はどこにもなく。

助けの手は差し伸ばされず。それ求める手は届かない。

全てを失くして孤独にただ孤独、月光が降り注ぐ星空に嘆く。

そんな悪意に満ちた世界から逃げ出せる、これは神様が俺に与えてくれた最高のチャンス。

——ハハハッ、なんだ神様アンタ実はツンデレだったのか？

「……開け、フィア・ボータライズ銀月の光扉」

詠唱を終えたトウカが最後に魔法名を唱えた瞬間、いつの間にか地面に描かれた銀色の魔法陣は光を放ち、俺の視界を完全に白く覆い込んだ。

この夜この瞬間、御剣拓磨は地球上から失踪した。

正確にはこの次元体から別の次元体、つまりは異世界へワープしたのだが。

全ての真実を知る者は地球上に誰１人存在しない。

『人間以下』の失踪は世界的に大きく取り上げられ、世界規模で搜索魔法が行使されたが当然その居場所は掴むことができなかった。よって数週間後、国際魔術機構は『御剣拓磨の死亡』を公表することになるのだった。

・
…

「さあ、着いたわよ」

彼女の声と同時に眩い光が消えたのを感じ、ゆっくりと目を開ける。

「——なんだここ？」

最初に気付いたのは気温。

2月になりますます酷くなった冬のそれを全く感じない。そして身に染みる冷たい風もその姿を消していた。

まだ目がはつきりしないのでよく見えないが、さっきまでいたはずの星夜の丘ではないようだ。

「なんだとは失礼ね。私の部屋よ」

だんだん視界がもとに戻るのも重なって、この空間が小さな部屋だと認識する。

「おお、ぬいぐるみだらけだ」

タンス、机、ベッド。

家具のあちこちに可愛らしく並べられたぬいぐるみ。

それは今想像した銀髪少女の自室のイメージとは随分違っていた。

「ちよっ、あんまりジロジロ見ないでよ」

握りっぱなしだった白く小さな手を静かに離し、トウカは目を細くして釘をさす。

「あ、ああ。悪い……」

いや女の子の部屋なら普通こんなものなのかもしれないが、俺にとって彼女は未だ不審者かつ恐怖の対象なのだ。

こっ、もっと恐ろしいところなのかなと。深くは言わないけど。そんな想像に反して割と可愛らしい少女の部屋に俺は困惑していた。

トウカ
——冬霞。

彼女は俺を迎えに来たのだと言う。

その理由も色々言っていたが、正直なところ意味不明だ。

もし彼女の説明を単純に信用すれば、ここは異世界ということになる。

次元を超えた地球とは異なる世界！

……今更だが実に胡散臭い話だ。

そもそも異世界なんて存在するのだろうか？

どこかのアニメやら小説やら、数百年前から人間が夢に描いてい

る世界。

正面にある桃色のカーテンの間から少し外を眺めてみる。
外が暗いのでよく見えないが、どうもそういう雰囲気じゃない。

「ここ、本当に異世界なのかよ?」

彼女の転移魔法を使って辿り着いたのは、日本のどこにでもある
ような普通の部屋だった。

「間違いないわ。ここはリュミシアル魔法学園第3女子寮」

しかしトウカは黒いローブ片付けながらそう言い切った。
躊躇いなく答えるその様子に信じてしまいそうになる。

「リュミシアル? 聞いたことない学園だな。……ん?」

「ここはリュミシアル魔法学園第3女子寮よ」

「ご丁寧にリピートありがとう。おかげで大変なことが分かったぞ」

仮に百歩譲ってここが異世界だとしても、今の彼女の言葉には指
摘せざるをえない文句があった。

「皆まで言うな」とトウカは右手の人差し指と中指を俺の口前に
添える。

「大丈夫、私は寮長。男子であるあなたに今夜限りの居住権を与え
るわ」

『言ってやったぜ!』と言わんばかりのしたり顔である。
お前寮長なのかよ。つか寮長にそんな権限あるのか?

「そんないい加減な――」

「今夜はもう遅いわ。とりあえず今夜はここで寝なさい」

「は、えっ、ここですか!？」

「ええ、そのソファ―と毛布使っていていいから。じゃおやす〜」

「お、オイっ!？」

トウ力はそう言い放つとベッドに身を投げる。

信じられない展開に慌てて問いたただそうとするが――。

「――スウ」

ね、寝ていらつしやる……。『おやす〜』じゃねえよ。

つかそのまま寝たら確実に制服皺になるぞ。

こんないい加減なヤツに着いてきて本当に大丈夫なのだろうか？

ま、いいか。確かに今日はもう疲れてしまった。

彼女のお言葉に甘えてカーテンの前のソファ―に向かう。

「……ん？」

その時、心地良さそうに眠る少女の寝顔を見て立ち止まる。

あれ？ 俺コイツをどこかで見た事あるような……。

そつえばさっきもコイツは。

『あなた、やっぱり覚えてないのね?』

そつだ、確かにトウ力はそう言った。でも……分かん。何か引つかかるけど思い出せない。

部屋の明かりを消してから黄色のソファ―に横たわる。
少し狭いが寝られないわけじゃないな。

トウカと名乗る謎の少女との出会い。

この少女に導かれるまま、無理やり連れ出された。

いや違うか、喜んで逃げ出したんだ。

本当に俺はどこまでも弱い。

そんなことを思いながらゆっくりと深い眠りに落ちる。

この夜から御剣拓磨^{オレ}の運命が急速に加速するなんて、夢にも思っ
はすがなかった。

・
…

これは2人が部屋に着いて数分後の出来事。

深夜の学園塔、その学園長室に1人の青年が現れた。

「学園長、冬霞^{トウカ}が彼の回収に成功したようです」

トウカと同じ銀の、そして彼女よりも若干長い髪。

背は高く、彼のメガネは整ったその顔によく似合う。

彼は部屋の奥で窓から外を覗いていた黒髪の女性にそう告げた。

「ええ、無事に連れて来てくれたみたいですね」

「はい、特に問題はなく」

「あなたたち兄妹とは4年ぶりの再会になるのかしら？」

学園長と呼ばれた女性は青年に向き直るとそう言って微笑む。

「……明日はしっかりお願いしますよ？」

青年はあえて質問には答えず、代わりに大きな欠伸をする。
もう時計の針は日を越そうとしていた。

「こんな時間までお仕事ご苦労様。副会長さん」
「あなたほどではありません。では失礼」

スマートにそう返して彼は学園長室を出た。
残された女性はそれを見送ってから、再び窓に近寄り外を眺める。

「ようこそ私たちの生きる世界へ、御剣拓磨くん」
リユミシナル

彼女は静かにそう呟くと、今は眠れる夜の学園を見下す。
透明なガラスの窓には彼女の優しい笑みが映っていた。

M a g i c a l R e v o l u t i o n
P r o l o g u e S t o r y E n d

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! ! -

Ep:1-1 【男子禁制な場所から】

Episode 1-1 【男子禁制な場所から】

「……朝よ起きて。つか起きろっ」

誰かがそう言いながら俺の肩を静かに揺らす。

ゆっくり目を開けると、銀髪の美少女がそこにいた。

言わずとも昨夜に現れた冬霞^{トウカ}である。

大きな欠伸をする俺を横目で見ながら、彼女は「おはよう」と挨拶をしてきた。

「おはよ。そうか、昨日のは夢じゃなかったか」

次第に寝起きの頭が回転を始め、改めて部屋の中を見回す。

桃色のカーテンは全開、薄くも暖かな朝の日差しが部屋の中に差し込んでいた。

——異世界にも太陽は昇るんだな。

「私とのあんな素敵な夜を夢にしたいなんて酷いわ」

「朝っぱらから変な言い方するお前のほうが酷いよっ!？」

タチの悪い軽口を突っ込みつつ、いい加減ソファから起きて少女の横に立つ。

彼女は昨夜と変わらず制服姿だったが、不思議なことにシワが見られない。

ひょっとして人が寝ている間に着替えたのだろうか？

「何をジロジロ見てるのかしら？ 御剣拓磨」

「ん、いや別に何も。——ってオイちよっと待て」

言葉の最後に付け足されていた名詞に違和感を抱く。

「名前、アンタに名乗った覚えは無いんだが」

そもそも彼女からは訊かれていないし、俺も自己紹介をするほど昨夜は落ち着いていなかった。

「クスッ、気になるのね」

「そりゃまあ、結構気になるぞ？」

正直にそう答えると、銀髪少女は俺の耳元へ口を近付けてきた。小声じゃないと話せない内容なのだろうか？俺は自然に目を閉じトウカの言葉を待つ。

「まだ秘密にしておくわ」

小声でもなんでもない普通のボリュームでそう呟かれた。

こっちは肩透かしを喰らい、思わず転びそうになる。

するなよ！ マジで気になるじゃないか！？

結局、なぜ彼女が俺の名前を知っているかは謎のままだった。話してくれそうにないので仕方なく諦め、また部屋を見回す。

「あつ、そういえば……」

カーテンが開けられた窓を見て、確かめたいことを思い出した。

俺は透明な窓へ近付き、昨夜確認できなかった景色を覗く。

「おおっ——」

深夜の闇に包まれていた世界は、今見渡す限りに広がっていた。こっぴつの、どんな風に表現すればいいのだろうか？

まず最初に目に付いたのは巨大な建物、複数形だ。ここから少し離れているように見えるが、それらは圧倒的な存在感で『ここが世界の中心です！』と自己主張していた。

つまりはそこまで圧倒的で立派な建物だったのだ。奥のほうには時計塔のようなものまで見える。

ここが学生寮ならば、アレはやはり学園と考えるのが妥当だろうか？

「あれがリュミシアル魔法学園よ。ってかいつ見ても無駄に大きいわね」

いつの間にか真後ろに立っていたトウ力がそう教えてくれる。

——なるほどなるほどやはり学園らしい。

そして呆れ気味に彼女が呟くように、無駄に大きい。

俺が通ってる総合魔法学校もかなりの規模だったが、そんなものじゃないぐらいだ。

「それに学園を囲むようにして学生寮があるわ。ここもその1つよ」「ふーん、ここの学生はみんなそこに？」

「大体はね。たまに自宅から通ってるのもいるけど」

彼女の話に耳を傾けながら、蒼く晴れた空と学園を眺める。
見たこともない蒼穹。そして壮大な学園。

「案外本当に異世界みたいだな。なんだか雰囲気が違う気がするよ」

窓外の景色は俺をそんな風に思わせるのに十分だった。
まったくどうして、こんな力に溢れている場所が地球にあるだろうか？

「くどい、何回もそうだと言ってるわよ？」

「わ、分かったよ。信じるさ」

流石に鬱陶しく感じたらしいトウカにそう答えた。

ここが本当に異世界かは、外へ出れば分かることなのだから。

「……ところでさ、これからどうするんだ？ 俺」

「子供かアンタは。そんなの自分で考えなさいよ」

ベランダの窓から離れ、俺がさっきまで寝ていたソファに座る
銀髪少女。

呆れた顔の彼女を見て「確かにそうだな」と思ったが。

「ゴメン、ちょっと無理だわ。マジでどうすればいいのかわからん」
当たり前だ。右も左もわからんのにどこへ行けと。

「ふふっ、冗談よ。あなたは私に着いて来ればいい」

澄ました顔をする彼女に『どこへ……？』と訊こうとするが、

俺の心中を見透かしたように銀髪少女が先に答えた。

「――行き先はリユミシアル魔法学園、その学園長室よ」

「はあ、なんでまたそんな所へ？」

「私にあなたをこの世界へ連れてくるように言っただのは学園長だもの」

コイツを俺のところに向かわせた人か。

何の目的でかは知らないが、黒幕っぽいのは確かだろうしな。

「よし了解、さっさと行こうぜ」

俺は大きく深呼吸してからそう言い放つ。

机に置かれたクマが抱えている時計は、ちょうど7時を指していた。

・
…

「……どうしたの？ お腹でも痛くなったのかしら」

ドアノブを持つ少女は不思議そうに俺の顔を見て尋ねる。

俺は部屋の真中で立ち止まっていた。

それにはある1つの不安があったからだった。

「ちげえよ。ここ女子寮なんだろう？ 男が出歩いて大丈夫なのか気になってな」

そう、何を隠そうここは女子寮らしい。

もしそうなら間違いなく男子禁制のハズだ。

男に人権はないのは考えるまでもなく、もし見つかって騒ぎにでもなれば……。

——い、いと恐ろしや。

「もちろん普通は大丈夫じゃないけど、寮長である私の隣を歩けば問題ないわ」

いや不安すぎるし。だって俺が女子でも叫ぶと思うしな。

朝から女子寮に見知らぬ男が、例え寮長の隣を歩いていたとしても。

「——つかこんなことでビビるな見苦しい」

「ちょ待て。だ、誰が、ビ、ビビビビってなんかいるかつ!？」

……全力でビビっていた。いや、だってねえ？

「なら、ほら。さっさと行く。時間の無駄は嫌いな」

そんな俺の心配を完全に無視してドアを開けるトウ力。

……仕方無いか。どうせ俺に拒否権はないのだから。

なぜか玄関に並べられていた俺の黒靴を履き、彼女に次いで部屋を出る。

閉められた扉の上には『444』とあった。

日本じゃ不人気すぎる番号のゾロ目である。

……ひょっとしてワザとだろうか？

「ん、トウカ？ 朝早くからどうしたの？」
「ッ！？」

変な考察をしていると、急に後ろから声が飛んだ。
寝起きなのかフリル付きの可愛いパジャマを着た少女。
少し癖のついた薄いピンクの髪がふわっと揺れる。

「え、ひっ！？」

そして数秒後には狼狽気味な声を上げられていた。

女子寮^{コウ}に存在してはいけない男^モ。

それを偶然目にしてしまったショックで、少女の眠気は一瞬で飛んでしまったようだった。

「な、なananで、おおお男の人があつ！？」

「げっ、ミアじゃない……。アンタちよつとは空気読みなさいよ」

空気読むのはお前だろ。つか何が大丈夫だオイ。

あーあどうすんだよこの状況。どうも2人は知り合いらしいが……。

「ちっ、この辺が潮時か。なるべくこの手は使いたくなかったのに」

オイまだ部屋を出てから1分も経ってないぞ。

どう考えても早すぎるだろお前の潮時。

寮長様の横に歩いていれば大丈夫じゃないのかよ……？

混乱するミアらしき名前の少女に舌打ちすると、トウカは俺の右

手を掴んで――。

「緊急事態ッ！ 今からここを出るまで全力で、走るわっ！」

「――つつそおだろおっ！？」

あろうことが桃色少女を置き去りにして走りだした。

右手をしっかりと握り締め、廊下の中央にある階段を一気に駆け下りる。

トウカの部屋の番号からして恐らくここは4階だ。嫌な予感が……。

「ちよっとおま――、危なッ！？」

なにこの娘めっちゃ力強いし速い！？

男の俺が引きずり回されてるなんて。

「黙って走る御剣拓磨。誰かに見つかったら大変よ？」

「もう見つかつてるわバカッ！？」

部屋を出た時間が早かったのが理由なのか、結局あの少女以外には誰にも気付かれずに寮から出ることができた。

そして足を踏み外して怪我をしなかったのは本当に幸運だと思う。

ただ――。

「……舌噛んだんだけど」

「か、完璧ね。騒ぎを起こさずに出られたわ」

肩で大きく息をしながらそう言う銀髪少女。

それと同じ状態かつ舌が痛い俺は、もう文句も言う気になれなか

った。

その後2人並んで学園へ歩き出す。トウカによれば15分ほど歩けば着くらしい。

時折チラチラと視線を感じて見返せば、トウカは直ぐに目を逸らす。

「どうした？」と聞いてみるも、「別に」の一点張りである。

最初からあまり良いものではなかったが、この時の銀髪少女との雰囲気は少し気まづかった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:1-2 【リミシアル魔法学園】

Episode 1-2 【リミシアル魔法学園】

寡黙なトウカと石畳の道を歩くこと数分後。

既に俺達は学園長室があるという立派な学園塔に入り、その最上階の廊下をコツコツと歩いていった。

この階の下には学生会室や職員室があるそうだ。

つまり学園の中心部と言ったところだろうな。

だがそんな所にまで来ているのに、寮を出てから誰一人ともすれ違わない。

まあ寮を出たのが7時ちょっとすぎだったからな。

歩いて15分の距離なのに、そんな早くから教室へ向かうヤツはそついないのだろう。

時間がギリギリでも、いざとなれば転移魔法があるし——あつ。

「なあ今気付いたんだけど、どうして転移魔法使わなかったんだ？」

今更ながらそんなことを訊いてみる。

わざわざ女子寮の中を全力疾走しなくても、それを使えば誰にも気付かれずにここまで来れたはずだ。

——それもほんの一瞬でな。

「通学での使用は校則違反よ。一応決まりだから仕方ないの」

「は、なんでだ？ 使ったほうが便利じゃないか」

トウカの口から出た校則違反の単語に疑問を抱く。
移動時間が短縮できるのだから学園も生徒もデメリットはないはずだろう。

特に朝が弱い生徒には涙が出るほどありがたいものだ。

「そういうのに頼り切ると日常生活が疎かになるかららしいわ」

「あー、便利すぎるのも考えものってヤツか」

「そゆこと。私だってできれば使いたかったっての」

確かにそれなら納得だ。俺がいた学校でも多かったもんな遅刻者。

いざとなれば……、と頼り切って夜更かしをする。

起床時間に起きない。時間がないのにダラダラと支度をする。

そして本当に『いざとなった時』にはもう間に合わない。

転移魔法を使っても遅刻になってしまう。

結局は魔法の力を過信せず、健全とした日常生活を送るのが正しいというわけだ。

……ただそんな正しい生活を送ってきても、ソイツらより酷い扱いを受けてた人間がいるわけだがここに。

「そつえば、朝飯まだだな……」

鬱気味な思考になってきたので別の話題に変えてみる。

ってそんなことを言葉にすると今度は急にお腹が空いてきたぞ。

「学園長と話が終わるまで我慢しなさいよ」

「それ何分で終わるのか知らんのだが……」

『もつと詳しい説明は嫌というほど聞くことになる』——って昨夜言われたような。

いやでもすぐそこまで来てるわけだしな、学園長室。

話がそんなに早く終わるとは思わないけど、別に死ぬほど空腹なわけではない。

お腹を軽く摩って我慢することにした。

「さ、着いたわよ。心の準備はいいかしら？」

特に緊張もしないので俺は無言で頷く。

トウ力はそれを一瞥した後、ゆっくり2回扉を右手で叩く。

「私です、ここに御剣^{ミツルギ} 拓磨^{タクマ}を連れて来ました」

そう言ってもう一度ノックすると、今度は扉の向こうから返事が聞こえた。

「ご苦労様です。さあどうぞ、お入りなさい」

その声はどこか優しげな女性のものだった。女の学園長なんて珍しい気がするが。

……さって、いよいよ黒幕さんとか対面か。

「それじゃ私はここで」

「ん、なんだよお前も入らないのか？」

いきなり背を向けて歩き出した銀髪少女を引き止める。

「お入りなさい」って言われてるのになぜ……？

「だって学園長はあなたと2人で話をしたいらしいし。あつ――」

トウカは振り返りそう告げると、最後に何かを思い出したかのようにつながった。

「“カレー”か“焼きそば”どっちが好き？」

「――はい？」

一体何がどうなったなら今そんな質問が出てくるのか。
無視しようと思ったが、結構真剣な目でこちらを見つめるトウカさん。

仕方が無いので正直に答えておいた。

「……どっちも嫌いじゃないが、焼きそばの方が好きだな」

「おっけ、分かったわ。それじゃまた会いましょう」

銀髪少女はそう言い放つと背を向け、再び歩き出した。

横目で見えた少女の顔は、少しだけ微笑んでいるように見えた気がしたが。

――つん、きつと気のせいだろう。

「それじゃあ行きますか」

軽く両肩の埃を払ってから、扉に向き直りドアノブに手をかける。扉の上には“学園長室”と魔法で映しだされた文字が浮かんでいた。

その表記は間違えなく漢字である。

すまんトウカ、やっぱり胡散臭いと思うわ。
地球の、しかも日本の言語を目の当たりにしてそう呟く。
込み上げる苦笑を抑えながら、俺は部屋の中へと進むのだった。

・
…

部屋の奥、蒼穹が映る大きな窓を背にその女性は微笑んで椅子に腰掛けている。

「リユミシアルへようこそ、御剣^{ミツルギ} 拓磨^{タクマ}くん」

彼女はそう笑いかけると椅子から立ち上がり、その長い黒髪を靡かせた。

知らない相手に突然フルネームを呼ばれるのは2回目だな。

「初めまして、私はこの学園長をしているトウルシファナ＝リリスです」

「……どうも初めまして。御剣拓磨です」

「さあさあ、どうぞこちらへ」

微笑んだままそう言うと、学園長は右の指を鳴らす。

——すると彼女と俺を挟む事務机の前に、1つの立派な椅子がどこからともなく現れた。

地味だがかなり上の空間操作系魔法か。何の媒介も使わず一瞬でやれるレベル。

こりゃ地球の上級魔道士の皆さんもビックリだな。

学園長はたくさんの書類が積み重なった事務机に両手を付き、入り口で立ち止まったままの俺を大きな瞳で見据える。

この人が学園長ねえ……？ 何と言うかそんな感じには見えない。

なんとなく自分より年上には見えるのだが、遠くても3歳程度だろう。

なぜなら背がほんのちよつと高いだけで、顔は同年代のものに見えるからだ。

——よく見積もって20代前半の女性だな、うん。

やはり学園長と言うには若すぎる気がするが。

そんなことを彼女を見ながら考えていると。

「まあ、若いなんて嬉しいですねっ」

「——はッ！？」

美人な学園長にこの胸中を軽く見透かされていた。

おかしいぞ、名乗ってから一言も喋ってないはずだ。

「まあその辺はあまり気にしないで。とりあえず座ってくださいな」

「……はははっ」

どうやらこの学園長、あの銀髪少女より手強い相手のようだ。

引きつった苦笑いを向けて俺は用意された椅子へ歩くのだった。

・
…

「この世界で素晴らしき学園生活を、ですか……？」

「ええ、ぜひっ」

リユミシアル魔法学園。

今いるここがまさにその学園長室なのだが、お若い学園長様は熱心に俺を勧誘をしていた。

『もう凄いんですよこの学園はッ!』

そんな文句から始まって早15分。

立ち上がり熱弁する彼女の学園PRは今やっと終わったところだった。

リユミシアルというこの世界の名称がそのまま使われているこの学園は、由緒正しき人気校だそうだ。

学生数も多く賑やかで敷地も広い、魔法行使のカリキュラムもかなり充実しているらしい。

聞く限りは確かにいいところだとは思っただけど。

「あの、1ついいですか？」

「はいはいなんでしょう？」

「俺、魔法が全然使えないんですけど……」

そう、どんなに学習環境が整っていてもエーテルなしの俺に魔法は使えない。

そんな人間が魔法学校に通ってどうする。落ちこぼれになるのは目に見えてるぞ。

「（大丈夫、冬霞ちゃんのおかげで君は少しずつただけど確実にエーテルを取り戻してきている……）」

「——え、今なのか？」

何か小さな声で学園長が呟いたような気がしたんだが。

「いえ何も。ふふ、心配いりません。私の見立てでは魔法なんて明日にでも普通に使えるようになると思いますよ」

「はいっ！？ いやいやいや——」

彼女から返ってきたとんでもない答えに狼狽する。

詠唱やら技術の問題ならともかく、俺は魔法を使う上で最も根本的な面で駄目なんだぞ？

どうやったら1日でエーテルの生産量が増えるというのか。

「それは さすがに冗談でしょう？」

「そんなことはありません。キミを呼んだのはこの為なのですから」

俺の予想を否定し、学園長は少し真面目な顔でそう告げた。

この為って、俺が魔法を使えるようになることだろうか？

「まあ詳しい話は君がもつと成長してから話しますけどね」

「……あなたも焦らすんですか」

例の銀髪少女と同じだ。

しかし異世界に連れて来られた理由^{ワケ}が何も分からないままだと流石に不安すぎるわ。

ちよつとぐらい教えてもらえないかな？

相手が心を読めるのを思い出し、そう強く念じてみる。
すると学園長は向かい側に腰を下ろしてこう答えた。

「一番シンプルな答えは最初に言っただけですよ?」

おおっ、ちゃんと伝わったみたいだ。

ん、でも最初に言われたことといえば……。

「まさか“素晴らしい学園生活を云々”ってやつですか」

なんて適当な理由だ。気持ちは嬉しいんだけどなあ。

「そうそれです。で、それらを踏まえてどうします?」

「……へ、どうするとは?」

「この学園の生徒として新たな生活を始めるか、それとも元の世界に帰りますか? さあ、選んでください。今すぐ」

「そんな――」

彼女がいきなり提示した選択肢に戸惑う。

そんなすぐ簡単に決められるものじゃないだろ。

いきなり連れて来られて、その理由も酷く曖昧なのに。

しかも初対面の人間の言うことが信用できるか?

でも――。

もし、この世界で新たに歩き始めたら。

俺は変われるのだろうか?

あの腐敗した日々から。何も無い自分から。

手を伸ばせば手に入れられるのだろうか？
失った力を、何か大切なモノを。

僅かな希望すら無かったあの世界とは違う。
ここが本当に異世界だというのなら。

俺は、こちらの世界に賭けてみたいと思った。

「――学園長、決めました」

椅子に座ったまま学園長の顔を見上げる。
そう、最初から迷うことなど何も無いじゃないか。

戻ったところで居場所があるわけじゃない。
しかも俺は無能なだけでなく、殺人までやらかしたんだ。

「俺は、御剣拓磨は、リユミシアル魔法学園への転入を希望します」
「ふふつ、よく決断してくれましたね。ええ、キミの学園転入を許可しますわ」

今までの過去も全部受け止めてやり直そう。
それで、新たな一步を踏み出してみよう。

きっとこれはツンデレな神様が俺に与えてくれた、逃すことので
きないチャンスなのだから。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:1-3 【生徒証と桃色少女】

Episode 1-3 【生徒証と桃色少女】

ただいまの時刻は午前8時前。

ほとんどのリュミシアル魔法学園の生徒が登校を始める時間帯である。

俺はそんな生徒たちの一人となるべく、正式に転入の手続きをするため学園長室にいた。

「――で、一体どういうものなんですこの箱は？」

学園長から手渡された掌サイズの立方体。

無色なその全面を観察するが、特に変わったところはない。

どういったモノか全く分からないので、そう尋ねてみた。

「これは“リュミシアル・キューブ”という魔法具です。ほんの少しでいいので魔力を送ってみてくださいな」

「そうすると一体どうなるんです？ 嫌な予感がするんですけど」

「そんなのやってみてからのお楽しみじゃないですか。それにキミが思ってるような危険はないから大丈夫ですって」

微妙に不安が拭いきれないのだけれど、話が進まないようなのでとりあえずは信じることにしよう。

「……分かりました、やってみます」

“リュミシアル・キューブ”なるものを両手でしっかりと握る。

そして目を閉じ、自分のどこか深い内にあるエーテルを呼び起す。

俺にはほんの僅かしかないそれを操り、なけなしの魔力を箱の中に送り込んだ。

『明日にでも魔法を使えるようになる』と学園長は言ったが、やはり今の俺が使えるのはいつもと変わらない貧相な量のエーテルだけだ。

正直この様子じゃ魔法なんて到底使えないだろうな。

この黒髪の美女は何か秘策でも持ってるのだろうか？

「拓磨くん、もうそのくらいでいいですよ」

10秒ほどしてから学園長から声がかかる。

ゆっくり目を開けると、両手に持つ箱が白く光っているのが目に入った。

箱の中で何か魔法が発動しているのか、温かな熱を直の両手に感じる。

——爆発しないか心配だな。

「それで学園長、結局これは何をしてるんでしょうか？」

数秒経っても光の収まる気配はなく、ずっと輝き続けている。いつまで両手に持っていればいいのだろうか。

「何って、君の生徒証を作ってるんですよ」

学園長は光る箱を俺の手から事務机にそつと置きかえて、さも当然のことにようにそう続けた。
彼女の言葉だとこのキューブは生徒証を作るための魔法具だったようだ。

「生徒証はここでの生活に必要な不可欠なので大切に管理してくださいね」

「そりやしますけど、そんなに重要なアイテムなんですか？」

「身分証も兼ねてますからね。無かつたら学園生活だけではなく衣食住も超ヤバイですよ」

おおつ、かなり大変なシロモノみたいだな。生徒証……ね。
ちゃんと失くさないようにしないと。

「——おおつ、できたのかな？」

そう思いながら机の上に置かれた箱をじつと眺めていると、放っていた光が徐々にその輝きを無くしていくのに気付いた。

そしてついに光が収まったのと同時に、箱上部からカードのような物の先端がスツと出てくる。

「よいしょつと。はいどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

学園長が箱から抜き取ったそれを両手で受け取る。……これが生徒証か。

薄い水色の生徒証には『タクマニミツルギ』と俺の名前がしっかりと刻まれていた。

イメージしてたものより少し大きくて質量がある。
この重さは紙やプラスチックカードのものじゃない。
——何かの金属でできているのだろうか？

「それは企業秘密です。教えてあげません」

また勝手に心を読まれた上に、酷く馬鹿にされた気がする。

「それではまずそれで制服に着替えてみましょうか」
「——はい？」

思いも寄らない事を言い出す学園長に、つい間の抜けた声を上げてしまった。

そりゃそうだろう。ワケがわからない。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ。着替えるって……」
「あら、キミがいた世界じゃまだこういうのはなかったのかしら？」
「——勘弁して下さいよ」

そんなセリフを聞くと改めて『異世界に来てしまったんだなあ』
と思ってしまう。

魔科学によって発展した今日の地球でも、こんなカードで服を着替えるなんて話は聞いたこともないからだ。

「制服だけじゃなくて私服も登録すればできるんですけど、まあその話は追々」

「……本当にできるんですか？」
「できますとも。さっきと同じように魔力を送り込んでみてください。それがシステムの起動スイッチですので」
「分かりました。んっ……」

さつきと同じように全神経を集中して魔力を送り込む。
俺以外の人はもっとカンタンにできるのだからうけどな。

すると間もなく生徒証に水色の魔法陣が浮かび上がった。
そして小さな魔法陣は小さな輝きを放ちながら“画面”を映し出す。

そこには『認証作業をしてください』と文字が出ていた。

「それでは着替える前に認証をしましょうか。タクマミツルギと画面に向かって詠唱してください」

どうすればいいか分からないので、彼女の言うとおり自分の名前を詠唱する。

すると認証作業はこれだけでいいのか、違う画面に変わった。
……なんかパソコンのデスクトップみたいだな。

「服の着替えはそのお洋服のマークです」

学園長のナビゲーションどおりに指を動かす。
といってもアイコンを軽くタッチするだけなのだが。

学園長曰く“リュミシアル魔法学園高等部1年男子制服”がこれから着ることになる制服らしい。
内心ワクワクしながらその文字に触れた。

——すると俺が着ていた地味な制服が青白く光り、すぐに収まる。
同時に身体がほんの少しだけ重くなったような錯覚に陥った。

「うわっ、ホントに着替えられてるし……」

しかしそれは錯覚ではなかったようだ。

「うん、よく似合ってますよ」

そう言って学園長はまた指を鳴らし、今度は俺の真横に等身大の鏡を出現させた。

突然なことに驚きつつも、向き直りその中に映る自分を見る。

黒を基調にしたブレザーとズボン。

その隙間から見える白いカッターシャツに紅のネクタイ。

ミニスカートではないことを除けば例の銀髪少女が着ていたのと同じものだ。

「すごいな……、便利ですねこれ」

「ふふ、他の生徒からもそう言われますよ」

学生証の機能と学園長の魔法の双方にたいそう感心していると、唐突に入口の扉がコンコンと規則正しく叩かれた。

「おはようございます学園長。あの、ご用件とは一体……？」

「あら、ちょうどいいところに来ましたね」

扉の向こう側からするのは、どこかで聞いた気がする少女の声。俺が来た時と同じように学園長は「お入りなさい」と声を返す。

……なんか、ものすごく嫌な予感がするぞ。いや今回は割とマジで。

「はい、失礼します」

ゆっくりと扉を開けて入ってきた女の子を見て、思わず「ああやっぱりな」と声が漏れてしまった。

薄い桃色の髪に肩の下あたりまでの短いツインテール。髪を結ぶ水色のリボンがよくその色に合っている。

髪型が変わっていても分かった。間違いなくさっきの娘だ。

トウカと同じ女子制服に白いニーソックス。

学園長の前にいる俺を、ラピスラズリの瞳が捉えた。

「あ、あなたはさきほどのっ、ど、どうしてここにっ!？」

すると少女は早朝と同じように目を見開いて混乱し出した。まずいな、上手く女子寮のことを説明しないと――。

「ええっとそれはだな……」

「――落ち着いてくださいミアちゃん。私が説明しますから」
「ががが学園長!？ 私一体何がどうなってるのか……」

後ろにいたはずの学園長は気付けば俺の右隣に。
そして俺と少女の間に歩いて口を開く。

「あなたのクラスでも流行ってるのではなくて？ う・わ・さ」
「う、噂って『近くに転入生が来るかもしれない』ってやつですか?」

「そうそれです。で、この子がその転入生」

学園長はもう見慣れた笑みで俺のことを語りだすのだった。

・
…

「……それ、生徒会の私だって知りませんでしたよ？」

「いやあつついっし連絡するのを忘れてたんです」

「ううっ、どうせ私なんて存在感ないですよ……」

学園長が間に入って今までの経緯、つまりは昨夜の晩からのことを説明してくれたおかげで少女は上手く現状を把握してくれたようだった。

それでもトウカの部屋、つまり女子寮に一泊したことだけはかなり動揺してるみたいだったが。

なんとかなつてひと安心し、息をついたところに学園長と話をしていた桃色少女が俺の前に近づいてきた。

「あの、私 ミヤナームル＝シアクウナって言います。さっきは取り乱してしまってゴメンなさい」

「いや大丈夫だ、えっとミヤナ……」

ミヤナ……なんだったけか。やべえ覚えられてない!?

「ミアでいいですよ。覚えづらい上に呼びづらい名前だと自覚しますから」

「わ、分かったよ。俺の名前は御剣拓磨、じゃないタクマ＝ミツルギだ。よろしく」

「タクマ君ですね。ええ、こちらこそよろしく願います」

2人の話を聞いていた限り、彼女がここに呼ばれたのは理由はあるようだった。

俺はこれから生徒会長さんやら教員たちに挨拶へ向かう必要がある。

が、いかせん広いこの学園では迷子になってしまう可能性が高い。

そこで学園長は生徒会員である彼女を案内役として呼びつけたというわけだ。

準備がいいと言えぱいいと思うのだが……。

——本人にその旨を伝えていないのは正直どうかと思う。

「よかったですねえ拓磨くん。転入早々お友達、しかも女の子ができて」

「その言い方には何か棘があるように聞こえるんですケド？」

「そんなことはありませんよ。——おっと！ もう8時を超えてしまいましたね」

そろそろ急げということだろう。壁にかかった時計を大袈裟に見て続ける。

「それではミアちゃん、彼をお願いしますね。副会長さんには話が通ってますから」

「了解です。それでは行きましょうかタクマ君」

「あ、うん。それでは学園長、いろいろありがとうございました」

「——そうそう、最後に学園責任者として一言だけ」

部屋を出ようとする俺に、1つ言い忘れたと学園長が引き止めた。
長く黒い髪を靡かせ、優美な微笑を浮かべながら。

「今日からのキミに、リユミシアルの祝福と加護とがあらんことを」
そんな彼女の美貌に、少し胸がドキツとしたのは内緒の話である。
終始笑顔のままだった学園長に見送られ、俺は部屋を出るのだっ
た。

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! ! -

Ep:1-4 【あなたに焼きそばパンを】

Episode 1-4 【あなたに焼きそばパンを】

「なあ、異世界なのにどうして言葉が通じるんだ？」

それは学園長の激しい勧誘に流されて訊けなかった最大の疑問。そういう魔法が原因なのは間違いないだろうが……。どうも辻褄が合わない。

あの銀髪少女の仕業と考えるのが普通だが、初めて会った時からアイツは日本語で話しかけてきた。

それにどのタイミングでもそんなことをされた覚えはないしな。

「思ってることより難しい話じゃないですよ。違う次元から来た人が何の不自由もなく私たちと同じ言葉が話せるのは、この世界に張られた“言語統括結界”のおかげなんです」

「ふうん、なるほどね。結界のせいだったのか」

俺個人にかけられていたのではなく、世界全体にか。

「ええ。タクマ君は自分の世界の言葉で話しているつもりでも、それは気付かないうちにこちら側の言葉に変換されてるんです。聞いたり読んだり書いたりするのも、全部同じようにですね」

「俺のいた世界じゃ到底できない技術だな」

今の日本、いや他のどの国も無理だろう。

地球を丸ごと覆うほどの巨大な結界、しかもすべての人間の言語に干渉するようなシロモノを作るなんて。

「そういえばタクマ君のいたところって日本なんですよね？」

「ああそうだが……、何か知ってるのか？」

「いえ、確かトウカもそこから来たって言ってたなあと思って」

「——アイツ、日本人だったのか」

なるほど、だから昨晚日本語が通じてたのか。

ん？ でもそうなるか——。

「おいミア、それじゃトウカも俺と同じ転入生なのか？」

「はい、彼女が12か13歳の時に。だからもう4年も前のことですけど。それが何か？」

「い、いや別に。ちよつと気になったただけだ」

昨夜の銀髪少女の言葉と寝顔を思い出す。

やっぱりアイツは何か知ってるのかもしれないな。

——4年前の消えた記憶を。俺の身に何があったのかを。

今歩いている学園の中心塔は7階まであり、上の階へ行くには大きな螺旋階段を上る必要がある。

最初に学園長室のある7階まで上るのは結構大変だった。

一緒にいたトウカは「そのうち慣れるわ」と言っていたが。

ちなみに4階は他の学舎への連絡通路となっているそうだ。

通路と言っても直接繋がっているわけではなく、それぞれが転移魔法のかかったゲートになっているらしい。

「ここが生徒会室です。学園長の話じゃアキラ先輩——じゃなくて副会長がこの後のことを説明してくださるそうなので」

「副会長さんか。真面目そうなイメージがあるけど、どんな人なんだ？」

「実はトウカのお兄さんなんです。とても優しくて知的な方ですよ」

アイツ兄さんがいたのかよ。いや別に文句はないけど。

「優しくて知的なお兄さんか。それならリラックスして挨拶できるな」

「どうぞ安心してリラックスしちゃってください。それでは入りましょうか。時間もあまりないですから」

ミアは可愛らしく微笑んでその扉を開けた。

・
…

ミアに続いて部屋に入った瞬間、品がある心地良い香りが広がった。

その匂いの元を感覚で辿っていくと、すぐ横にある棚の上に整然と置かれた花瓶からだと気付く。

鮮やかな赤紫色の花が生けられているが名前は分からない。
異世界にある花なんだから知らないのも当然だけだな。

「——来たか、待っていたぞ2人とも」

そんな中、落ち着いた雰囲気の中の男の人の声が響く。
目を向けるとそこには長身の男子生徒がいた。

何か神聖なものを感じる銀髪も、澄んだ紫の瞳も、怪しく感じるオ
ーラも同じ。

なるほどな、こりやどう見てもトウカの兄さんだ。

「どうも初めまして。今日から転入するタクマ〓ミツルギです」

「ああ、生徒会副会長のアキラ〓シラガネ、君を連れてきた冬霞^{トウカ}の兄だ。いきなりの異世界に驚くことも多いだろうが、そのうち慣れるだろう。なに、君と同じ世界から来た俺と妹がその証拠だ」

「は、はあ……」

副会長はそう言うと言つと生徒証を俺に見せた。

俺が受け取ったのとは違うオレンジ色の生徒証には、彼の名前が記されていた。

どうやら銀髪兄妹はミアの言つとおり日本出身らしい。

「ちなみに漢字表記だとシラガネは白い銀、アキラは暁と書くぞ。由来は――」

「い、いえ分かりましたから結構ですっ！」

「む、そうか。残念だ」

妹と同じくいきなり自分の名前の由来を語り出したので思わず止める。

それにしても白銀と書いてシロガネだなんて随分珍しい苗字だな。名前を覚えたところで生徒証を返すと、副会長は話を続ける。

「本来なら会長が君と細々した話をするはずだったのだが、まだここに来てないんだ」

「すみません2人とも。エルザお姉ちゃんは朝に弱くて……」

ミアは副会長の言葉を聞くと、いきなり頭を下げた。
彼女の口から出た“エルザお姉ちゃん”とは会長のことだろうか？
よく分からなので訊いてみると、推察通り会長はミアのお姉さんらしい。

その名前は……、うんやっぱり長いから覚えてない。
とりあえず愛称がエルザさんということだけは覚えておこう。

副会長が「そういうことだから」と話を戻す。

“そういうこと”とは会長さんが寝坊（？）でまだ来ていないということだな。

「会長からの挨拶はまた次の機会にすることにして、今は俺が代わってその細々したことを説明させてもらう」

「……よ、よろしく願います」

やっと本題というところか。俺は何をすればいいんだろうな？

「まず君が所属するクラスについてだが、すでに決めてあるんだ」

「あのオ……、タクマ君の転入の件もそうですけど、そんな話ぜんぜん聞いてませんよ私？」

「おっとすまん、ついつい連絡し忘れてしまっていたな」

ついさっき見たなこんなやり取り。

ミアはこういう扱いのキャラなのだろうか？

それにしても棒読みすぎるだろ副会長。

「もういいですよ私なんて……。それより、タクマ君のクラスはどこなんですか？」

「ああ、君や冬霞と同じ1年第2クラスだ」

「――聞きましたかタクマ君、同じクラスだそうですよっ！私クラス委員ですので、困ったことがあったら何でも言ってくださいね」

「わ、わかった、その時は頼らせてもらうよ」

テンションが上がったのか、声の高さも一段階上がるミアを見てそう答える。

「それにしても今日いきなり転入生が来るって知ったら、きっと2組のみんな今日は一日中お祭り騒ぎですよ」

「そ、そうか。お祭り騒ぎか……」

お祭りてどんなクラスだよ。それだけ賑やかなのかな？

「――もうミアに手をつけたようね。純情な乙女を欲望のままに弄ぶ鬼畜神、御剣拓磨よ」

それは本当に一瞬の出来事だった。
透き通っていて、かつ理不尽な少女の声に俺は無意識に反応していた。

「ちげえええええ！？　しかも何だよその最高にカッコ悪すぎる二つ名はっ！？」

そう突っ込みつつ後ろを振り向けば、案の定銀髪少女がいた。
慌てる俺を尻目に、扉の前でニヤニヤするトウカ。
またしても余裕のしたり顔を見せる。

「ちょっとした冗句じゃない。でも、そんなにムキになるなんて案外本当のことなのかしら？」

「全くもって冗談じゃないぞ。マジで誰かが信じたらどうしてくれるんだ？」

「知ったことじゃないわね」

くっそくっそ！ しれっと流しやがって。

「——あ、やべ本格的にお腹すいてきたな……」

銀髪少女の相手に気が滅入っていると、一気に空腹感が増しついそう呟いてしまう。

それを聞いたのかトウカは俺の前まで歩いて来ると、右手に持った白いビニール袋を目の前に差し出してきた。

「あなたの朝食を用意してきたわ。ありがたく思って食べなさい」

「——え？」

思いも寄らない言葉と行動に混乱するが、すぐに礼を言った。

「あ、ありがとう。これわざわざ買いに行ってきたくれたのか？」

「……生徒会の仕事で仕方なくね」

トウカは気恥ずかしそうに「仕方なく」と強調してくり返す。

もらったビニール袋の中身を取り出すと 焼きそばパンと小さな牛乳パックがあった。

なるほど、あの時の問いかけはこういうことだったのか。もっとストレートに言えないものかね。

——ま、悪いヤツじゃないよな。

さっさとミアの所に行って何かを話す銀髪少女を眺めながら、俺はモグモグと焼きそばパンを口にする。

ん、焼き立てなのか？ 香ばしくて美味しいな。

「御剣、時間がないからそれを食べながら話の続きを聞け」

おっとそうだった。今は副会長の説明を聞いている最中だったんだな。

耳を副会長の説明に傾け直す。

「君が所属する第2クラスの担任はクリスティーナ先生と言う。それを食べ終わったら俺と一緒に教務室へ挨拶しに行くぞ」

「え、今からですか？ この時間先生は忙しいんじゃない……」

「その先生が『連れて来い』と仰ってるのでな。問題ないだろう」

うーん、クリスティーナ先生か。名前的に女の先生だろうか。

「クリス先生はとても可愛らしい方なんですよ！」

自分の担任の話だからか、副会長より先にミアが口を挟んだ。可愛い？ 先生なら美人とか言ったほうが似合うと思うのだが。

「それなら会うのが楽しみだな。可愛くないよりは良いだろうし」
「もう他の女に乗り換えするつもり？」

「……………ハハハッ」

ダメだ、やっぱりこの毒舌銀髪少女は俺の天敵らしい。

・
…

「そろそろ教室へ行くわよミア」

「分かったわ。それではタクマ君、私たちは先に教室へ行ってますね」

「そうか、それじゃまた後でな」

時刻は8時半前。

足早に部屋を出て行く2人の少女を見送りながら

まだ温かいままの焼きそばパンを椅子に座ったまま食べる。

副会長から聞いた話だが、あの2人は俺と同じ年らしい。

正直2つぐらい年下だと思っていたので少し驚いた。

だって2人とも背が俺の肩と同じ高さぐらいなんだぞ？

俺の身長はともかく、な。

とにかく “人のあれそれを見た目で決めるもんじゃない” ってのは本当のことだったらしい。

「ン、ゴクッ——」

最後の一切れを口の中に入れ、牛乳で流し込む。

美味しく食べ終わって椅子から立ち上がると、副会長がじっとこちらを見つめているのに気付いた。

鋭い赤紫の視線を、知的に光るレンズ越しに。
オイオイなんか怖いぞ。——いろんな意味で。

「あの、どうかしましたか副会長？」

「……いや、なんでもない。さあ俺達も職務室へ急ごう。モタモタしているとHRに間に合わなくなってしまうからな」

「え、ああちよつと待ってくださいよっ！？」

早口でそう答え、副会長は颯爽に扉を開けて部屋を出て行ってしまう。

空のビニール袋を部屋の隅にあったゴミ箱に入れ、俺も急いでその後を追うのだった。

それと同時にHRの予鈴だろうか、大きなチャイムが廊下に響いた。

普段なら耳に入ると気怠くなっていたハズのその音は、不思議なことに心地良い。

それはまるで、これからの学園生活の始まりを祝福するかのようだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:1-5 【異世界に映る教室】

Episode 1-5 【異世界に映る教室】

——シンフォニック 学園新聞 Symphonic

もはや生徒証としての役割の域を越えているカードから、その朝刊と夕刊が気軽に観覧できる。

内容のほとんどは見なくてもいいようなコラムがほとんどのだが、今朝更新された記事は高等部の生徒にとって非常にインパクトのあるものだった。

「——な、なんてこったあッ、転入生は男だっただとおオオッ!？」

机の上に行儀悪く座りながら、真剣にその記事を見て叫ぶ男子生徒がいた。

燃える炎のようにツンツンした赤毛は彼のシンボルマーク。

姿形は普通の人間に見えるが、彼は竜族である。

「俺は可愛い女の娘がよかったのにッ!」

「あはは……、残念だったねラグナ」

そんな彼のもとに1人の男子生徒が近付く。

赤毛の少年に比べ背は少し低く、落ち着いた翠色の髪に琥珀の瞳。身嗜みを整えた彼は、着崩した制服を纏うラグナとは対照的に清潔感がある。

「テオ! どうしてお前はそんなに普通のテンションなんだ!？」

噂の転入生は甘い香りがする乙女じゃなかったんだぞ!？」

「そんなこと言われてもなあ……。ボクはあんまり信じてなかったからさ」

そう、言わずもかな。

その記事の内容とはとある異世界人の転入についてだった。

異世界人と聞けば目を丸くするような話だが、このリユミシアル界では異世界人の存在が大して珍しくない。

そんな世界の学園に通う生徒たちを騒がせる理由が2つあった。

1つは赤毛の竜人、ラグナ・ヴォレリウスのように嘘の噂に騙されたパターン。

恋を夢見る男子生徒たちの間では『転入生はすっげえ美人でかつ清楚系らしい』という噂が交わされていた。

つまり誰かの願望が1人歩きし、都合の良いように広まったというわけだ。

今朝事の真実を知ることになってしまった悲しき男子たちは、彼のように失望の声を上げるか、静かに見えない涙を流すかのどちらかである。

「クッソ 誰だよこんな非人道的な嘘を最初に言い始めたヤツは!？」

「いや、見つけてどうすんのさ？」

「俺の“炎龍の鉄槌”ファイアフレスをゼロ距離で喰らわせてやる！」

「はあ……。ほどほどにしときなよ」

ラグナの妙な執念深さに溜息をつく少年はテォーオ・ベリアルス。

落ち着いていて人当たりがいい優等生だが、実は強大な魔王の血を引く魔族である。

もつとも彼には父である魔王のように残虐非道なことをする悪い趣味はない。

むしろ平和な世界を望み、姉と共にこのリユミシアル界へと逃れてきたのだ。

「確かに転入生が女の子じゃないのはちょっとだけ残念だけどさ、それよりもつと気になることがあるじゃないか」

一方生徒を賑わすもう1つの理由はこのテオが気にしている事と同じである。

この学園は異界から転入生として生徒を集めているのだが、それは『中等部ミッドに新入生として』という意味が普通なのだ。

高等部へ転入してくる例は珍しいし、かつ時期もおかしい。

転入生が来る時期としては早すぎし遅すぎる。なんせ今はまだ2月の中旬なのだから。

よって大半の冷静な生徒はこの噂自体がそもそもデマだと考えていた。

それがビックリ、今朝のニュースによると真実だったのである。学園中で『謎の転入生』と朝から大きな話題になっているのだ。

もちろんこの高等部1年第2クラスもその例外ではない。

仲の良いグループや前後左右の席の生徒たちが集まって会話を交わしている。

憂鬱な月曜日の朝とは思えないほどの賑わいだった。

そんな中、教室に背の低い2人の少女がドアを開けて入室する。それを見た数人の女子生徒たちは2人を囲み出した。

予想通り、と銀髪少女は目を細めた後面倒くさそうに口を開く。

「……なんなのよこの騒ぎは。朝からやかましいわね」

「トウカさんにミアちゃん！生徒会の2人なら詳しいコト色々知ってるんでしょ！？」

トウカの言葉を完全無視して女子の1人が詰め寄る。

他の女子たちも『教えてよ』と徐々にその数を増やしていった。

『詳しくってやつぱりタクマ君のことかな？』と小さなツインテールを揺らすミアはトウカに目配せする。

他に何があんのよとトウカは桃色少女の青い瞳を見つめ返した。

「ちょっと、2人とも勿体ぶらないで教えなさいよ。背の高いのイケメンなの？」

「優しそう？ SかMのどっち系なのかだけでも教えて！？」

身を乗り出して質問をぶつける女子生徒たちを見ると、この女子達の思考回路も男子達のそれと大して変わらないように見える。
——結局はみんな転入生のそういうところに一番の興味が湧くのだ。

「別にイケメンじゃないし性癖もフツーよ普通。つかアンタら期待しすぎ。あんまり変なコト考えてると、その雑魚ドラゴンみたいになるわよ？」

「あゝ、そうね。確かにそんな気がするわ」

銀髪少女の言葉を耳にし、興奮気味な女子たちは落ち着きを取り戻す。

そして後方でテオと話をしていたラグナヘクスクスと苦笑いを向けた。

「ちょッ、雑魚ドラゴンで俺のことかよ!?　いくらなんでも酷すぎるぞトウカっち!」

「本当のコトじゃなか。去年10秒でトウカさんにボロ負けしたくせに」

「うげっ……、そ、それは」

すかさず非難の声を挙げるラグナだが、トウカを取り巻いている女子の1人から追い打ちを受けてしまった。

それを言われてはぐうの音も出ないのだ。

「それは俺が弱いんじゃないかってトウカっちが強すぎるからだろ!？」
「それでも10秒はないわ。トーナメントの過去最短記録更新しちゃったんでしょ？」

「ふっ……、やゝい雑魚ドラゴン」

銀髪少女は小悪魔のように目を細めて晒う。

このように人を煽り立てるのは彼女の最も悪い癖である。

「いやいやあんまり皆でラグナを苛めないであげてよ。トウカさんが強すぎるのは事実なんだしさ」

流石にラグナを哀れに思ったのか、聞き手に回っていたテオが話に割り込んだ。

『俺の味方をしてくれるのはお前だけだ!』とラグナは目を拭う仕草をしている。

少し気味悪いと思ったが、もちろん彼はそんな余計なことは言わない性格だ。

「チツ、折角ソイツで色々鬱憤を晴らそうと思ってたのに」
「いつも冗談きついなあトウカさんは。それよりさ——」

持ち前の爽やか笑顔でトウカの毒をやり過ごしてテオは言葉を続ける。

「その転入生の話、ボクも詳しく聞きたいんだけど」
「ん、なんだよお前さっきは興味なかったみたいだったのに」
「いやいや興味あるよ。これから長い時間一緒にクラスで過ごすんだからね」

いつの間にか復活していたラグナに期待に満ちた顔で答えるテオ。そしてニコニコしているミアに向かって『どんな人?』と尋ねる。

「ついさっき挨拶したばかりなんですけど、悪い人じゃないと思いますよ」

「ミアさんがそう言うなら間違いないだろうね。楽しみになってきたよ」

「ま、歓迎ムードも悪くないけど、あんまりバカ騒ぎするんじゃないわよ?」

「そうだね、クリス先生に叱られないようには自重しないと」

銀髪少女の忠告どおり、今朝の教室はいつにも増して賑やかな声で溢れていた。

華やかな学園行事が終わってしまい味気なく退屈な3学期。そんな時期に突如その姿を現すことになった謎の転入生。

思いがけないスパイスの登場に、生徒たちはさぞ心踊らされているだろう。

・
…

転入生、つまりは転校生としてこの学園に通う。
それは確かに俺が学園長と交わした契約である。全くもって間違いないのだけど。

「無理無理ムリッ！ 絶対そんなことできませんって！」

「スマンな。これも学園長からの指示なんだ」

「いきなりすぎですって！ 俺まだこっちに來て半日経ってないんですよ！？」

「異世界だからってことで割り切れ。大丈夫なんとななるさ」

今は銀髪少女の兄兼生徒会副会長のアキラ先輩と職員室に向かっている途中だ。

生徒会室から出た後、溜息が出るほど大きな螺旋階段を再び下っていく。

ちなみになぜ会ったばかりの先輩に軽々しく下の名前で呼んでいるかというと、それがこの異世界リユニシアルの常識だからだ。

ファーストネームで呼び合うなんて当分慣れないことだろうが、
『 郷に入っては郷に従え』 とは決して地球限定のことではない』と同じ日本出身らしい副会長が仰るのだから仕方が無いだろう。

だがその副会長が俺のことを御剣と苗字で呼んでいるのは一体ど

ういう事なんだ。

まあ、それは今は置いておいて。

「転入手続きしたその日から授業に参加だなんて、いきなりすぎて緊張しますよ！」

「この程度の逆境ぐらい跳ね返してみせる御剣拓磨」

「アンタ俺の置かれた状況を見て面白がってるだろッ」

「副会長様に向かってアンタとはいい度胸だな、オイ、転入生クン？」

「……すみませんっす副会長様」

寡黙クール系だと思ってたが、意外とそのなんだ。
話しているとなかなか面白い人だな。

「あ、言い忘れてたが教壇の上で自己紹介イベントはもちろんあるからな」

「地獄の底へどんどん追い詰められてる気がする」

「これも経験だ。上手くクラスに馴染めるように頑張れ」

「そうは言いますけど……」

応援のお言葉をもらったのはいいが、緊張と不安はよりいっそう増していく。

なんせこの数年ともに人と関わらなかったからな。

異世界の住人たちと上手くやっていける自信は正直あまりない。

実際に俺はトウカ、学園長、ミア、目の前の副会長でさえ言葉を交わすことに緊張してしまっているのだから。

そんな中1つ下の階に着くと、職員室と表示が出ているドアの前に腕を組んでいる女性がいた。

「——む？ あれはクリス先生じゃないか。いかん待たせてしまっ
たらしいな」

それを見た副会長の足取りが速くなった。

その女性もこちらに気付いたのか、その小さな顔をこちらへ向け
る。

どうやら彼女がクリスティーナ先生で間違いないようだった。

深い紅に染まった目に、腰まで届く金髪のツインテール。

俺やトウカよりも背は低く、白いローブを羽織っていた。

整った小顔は少女のものでとても教師のようには見えないのだが。

「すみません先生、少し遅れてしまいました」

「いや気にするな副会長。案内役ご苦労だった」

「はい。それじゃ昼休みに迎えに行くからな。いろいろ気合入れる
よ」

「あ、はい、ありがとうございます。また後で」

副会長はズレた眼鏡を片手で上げて、廊下の奥へ消えていった。

眼前のクリスティーナ先生は「さて」と長い金髪を揺らして俺の
目を見る。

「初めましてだな異界の少年。私の名はクリス。クリスティーナ」

ムーンライト。魔族、吸血族の真祖にしてお前のクラスの担任だ。

クリス先生と呼ぶがいいぞ」

「——は？」

クリスティーナ、もといクリス先生は信じられないことを言い放
った。

聞き間違いではない。魔族と吸血族というファンタジックな単語

である。

混乱する心の内を見抜いたのか、その少女は笑みを浮かべてさらに続ける。

「なるほどなるほど。その様子では魔族を知らないようだな少年よ」

「魔族って……、まさかあなたは人間じゃない？」

「ああそうだ。私は人族じゃない魔族さ。そんなことより少年、貴様の名前を教えろ」

「——タクマミツルギです。てか学園長から聞いてないんですか？」

「たとえ既に知っていても、本人が名乗るのが礼儀というものだろう」

クリス先生はミアの言うとおり小さくて可愛らしいが、実に大人びた口調だ。

これは彼女の性格なのか？ それとも魔族とか吸血族の特徴なのだろうか？

「生徒タクマ、貴様今私のことを『チビなくせに偉そうな喋り方する先生だなあ』などと失礼な目で見ていないだろうな、ん？」

「い、いえそんなことは全然ッ！ あれですよほら、魔族ってなんなのかなあって考えてたんです！」

チビとか偉そうとか断じて思っていないが、似てることは考えていたので必死に取り繕った。

「本当だろうな？ まあいい、そのことは歩きながら話してやろう」

HRが始まる前に教室へ行くぞ、着いて来るがいい」

「分かりました。よろしくおねがいします」

この後クリス先生の話を聞いて、俺は知ることになる。
今までいた世界がどれほどちっぽけな存在だったのかを。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:1-6 【第2クラスの転入生】

Episode 1-6 【第2クラスの転入生】

職務室から学園中心塔の4階、連絡通路ポータルを越えて高等部の学舎の中を歩く。

登校時間はとうの昔に過ぎているのか、歩く廊下に生徒の影はない。

「———というわけだが、理解できたか生徒タクマ？」

クリステイナー「ムーンライトはそう言ってこちらを振り返る。彼女はこれからお世話になる1年第2クラスの担任の先生だ。」

クリス先生の問いかけに、俺は「うーん」と少し唸ってみせた。彼女の話を簡単に要約すればこうだ。

世界には優位種族というものが存在しているらしい。

強大な力を持つ霊長、すなわち人族、魔族、神族、竜族のこと。

ちなみに俺や白銀兄妹のような人間は人族に属されていて、あのミアは神族の天使族のようだ。

話を元に戻すが、優位種族同士は対立し戦争を起こすのが普通らしい。

しかしこの世界では全ての高位種族は『平等にして対等』という考え方が根づいている。

つまり“共存”して生活しているそうだ。

それに加えて異種族間の婚姻や交配が大昔から続いているため、『混血種』がかなり増えてしまい、今では種族区別自体あまり意味を成さないのだとか。

「素晴らしいことだとは思うんですけど、やっぱり信じられませんか」

頭の中で整理してもそんな答えが口に出てしまう。
当たり前だ、俺は人間しかこの目で見たことがないのだから。

魔族やら神族やらそんな単語を並べられても理解するには難しい。

「まあ無理もないか。お前のいた世界には人族しかないのだろう？」

「はい、ですから“何のファンタジーだよ!?” ってのが正直な感想ですね」

そもそも異世界に来ている時点でかなりファンタジックだけどなそう考えてみると、異種族の存在は嫌でも受け入れざるを得なくなる。

「なるほどな。そう思うなら、貴様にとってこの世界は新発見の連続になるだろう」

「それは……、楽しみですけど少し不安になりますね」

俺の常識では有り得ない物、在り得ない者を連続で見せさらたらか心とか大切な何かが壊れそうな気がする。

——在り得ない者。

例えば今俺の目の前を、長いツインテールを揺らしながら凜々しく歩む少女。

その後姿を見るに、やはり背の小さな可愛らしい人だが……。

「クリス先生は、その……、本当に魔族、吸血族なんですか？」

「さっきも同じこと答えた気がするのだが、正真正銘私は魔族、吸血族だ。と言っても、今は血を吸うことは殆ど無くなってしまったがな」

先生は自分が俺にとって在り得ない者、人外存在であることを改めて肯定する。

それには一切の躊躇いの様子がなかったが、同時に奇妙なことを口にした。

『血を吸わない吸血族』

ここでは俺の常識はあまり通じないのかも知れないが、これは絶対おかしいだろう。

血を吸わないって、それはもう吸血族とは呼ばないのではないか。

血を吸わないんですか、吸血鬼なのに？

そう尋ねたいが、何か深い事情がありそうなので声に出せない。そんなムズムズした俺の気を読んだのか、先生は理由を説明してくれた。

「さっきの説明で分らんか？　ここは他種族が共存している世界なんだ。己の欲を叶えるために人を襲うわけにはいかないだろう？」
「で、でも吸血鬼にとって血は大切な食糧だって聞いたような……」

「まあ確かに吸血は私達にとって命に関わる大切な行為だが、別に半年近くしなくても問題ないのさ」

「へえ、そうなんですか。勉強になります」

そんな吸血鬼の生態は知らなかったからな。

てつきり毎日 食事感覚で吸っているのかと。

『いきなり噛まれたりしないかな?』という心配は杞憂だったようだ。

「——だから、数ヶ月に一度若い生徒たちから血を提供してもらっているぞ」

「えッ!?!」

お、おいおいおいオイ。

結局吸ってんのかっ、しかも生徒から!?

俺は歩くスピードを極力落とす。先生から距離をとり首筋に右手をあてがった。

それに気付いた金髪吸血鬼は立ち止まりニヤリと笑う。

「フッ、安心しろ生徒タクマ、私は男の血をあまり好まんからな。それにさっきも言ったとおり無理矢理吸うようなことはしないさ」

「お、驚かさないでくださいよ……」

「貴様が勝手にビビってるんだろっが」

……返す言葉もないな。

クリス先生は早く行くぞとさっきよりスピードを上げて足を進める。

「ん? そういえば ここ……」

先生との充実した会話に夢中になって気付かなかったが、いつの間にか歩く廊下の先から賑やかな話し声が響いていた。

前方をよく見ると、1 - 6や1 - 4とドアの上に表示されているのが分かる。

どうやらここは1年生のHR教室がある階の廊下らしい。

……ということは、そろそろか。

その時大きなチャイムが響いた。

生徒会室を出る時に鳴ってたのがHR開始の予鈴ということは、これは本鈴だろう。

「いいタイミングに着いたな。さあここが第2クラスの教室だ」

クリス先生はそう言って1 - 2の扉の前で足を止める。

その教室の扉と窓の隙間から生徒たちの談笑の声が漏れていた。内容は詳しく聞き取れないし分からないが、きっと俺のことなんだろうな。

「……………うう」

「ってなんだ？ 緊張して返事もできないか生徒タクマ？」

「い、いえそんなことはなないですヨ？」

「動揺しまくりだなお前。ま、みんないい奴らだから心配するな」

クリス先生はしつかりしろと力強く俺の肩を叩く。

背が俺より低いから妙な図に見えるけど。

「では先に私が入るから、貴様は私の合図の後に入ってくるといい」「わわわ分かりましたっ！」

クリス先生が教室へ入ると、ざわついていた教室の中がさらに大きくなった。

うわあめっちゃ緊張してきたぜチクショウ！

ああ、マジでどうしようか自己紹介。

言うことは何となく考えたけど、噛まずにちゃんとと言えるか心配だ。

壁にもたれかかって大きく息を吐きかけた瞬間――。

「よしよし、それではお待ちかねの転入生に登場してもらおうか。
入るがいいぞ生徒タクマ」

「――ッ！？ げふっ、がふっ、げほっ！」

うおおおい、おまちよつと早すぎるよ先生！

びっくりして吐こうとした息を飲み込んでしまった。

つか1分も経たないうちにお呼び出しデスか？

少しぐらい心を落ち着かせるための時間を稼いでくれても良いんじゃない！？

……でもまあ ここは覚悟を決めるしかないよな。なんとかなるよ、ね？

誰ともなく呟くと、俺は静かに扉を開け教室の中へ足を踏み入れるのだった。

・
…

ただいま御剣拓磨の緊張はピークに至る。

プレッシャーに押し潰されそうになるのを必死に耐えていた。

俺は教卓の前までゆっくりと足を進め、教室中を見渡す。

木製とは違い少し高級そうな机に椅子。

意外にも異世界の教室の中のはつくりは、日本のそれと変わらないように見えた。

生徒の数もパッと見た限り40人ぐらいかな？ 50は越えてないと思うのだが。

これも平均的な日本の学校のクラス人数だ。

正直100人ぐらいだと覚悟していたので少し拍子抜け。

そうしているうちに何人かの生徒と目が合ってしまう。

オイやめろそんなキラキラした瞳で見つめるな俺の心が心が。

——拍子抜けってのは撤回だな。ゆっくりと他の所へ視線を変える。

その先に見知った2つの顔を見つけた。トウカとミアだ。

「……………ん」

「——クスッ」

銀髪少女は相変わらず興味がないような無愛想な顔。

一方桃色少女はニコニコしてアピールをしている。

……………何なんだこの差は。

「それでは自己紹介を頼む」

——って いよいよ来てしまったか。クリス先生の合図に「はい」と答えて一拍。

気付かれないように深呼吸をして、俺は出来る限りの声を出した。

「初めまして、今日からこの学園に編入する事になったタクマ＝ミツルギです。種族は人族の人間。分からないことばかりですが楽しい学園生活を送ればいいなと考えているので、みなさんよろしくお願いしますっ！」

それは10秒もない簡単な自己紹介。

内容的にも短すぎるし自己紹介とは言えないかもしれないけど。

これが俺の精一杯だった。噛まずに最後まで言えたことを誰か褒めてください。

その後クラスメートたちから起こった拍手を耳にして胸をなで下ろす。

最初の掴みはなんとか上手く行ったみたいだな。

「うむ、よからう。お前らもすでに知ってると思うが、生徒タクマは異界の出身だ。同じ2組のお前らが率先して学園の施設や勝手を教えてやってくれ。あと仲良くな」

クリス先生のフォローがあつた後、前の席の生徒たちから『よろしく』と笑顔の歓迎を受けた。

もちろん俺も『ああ、よろしく』と返す。笑顔は引きつつているかも知れないが。

「後ろの席が1つ空いてるからそこが貴様の席だ」

「はい、分かりました」

クラスメートたちに会釈をしながら後方の席へ向かって歩く。
この中のほとんどが人間じゃないのか……。

誰を見ても人間にしか見えないんだけどな。

「ん、あれ？」

そんなことを考えながら、席のすぐ前まで来て足を止める。
なぜなら空いてる席が2つ並んでいたからだ。はて、どっちに座ればいいのか？

「——左の席は別の人のだよ。君の席はラグナ……、その寝てる赤毛クンの隣」

「そ、そうか。ありがとう」

「いえいえどういたしまして」

先生に尋ねてみる前に、緑髪の男子生徒が察してくれた。
その親切なクラスメートにお礼を言ってから右側の席に座る。

チラッと左隣を見ると、赤毛の男子生徒が机に伏していた。
心地良く熟睡なさっている所を見ると、昨日は遅かったのだろうか？

「よしよし転入生が気になるのは分かるが、一旦前を向け前を」

自分の話を聞かず後方の俺に大半の視線が向いていたので、クリス先生は手をパンパンと叩いてから出席をとり始めた。

と言っても、1人ずつ点呼を取るわけではなく前の席の数人に欠席者を確認しているだけだが。

「生徒ミリオムが遅刻と……。よし、朝のHRはこれで終わりだ。
今日の午前中は全て魔法基礎だったか、頑張れよ」

恐らく開いている右隣の席の人の名だろう。名前的には女の子かな？

チャイムが鳴ってクリス先生が教室から出て行く。
すると入れ替わるように男の先生が入ってきた。

どうやらこの学園ではHRの後は休みなしに1時間目が始まるらしい。

確か授業の内容、魔法基礎って言ってたよな先生。
日本にも一応同じ名前の科目があっただけ……。
その内容とレベルが同じかどうかは分からない。

全然分からなかったら嫌だなあ。

そんな俺の不安を他所に、朝の授業は始まるのだった。

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! ! -

Ep:1-7 【クラスメートは異界人】

Episode 1-7 【交わる出会いと仲間】

「ああそうだな、どっちかって訊かれたら好きかもな」

「えっ、身長か？ 半年ぐらい前の身体検査じゃ、確か167だったよ」

40分間の1時間目が終わった後の休み時間、案の定俺の席の周りには人集りができていた。

もちろんそれを無下にする勇気を俺は持ち合わせていない。

よって今クラスメートからの質問を丁重に答えしている最中である。

ちなみに心配していた授業の内容はあんまり難しくなかった。

幸いなことに魔法の実習はなくて、あくまでも論理だけだったからな。

詳しく言えば水の魔法構成式の応用についてだったのだが、話せば長くなるのでそこまで説明しないけど。

それより驚いたことが、生徒証の中に教科書やノート機能があることだ。

……もうこれ生徒証ってレベルじゃないぞ。

「え、SかMのどっち系か？ アンタそれ初対面の人にする質問かよ!?!」

女子生徒の1人がニヤニヤしながらえげつない事を問いかけてくる。

「いいジャン教えてよ！ この学園じゃそういうのを答えるのが信頼の証なのよ」

「ロクでもない信頼だなオイ……。 って、そもそも俺はノーマルだ！」

「もう、転入生クンったらツマンないの」

そういう面ならつまらなくて大いに結構だ。

大半の質問には答えてしまったので、だんだん下らないのが増えてきた。

今みたいな性癖とか好みのタイプとか云々。 反応に困るからやめて欲しいんだけどなあ。

ま、でも日本での扱いと比べたら天と地の差はある。

俺のエーテル不足事情を話しても、誰も蔑むようなことはしないからだ。

そしてみんな学園長と同じように口を揃えてこう言う。

『魔法なんて明日にでも使えるようになる』と。

「どうして？」と尋ねても勿体ぶられてしまうのだが、ここまで言われるからには信用してもいいのかね。

本当に魔法が使えるようになるのなら明日が楽しみだ。

「う、うーん……。 なんだあ？ さっきからうるせえなあ……」

「お、やっと起きたかラグナ？ もう転入生来てるし1時間目も終わっちまったぜ？」

俺の席の周りがかかなり騒がしくなったせいか、隣の席の赤毛が目を覚ましたらしい。

そっいえばコイツ、授業が始まって普通にも眠ってたな。

彼はクラスメートたちに笑われながら背伸びをする。

「んあ？」

横目でそんな様子を眺めていると、その男子生徒と目が合ってしまった。

ツンツン赤毛は 何かが弾けたように勢いよく席を立つと――。

「おおっ、アンタが噂の転入生かい！？」

「うわっ！？」

あっという間に目を輝かせて詰め寄ってきた。

俺の顔、髪、足、手の先まで舐め回すようにジロジロと観察すると、腰に両手を当ててこう口を開いた。

「俺の名前はラグナ・ヴォレリウス。ラグナって呼んでくれイ転入生くん！」

「あ、ああ…… 俺はタクマ、タクマ・ミツルギだ。こっちも好きに呼んでくれ」

初めましての挨拶もなしに名前を交換し合う。な、なんだコイツ今さっきまで寝たくせしてめっちゃテンション高い。
クラスのムードメーカーか何かだろうか？

「よしよしタクマだな、よろしくな頼むぜい！ 女の子じゃないの

は残念無念だけだな。……もしかして、実は女の子だったりする？」
「ねーよッ！？ 正真正銘男子だぞ俺は」

どうやらラグナは女子の転入生をご所望だったらしい。
その気持ちは分からんでもないがな。

俺もどうせ来てくれるなら野郎より女の子の方が気分は良くなる。

「ラグナ、まだそれを引きずってるのかい？」

すると横から緑髪の男子生徒が苦笑いをして話に加わってきた。
さっき席を教えてくれた人だ。

「僕はテオ、テオ〃ベリアルスだよ。よろしくねタクマ君」

「ん、よろしく。さっきはありがとう。助かったよ」

「だから気にしないでってば。全然大したことでないよ」

改めてさっきの件の礼を言うとテオは手を頭に置いてはにかむの
だった。

「……なんだ、何の話してるんだお前ら？」

その時眠っていたラグナには、話の筋が読めないようだったが。

・
…

3時間目が終わった休み時間、転入生に質問タイムはついさっき
まで続いていたのだが気合で乗り越えた。

「ふーん、ラグナもテオも転入生だったのか」

今は新たにできた席の近い友人、ラグナとテオの2人と会話をしていた。

ちなみにラグナは竜族でテオは魔族らしい。

身体的に人族とどう違うのか全く分からないのだが。

「そうだよ。僕は4年前で、ラグナは去年の新学期にね」

「他にも10人ぐらいはリユミシアル外の転入生らしいぜ」

「ふーん、なんか微妙に多いな」

きつとその割合は、このクラスだけのものではないだろう。

そもそも異世界人の存在が当たり前なことが異常な気がするけど。

「そんなに外から人を連れてきて問題ないのかね、この世界は？」

「もう数百年前からやってることらしいからね。別に問題ないみたいだよ」

「難しいことは気にすんなってこつた。あの学園長が計算してやってることだからな」

ラグナの口から漏れた単語に俺は反応する。

「学園長？ ああやつぱりあの人が黒幕なのか」

「ハハ、黒幕って言い方はどうかと思うけど、確かに学園長さんがここに連れてくる人を選んでるみたいだからね」

「つか目的が何か分からん。俺をここに連れてきても得はないと思うんだ」

「さあね、それは僕にも分からないな。でも君はここに来て良かったと思えるはずだよ」

「……うん、それはどういう意味だ？」
「転入生は、ここに来る人はいつも“良くない事情”を抱えてるからね」

一瞬だけ、テオは鋭い目をして俺の目の中を覗き込んだ。
隣のラグナはわざとらしく目を瞑って腕を組んでいる。

「たしかに俺の魔法が使えない事情なんてまさにそれだよな」
「でしょ？ この世界は、学園はそんな迷える少年少女を転入生として迎えてるのさ」

テオ曰くここは特殊な次元体らしい。
セカイ

さつき先生が教えてくれたように、異種族同士が手を取り合っている。

当然戦争は起こらず、豊かな街並が守られているわけだ。

そんな平和な世界は他に存在しない。

転入生は、俺たちはそんなセカイで過ごすこと許された1人である。

「いや、ますますワケが分からなくなっただが……」

「ま、深追いせずに“ラッキー”って思っておけば良いんだよ」

テオはそう言つと爽やかな笑顔に戻る。
果たしてラッキー……、なのかねえ？

「アンタら男が集まって何の話してんのよ？」

「さっそくクラスに馴染めてますねタクマ君。良かったです」

会話に集中していたからか、気付かないうちにトウカとミアが俺の後ろに立っていた。

2人揃って様子を見に来てくれたみたいだ。

「お陰さまでな。んでお前は何しに来たんだトウカ？」

相変わらずなんとも言えない色の目を俺に向ける銀髪少女に問う。
今のところ第一印象が最悪だからなコイツは。

「ちゃんと講義に着いていけるか聞きに來たのよ。分からないところはない？」

「そうだな、2時間とも今のところは大丈夫だ」

「チツ、つまらん」

銀髪少女はわざわざ人の耳元で舌打ちをくれました。

——これってケンカ売られてるのかなあ？

「トウカ、悪い冗談はなしで。本当に大丈夫ですかタクマ君？」

「ああ本当だ問題ない。氣遣ってくれてありがとな」

「安心しました。困ったことがあったら何でも行ってくださいね」

めっっちゃ親切な娘だし、話してても気分がいいなミアは。

「ま、せいぜい落ちこぼれないように頑張りなさいな」

……どこぞの銀髪少女とは違って。

その後チャイムが鳴り先生の姿が見えると生徒たちが次々に着席

する。

座りっぱなしでは腰が痛くなるので、俺も一度立ち上がってから席についた。

「あれ、そういえばラグナは……？」

すっかり静かになったラグナの方を見ると、

「――ぐう」

爆睡なさっていた。さっきの腕を組んでいるポーズのまま。

「オイ！ 起きろラグナ、授業始まるぞ、つかもう始まつてる！」

「んあ？ いいんだよ別にいゝ、タクマっちこそしっかり授業聞いとけて……」

変なあだ名を付けられてしまった。そのまんまだけど。

「そんな堂々と眠って叱られても知らんぞ俺は」

これ以上を説得が続けると、俺まで怒られかねないので引き下がった。

ちなみにあまりの爆睡ぶりに先生がキレたのは言うまでもない。

そしてこの日俺は廊下に立たさせる生徒を初めて見た。

――しかも異世界でな。

そんな意外と面白い奴が多いこのクラスで過ごすうちに、特に問題はなくすべての授業を終えた。

教科書ノートが特殊なこと以外は特に日本のそれと変わらない。
いや、日本よりもずっと分かりやすかったかな。……俺の気分の
問題かも知れないが。

昼休みになるとクラスメートたちが食堂へ誘ってくれたのだが、
俺は副会長を持たなければならぬのでまた今度案内してもらっ約
束をした。

生徒たちで溢れた賑やかな廊下を、教室の窓から身体を乗り出し
て見渡す。

俺の姿を見て手を振ってくれるクラスメートに答えながら副会長
を待つのだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 1 - 8 【生徒会長様と男子寮】

Episode 1 - 8 【生徒会長様と男子寮】

『見てみるって、あれが噂の転入生らしぞ!』

そんな視線をビンビン感じながら副会長の隣を歩く。
正直めっちゃ恥ずかしい!

そんな俺の様子を察してか、銀髪メガネが話題を振る。

「それで御剣、授業の方はちゃんと受けられたのか? この学園の魔法講義はほとんど日本と同じレベルだから、一応問題ないと思うんだが」

「あ、はい、その辺は大丈夫でしたよ。ちなみに自己紹介も」

「それは良かった良かった」

副会長の話では生徒会室が落ち着いて話ができる場所らしい。

2人で整然とした生徒会室に入ると、俺は早速話を切り出した。

「それで副会長、お話ってのは一体?」

「朝の続きだよ。これからの新生活、まだまだ不安が残ってるだろ?」

まあ確かに、お金とか寮とかまだ結構な問題があるな。

寮は学園が用意してくれるんだろ?」

「お金ってどうすればいいんでしょうか? 俺一文無しなんですけど」

言って悲しくなることだが、事実だし仕方ない。

「それは……。学園長説明してないのか。全くあの人は――」

近くの椅子に適当に腰掛けると、学園長に向けてか溜息を吐く彼。その後学園長に代わって俺への金銭事情を説明してくれた。

副会長の話を纏めると、まず金銭面については気にしなくていいらしい。

何でも転入生の食費や生活費は学園側が面倒を見てくれるそうだ。もちろん月に支給される額は決まっているから、全てタダというワケではないけど。

驚くべきことに通貨が硬貨や紙幣ではなくポイント制だということ。

生徒証が財布代わりになって物を購入できるとか。

「異世界って普通にすごいですね」と感嘆な声が漏れてしまう。

「あゝ、こんなことで驚いてちゃいかんよ。まだまだこの先大変だから」

「聞くの怖いんですけど、どういう意味でしょうか？」

「具体的には伏せておくが、日本や地球では有り得ないことがこの世界にはあるし、起こるってことさ」

「めっちゃ不安になるんですけどそっという言い方!？」

「ふふっ、割とわざとだったりするぞ。精精楽しみにしておけ」

右手でメガネを持ち上げてニヤツと晒う。

そついう嫌らしいところ妹に似てやがるぜ。

冗談は抜きにして、本当に身に何が起こるのか不安すぎる。
一応同じ人間の副会長もトウカも生きてるので大丈夫だと思うが。

「と言つか、お腹空きませんか？」

昼食を食べたいと副会長にアピールして見せる。

朝食が焼きそばパン1つだけだったので結構キツイ。

「それなら今、アイツに買いに行かせてるから大丈夫だ」

「——え、アイツ？」

買いに行かせてるって誰に？

それを考える暇もなくバンツといきなりドアが勢いよく開かれた。

何事かと思いながら扉の方を見やると、
息を切らせた1人の美少女がそこにいた。

「ハアツ、お待たせしましたの。昼食を買ってきましたわッ！」

その人はあまり聞く機会がないお嬢様口調で。

大きく肩で息をしながら、今日のランチを運んできた。

・
…

「わたくし、生徒会長のエルジイルムⅡシアクウナと申しますの。
今朝は寝坊をしてしまってご挨拶ができずに申し訳ないですわ」

「い、いえ気にしてないですよ。ええっと……？」

「妹と同じで呼びづらいでしょう？ エルザで構いませんわ」

ああ、確かそうだった。ミアが朝にそう呼んでいた事を思い出す。

「そう呼ばせてもらいます、エルザ会長」

会長の方は既に知ってるみたいだが俺は名乗り返した。

今日という日ほど自分のフルネームを人に伝えた日は記憶にないな。

「そう、タクマね。ようこそリユミシアル魔法学園へ……っでお決まり文句は、少し遅すぎるかしら」

「無論だ、本来それは今朝言すべきセリフだからな」

副会長が呆れた声で答え、エルザ会長が買ってきたパンを口に入れる。

俺もありがたくチョコレートパンをいただいた。

エルザ会長はミアのお姉さんだ。

髪型は学園長に似たロングで、色はミアのピンクより少し濃く鮮やかに見える。

生徒会長らしく高等部2年生の中では首席らしい。

だが寝坊が多いのが玉に瑕と副会長は晒った。

『なんでコイツが俺より優秀なのか分かん』と。

「そ、それは夜遅くまで勉強をしていたからですわ！」

顔を赤くして抗議するエルザ会長。

「——だそうだが、どう思うよ御剣？」

「あはは……、別に良いんじゃないですか？ 勉強なら」

「まあまあ！ タクマはアキラと違って優しいですわねえ！」

適当に誤魔化したつもりだったが、随分と真に受けられてしまった。

「その考えは甘いぞ御剣よ！ 生徒の見本たる生徒会長、いくら勉強に励んでも日常生活が弛んでいては話にならない」

「まったく、これだから嫌なのです。アキラは頭が硬くて……」

「やかましいわ寝坊助会長め。——っという加減話を元に戻さんとな。御剣、昼食を食べ終わったら寮へ案内するぞ」

副会長はパンを口に含みながら新たな話題を切り出した。

寮か、どうやら話の本題らしい。

「え、副会長が案内してくれるんですか？ それに授業もまだあるんじゃない……」

「アキラは優等生ですから、別に1日授業を受けなくても平気ですわ」

「おおさすがだ」

「まあな、副会長なんで」

白銀暁がわざとらしく ふんぞり返った。

それが原因でメガネがズレたの言うまでもない。

・
…

昼休みの終わり、賑わう学園を抜け出して俺と副会長は静かな寮

の中を歩く。

高等部第3男子寮が俺の住むことになる寮の名前らしい。
ちなみに銀髪少女トウカが寮長をしている女子寮の隣だ。

「ここがお前の部屋だ、日当たりもいいし悪くないと思うぞ」

副会長に促されるままに生徒証をドアノブへかざす。

するとロックが解除されたこと知らせる機械音が小さく響いた。
……マジでカードキーにもなるのかコレ。

生徒証の多様さにつくづく感心して部屋の中に入る。

ベッドや机、料理場に洗面所。

銀髪少女の部屋と同じづくりだが、当然のことながら誰かが使っている形跡はない。

「ここが」

これから住む部屋か。

「今度の週末にでも誰か誘って、街へ装飾品を買ってくるといい」

「そうですね。確かにこのままじゃ地味ですし」

「あ、その時はちゃんと俺も誘えよな」

「へいへい」

適当に副会長をあしらって部屋の中を歩きまわる。

純白のカーテンを開けると、今朝トウカの部屋から見た時と同じように大きな学園が覗けた。

「意外に早く終わっちゃいましたね」

時計を見るがまだ14時にもなっていない。

特にすることもなくベットへ身を投げる。

制服がシワになるが気にしない。カードで着替え直せば綺麗なものに戻るからだ。

——その後数時間、俺は副会長から他愛もない話を聞かされた。

地球には存在しないような魔法の話、

去年副会長が魔法決闘というものでエルザ会長に叩きのめされたという話、

数百年前日本から来た人が日本食などの文化を残したという話、

この学園には男女ともに人気が熱いアイドルが活動しているという話などなど。

実に3時間近く2人で話し込んでいた。……暇人すぎるだろ。

「ちなみに俺の部屋は最上階、5階な。何かあればいつでも来いよ」

「ここって何階でしたっけ？」

「真ん中の3階だ。部屋番号は314な。忘れるなよ」

314で円周率かよ。嫌でも覚えられるわ。

副会長を見送りに外へ出ると、ちょうど帰宅してきたラグナとテオにばったり会った。

その時知った話だが、周りの部屋は全部同じ第2クラスの男子のものらしい。

しかも隣はテオ、向かい側はラグナということが判明。

夜 食堂で夕食をとった後、2人の部屋にお邪魔させてもらった。

ちなみに夕食はフィダンラとかいう肉料理の定食だった。

それどう見てもハンバーグなんだけどな。

味は良かったぞ、俺ハンバーグ好きだし。

テオの部屋はよく整理されていてメチャクチャ綺麗だったのだが……。

ラグナの方は何かもう色々と終わっていた。言葉に表せないほどに。

——頑張って清潔な部屋の状況を維持しようと自身に誓うのだった。

その後日が越えそうになるのを見計らってまた明日と解散。

生徒証の着替え機能で元から登録されていた適当な寝間着にチェンジしベッドに潜り込む。

「明日はどうなっちゃうのかねえ」

俺はこれからの未来に想いを馳せながら目を閉じる。

新品なのか、純白の枕がものすごく寝心地がよくて俺は早く眠りに落ちるのだった。

・
…

深夜、静かな学園長室に2つの影があった。

「呼んだか、リリス学園長」

「ええクリスちゃん、大切なお話があるんですよ」

リユミシアル魔法学園のベテラン教師、クリスティーナ・ムーンライトにそのような呼び方ができるのは、どこを探してもこの学園長ただ1人だけである。

「もう200年は言い続けてるんだが、いい加減その呼び方はやめてくれないか？」

「別にいいじゃないですか、可愛らしいんですから」

「可愛い可愛くないの問題じゃなくてな、生徒に示しがつかないだろ？ …… って言っても無駄か」

クリスは大きな溜息を吐いて、金の長い2つの髪束を揺らす。一体なんの用だ、と尋ねようとして止めた。

このタイミングで呼び出される事案はかなり絞られるからだ。

「ま、用件は何となく察しが付く。今日の転入生についてだろう？」

クリスはその中でも特に気になっているものを挙げた。

人族の、名をタクマ・ミツルギと言ったか。

教師の彼女ですら今朝になって初めてその存在を聞かされたのである。

例を見ない不自然すぎる異界人、転入生だ。

「大正解」 実はあの子のチカラを引き出して欲しいんですよ」

「“ラファールゼ”の事か？ 随分簡単に言ってくれるな……。期間は？」

「3週間後には彼のチカラが必要になりますので、それまでに何とか」

「フッ、上等だ面白い。明日からきっちり鍛えてやろうじゃないか」
「クリスティーナ・ムーンライト、期待していますよ」

ラファエーゼ
高密度エーテル顕現体。

ミシク
リユミシアル界だけに存在する “エーテル増強魔力” を摂取することで手にすることが出来る最強の魔力媒介である。

「——ところで学園長、1つ訊きたいのだが」

部屋から出て行こうとするクリスは、何を思っただけで立ち止まった。
深い紅に染まる吸血族特有の瞳は、黒眼の学園長を鋭く捉える。

「生徒タクマは何者だ？ どうせただ才能を持った人間だけではないのだろう？」

視線の先を微塵も離すことなく、静かに口だけを動かす。

これはクリスの純粋な疑問だった。あの黒髪の少年に神は一体何を期待しているのかと。

「さあ？ 何でしょうね……」

少年と同じ漆黒の髪を持った“神”は悪戯っぽく笑みを浮かべた。
それは数百年前、身も心もボロボロだったクリスに向けられたものとよく似ていた。

この世界に導かれた時、確か彼女は学園長にこう質問したのを覚えている。

『なぜ、私を助けた？ 誰に殺されても文句を言えない吸血族なんかを』
コミクス

その時の答えと、今のそれは何となく同じ様に聞こえたのだ。

「あの時から相変わらずに、貴女の考えることはよく分からないな」
「ふふ、他の人からもよく言われちゃいます」

まるでホンモノの天使のように可愛らしく舌を出す学園長。
クリスは再度大きな溜息を残してから学園長室を出るのだった。

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! ! -

Ep:2-1 【魔法学園のダンジョン】

Episode 2-1 【魔法学園のダンジョン】

異世界リユミシアルの朝2日目。

ベッドの上で俺は自身に起こった異変に1人驚愕していた。

「本当に戻ってる……。し、信じられん」

昨日まで欠片ほどしか無かったエーテルが、熱く俺の中を巡っているのを感じるからだ。

溢れんばかりのエーテルを右手に宿し、殺風景な部屋の中にかざす。

すると今まですり抜けてしまい、触れることすら叶わなかった魔力が自然にその手に集う。

……やべえ嬉しすぎて涙出そうだ。

「まてまてこれ夢じゃないよな？」

俺はベッドから飛び降りて洗面台へ。

冷たい水でぞんざいに顔を洗い立てること3回、この事態が妄想の産物でないことを確かめる。

よし、これは現実だ。

いい感じに眠気が吹き飛んだところで試しに昨日授業でやってたフリーズリコシェット

“氷結の跳弾”の魔法構成式を編んでみる。

美しいホライズンブルーの魔法陣が足元に展開されたのを見て、自然に笑みが溢れた。

「マジカル魔法はきらめく、ミラクル奇跡がときめく」

喜びのあまり即興で歌ってみる。音痴でカオスなのは承知の上だ。よつと両手の力を抜いて魔法が発動する直前にキャンセル命令を出す。

——部屋の中でぶちかますわけにはいかないし。

昨日学園長やクラスの奴らが言ったあの言葉を回顧する。

『魔法なんて、明日にでも使えるようになる』

それがまさか本当に本当だったとはな……。

朝っぱらから感動しつつ、窓を開けて大きく深呼吸。

今度学園長に会ったらちゃんとお礼言わないといけないな。

どういつ理屈かは分からないが、実際エーテルは回復して魔法を使えるようになったのだから。

そんなことを考えているとコンコンと部屋の扉が叩かれた。

「タクマ君、起きてる？ 僕、テオだけと一緒に学園行かないかい？」

誰かと思ったら爽やかクラスメートのテオだった。

どうやら迎えに来てくれたみたいだ。

まだ教室までの道のりを把握できてない俺にとってはありがたいぜ。

「オーケー分かった、俺も行くよ」

朝の日差しが差し込む窓の前で再び大きな深呼吸。
枕元に置いてあった生徒証を起動させると素早く制服にチェンジする。

鏡で身嗜みを整えてからドアを開けるのだった。

・
…

寮の食堂でサンドイッチを頂いた後、テオと2人で第2男子寮を出て学園へ向かう。

まだ教室までの道順をよく覚えてないのでテオが先頭で俺がその後続く形だ。

「グランタリー高等部の学舎は学園で一番大きいから気をつけてね」

「そうなのか。それにしても悪いな朝から面倒みてもらって」

「いいのいいの、僕ら友達でしょ？ 生徒会の2人だけじゃなくて僕にも頼ってよね」

ああお友達、実にいい響きだ。

ちなみにもう1人仲良くなった友人ラグナは放置してきた。

なぜなら彼は部屋の中で爆睡、呼んでも起きる気配が一切なかったからである。

昨日の爆睡ぶりを見るに、思いつ切り遅刻しそうで心配だが。

「そういえば今日は何の授業があるんだ？ 昨日と同じってわけじゃないだろ」

「うん、違うよ。たしか今日はダンジョン探索の日だったね」

「……………はい？」

だ、ダンジョンだって？　なんだか頭が痛くなる単語が出てきたぞ。

「それはズバリッ、学園が作った“仮想迷宮”のことなんです！」「ぬわッ！？」

どこからともなく突然ピンク髪の少女が現れた。

水色のリボンで可愛らしく形作られた、小さなツインテールには見覚えが。

「……………ミアか、朝から驚かすなよ」

「えへへすみません。さつきから話しかけるタイミングを伺ってたんですよ」

「普通に話しかればいいだろうが。で、そのダンジョンとやらで一体何するんだ？」

「その時の授業内容にもありますが、基本的に探索です。もちろん中には魔物などの敵が設置されていますから撃破しながらですね」

呆れて桃色少女に聞き直したが、返ってさらに混乱する。

だってねえ、魔物ってさあ。

「オイオイ、そんな危なそうなの入れて大丈夫なのかよ？」

下手したら生半端な怪我じゃ済まなくなるんじゃないだろうか？
気付いたら頭からガッツリ食い殺されちゃってましたテヘッ

——なんて悲惨なことになりかねないぞ！？

「そんな世界の終りみたいな顔しなくても大丈夫だよタクマ君。あくまでもダンジョンは仮想世界だからね、中で何があっても怪我したり死んだりしないよ」

「先にそれを言ってくれ……」

その仮想世界がどういう仕組みで構成されているのかは詳しく知らないが、きっと光の空間魔法の応用か何かだろう。

とにかく俺の嫌な想像は杞憂だったようだ。

「最初はビックリするかも知れませんが、慣れれば魔物の相手なんて楽勝ですよ。中等部の女の子よりも弱いんですから」

「そ、そうなのか？　なら少し気が楽になるな……」

昨日副会長から聞いた話だが中等部とは日本風に言えば中学生と同じ意味らしい。

異種族でも肉体的、精神的にも同じ年齢ということで間違いないとか。

同じように初等部が小学生、ブライマリー高等部は高校生に相当するらしい。

そんな中学生、14、15の女の子よりも弱いつて逆にどうかと思う気がするが。

しかし魔物ねえ。スライムとかゴーレムか？　他には、うーん……

生憎そういうのが出てくるゲームには詳しくないから想像できない。

願わくはあんまりえげつないのが出てきませんように。

いやだってゾンビとかのいわゆる死骸系は生理的に無理ですし俺うをおやべえ想像したら吐き気が……！？

「ちなみに結構いますよ、その……、^{アンデッド}死骸系の魔物」
「ははっ、はっ」

遠慮がちに教えてくれたミアに俺は乾いた笑いしか起こらなかった。

もうどうにでもなれ。

その後3人でお喋りしながら教室へ到着。

これでなんとか寮からの道のりは覚えたぞ。

先に来ていたクラスメートたちに挨拶しながら相手の名前を確認。記憶力は悪くない方なので、顔と声を合わせれば大体名前が出てくる。

「おう、おはよう——。ってあれ？」

自分の席の前まで来ると、昨日は居なかった女子生徒が隣に座っていた。

生徒証で学園新聞を観覧しているみたいだ。

「あら……、あなたが話題の？」

話しかけようと席に着くと、先に気付いて向こうから声をかけてくる。

「どうも昨日から転入してきたタクマだ。よろしくな」

「ミリオムよ。昨日はちよっと寝坊しちゃってね」

「ちよっと？ 確か昼休みになっても来てなかったような気が……」

「あはは、バレちゃったか。本当は目が覚めたのお昼休みが終わる時間だったの」

『さすがに寝すぎだろ』と突っ込むと『隣のラグナよりはまだマシよ』と彼女はなぜか誇らしげだった。

ミリオムと話すことで、第2クラス全員の生徒と一通りコンタクトを取れた。

俺を入れて47人。男子が24、女子が23人だ。

それにしても席の両隣が睡魔人だったとはな……。

・
…

そんなこんなでHR、そして授業が始まる。

ダンジョン探索の担当教師は我らが2組担任クリス先生だそうだし、ちなみにラグナはギリギリで教室に滑り込み遅刻を回避した。

金髪吸血鬼先生はバ力を見る目で晒っていたが。

「それでは早速迷宮探索に入りたいところだが、その前に1つ決めねばならんことがある」

クリス先生は教卓の上に両手をついて話を切り出す。

「貴様らも知っているとおり生徒タクマは昨日転入してきたばかりだ。当然まだどのクランにも所属していない」

タクマという言葉を聞くに、どうやら俺の話らしい。

つてかまた知らない単語が……。

「おいラグナ、クランって何だ？」

「んあ？ ああクランてのはな、こういう授業と一緒に行動するグループのことだよ」

赤毛竜人はそう言いながら机に伏した体を中途半端にこちらへ向ける。

その中途半端に開けた目を見るに、まだまだ寝足りないようだ。

ラグナの説明だと、クランとは活動班と言ったところかな。

そりゃ1人で魔物と戦うのはキツそうだな。

「——そこでだ。彼を受け入れてくれるクランはいないか？」

それを聞いたクラスのクランリーダーから一斉に手が上がった。
ふむ、どこに所属させてもらおうか——。

「失礼、クリス先生」

「む、どうした生徒トウカ？」

銀髪少女は1人立ち上がると、先生の目を見て静かに口を開いた。
クラスがざわつき出すのを全く気にする素振りを見せずに言葉を続ける。

「学園長からタクマミツルギの管理は生徒会がするようにと言われました。よって彼の所属するクランは私の所にしてもらいたいのですけれど」

「……そうか、なるほど。そういうことなら仕方ないな」

クリス先生はうんうんと頷いて銀髪少女の要請をあっさり受け入れた。

銀髪少女は満足気にこちらへしたり顔をして見せる。

——え？　どういう意図なんだ今の！？

「ちよつ、トウカさんそれセコくない！？」

「そうだぜ！　俺たちだって転入生と親交を深めたいんだが——」
「やかましい。これは学園長の意味なのよ、文句あるのかしら？」

トウカは次々に不満をたれるクラスメートを一蹴りして着席する。
隣の席でミアがうふふと笑っていた。

「そういうことだ生徒タクマ。お前の所属クランは生徒トウカの所に決まった」

「はあ、さいですか」

そもそも俺は一言も自分の意見を主張していないけどな。
ま、別にアイツのクランに入っても不都合はないからいいけど。

「そうそう、生徒トウカのクランメンバーを覚えておかないとな。
生徒ミア、ラグナ、テオオの4人だ。覚えておけ」

「えっ、お前らなのかよ！？」

隣でラグナは親指を立て、テオとミアは笑顔でこちらを振り向いて見せる。

クラスで一番仲良くなった奴らばかりじゃないか。

「よしよし、それでは仮想迷宮へ向かうぞ。他のクラスは授業中だから静かに移動するようにな」

先生のパンパンと手を叩く音を合図で、クラスメートたちが次々に教室の外へ出る。

つか そもそも仮想迷宮^{ダンジョン}って学園のどこにあるんだ？

俺は迷わないようにクラスメートたちの後に続くのだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:2-2 【いざ、仮想迷宮へ】

Episode 2-2 【いざ、仮想迷宮へ】

学園中心塔の4階には他の学舎や学園施設に転移できる連絡通路ポータルがある。

その1つが仮想迷宮ダンジョンへの入り口というワケだ。

転移魔法が施されているポータルの中へ進むと、景色は巨大な円形ホールへと変わった。

床は色鮮やかなタイルで彩られ、壁と天井は純な白で覆い尽くされている。

「ここが仮想迷宮ダンジョン？　なんかイメージと違うな」

「まだですよ、ここはただの入り口ですから」

1人呟くと隣のミアに『違う違う』と苦笑されてしまった。
入り口と言われても、どう見てもこのホールは行き止まりだ。
他に繋がるような入り口はどこにも無いようだが……。

「よし、全員移動したな」

広すぎるホールを見回していると、最後に入ってきたクリス先生が声を響かせる。

「今回の探索実習は魔獣フェンリルの討伐だ。フェンリルは大型の人狼ワウルフ、気を引き締めて挑むように。撃破すれば魔晶石を落とすから戦利品として回収してくるようにな」

フェンリルは聞いたこと無いが、ワーウルフって……。
間違いなくオオカミ男のことだよな？

——俺なんかに処理できるのか大いに不安なんです。

「顔、すんごく青くなってるわよ？ 御剣拓磨」

「だ、誰がビビってるものか！」

「……分かりやすい男ねアンタ」

うをお今のは完全に自爆、言い返せないぞ。

ジワジワ恥ずかしくなってきたので銀髪少女から目を逸らす。

「——ん？」

逸らした視線の先のクリス先生は白衣の内ポケットから赤色のカード、よく見れば生徒証に似ているソレを取り出して何やら操作をしていた。

左手にカードを持ち、空いた右手で空中に映された画面をタッチ。その操作に慣れているのか、右手のスピードが半端じゃなく速い。

「なあラグナ、先生何やってるんだ？」

「何って仮想迷宮ダンジョンを作ってるんだぜ」

俺の問い掛けに、まだ眠そうな顔をしている赤毛竜人から返ってきた答えはそんなものだった。

いや、言わんとしていることは分かるんだけどね。

「テオ……」

俺は一番丁寧に説明してくれそうなテオに尋ね直す。

テオは『一応はラグナの言うとおりなんだけどね』と前置きして続けた。

「まず先生が持つてるカード、見れば分かるけど生徒証と同じものなんだ。もちろん生徒用とは違って教師専用の機能が備わってるんだけ——」

「その機能の中に、“ダンジョン 仮想迷宮を管理する” っていうのがあるんです！」

登校時と同じように、横からミアが口を挟んだ。

説明の途中だったテオは『ミアさんには参ったなあ』と苦笑する。そんな彼の様子を気にせず、ミアは明るい笑顔のまま続けた。

「クリス先生は今私達が向かうダンジョン 仮想迷宮のフィールドの形状、魔物の種類と強さなどを設定していらっしやるんですよ」

「そんなことまでできるのか。すごいな」

魔物にしてもダンジョン 仮想迷宮にしても、地球じゃ考えられん。

副会長やクリス先生が言ってた『驚くこと』とはこういうことか。

しばらくしてホールの虹の床に1つ、また1つと金色の魔法陣が展開されていく。

なるほど、これが入り口ってわけね。

10個目の魔法陣が出来上がると、クリス先生は『注目しろ』と声を上げた。

「前の時間にも言ったが、3学期も残り1ヶ月と数週間だけだ。2年生になって痛い目を見ないようにせいぜい腕を磨け。では開始！」

その言葉を聞いて次々にクラスメートたちが魔法陣の上に消えていく。

俺たち5人も顔を見合わせ、トウカの『行くわよ』の言葉を合図に進もうとするが――。

「待て、生徒タクマとそのクランメンバーよ」

金髪吸血鬼に呼び止められた。

長いツインテールを後ろに払い、その紅い目を俺に向けて補足を始める。

「貴様は魔物を見るのも初めてだろうしな、一応は配慮しておいたぞ」

「えっ、配慮ってどういう？」

「ま、簡単に言えば弱い魔物しか湧かないように、な」

え〜と、つまりあれか。イーजीモードってやつ。

やったぜそれなら初めての俺でも安心――。

って待て待て待て。

「それって本当に大丈夫なんですか？」

いくら相手が弱いと言われてもな……。

「攻撃魔法、少しは使えるようになったのだろう？　ならば十分戦えるはずだ」

「んな無茶な。てか何で知ってるんですか」

「昨日は塵程も無かったエーテルがあからさまに増えているからな。見れば分かるさ」

「エーテルって不可視なハズなんですけど」

「フッ、私のような強大な魔族の前では例外だがな」

この言葉で地球人の常識がまた1つ崩れ去りました。
やっぱり異世界ってすげえ。

「話を戻して、魔法の練習も兼ねてということだ。“自分の力”で魔物を蹴散らし、フェンリルを狩ってこい」

ん、なんか聞き捨てならない言葉が聞こえたような。自分の力で？

「ちょ、それってどういうことですか!？」

「そのままの意味だ。クランメンバーに頼らずにな」

え、じゃあ なに1人で行けと？ さすがにそれは怖いですよ!？

「じゃあ今回俺達とタクマっちは別行動ってことですか？」

「いや、貴様ら4人には彼のサポートをやってもらう。後ろから着いて行って、手は出さず、あくまでもアドバイスをしてやれ」

どうやら先生の話では俺1人じゃないようなので少し安心する。
1人で戦うのは変わらないんだけどな。

「それでは貴様らも行け。健闘を期待している」

「……なんとか頑張ってみますよ」

『自信はないですけど』と付け足して、最後に余った魔法陣へ向かう。

まず銀髪少女が俺に見本を見せるように魔法陣に足を踏み入れる

と、その華奢な体が眩しい光りに包まれ、ふっと消えた。

俺も彼女のすぐ後に続いて魔法陣に乗る。

直後 何かに引き上げられるような感覚がして、無意識に目を瞑るのだった。

ミアが最後に仮想迷宮^{ダンジョン}へ潜ったのを見計らい、クリスは1人呟く。

「さあ、見させてもらうぞ生徒タクマ」

その黒髪の転入生が、まずはどれほど戦えるのかを。

・
…

「ここは……、洞窟か？」

次に目を開けた時、明るく開放的だったホールはその姿を消し、代わりに薄暗い閉鎖的な空間が目の前に広がっていた。

サイドにある壁と壁の幅は大体5メートル。

規則正しく土壁にかけられたランプに怪しく照らされ、この空間が俺に抱かせるイメージはまさに洞窟^{トンネル}だった。

確かにここがダンジョンと言われれば、納得できるしな。

「今回はそうみたいだね。他にも森の中とか火山地帯とか色々あるんだよ」

気付けば他の3人も転移してきたようで、再びテオが話し始める。

彼の説明に耳を傾けながら土壁に触れると、ゴツゴツしてひんやりした土の感触がした。

仮想空間とは言え、なかなか凝ってあるじゃないか。

「火山つてオイ。どんなのか想像できないな」

「まあそれは今度のお楽しみということだ」

「さすがに火山は正直楽しみにはならないぞ」

暑いのが苦手だしね。

いや、そもそも火山地帯って近づいて大丈夫だっけ？

「無駄話してる暇はないわよ。さっさと奥へ進みなさい」

「そりゃ分かってるけど、魔物がいるんだろ？」

「大丈夫大丈夫！ 殺り合ってれば自然に慣れてくるぜ」

——む、赤毛竜人が物騒だ。

「ほらタクマ君、さっそく魔物がいますよ！」

渋々前へ進もうとするより先に、ミアが敵を見つけたようだった。

「えっ！？ ちょっと、ど、どこだよ！？」

「ほら、アソコです！」

息を飲んでミアが指さした方向に目を凝らす。
が、薄暗くてよく見えない。どこだ？

「なあ、ひよっとして……。アレなのか？」

数秒の後 それらしきモノを見つけた。サッカーボールより少し小さいかな。

砂っぽい地面の上に、水色の物体がモゾモゾと動いているのを。

『うにゅ、にゅーん』

なんかもう色々と凄い鳴き声を放っているのを見るに、間違いないだろう。

とにかくこつちには気づいていないようだ。

「なにあれすんごく可愛い」

予想と随分違う。本当に魔物なのか？

すごく触ってみたい！ 腕に抱くとさぞ心地良いことだろう。

「見た目に騙されないで！？ 確かに僕もそう思うけどさ！」

「そ、そうか……。で、あの魔物は一体？」

「スライムよ。^{ダンジョン}仮想迷宮の中で一番の雑魚敵」

あゝ、そうだった。どこかで見た事あると思えば。

大昔のコンピュータゲームにいたなスライム。

確かそのゲームでも一番の雑魚敵じゃなかっただろうか？

「よしタクマっち、まずはアレを倒してみようぜ！」

「りょーかい。とりあえずやってみるよ」

めっちゃ可愛いけど敵なら話は別だ。

ラグナに応え、腰からゆっくり魔銃を取り出し前へ出る。

2日前に3名様のチンピラを彼の世に送り届けた品だ。

トウカには障壁で防がれてカスリ傷1つ付けられなかったけどな。

果たして魔物スライムに効くのか不安なものだが、やってみないと始まらない。

未だこちらに気付いていない1匹のスライムに狙いを定める。
だが、いざ引金に力を入れようとするとところで手が止まった。

——— 少しでも工夫してみたい。そんな気持ちがある中であつたからだつた。

そつだな、まずは単純に魔弾を無属性マナから火属性フレアに変えてみよう。

『…… Enchantare
火魔力装填』

ちよつと簡単すぎて工夫とは言えないかも知れないが、頭の中で火の魔力を集める構成式を展開、詠唱する。

ちなみに特定の魔力を集める構成式を“属性魔力装填”エンチャントと言うぞ。属性魔法を行使する上では基礎の基礎だから感覚を掴んでおかないとな。

続いて小さく燃える魔弾を銃口の前に3つセットする。

テニスボールぐらいの大きさに肥大した炎球は薄暗い洞窟を赤く染め上げていく。

だんだん指先が熱くなってきた。もう十分だろう。

『行け』Go

俺の合図と同時に緋色の魔弾が真っ直ぐにスライムへ襲い掛かる。

紅い尾を引く3つの炎球は短くも美しく感じられた。

水色のスライムは自分に向かってくる炎球に気付いて逃げようとするが――。

『ピギャッツ!』

「うわぁ……」

何と言うか……。逃げるスピードが遅すぎるぞスライムよ。

愛くるしい目をしていた水色魔物は嫌な断末魔を残して燃えてしまった。

なんだか妙な罪悪感が半端ないなっ！

豪快に発火していたスライムはやがて、赤の炎ごと白い光の粉になって霧散してしまう。

果たしてこれで倒したことになるのか？

「ナイス一撃だったぜタクマっち！」

「なんか意外とあっさりだったけどな」

「当たり前。スライムくらい誰でも素手で殺れるわよ」

「さいですか」

ならお前やってみろよ！　と言ってやりたいが面倒臭くなりそうなので抑える。

しかしこの銀髪少女、マジで素手で潰しそうだな……

「うんうん、エーテルの魔力制御もちゃんとできてたよ」

「そうですね。この調子で進んでいきましょう」

テオとミアの2人からも激励を受けて、再びクランの先頭に立つ。

『すうゝ、はぁゝ』と少し長めの深呼吸。

「よし、気合入れて進むか」

俺は白き魔銃を構え、闇に溶けた洞窟の奥地へ歩き出した。

スライムより強大な魔物を倒す魔法を、自分の頭から探りながら。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 2 - 3 【魔獣フェンリルの咆哮】

Episode 2 - 3 【魔獣フェンリルの咆哮】

薄暗い洞窟を探索し始めてから、あれこれ2時間近くが経とうとしている。

その間に処理した魔物は恐らく100匹を軽く越えているだろう。もちろんスライムだけじゃなくて他のも5種ほど見つけた。

ゾンビ？ ああしつかりいらつしやたぞ。

直視するのが嫌だから颯爽と魔弾を叩き込ませてもらった。

テオからの豆知識だが、ゾンビなどの死骸種アンデッドの魔物は燃やすか光の浄化魔法を使わないと復活してしまうらしい。

なんとまあ恐ろしいことよ。

ゾンビの他には、まったく俺が想像もしなかった魔物もいる。例えば――。

『Electric power
紫電の大槍、どりゃあっ！』

気合の籠った掛け声を合図にトリガーを引いた。

バリバリと危なそうな音が鳴る槍状の魔弾、俺の倍ほどある巨大で鬼のような魔物をいとも簡単に貫く。

緑の肌をしたこの大きなのをオーガと言っらしい。

スライムと並ぶほど有名で、気性が荒くとても凶暴な肉食魔物と
のこと。

最初はその威圧感に腰が抜けるかと思ったけど、十匹近く狩って

いると流石に慣れてしまう。

「そろそろ終点に着いてもいいんじゃないか？」

「ええ、あと少しよ。――あ、またゾンビ」

『ああもつつ、居すぎだろゾンビ！ 深紅の焰閃！』
Crimsonphaze

銃口から放たれた紅いレーザーが徘徊するゾンビを焼き切る。何体も狩ってる内に見つけ出した一番効率がいい攻撃魔法だ。遠くまで届くからあんまりグロいの見ずに済むし。

「でもタクマ君、今まで魔法を使えなかったとは思えないなあ」

「私もかなり素質があると思いますよ。精度も結構なものですし」

「え、そうかな？ まだまだ自信がないんだけど」

ミアが笑顔で褒めてくれるのでちよつと照れる。
少し顔が赤くなってないか心配だ。

「世辞ということも分からないのかしら御剣拓磨」

「いちいち茶々を入れないと気が済まないのかお前はよっ」

「――それが私、白銀冬霞」

「したり顔でかつ清々しく言っな！？」

初対面の不信任はまだ完全には消えてはいないが、トウカとはそれなりに会話のキャッチボールができていた。

……できてるよな？

「はいはい、ケンカしないケンカしない！ ほら、ゴブリンが湧いてるよ」

「クツ、覚えてろよ銀髪少女！」

「覚えておいてあげないこともないわ」

トウカに色々言い返したい気持ちを抑え、水の魔力をエンチャントしながらゴ布林たちの前へ出る。

ゴ布林は亜人でオーガなどに比べると体も小さいが、他の魔物より知能があるため注意が必要らしい。

ざっと20匹、ハンマーのような黒鉄の鈍器を振りかぶってこちらへ奇襲してくる。

『撲殺はちょっと遠慮願いたいぜ。氷結の跳弾！』
Freeze Ricochet

今朝使いかけた魔法を、今回は思いっ切り解き放つ。

ホライズンブルーの魔法陣から絶えず冷たい魔弾が生成され、前方のゴ布林へ大量に撃ち込まれていく。

狭い洞窟、土壁に当たった魔弾が跳弾を起こして“氷結の跳弾”
フリーズリコシェット
は逃げ場のない攻撃魔法となっていく。

『——さってこんなもんかな、氷砕』
Crush

そう唱えた瞬間、ゴ布林たちを凍り付けにしている水晶にパキパキと亀裂が走り、盛大に砕け散った。

魔法構成式に少し工夫すればこのような応用も可能だ。

「……はあ、そろそろ疲れてきたぞ」

ゴ布林殲滅後、ダイヤモンドダストが浮かぶ道を進みながら首を回す。

かなり歩いたのに加え、魔法も行使したから尚更だ。

「そんなタクマっちに朗報だ」

「ほう、なんだ言ってみる」

「あと2、3歩進んだら仮想迷宮最奥だぜ」
ボスゾーン

やつと魔獣フェンリルさんがいる場所の前まで来たらしい。

「ボスは雑魚とは違ってしぶといわよ」との銀髪少女の声に、俺は握る魔銃に力を込めて顔を上げ、足を進めるのだった。

・
…

入り組んだ造りになっているらしい洞窟。

その最奥は大きく開けており、さっきまでいたホールに似ていた。もちろん薄暗くて湿気った雰囲気は変わらないが。

「ボスがいるからボスゾーンね。随分安直な名称だ——」
『グウルルルアアア!』

「いつ——!? な、なんだ!?!」

いきなり上げられた凶なる咆哮に立ち竦んでしまう。

殺気に押し潰されそうになるが、その主を全神経を使って探す。

「見つけましたよっ! 魔獣、人狼フェンリルです」

ミアが見つけた先、俺たちとは反対方向の位置に奴はいた。

「あ、あれがオオカミ男……」

実際オオカミを見たことはないが、コレは違っただろ。まず二本足で立ってるし。

こちらを捉えた人狼の鋭い目には敵意が満ちていて、その威圧感
は熊や虎を優に越えているように思えた。

「ちょ怖っ!？——って、なんかこっち走ってくる!？」

どう見ても今までとは違う魔物の覇気にたじろいでしまう。
やべえ勝てる気がしないぞ!？

「いいから、さっさと行け」

「ぎゃ、うわあっ!？」

銀髪少女に後ろから容赦なく蹴られて前へ押し出されてしまった。
ひ、酷すぎる。まだ心の準備ができてないのに!

「男の見せどころだぜイタクマっち!」

「キミならできる、僕はそう信じてるよ」

「タクマ君! 落ち着いて頑張ってくださいっ!」

ギャラリィは完全に他人事だ!？ しかもしつかり障壁まで張っ
てやがる……。

『ヴァルオオオ!』

「う、嘘だろオイ……」

さらに大きくなった咆哮に、嫌々前方を見遣る。
その先の人狼は、俺との距離をかなり縮めていた。

迫るスピードをさらに加速させ、不気味な赤に染まった凶爪を振り上げている。

—— あんなものの餌食になるなんて冗談じゃないぞ！

「つと、あぶねえ！？ はあッ！」

そう言ってる間にフェンリルはあっという間に目の先に。

大きなモーションで右腕を振り下ろしてきたところを素早く前に飛び込み、間一髪でかわす。

「喰らえやッ！」

空振りして態勢を崩している人狼。

後ろに回り込めたチャンス逃さぬべく、その背を思いつ切り蹴り飛ばしてリーチを広げる。

『グウラアア！？』

顔面から地面に叩き付けられたフェンリルは悲鳴を上げる。

所詮 魔物なのか何が起きてるのか分からずに混乱しているらしい。

「さ〜てと……。反撃だ」

こちらのペース持ち込めたことで、だんだん恐怖心が薄れてきた気がする。

俺は本日絶賛大活躍の魔銃を構え、次の魔法の詠唱にかかった。正三角形の魔法陣が空中に描かれていく。

『氷の魔弾よ、眼前の敵を肅正せよ！ 氷結の魔閃！』

Freeze Flash

ターゲットを倒れている人狼に指定し、氷結を狙う。

直進する三本のレーザー。

それらは同時にフェンリルへ直撃し、爆ぜた冷風が辺りに舞う。
後は“氷砕”^{Crush}を唱えれば……！

「——ってオイ、なんで凍ってないのっ!？」

そればかりかダメージが全く通ってないようだった。

勝利を確信するにはまだ甘かったか。

やっぱり今までの雑魚とは違うな。

……クソッ、何が原因だ？

「その人狼は魔力耐性を持つてるようね。水魔法は効かないわ」

ホールの隅から銀髪少女がはつきり聞こえる声でそう言った。
アドバイス、なんだろうなコレ。

「先に礼を言っとくぞトウカ」

「……無駄口叩いてる暇があつたら勝負に集中するのね」
「フッ、分かったよ」

俺は笑みを浮かべながら、ゆっくりと立ち上ろうとする人狼に気
付く。

さらにフェンリルとの距離広げるため、後方へ走る俺。

「ハッ、ハッ、ハッ——！　こんなもんか」

十分に離れたところで立ち止まり、フェンリルを見据えた。
そして新たな魔法構成式を展開する。

『Enchanneaia Rocky Edge
土魔力装填、凶鋭なる岩針！！』

フェンリルの足元に巨大な魔法陣を出現させ、地面から岩の棘で串刺しにする作戦だ。

迅速な魔力収束と詠唱を行い、一気に攻め立てた。

ドドドツと土魔法を使ったことで地面が大きく揺れる。

するとフェンリルが立っていた位置を中心に土煙が激しく上がり、俺の視界を覆い込んでしまった。

しまったやりすぎたぞ。これでは視界が悪くてヤツの姿が確認できない。

一応魔法は決まったと思うんだけどな……。

「タ、タクマ君！ 前見てください、前を！」

「え、なにっ！？」

ズシツという嫌な音とミアの叫び声を聞いて、ゆっくりと前を見る。

「——んなッ！？」

心臓が止まるかと思った。人狼の顔が目の前にあって。
黒ずんだ茶色、毛むくじゃらの腕が俺の左胸に食い込んでいて。

「う、ああ……」

眼前の光景を目にして初めて痛みが広がる。
これは、ヤバい。どうする？

そんなことを考える間もなく、俺はフェンリルが貫いた勢いのまま後方へ投げ捨てられてしまう。
受身も取れず背中から強く落下してしまい、更なる痛みに襲われるが寝転がつてる余裕はない。

「つう、いてえな。ハア、ハア……」

気合で起き上がり、ゆつくりと左胸を摩る。

今朝テオが教えてくれたとおり、血も出てないし怪我もしていない。
い。

“仮想空間”じゃなかったら確実に死んでたぜ。

考察するに、どうやら“凶鋭なる岩針”Rocky Edgeは綺麗に避けられてしまったらしい。

投げられ宙に浮かんでいる時、フェンリルが無傷なのを確認したからだ。

うーん、ちょっと調子に乗りすぎたかな。

『グオオアアア！』

立ち上がった俺に、フェンリルは再び狙いを定め突進してくる。
こちらはというと体が重く、さっきまでのように上手く動けない。

——長期戦は無理か。

『Enchantunder
……雷魔力装填』

こうなったら さっさと仕留めてしまおう。
右手でまだ痛む左胸にそえ、左手で魔銃を強く握る。

『今度は決めさせてもらうぞ。Plasmachain
紫電の束縛!』

銃口の先、一本の紫電が走る。バチバチ、バチバチと。
凶暴な人狼に触れ、その光が眩しく包み込んだ。

突進していたフェンリルは、電撃の拘束の前に倒れてしまう。
俺はそれを確認し、トドメの魔法を詠唱し始める。

『Electrasspaat
貫けっ、紫電の大槍!!』

今日一番の大きさと威力を込めた魔弾を、藻掻くフェンリルの頭に
撃ち込んだ。

・
…

「あゝ、死ぬかと思ったあ!」

フェンリルが光りに包まれて消滅した後、俺はすぐさまその場に
ドサッと寝転がる。

ピリピリする左胸の痛みは引いたのだけれど、全身の疲労感が代
わりに押し寄せてしまったからだ。

「途中危なかったけど、初陣にしては中々だったぜタクマっち」

「私もそう思います！ 最後は格好良かったですよ！」

「そりゃどーも……」

4人がこちらに駆け寄ってきたので上半身だけでも起こした。
まだ少しは立ち上がれそうにないけど。

「でもまだ終わってないよ。魔晶石、回収しないとね」

「魔晶石……、こ、これか？」

テオに言われて思い出す。確か戦利品だったのか？

フェンリルが消滅した場所から1つの宝石を拾い上げる。

透き通った、見た者を魅了する蒼い宝石。

「それは水紋石ですね。加工して身に付ければ水魔法を使う際のエネルギー負担が減るんですよ」

この色と同じラピスラズリの瞳を持つミアが、笑顔で教えてくれる。

なかなか優秀な魔法アイテムらしい。

「……………ん」

銀髪少女が無言で俺を見下ろす。

何か言いたそうだが、何を言いたいのかは分からない。

「それなりには頑張ったつもりなんだが」

何か皮肉を言われる前に、努力はしたと伝えてみる。

「ま、とりあえずは及第点じゃない？　ねえ、クリス先生？」

「ハハ、及第点か……。って、クリス先生？」

意外にも認めてくれた銀髪少女に安堵するが、居ないはずの人物に問い掛けた彼女にハテナマークを浮かべる俺。

なんで今先生の名前を？

「——気付かれてしまっていたか。なかなかどうして鋭いな生徒トウカよ」

『うわっ！？』

突如背後から聞こえてきた担任の声に、トウカ以外のメンバーが慌ててその方向へ目を遣る。

するとそこには金髪ツインテールの吸血鬼の姿があった。

「どどど、どうしてクリス先生がここにっ？」

「いや、少し転入生の様子見にな」

急すぎる出来事にテンパるミアやテオ。

いや、俺も十分びっくりしてるけどね。

「すべて見ていたぞ生徒タクマ。ご苦労だったな」

「あ、はい。ありがとうございます」

彼女は俺の前まで来ると、紅い目を向けて笑みを浮かべる。

あまりにも優しく微笑んで言う先生に、俺は好意を覚えるのだった。

しかしこのファンタジックな俺の異世界学園生活。

それがさらに妙な方向へ展開していくのを、この時の俺は知らない。

——もとい、大体1時間後には知ることになるのだが。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:2-4 【ランチタイムの二者面談】

Episode 2-4 【ランチタイムの二者面談】

「ご注文はお決まりですか？」

ウェイトレスが丁寧に水を置きながら笑顔で尋ねた。
メイド服に見えなくもないフリル付きの制服が輝かしい。
その姿に思わず魅入ってしまいそうになる。

「んー、えっと……。よし、それじゃあカツ丼定食で」
「私はいつものを頼むぞ、もちろん大盛りでな」

生徒証から映し出されたメニューを見直してそう答える俺と、見
ずとも最初から決めていたらしい金髪ツインテールの少女。

「はい、かしこまりました。カツ丼定食と激辛ラーメンInfer
no大盛りですね」

「少々お待ち下さい」と一礼して席を離れる彼女を目で追いな
が、俺は『やっぱりおかしい』と心の中で呟いた。

「どうした生徒タクマ？ 苦虫を噛み潰したような顔をして」
「いえ、ただ学食じゃなくてレストランに見えるなあって思った
だけです」

普通学食にウェイトレスなんていないはずだしな。

——つかそんな酷い顔してねーよ。
少しは難しい顔をしていたかも知れないけど。

「どちらでも構わんだろ。小さいことでグチグチ言っ
「う、分かりました……」

完全に一蹴りされ、強引に納得させられてしまっただった。

もう説明の必要はないだろうが、ここは学園中心塔にある食堂の
一席。

時は正午を過ぎた昼休み。続々と学園の生徒が昼食目当てに集い、
このエリアの席はすでに満員状態だ。

ちなみに2階と3階のフロアは全てが購買食堂となっている。
ミッドラリー グラウンダー
中等部と高等部、両方の生徒が集まるのだから当然の広さといっ
たところか。

「それで、お話とは何でしょうか？ クリス先生」

カップル席、俺の向かい側に座すのは我が担任だ。
迷宮探索の後『2人で話すことがある』と昼食を誘われ、今に至
る。

残念ながらクラスメートたち親睦を深めるのは明日に延期となっ
たが。

「――ふむ、単刀直入に伝えよう生徒タクマ」

少しの間があってから、先生は表情を曇らして話を切り出した。
さっきまでは適当な談笑だったが、ついに本題らしい。

俺は周囲の声をシャットアウトして続集中する。

「このままでは貴様、確実に留年だぞ」

冷やかな声に、空気と俺の背中とが凍った気がした。
……な、なんだって？

「そ、それってまさか……、あのRyu Nenですか？」
「イエス、あのRyu Nenだ。ふふっ」

表情を一変させ、今度は嘲笑うかのように呪文を復唱する先生。
『冗談でしょ？』と目配せするが、細い首を横に振られてしまう。

「え、マジで留年！？ ちょっと待ってくださいよっ」

ただの面談かと思っていたら、随分と芳しくない内容らしい。
留年でオイ。まだ転入してから2日目なのにな俺。

「誠に遺憾で残念だ。まさか私のクラスからな……」
「だから待っててば！？ このちびっ子吸血――」
「あゝん！？」

やべえつい口が滑った！？
強く凛々しい紅い瞳を釣り上げ、キレ気味な声で凄まれてしまった。

さすが吸血鬼、背はちっちゃいけど怖えな。

「……詳しい説明をお願いしますクリス先生」

俺はしょんぼりと頭を下げ、改めて質問する。

「ふんっ、説明も何も貴様が転入してきたのは昨日、3学期の真ん

中だぞ」

「単位数が足りないのか！？ いやでもそれって学園側のミスでは

」

「そんなもん私がかかるか？ この時期に転入してきた貴様の責任だろうが」

そう吐き捨てて、ゴクゴクと喉を鳴らし水を飲むクリス先生。

「うわぁ……」

なんてこったい。学園長と話した時に気付くべきだったな。てか先に教えるよりリス学園長。留年なんてカッコ悪いじゃないか。

——ん、でも待てよ？

無理に2年生になるより、新しく1年生から学生始める方がむしろいいのか？

だってホラ、この世界どころか学園のことさえ全然知らないし俺あえて1年遅らせた方が、学園生活はスムーズになるかも。異世界から来る同じ環境の新生だっているだろうし……。

「そういうことならもう留年でいいですよ。来学期から改めて頑張りますんで」

かなり極論かも知れないが、思い切って先生に伝える。

すると先生は フッフ和不気味に笑いながらこう返してきた。

「勇者だなあ生徒タクマ。自ら後輩になり下がる道を選ぶとは」
「え、後輩？」

「貴様は2年生となった我がクラス一同に、“先輩”と付け足さなければならぬわけだ。いやあ結構結構」

嫌らしくクリス先生が晒い、俺の見落としを突く。

あー、そうだな。その問題があるんだっただな。

この学園の生徒としては周りの奴らの方が先輩なのだけど、実際に名前に先輩を乗せるとなると結構キツイか。

とりあえず頭に浮かんだクラスメートに『先輩』と付けてみる。

「———つわぁメツチャ嫌だ！？特にラグナが」

「んなっ！？オイ聞こえてんぞタクマっち！」

数個のテーブルを挟んだ先から赤毛ドラゴンの声が飛んだ。

お前いたのかよ。……聞こえないフリ聞こえないフリ。

とにかく、やっぱり留年は嫌だ。いろいろ癢だし。

「まあな。そう考えるのが普通の判断だ」

「それで進級するにはもう手遅れなんですか？」

「安心しろ、救済策はちゃんとあ——」

「お待ちせしました。カツ丼定食と激辛ラーメンInferno大盛りになります」

「———なッ！？」

言葉を続けようとする先生を遮り、ウェイトレスが料理を運んできた。

鼻を強く燻る、ものすごい香りと一緒に。

・
…

「貴様はオリハルコンを知っているかな？」

「って話題変わってますけど、俺の留年云々はどうなったんですか」
「そう急かすなよ。ちゃんと関係あるからまずは私の話を聞け」

暗に「聞かないと見捨てる」とも言われている気がして、俺は静かに頷くことしかできなかった。

「次元体によって呼び方は様々だが、聞いたことぐらひはあるだろう？ 貴様がいた日本だと確か……、^{ヒイロカネ}緋緋色金だったかな」
「いや、オリハルコンで知ってますよ」

確か古い魔導書や小説にもよく出てくる金属だ。
つかヒイロカネとかマイナーすぎるだろ。

「俺の知ってる範囲じゃ、とにかくデタラメな金属と聞きますが――」

オリハルコンは非生物でありながらエーテルを放つ。
魔力媒介物質として最高級のレアメタルだとか。

その点 『神が与えし金属』とは良く言ったものだな。だけれど。

「あくまでも伝説の範囲で、ですけどね」

口に頬張ったサクサクのカツを噛み砕き確認する。

そう、そんな金属は伝説。今ではただの妄想。

飯に昔はあったとしても現代の地球には存在しないハズだ。

「フフツなるほど伝説か。まあそんなところだろうな」

クリス先生は血の色に染まった激辛ラーメンを口に運んだ。
オプシヨンの七味をかけずとも、デフォルトでその色はやばいと思う。

見てるこっちは汗が出るな。めっちゃ辛そうだ。

「——ハア、最高だな。お前も一口どうだ？」

「いいえ、俺まだ死にたくないんで」

即答、絶賛ノーサンキューである。

名前を完全に覚えてしまった激辛ラーメン Inferno。

先程ウェイトレスが運んできたメニニューだが……。

香りといい色といい、どう考えても俺の口には合わないだろう。

「んで、そのオリハルコンは何ですって？」

どうして異世界で名称が同じなのか気になるところだが、美味たるカツ丼を黙々と口へ運びつつ、先生へ話を振った。

まだ俺の留年救済策には辿り着いていないし。

「ふむ、それより先にオリハルコンは存在すると教えておいてやろう」

「ははは、先生。俺の世界観が壊れていきますっ！」

あまりにも軽く真実を告げられるので、なんかもう笑えてきた。
傍から見たらさぞ馬鹿な奴に見えるだろうけど。

「そう気に病むな。異界に来た以上カルチャーショックは必然だ」
「つまりこれから壊れていくんですね。俺の世界観は」

クリス先生は「まあな」と捨て置いて、話を続ける。

「これからが本題だ。お前も知るように、確かにオリハルコンは最高級のレアメタルだ。しかしな、それを越えた魔力媒介物質が開発されたのだよ」

「……冗談じゃないなら、かなり凄いお話ですね」

どうせ冗談などでは断じて無いのだろう。

自慢気に話す先生の目は真剣そのものなのだから。

「喜ばしいことに本当だ。名をラファーズと言う」

うん、やっぱり本当らしい。

俺は定食に付いていた汁物を啜り、初めて聞いた単語について思考する。

——ラファーズ、ねえ？ そんなものかまったく想像がつかんな。

「それってやっぱり金属なんですか？」

「違う。高密度エーテル顕現体、一言で言うと“エーテルの塊”だな」

「エーテルの顕現体！？ ちょ、そそそそんな馬鹿なっ」

さすがに無視できない言葉を聞いて、思わず大きな声を出してしまった。

落ち着けとチョップを喰らってしまいが、頭は混乱したままだ。

なぜならエーテルは生命の魂から発生する霊的な物質。実体を持たず、体内から取り出すことは不可能なハズだからだ。だから“エーテルの顕現体”なんて……。ありえない、矛盾している。

「何がどうなってそんなことが？」

「別に説明してやってもいいが、貴様には難しすぎて理解には及ばないと思うぞ」

「じゃあ俺にも分かるようにお願いします」

間髪入れずに無茶を要求してみせた。

こうなったら無理矢理にでも理解してやる。

「つたく最近の若い奴はこれだから……」

「無関心よりは良いじゃないですか」

「小僧め屁理屈を。——まあいい、分かった教えてやろう」

最初はブツブツ文句を垂らしていた先生だが、続けた俺の言葉に「上等だ」と笑みを浮かべ、口を開いた。

「まずエーテルに唯一干渉することができる物質がある。名をエーテル増幅魔力、ミシツクと言ってな。それで——」

「あゝ、最初から分かりませんか」

「やる気あんのか低脳めっ！」

だって専門用語っぽいので多くて頭に入ってこないし。しかも低脳って教師にあるまじき暴言だなオイ。

その後先生からさらに分かりやすく教えてもらい、結局俺が理解

できたのは概ねこんな内容だ。

『ミシツクはリユミシアル界特有のもの』

『ミシツクはラファアーゼを生成するのに必要不可欠』

『ミシツクは魔法を使うことで自然に体内に取り入れられる』

つまりは魔力と同じような物で、対応する効果はラファアーゼの生成って所だな。

先の迷宮探索で魔法を使ったから、俺も極微量のミシツクを身体に取り入れていることになる。

「^{グラントリー}とにかくも、高等部ではラファアーゼを生成できているのが最低限必須でな。転入生の貴様も例外ではないのだ。この意味がお分かりかな？」

「つまりそれが留年救済策ってことですね。そのラファアーゼとかいう魔力媒介の生成が」

「おお、こういうことは理解が早くて助かるぞ」

ここまで話が進むのに長い時間だったが、なんとか留年救済の方法が明かされたのだった。

でも——、そんな簡単にできるのかな？

「ちなみに去年転入してきた生徒ラグナは3ヶ月かかった」

「えー、それだともう新学期始まっちゃってますよね？」

なんせ新学期は後1ヶ月とちょっとだ。

ラグナがサボったとかじゃないと絶対に不可能な話になる。

「ああ、ヤツのスピードだと絶対に間に合わん。だから——」

「早急に今日から特訓を始めよう。後で仮想迷宮ダンジョンに来るように」

「ちよつと、後でつていつですか？」

「少しは自分で考える。午後の授業からに決まっているだろうが」

なんとなく予想は付くが、ダンジョンでどう特訓するというのか。不安でだんだん箸が進まなくなってしまう。

そんな俺を他所に、クリス先生は「遅れるなよ」と釘を刺してから、

血にしか見えないスープを恍惚と飲み干すのだった。

……転入早々、大きな課題を抱えてしまったもんだ。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 2 - 5 【午後2時間の実戦演習】

Episode 2 - 5 【午後2時間の実戦演習】

「あとっ、もうちょっとでッ、ゴールだなっ——」

その日の午後、俺は1人薄暗く寂れた洞窟を駆けていた。
言うまでもなく仮想迷宮の内部だが、午前中に克蘭メンバーたちと潜った形状とは違う。

サポート役がいらないから迷ってしまいそうで不安だったが、生徒証にマップを見れる機能があるので無難に進められている。

「……ハア、ハア、しっかし流石にきつついな」

しばらく走り続けたところで、急に足の速さが落ちてしまう。
午前中の疲れも完全には回復していないし、さっき油断して思いつ切りダメージを喰らっちゃったからな。

『グアギルツッ！』

もうすっかり聞き慣れてしまったオーガの威嚇。

立ち止まって前を見据えれば、数体のオーガが道を阻んでいた。

「まだいるのかよ、もう少しで終点なのに」

先ほど鋭い爪裂を受けた左足に力を入れる。

さすがに気怠い気分になりながらも、魔銃を構えた。

俺は完全に復活したエーテルを駆使し、適当な魔力を集めにかか
る。

頭に浮かべた魔法構成式は自動的に展開され、白銀の銃口へ小さな魔法陣を生み出し、無色の魔弾を装填させる。

「何だかんだ言ってあと100メートルぐらいだしな」

見える範囲の敵数はほんの5体ぐらいなので、エンチャント属性魔力装填は特にしなくても大丈夫だろう。
マナ無属性、俗に言う無垢なる魔力だけで突破することに。

「——行くぞっ！」

魔弾を炸裂させながら足を踏み出すのと同時に、ダンジョンに潜らせられる直前、クリス先生から聞いたことを思い出す。

なんでもラファールは一日二日で仕上がるような代物ではなく、かなりの量のミシック供給が必要だそうだ。

それには魔法を行使しまくるのが唯一の方法らしい。

「だからって、実戦形式で魔法使わせなくてもいいだろうにっ」

改めて文句を吐きながら、巨大なオーガへ八つ当たり。

『ブアッ——！?』

もう最後の一匹となったオーガを、ミサイルのような魔弾で容赦なく吹き飛ばす。

強く捻じれながら宙を舞う緑肌の巨体。

焦げ茶の土壁に叩き付けられ、無様な断末魔のみを残し、呆気無く絶命した。

本来なら生々しい死骸も一緒に残るのだろうが、この空間では死んだ即時に霧散する演出になっている。

「よしよし、後はこのまま進むだけだな」

俺は魔銃を腰にかけ直してそう呟くと、さっきより早足になって終点へ向かうのだった。

・
…

「はあ、やっと終わったか。もうクタクタだぞ」

都合の良い岩を見つけて腰掛け、大きな息を吐く。

ここは午前中に狼男と戦った仮想迷宮最奥と同じ空間のようだ。
ボスシーン
もっとも、ボスモンスターはいないようだが。

「んで時間は……。うっわもう15時手前じゃないか」

生徒証に表示された時刻を見ると、自然と頭を掻いてしまう。

午後の授業が始まるのが13時だったから、やっぱ2時間近くはこの中にいることになるな。

午前中の分も合わせればもう4時間以上だ。結構タフだったんだな俺。

「だけどそろそろ授業も終わる時間だし、丁度いい頃だな」

ちなみに昼休み、仮想迷宮入り口へ向かっていた時の話。

廊下で擦れ違ったクラスメートに教えてもらったのだが、午後の授業は選択制らしく、人によって学ぶことが違うそうだ。

その内容も結構たくさんあるようで、午前中にある魔法講義や数学の応用はもちろん、ここ仮想迷宮を使ったハイレベルな実戦訓練もあるらしい。

「——早いとこさっさと帰還するか。これで終わりみたいだし」

そう呟いて俺はよいしょと立ち上がり、生徒証を握り直した。

仮想迷宮からの帰還方法はとても簡単。

ダンジョンに潜っている間は、生徒証のトップ画面に『帰還』という項目が追加されている。

それをタッチすれば入り口へ戻るための構成式が展開されて、魔法陣が自分の近くに作られる仕組みになっているんだと。

つまりはその中へ飛び込めばいいわけだ。

『甘い生徒タクマよ。まだ一仕事残っているぞ』

「うわッ——！？」

帰還とあるアイコンをタッチしようとした瞬間、ピピッと機械音が響き、続いて誰かの声が聞こえた。

いきなりなことでは心臓が止まりそうになる。

『おやおや？　なんだ驚かせてしまったか？』

「く、クリス先生。……まあ少しだけ」

正直かなりびっくりしたけど。

加えて驚いたのは、これに映像通話の機能まであったことだ。
つくづく唯の生徒証とは思えない。寮に帰ったらもっと詳しくマ
ニユアル読んでおくか。

「それより、一仕事って何ですか？ もう終わりだと思っんですけ
ど」

『ふふっ、最後の追い込みだよ。後もう少しだけ頑張ってくれ』

目を細めて尋ねてみると、先生はそう悪戯っぽく微笑む。

「はい？ これ以上一体何を頑張れと言うん——」

眼前の光景を目に、そこで言葉が停止してしまふ。

何も無い空間から突如白い光が生まれ、巨人の姿を形取っていく。
しかもその数は1つや2つだけではなく、次々に増えていき……。

「こ、これは——」

気付けば、俺を完全に取り囲むオーガの群れが出来上がっていた。
最初からボスゾーンに置いとけばよかったのに、わざわざ人が到
着してから召喚するなんて。

こんなの非道い、鬼畜すぎる。

「ええっと、つまりはこれらを片付けると」

『その通りだ。ただし、華麗かつ颯爽とな』

「んー、できるだけ頑張ってみますわ」

苦笑して見せ、俺は静かに生徒証を胸ポケットに沈めた。
そしてすぐさま魔銃にエンチャントを開始する。

『Enchantare
火魔力装填、ざっと30匹かね』

辺りを見回し、俺を囲むオーガの数を弾きだす。
結構キツイかも知れないが、ギリギリなんとかはなりそうだ。

密閉された仮想空間の洞窟。

相手の動きを待っていると、どこからか一陣の風が吹いた気がした。

思い違いではなかったのか、一匹のオーガがそれを合図に咆哮を上げる。

野太いその声は、まるで激しい地響きを起こしているような、そんな錯覚を俺に覚えさせた。

「ささっ、かかってこいよ。華麗に、颯爽と倒してやるからさ」

言葉が通じる相手ではないのだが、いや通じない相手だからこそ、そんな他人に聞かれたら赤面してしまうような言葉を吐いてみる。

——って、先生に聞かれてるかも！？

『うむ、しっかりと聞こえたぞ。しっかりとな』

「そんなにしっかりと強調しないでください……」

心の中まで全部聞かれていましたとさ。

そんなよく分からないやり取りをしている間に、右手に持つ魔銃はエンチャントの影響で烈火に染まっていた。

それは次なる魔法構成式詠唱のスタンバイができた合図でもある。
その燃える赤は洞窟内に設置された微かなランプよりも強く輝き、
だんだんと辺りの気温を熱くしていく。

『□□□□□——！！』

とても言葉では言い表せない叫びを上げながら、10メートルほど離れたオーガたちが一斉に動き出した。

相手に文明的な武器はなく、凶器はその豪腕な拳と爪のみである。

『ラストファイツ、Cries of the 深紅の焰閃！』

ノシノシと迫るオーガの首に標準を合わせ、呼吸を乱さぬようにステップを踏みながら引金に力を込めていく。

紅い魔法陣が銃口から展開されると、これまた紅い一本の線が放たれた。

その光線は先に立つ巨人を音もなく焼き切ってしまう。

決して見ていて気分がいいものではないが、もう慣れた。

「せいやっ！」

接近戦は無理なので、半径5メートル以内には近づかせたくない。
右足を軸に体全体をくると回転、オーガを捉えては光線を放つ。

流石に狩り慣れていたもので、殲滅する時間は1分も必要としなかった。

・
…

「うう、すんません……。なんか酔っちゃって」

ここは仮想迷宮入り口、虹床の円形ホール。

オーガたちを倒したその後、震える手でなんとか帰還した。

「そりゃあんなにクルクル回ってたらな」

クリス先生は呆れているのか、分かりやすいように溜息を吐く。
その視線の先には頭を抱え縮こまっている俺の姿があるに違いない。

華麗かつ颯爽に倒せたのはいいが、後でこれなら元も子もないな。

「そのままでもいいから聞け生徒タクマ」

広いホールには他の生徒もいるのか、話し声が聞こえる。

俺はお言葉に甘えながら、意識を彼女の声だけに集中させた。

「今日見ていて分かったのだが、お前はそれなりの才能があるらしい」

「そりゃどうも。お褒めに預かり光栄です」

「まるで棒読みだな……。まあ冗談ではないから素直に喜べ」

とは言われたものの、『それなりの才能』がどれほどの物なのか不明だ。

まあ『才能は皆無だ』と言われるより十二分マシだが。

「それでな、この調子なら案外早めに解決しそうだぞ」

「解決って……、ラファージェ生成のことですか？」

「それしかないだろ。私は早くて2週間後、来週末と踏んでいる」

おお、それならなんとか留年は回避できそうだな。

「だが勘違いしてもらっては困るぞ。あくまでもこの調子なら、だ」

安堵の表情を作って顔を上げた俺に、先生は何か思わせ振りの口調で話を続ける。

「んあ？ ど、どういうことですそれ？」

「毎日、最低でも2時間は魔法行使の時間が必要、これでお分りかな」

「まさか午後の2時間、ずっとこれを続けさせるつもりじゃ……」

「やはりこういう事にはすこぶる察しがいいな」

クスクスと嫌らしく哂う我がちびっ子担任。

俺は心の中で声にならない悲鳴を上げ、呆然としていた。

「おつといかな、HRに遅れてしまいそうだ。急ぐぞ生徒タクマ」

『いつまでも蹲すわってないで早く立たんかつ！』と本日2度目のチヨップを受ける。なんか地味に痛い。

「——ったく、こっちはボロボロだったのに……」

「ん、何か言ったか？ どこか生意気な声が聞こえた気がしたのだ
が」

「いゝえっ！ 何もありませんとも、何もね」

ゆつくりと立ち上がって両足を屈伸、口では適当に誤魔化す。

それでもヒリヒリとした痺れを感じる左足を引きずりながら、可愛らしく歩くクリス先生の後に続き、教室へと向かうのだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 2 - 6 【得ようとするモノと】

Episode 2 - 6 【得ようとするモノと】

「聞いたよ。随分大変な課題を突き付けられたんだってね」

クリス先生のHRが終わりその放課後。

歓談に満ちた教室の奥、自分の席でボーッとしていた所へ、緑髪のテオが哀れみにも似た声でそう話しかけてきた。

「まあな。——って、もう広がってるのかよ」

彼が知ってるということは、このクラス全員も同じなのだろう。教室に戻ってから浴びた妙な視線はそういうことだったのか。

もしかしたら他のクラスにも広がってしまっているのかも知れないな。

確かに食堂で目立っていたけれど、噂って怖い。光より早いとは本当だ。

「ちなみに昼休みの後ラグナが大声で叫んだのを見たわよ」

右隣の少女がぐっすりと居眠りしている赤毛竜人を指差して微笑んだ。

周りの生徒も苦笑しているのを見るに、間違いないようだ。

「ははは、こやつめっ」

俺は乾いた声を漏らすと、生徒証を取り出す。

人物メモを起動し、ラグナの欄に迷うことなく『口が軽い』と記録してやった。

全くつまらんことをしてくれるヤツだ。

「有益な情報がありがとミリオム」

「ふふっ、まあ頑張んなさいよ。じゃまた明日っ」

ミリオムはそう言い放って手を振り、颯爽と教室から出て行く。今朝知り合ったばかりだけど彼女は中々話しやすい娘だ。何か人を惹き付けるオーラを持つてるように感じる。

「さあて、これからどうするかねえ……」

大きく背を伸ばして身体をストレッチ。すべきことを思考する。

そうだな、適当に学園内をうろいてみるのがまず無難だろうか。一応全体のマップは昨夜確認したが、実際に目にするのもいいだろう。

……果たして迷わなければいいのだが。

「――呑気に言ってる場合かしら？ もう少し焦るべきよ」

「ッ、焦ったところでどうすりゃいいんだよ」

唐突に後ろから響いた銀髪少女の声。

内心飛び上がりそうになるが、何とか自然に返して見せた。

コイツは人を驚かせるのが趣味なのか。

俺は首を後ろへ捻り、凜々しい冬霞トワガの小顔を見据えて続ける。

「それにクリス先生も真面目にやってくれば問題ないってさ」
「へえ、そうだったんだ。ならそこまで心配する必要はなかったみたいだね」

トウカより先にテオが安堵の声を漏らす。

『そういうことだ』と銀髪少女へ目配せすると、彼女はつまらなさそうに舌打ちを返してくれるのだった。

……やっぱり俺はコイツが嫌いだ。

「みんな集まってどうかしたんですか？」

そんな中、今まで他のクラスメートと談笑していたミアがこちらへ向かって来た。

「ん、いやちょっと。大したことじゃないよ」

留年云々はともかく、やり取り自体に何も面白いことはない。
俺の言葉にミアはよく分からないといった顔をこちらに向ける。

そんな彼女を見て、俺はあることを思い起こした。

「そうだミア。さっそく訊きたいことができたんだけど」

「あ、はい、いいですよ。何でもどうぞ」

別にテオやトウカでも問題ないが、クラス委員も務めているらしい彼女に尋ねる方が確実だろう。

「その、ラファールゼの事なんだけどな。具体的にどんなものなんだ？」

クリス先生はオリハルコンを越えた魔力媒介物質、エーテルの塊だと言っていたが、正直どんなものか想像できない。そもそもどんな形をしているのかさえ。

ミアはほんの数秒唸ってみせた後、可憐な顔を上げて口を開いた。

「そうですね、形状は普通の魔力媒介と同じようにたくさんあるんです。近接武器に魔法銃、杖だったり。他にも腕輪や指輪とかもありますよ」

「なるほど……。形は普通なんだな」

突然の質問にも関わらず丁寧な説明してくれるミアに感心しつつ、俺は真剣に彼女の話へ耳を傾け続ける。

「ラファールゼは1人につき1個しか生成できないと定義されています。どんな形状の物ができるかは、ランダムなので分かりませんが」
「うん？ それだと扱えないのができた場合はどうするんだ？」

俺の場合だとアレだ、近接武器だな。

剣とか槍とかできてもらっても困るぞ。使ったこと無いし。

「その心配はいらないわ」

「……とおっしゃると？」

「確かに何ができるかは不明だけど、必ず“本人にあったもの”ができるの。本人に不適性なラファールゼなんて、過去にも例が無いそうだから安心しなさい」

俺の新たな疑問にしたり顔で解説なさる銀髪少女。

一方途中で話の主導権を取られたミアは少し不機嫌そうだった。

「まあ何にせよ、俺ならやつぱり魔法銃だろうな」

「いや分からないよ？　もしかしたら大剣やハルバードを振り回すことになる可能性だって、十分捨て切れないんだからね」

両手に剣を持って振るうモーションをして微笑むテオ。

自分が同じようにやっている姿を彼に投影してみる。

……なんかすごくシユールだ。

剣圧も全然無くて使えこなせない俺が容易に想像できるぞ。

・
…

しばらくした後、俺は教室から離れ、呆れるほど広い学園敷地内を散策していた。

テオやミアに『案内したい！』と意気込まれたけれど、1人で冒險してみたい気分に駆られてたのでそのまま別れたが。

「む、中に入ってみるとつくづくデカい闘技場だな」

そんなこんなで辿り着いた先が、高等部学舎の屋上から覗けた巨大な円形闘技場。
コロッセオ

人がたくさん座れるギャラリー席まで完備されている。

学舎階段の踊場で見かけた副会長を捕まえて話を聞くに、ここは入学式などのイベント会場に使われるらしい。

闘技場だけあって戦闘、決闘の場としても機能しており、放課後には自由解放されて実戦形式の組手ができるそうだ。

「ふう…… 少し休憩するか。ん、ごくっ、ごくん」

2階のギャラリ―席へ上がり、適当に腰を下ろす。

エントランスで買った紙パックのオレンジジュースを飲みながら、激しい歓声で溢れる闘技場1階を見下ろした。

教室2つ分ぐらいの広さのコートが30個ほどに分けられており、その中で多くの生徒が激しく動き回って真剣勝負をしていた。

彼らが手に持つ武器が恐らくラファ―ゼなのだろう。

本当に両手剣やハルバードを振り回している奴もいる。もちろん人に。

オイオイ危なすぎるだろっ!?

もし当たったら怪我じゃ済まなく――。

『隙ありっ、Fire Bolt激昂の火炎弾!』

「ブウツ――!?! え、ちょ、アイツなんてことを!」

言ってる傍から、誰かがファイアボルトを相手の顔面へ直撃させた。

思わず口に含んでいたオレンジジュースを吹き出してしまう。

きたねえ……。

それは置いておいて、今のはヤバいだろ。

俺は身を乗り出して地面に倒れ込む男子生徒に目を凝らす。
当たった奴死んだんじゃないのか?

「あつちいなチクショウめ、今度はこっちの番だぞ！」

「なななっ……」

今度は酷く間拔けな声を上げてしまふ。だって、顔面大火傷を負うはずなのに。

その男子生徒は元気に立ち上がったのだから。

しかも苦痛の表情こそ浮かべるが、その顔に傷ひとつ無い。

「一体何がどうなって？」

俺は混乱する頭で隣のコートへ目を移した。そこには――。

「拙者斬られたでござるッ、拙者斬られたでござるッ！」

左脇腹を強く押え込みながら絶叫している忍者衣装の生徒がいた。どうやら相手の片手剣にスパツと斬られたらしい。

が、ここから見るに血飛沫は全く飛んでいないようだ。

つか何でアイツ忍者の格好してるんだよ。

「……もしかして何かの魔法が効いてるのか？」

立ち上がって辺りをよく観察してみると、闘技場自体に何か強大な結界魔法が掛けられているのに気付く。

「なるほど、^{ダンジョン}仮想迷宮と同じ効果になってるんだな」

この中にいる限り、どんなことがあっても負傷しない。
少しばかり考え込んだ後、俺はそんな結論を出した。
そんなに難しく考えなくても予想できることだけだ。

やはり光魔法の超応用だろうが、どんな魔法構成式で発動しているのか興味が湧く。

地球じゃ光と闇魔法はあまり解明されていなかったからな。

……この異世界にはまだまだ俺の知らない魔法がありそうだ。

なにはともあれ、危険がないと分かれば安心して観戦できる。
俺は静かに座り直し、再び1階の生徒たちを眺めた。

「ん、あれは？」

その中に俺のクラスメートの姿が目についた。名前は確か……、
なぜかド忘れてしまったけど。

まあクラスメートAとでも呼ぼうかな。

彼が相手をしていたのは、俺や彼と同じぐらいの背丈の女子生徒
だった。

「どおりやあああ！」

クラスメートAは大きな掛け声を出して相手へ迫る。
火魔力をエンチャントした赤く燃え上がるブロードソード。
物騒すぎるそれを容赦なく振り回して女子生徒に斬りかかる。

「アテューリア!!ローズハート、覚悟オツ!」

「甘いつ、そんな斬撃簡単に捌けるわよ? はあッ——」

そんな名前で呼ばれた女子生徒もまた、物騒な大鎌を構えていた。身の丈ほどあるそれで迫る焰刃を華麗に受け流すと、体勢を崩したクラスメートAの隙を見逃さず、的確に反撃を叩き込んでいく。

「え、うわっ ひぎい!? ちょ、ちよっタンマタンマ!」

『ひぎい』ってなんだ『ひぎい』って。

酷くみつともない声を上げるクラスメートA。

「あははっ、そう言われて待つわけが無いじゃない、ねえ?」

「あっははー、ですよねー」

2人でよく分からない漫才をしながらも、クラスメートAは徐々に壁へ壁へと追い詰められていく。

あー、駄目だなこりゃ。

「これでお終いよっ——!」

それはほんの一瞬のこと。

不規則な大鎌の軌跡が、赤のブロードソードを捉えた。

「ぐうッ……、ま、参りました」

後方に弾き飛ばされてしまった己の武器を見て、クラスメートAは悔しそうな声で白旗を上げたのだった。

反撃されて1分も経たないうちに。

周りのギャラリーから拍手が湧き、少女は満足気な笑みを浮かべる。

「すげえ、めっちゃ強いなあの子」

俺は感嘆の声を漏らして、ブラウン調の髪色の女子生徒を見る。その髪はクリス先生と同じように、長いツインテールに結ばれていた。

「ええ、彼女は1年生の中でも最上位クラスの実力者ですから」
「——ッ!？」

漏らしたその声に、いきなり誰かが答える。
驚いてその主の方を見遣ると——。

「エ、エルザ会長!？」

「クスッ、ご機嫌ようタクマ。やっと気付いてくれましたね」

知らないうちに、華やかな生徒会長様が隣に座っていた。

・
…

「そういえばさっき学舎で副会長が探してましたよ？ 会議がどうのこうのとか」

「べ、別にお仕事をサボってるわけではありませんっ。少しばかりの休憩を」

鮮やかな桃髪を靡かすエルザ会長は、微妙に視線を逸らして答える。

絶対ウソだ、副会長は走って逃げ出したと言ってたぞ。

「それで偶然、一人で座るあなたを見かけたものですから」

「それはそれはわざわざありがとうございます」

何に対しての『ありがとう』なのか、自分でもよく分からないが。

自称休憩しに来たらしい会長さんの話によると、さきほどの女子生徒の名前はアテューリア・ローズハート。

俺と同じ1年生で生徒会にも所属している成績優秀者らしい。

「彼女の持ってた大鎌、あれってラファエゼなんですか？」

俺の問いに会長は少し目を大きくして答える。

「そうですね、あなた……。まだこの世界に来て間もないのに、もうラファエゼのことを知ってるのね」

「いやええっと、それはですね、とある事情がありまして」

「事情、ですか？ ふふっ、どういう事情なのか気になりますわ」

会長の反応を見るに、どうやら俺の留年云々話はまだ上級生クラスにまで広がっていないようだった。

いずれはこの人にも知られてしまうのだからと、俺は思い切って身に起こっている事情を告白するのだった。

「——学園長もクリス先生も、無茶なことを仰いますわねえ」

やはり1ヶ月で生成するというのは相当キツイ話なのだろう。話を聞いたエルザ会長は軽く溜息を吐いてこちらに向き直る。

「そういえば、ラファールゼってどうやって顕現させるんですか？」

思ったまま気になったことを質問してみる。

やはり特別な魔法構成式と詠唱が必要なのだろうか。

「いえ、別に特別な詠唱はいりませんわ」

実際にやって見せてくれるらしく、会長は立ち上がって瞳を閉じる。

「感覚ですので言葉にしづらいですけど……。こう、体内にあるエーテルを一気に収束させて――」

言葉の途中、音もなく会長の右手に光の塊が宿った。
仄かな桜色の煌きを帯びた、それは細身の長剣。

「これが、わたくしのラファールゼですわ」

美しすぎる神剣を持って微笑む会長に、思わず息を呑んだ。
そして確信する。この人は、強い。

「……なんか間近で見ると凄い威圧感を感じますね」

「それは誉められているのかしら？」

「感心してるんですよ。凄いなあ、って」

これは本心だった。

初めて見た神剣に、俺は心を奪われていたに違いない。

「さて、アキラも待っているでしょうし、そろそろ生徒会室に戻りますわ」

それからしばらく談笑した後、会長はそう告げて席を立つ。

「あ、そうですか。いろいろありがとうございます」

「いえいえ、困ったことがあったらいつでも生徒会室に来なさいな」

そして俺の前を通り過ぎる、すれ違いざまに一言。

「そうそう後もう1つ、あなたが手にするラファーズ。わたくし、この目で見ると心を待ちにしていますわよ。頑張りなさい」

そう言い残してエルザ会長は闘技場を後にした。

その後姿を目で追いながら、俺は彼女に小さな思慕を抱くのだった。

それから更に時は過ぎ、気付けば空模様はすっかり黄昏色に。賑わっていた闘技場もだんだん生徒の数が減ってきた。

「俺もそろそろ帰りますかね。色々調べたいこともあるし」

俺はコロッセオのエントランスへ降り、来た道を1人で引き返す。数多く立ち並ぶ施設塔と高等部学舎を抜け、夕焼けが落ちる前には男子寮へと戻ることができたのだった。

眠りに付く直前だが、この3日間のことを改めて整理しようと思う。

銀髪少女、トウカに導かれた先は確かに異世界だった。

興味深いことに魔法や技術が地球より大きく発展しているらしい。

しかも吸血鬼みたいな魔族や天使のような神族、スライムみたいな魔物まで存在していて結構ファンタジックな世界だ。

それでいて種族対立や戦争も起きていない、誰もが望む平和な理想郷。

そんな世界へ連れて来られた翌日、俺はトウカの通う魔法学園へ転入することになった。

腐敗した過去と心から抜け出して、変わろうと思ったから。

いろんな人と出会って初日から友達もできた。

幸せな気持ちになって、実は今でも感動が止まらない。

そして今日、なぜか枯渇していたエーテルが復活していて、魔法の行使が4年ぶりにできるようになっていた。

しかし喜んでいるのも束の間、厳しい進級課題を突き付けられてしまった。

それで……。ああ、だ、ダメだ睡魔が。

まとめると、まだまだ謎や不安はいっぱいある。

……けれどきつと大丈夫だろう。

前へと進む最初の一步は、もう踏み出しているはずだから。
明日はもっと頑張ろう。この新たな世界で。

Chapter 1 End . . .

- Coming Soon Next Story ! ! -

キャラクター紹介 01

Magical Characters Chapter 1

ここまでの簡単な登場人物まとめです。

・
…

【リュミシアル魔法学園 高等部1年】

—— 主人公、所属クランメンバー

—— タクマミツルギ（御剣 拓磨）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、16歳
出身次元体：地球、日本

「黒髪黒眼、旬な学園転入生、不安と希望とを抱えて」

不安を感じつつも、どこか楽しんでいる節がある主人公。

魔法の知識はそれなりにあるが、やっぱり戦闘経験が少ない。

彼の異世界魔法学園生活の明日は一体どこへ？

—— トウカシラガネ（白銀 冬霞）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：地球、日本

「銀髪少女、掴み所なし、クールときどき小悪魔」

主人公を連れ去った張本人で、なんだか掴み所のない少女。幸か不幸かこれからも縁がありそうだ。いろいろ怪しい娘だけど、その真意はどこにあるのか。

—— ミヤナールム「シアクウナ（ミア）」

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：リユミシアル

「桃色ミニツインテール、小動物系少女、いつも優しい」

長く覚えづらい名前には自覚があり、ミアと名乗っている。
初対面の主人公にも強い好感を与えるなど人が出来ているようだ。
きつとお嫁さんにしたい女子生徒ランキング1位だろう。

—— ラグナ「ヴォレリウス」

種族種目：竜族、竜人族 性別年齢：男性、推定150
出身次元体：不明

「ツンツン赤毛、バカ気味竜人、ムードメーカー」

竜族は長生きで人間のおよそ10倍と言われる。
簡単な話、彼は年寄りどころかまだまだ若く主人公たちと同じぐらい。
美少女転入生をご所望だったが、颯爽と裏切られた人。

クラスに1人ぐらいは　こんな奴いた方がいいかも知れない。

―― テーオ^{II}ベリアルス（テオ）

種族種目：魔族、魔人族　性別年齢：男性、16
出身次元体：不明

「爽やか緑髪、魔王子息、世話焼き気質」

名前はテーオともテオとも両方で呼ばれている。
寮では主人公の隣部屋なこともあり、進んで面倒を見てくれる。
しかしこんな好青年が魔王の息子とは皮肉なものだが。

―― 第2クラス担任、クラスメート

―― クリスティーナ^{II}ムーンライト（クリス）

種族種目：魔族、吸血族　性別年齢：女性、不詳
出身次元体：不明

「金髪ツインテール、ちびっ子担任、真祖の吸血族」

ベテラン教師でどんな分野にも精通している超天才。
子供体型にコンプレックスを抱いており、指摘されると……
『激辛ラーメン Inferno』が好物らしく、毎日食べている
ようだ。

—— ミリオムⅡハイソール

種族種目：魔族、不明 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：不明

「右隣のクラスメート、社交的な女子生徒」

偶然にも主人公が転入してきた日、寝坊をキめていた少女。
全然出番ないけど、きつと彼女には何かある。
それは意外にもこの先の物語に大きな影響を与えるかも知れない。

【リュミシアル魔法学園高等部 上級生】

—— 生徒会役員

—— エルジイルムⅡシアクウナ（エルザ）

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、17歳
出身次元体：リュミシアル

「生徒会長、学年首席、お嬢様口調」

妹ミアと同じく名前が覚えづらいと自覚し、エルザと名乗る。
寝坊したり抜けている所もあるが、基本的に天才気質。
それにしても思慮分別のあるお嬢様って素敵。この人はどうだろ
う？

—— アキラⅡシラガネ（白銀 暁）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、17歳
出身次元体：地球、日本

「生徒会副会長、クール眼鏡」

見たままの堅物ではなく、話すと意外に面白い人。
生徒会幹部として主人公をサポートしてくれる。
どうでもいいが嫁の尻には敷かれてしまいそう。

【その他の人物】

―― 学園関係者

―― トウルシファナ＝リリス

種族種目：不明 性別年齢：女性、不明
出身次元体：不明

「学園長、艶やか美人、おっとり口調」

黒髪、腰まで伸びる長いロングヘアーのお姉さん。
その正体はリュミシアル魔法学園の学園長。
誰がどう見ても黒幕。何かを知ってるし、しようとしている。

・
：

Ep:3 - 1 【羽休めをするのなら】

Episode 3 - 1 【羽休めをするのなら】

生きる世界が違えば、物の言い方が変わってくるのもまた然り。

「だ〜か〜らあ、違うっての。月火水雷風土日なんだってば」

「いやいや木と金はどこへ行ったんだよ……」

長いブロンドの髪を揺らす少女の喋りを聞くに、この世界では木と金の曜日はそもそも存在しないらしい。

無属性以外の7つの属性魔力が曜日に対応しているようだ。

「雷曜日に風曜日ねえ。ははっ、案外早い世界観崩壊が来てしまったな」

1年は12ヶ月、1ヶ月は4週間、1週間は7日と聞いて地球とほぼ同じだと安堵していたのだが、まさかここで反撃とは。

「でもこれどこの世界でも常識じゃないの、ねえ？」

冷めた笑い声で頭を抱える俺に、どこか自慢気に語っていたミリオムはさらにそう追撃してみせる。

「えっ何、それだと最初から知らなかったのは俺だけなの？」

俺と同じリユミシアル界外出身のクラスメートたちが頷くのを見るに、木曜と金曜を採用していたのは日本ぐらいだけだったようだ。そうか、それじゃあ昨日が木曜日だと思って生きていたのはこの

世界で俺1人だったというわけか。

確かにWednesdayやFridayなんかは北欧の神様の名前で、漢字の七曜は元々中国の五行説なんだっただけか？

まあそれは別にいいとして、月火水雷風土日はめちゃくちや違和感がある。

慣れるにはしばらく時間がかかりそうだ。

とにもかくにも今現在の状況を説明しよう。

クリスマスとの面談から早3日が過ぎ、本日は金曜日改め風曜日の午後。

適当なクラスメートたちに誘われ食堂でランチタイム中だ。

もつとも、もう食べ終えて談笑を交わしているのだが。

「んで、タクマさんよ。どうなのクリスマス先生の特別補習は？」

冷水を喉に通した男子の1人が新たな話題を振ってきた。

ちなみに先日闘技場で見かけたクラスメートAである。^{コロッセオ}

名前は……、あえてこのまま通そうかな。

そんなクラスメートAの言う特別補習とはもちろんアレだ。

午後の洞窟ダンジョン巡り、そして魔物さんとの激しい戯れ。

つまり魔法を行使して淡々と進む迷宮探索である。

「あー、ぶつちやけ辛いです……」

火曜日に心配していたことは杞憂にならず、俺はやはり酷い地獄を見ていた。

証拠にこの台詞を吐いたときの目、きつと死んでいたに違いない。

だってあの午後2時間の実戦演習――。

日を追うごとに先生が設定する魔物が強くなっていくのだから。

エンチャント

属性魔力装填していない魔力弾はほとんど効かなくなってるし、

魔物の持つ弱点属性を狙って攻撃しないと効率的に撃破できない。

しかも出現する敵数も確実に増え続けているという。

この急な難易度の上げ方は、より多くの魔法を行使させミシクの吸収をより促進させる為だと先生は言うのだが……。

ええハイ辛いですとも。そりゃ死んだ目にもなりますよ。

ダンジョン

いくら仮想迷宮の負傷しない仕組でも、精神的な疲労感が増すばかりだ。

「弱音を吐かないの、諦めたらそこで留年よ」

「いてっ、お前力入れすぎだッ!？」

気合入れると言わんばかりに背中を叩かれてしまった。

1パーセントの遠慮も無く思いつ切り。良い音だったぜ。

ヒリヒリする背中をさすりながら別のことを思考する。

たしかにここで挫けるわけには行かないと。

――留年ダメ絶対。

一刻も早くラファールゼを生成できるようにならなければ。

「まあまあそんな切羽詰らずに。少しは心に余裕持たないと」
「いやアンタが言ってもぜんぜん説得力無いよ？ ミリオム……」

俺の目の前に座すミリオムの呑気な声に、近く的女子が突っ込みを入れた。

そしてそのことについては俺も激しく同意である。

ラグナもそうだけど、コイツら授業中に寝過ぎだ。

それに加えて2人ともイビキまで提供してくれるもんだから、おかげさまでこっちはなかなか講義に集中できやしない。

昨日さすがに我慢できずに文句を言ったのだが、2人揃って……。

『ごめん、（居眠り止めるの）無理っばい』 だとさ。

もう色々諦めて、席替えの日が来るのを心待ちにしている。

「失礼しちゃうわね、私だってやるときはやるわよ？」

怒ってるのかいないのか判断しかねる声で、生徒証^{ナヒ}の画面をタッチ操作しているミリオム。

この娘はさっきから一体何をやっているのだろうか？

「ほいほいハイ、送信っ」と

「うをお、な、なんだ——？」

彼女がそう呟いた途端、手元にあつた俺の生徒証から機械音が漏れる。

何事かと思つて起動させるとメールを一件着信していた。

送信者はミリオム、何かファイルが貼り付けられているようだが……。

「何を送ってきたんだよ？ 相手が目の前にいるのに」

「いいからっ、見てみなさいって」

「わ、分かったよ。見ればいいんだろ見れば」

眠り姫とは思えない彼女の気迫に押され、渋々俺は画面をタッチしてメールの中身を開く。

件名：ノイローゼ気味な転入生クンへ

本文：私からスペシャルなプレゼントを進呈しようッ！

ミリオム〓ハイソールに感謝するように

+ファイルが添加されています

誰がノイローゼだ。ほんのちよつと疲れてるだけだったの。

そんな突っ込みを入れつつ、短くシンプルなメッセージに目を通していく。

スペシャルなプレゼントねえ。やっぱりこの貼付けファイルだよな？

「あ、怪しすぎるぞ……」

思わずそんな声が漏れてしまった。

軽く唸りながらチラッと送り主に目を向ける。

その視線の先に覗けた彼女の瞳は『早く開ける』と強い念を放っていた。

ますます怪しい。が、周りの奴らからも押され俺の右指は半ば強制的に画面に添えられてしまう。

埒が明かないので仕方なく人差し指で透明な画面をタッチ、貼付けファイルの展開をコマンドするのだった。

どうか嫌なことになりませんようにと願いながら。

・
…

“解析完了、ファイルを展開します”

それから10秒もかからない内にそんなメッセージが通知される。

「んあ、ええつと、これは……」

続いて虚空に映し出された小さなフレーム。

そこに浮かび上がったのは、なんとも派手で可愛いらしい女の子の写真だった。

ウェーブのかかったライトパープルの長い髪、そして華美な衣装。片手にベースギターを持ってピースサインをしている。

あと周りの背景が無駄にキラキラと輝いていた。

「あのオ、こちらは一体どちらさまでしょうか？」

見覚えのない少女の写真を指差し、俺は当然の疑問を呈する。

「——えッ、知らないの!？」

するとみんな一斉に揃ってそう叫ぶのだった。

……お前ら打ち合わせでもしてきたのかよ。

「お願いだからそういう目で見るのやめてくれ!？」

話を進ませるため、早々に突っ込みを入れてみせる。
あんまり下手に弄られ続けると頭が痛くなるからな。

「あはっ、ゴメンゴメン。お約束だと思ってね」

「そんなもん大いに結構だ。で、結局この娘は何者なんだ？」

ウェイトレスから手渡されたデザートミルクプリン。

銀に輝くのスプーンで口に運んだ後、俺はそっけなく返して本題を突く。

「ふふん、それは私が教えてやろう。しっかり聞けイツ転入生！」

「どうでもいいけどいきなりテンション高いなお前」

端の方にいた一人称私の眼鏡男子が息を荒らげ出した。

声もなんか高くなってる気がする。何を興奮してるんだコイツは。

キャンディーキス

「彼女は“Candy Kiss”所属のスーパーアイドル、アイリスちゃんだ」

「……アイドル、アイリス？ ああ、なるほど、そういうわけね」

写真の少女の華美なコスチュームとギター、そして彼の言い放ったキーワードとが以前に聞いたことに結び付いた。

確か初日の男子寮で副会長が話してくれたんだっけ。

発展途上という異世界の幻想は既に打ち砕かれ済みだが、この世

界には芸能プロダクションまでも存在するそうなの。

俳優に歌手、アイドル。それらも当然のように存在している。

そしてこのアイリスという若手アイドルは、なんでもアイドル業界でトップクラスの实力者らしい。

透き通るような凛々しい唄声とフレンドリーな性格が良いのだから。

「それに合わせて彼女はモデルとしても活躍しているぞ。スタイルが抜群だろう？」

「た、たしかにこれは……。なかなかどうして凄いな」

露出気味な衣装のせいもあって、大きめな胸がかなり強調されている。

背丈も俺と同じぐらいでとてもナイスバディに見えた。写真からじゃ本当の姿は詳しく分からないけど。

「お、転入生がけしからんことを考えてる」

「——ッ!? ゴホッ、そそそんなことない!」

やはり俺は簡単に顔に出してしまうタイプらしい。

いや、今のは口が声が漏れてただけか!?

……どっちにせよ気を付けないとな。

「君も彼女の神曲の数々を聴いてみるといい。虜になるさ、フフッ」
「そ、そうか、俺もなんか興味が出てきたよ」

不敵に笑う眼鏡男子にそう答え、俺は正面の女子生徒に向き直る。ブロンド髪の彼女に訊かなければならない疑問があったからだ。

「んでミリオム、このアイドルさんの画像がスペシャルプレゼントなのか？」

「そうだけどちょっと違うわ。だってそれ、唯の写真じゃないんだから」

「——はい？」

間抜けな声を漏らす俺に彼女はよく見てみると促す。

よく目を凝らすと、右下に小さく記された文章を見つけた。

『春休み直前アイリス独占ライブコンサート！』

Candy Kiss 社 2階ライブホール、17:00から開

演。

ライブ終了後にはアイリスとの握手会もあります！

これはもしかしてライブの宣伝なのだろうか？

つか開演日は今週の日曜日、明後日じゃないか。

俺は目を細め、煌めくアイドルの姿を眺める。

「ちょ、これよく見たら入手困難なライブチケットじゃねーか！？」

するとチラッと覗き込んだ隣のクラスメイトAがそう声を上げた。

「え、チケットなのかこれ？ 俺には宣伝ポスターにしか見えんぞ」

「お前の目は節穴か！？ ここに入場券って書いてあるだろうがよ」

あ、ホントだ。見過ごしていた。

なるほど、そうなるって確かにスペシャルプレゼントだな。

「そそつ、今週末このライブにでも行つて羽休めしてきなよ」
「それはありがたい話だが……、いいのか俺が貰つて？ レアモノじゃないのか？」
「いや用事があつてさ、その日行けないのよ私。だからキミに、ね？」

どうやら彼女なりに気を使つてくれたようだ。
ならありがたく受け取っておくのがいいだろう。

「——だからさ、私の居眠りも大目に見てよねっ」

待て待てそれとこれは話が別だろオイ。
可愛らしくウインクする彼女を見て、俺は何も言えず溜息をつくのだった。

昼休みも終わり間近、ダンジョン仮想迷宮へ向かおうとクラスメート達から別れる。

その時ミリオムが待つたと声をかけてきた。

「言い忘れてたけど、そのチケット5枚分あるから」
「なんだ5枚もくれたのか？ どうしてそんなに……」
「い、色々あつたの。そのことはいいから気にしないでっ！」

少し慌て気味に答える彼女は何かを誤魔化しているように見えたが、あまり深く切り込まないのが大人というヤツだろう。

俺は静かにミリオムを見据えて言葉の続きを待つ。

「——それでさ、残りの4枚でアンタが世話になつてゐるトウカたち

を誘ってみたなら？」

「アイツらをか。まあ確かに面倒をかけてるしな」

彼女の提案を受けて『良いかも知れない』と1人頷いた。

ここは街の案内役も兼ねて後で誘ってみるとするか。

「ありがと、そうするわ。あとこれはいつか埋め合わせさせてもらうぞ」

「あはっ、それより先に進級できるように頑張んなさいよね！」

ははは、言いやがるなコイツ。

しかしライブコンサートか。明後日が楽しみだな。

俺は少し軽い足並みでその日の特別補習へ向かうのだった。

もちろん、その後ろでホッと胸を撫で下ろした彼女のことなど気付かぬまま。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:3 - 2 【街探索のお誘いを】

Episode 3 - 2 【街探索のお誘いを】

酷く不気味に、そして大きく開けた迷宮洞窟の最奥。

俺と1人の人物は宙に浮かぶ偽りの灯りにその影を映されていた。

「——— 今度こそ、Enchanholly 光魔力装填！」

土臭い、これもまた偽りの空気を肺に取り込んで。

教わった構成式を頭に描き、俺は魔法名をワード呟くように詠唱した。

その声を合図に銀に輝く俺の魔銃は聖なる光を宿していく。

その日の特別補習はいつもより30分ほど早く終わっていた。

何が原因かと訊かれれば困ってしまうのだが、

恐らく俺にも魔物の重要器官や弱点属性を発見する能力が備わってきたからなのだろう。

数日前に比べるとオーガもゴブリンもアンデッドだって、遥かに速く、そして効率的に撃破できていた。

別に自惚れているわけではないけれど、少しは強くなったということか。

そう考えると素直に嬉しい。

「そうだ、いいぞ生徒タクマ。先よりも魔力がかなり安定している、そのまま詠唱しろ」

そんなわけで時間がかなり余ってしまったので、俺は仮想迷宮ダンジョンの中でとある魔法をクリス先生から指導してもらっていた。

『其は祝福と加護、光の聖母。悪しき闇を断遮する光盾となれ』

分かりましたと首を縦に振り、俺は続けて呪文を口にする。今までの魔法なら魔法名ワードだけで発動できていたのだが、今回はそういうわけにも行かないのである。なぜなら――。

これは地球で解明されていなかった魔法学の1つ。空間を支配すると言われている、すなわち光魔法なのだから。

『障壁展開、エーテルバリアEther Barrierッ！』

最後にそんな魔法名を唱えると、白き光輝の障壁が銃口の先に展開された。

30分間挑戦することおよそ50回目。

先までならすぐに粒子となって霧散していたその聖盾は……。

「ふはあッ、ハア、成功すかねコレ？」

「ん、まあ形はな。どれ、耐久度の方をテストしてやろうじゃないか」

クリス先生はそう告げると人差し指をこちらに向け、ニヤリと笑みを浮かべると魔法名ワードを必要としない単純な魔法弾を一発放った。

グルグルと螺旋の軌跡を描き、白き魔弾は間もなく俺を捉える。直後強い閃光が走り、光の障壁がその凶弾を拒んだ。

が、さすが教師と言ったところか。

「うわぁッ!?　ちょ、魔導力が強すぎますって先生!？」

「ふん、この程度防げないなど障壁の意味が無いわバカタレが」

予想より魔弾に込められた魔力が多く、そして威力がとてつもなく強い。

魔銃から展開された障壁に尋常じゃない圧力がかかる。

このままでは我が担任が放った凶弾を打ち消せる気配は全くなかった。

「う、くう、ヤバい。このままじゃ……」

右手だけでは耐えれそうにないので左手もグリップに添える。

より多くの光魔力を送り込み、この障壁を維持し続けるためにだ。

そんな機転の甲斐あつてかやつと魔弾の圧力が徐々に弱まってく。

やがて魔弾の霧散に成功するが、同時に俺の障壁も消えてしまっていた。

同時に俺は重い息を吐き力なく地面に膝を付ける。

その一部始終を観察していたクリス先生はこちら見つめて口を開く。

「よくやったと言ってやりたい所だが、やはりまだまだ甘い。要鍛錬だ」

「……はい、努力します」

彼女の口から出た手厳しい指摘に自然と頭が下がった。

「参考書なら生徒証から山ほど見れるし、分からないことがあったら私に聞け」

「そうさせてもらいます。結構興味がある分野ですから」

「ふっ、良い心がけだ」

障壁結界魔法。

思えば防御面を全く考えずにダンジョン探索をしていたからな。こつこつ補助魔法は用意しておいた方が良さだろう。

「しかしエーテルの質が種族によって違うなんて知りませんでした」
「前に言っただろう？ 貴様にとってこの世界は新発見の連続になる、とな」

「ホントそうですよ。次は一体何が来るのかと考えると怖すぎます」

エーテルバリアを教わる時、俺は同時にそんな真理を知った。

地球において人間が長年悩み続けていたことの答え。

それは光と闇魔力をコントロール出来ない理由であった。

それはエーテルの質が種族によって違うということ。

これを言い換えると、『種族によって制御できる属性魔力が違う』ということだ。

詳しく説明すれば神族は光魔力、魔族は闇魔力に強い適性を持っているが、逆に言うと人族と竜族はそのどちらもあまり持っていないらしい。

つまり人族である人間は簡単な光闇魔法しか行使できないのだ。

だから人族以外の種族が存在していなかった地球では、必然的に光闇魔法の発展が進まなかったというワケだ。

が、俺は人間にも関わらず光魔法の応用であるエーテルバリアを行使できた。

それにはきちんとした理由がある。

なんと体内に吸収したミシックによって強化されたエーテルは、種族に関係なく属性魔力を制御できるようになるのだという。

つまりここでは誰もが8つ全ての属性魔法の行使が可能なのだ。

……やっぱりこの世界はすごいな。

「おい、さつきから何を呆けてるんだ？ 私は先に戻っておくぞ」
「——へ？ あ、はい」

「自分も一緒に」と声を続けて先生の方を見遣ると、すでに帰還用の魔法陣だけを残してその姿は消えていた。

少しぐらい待ってくれてもいいのではないのでしょうか、先生。

・
…

時は過ぎ夕暮れ時。

俺と克蘭メンバー4人は一緒に学生寮への帰路についていた。

ちなみに本日の放課後は教室で先程のエーテルバリアの練習をしていた。

クラスメートたちに手本やアドバイスを貰いながら頑張ったおかげ

げで、なんと詠唱を使わずに魔法名^{ワード}だけで発動させられるまでに上達したんだ。

第2クラスの皆様協力ありがとうございます。

「お、あれは――」

学園中心塔1階にあるエントランスの壁に作られた長方形の世界地図。

巨大な螺旋階段を下った直後、目に入ったそれを見てふと立ち止まる。

そこには現在地である学園を中心に1つの大陸と周辺の島々が広がっていた。

地区ごとに色分けしてあって、その中に街の名前などが記されている。

ちなみにこの学園は『ヴェルエス』という地区、街に所属しているようだ。

「しかし何回見ても知らない大陸と地名だな」

「なによ今更。散々ここが異世界だって思い知らされてるクセに」

感嘆交じりにカラフルな地図を見上げていると、すぐ後ろに続いていた冬霞^{トウガ}が耳元で小さく囁いた。

「いやいや絶対慣れるわけないし、気後れもするだろ普通」

銀髪少女の声に俺はそんな言葉を返し、振り返って彼女を見据える。

——異種族の存在にモノの呼び方、そして驚異的に発展している魔科学技術。

もっともこの数日間、たくさんの人たちとの会話を通じて得たそんな情報は、ここが地球とは違う異世界だと実感させられるには十分なものだったが。

「……ふうん、そう」

しばらくの間が空いた後、トウカはそう小さく呟く。
そして同時に向けられた俺の視線からそっと目を逸らすのだった。
一体何を考えていたのだろう。

「おーい、そんなとこで何をブツブツ言ってるんだ？」

微妙な空気の中、少し遅れてラグナたちも螺旋階段を下ってくる。

「アンタが馬鹿で阿呆でヘタレドラゴンだって話をしてたのよ、ふふ」

「いやしてないから。変な嘔吐かなくてくれませんっ!？」

目を細めてクスクスと晒う銀髪少女を咎める。

何をどうしたらそんな虚言を吐けるのだろうか。

「お、俺、確かにバカでアホだけど、ヘタレは言い過ぎなんだぜ……」

ほら見る赤毛竜人が萎んでいくじゃないか。
つか馬鹿で阿呆なのは認めるのかよお前。

「トウカさん、また人を貶めるようなことと言って——って、事実かも？」

「んなつ——」

ラグナ、テオにまで裏切られる。

その光景を見て俺とミアは目を見合わせて苦笑するのだった。

「あ、そうそう。明後日の休日に街へ行くつもりなんだけど、案内役頼めないか？」

寮の手前で俺は突然思い出してそう告げる。
いかにいかに、完全に誘い忘れていた。

「あら、それ明日に私たちから誘おうと思ってたんですよ」

「あ、そうだったんだ。悪いな氣を使わせて」

「いいんだよ。紹介したいお店とかも色々あるからさ」

俺をヴェルエスの中心街、つまり繁華街へ休日に案内しようというのを、どうやらミアとテオの2人で前々から計画してくれていたらしい。

ありがたいことだ。

「ちなみに私も行くわよ。アンタの世話は生徒会の仕事なんだね」

「はいはい、さいですか」

理由の雑さはともかく、銀髪少女も着いて来てくれるらしい。

「んで雑魚ドラゴン、どうせアンタも来るんでしょう？」

そう言って赤毛竜人に鋭い視線を向けるトウカ。

ちなみに『雑魚ドラゴン』とはラグナのあだ名だ。

無論こんな失敬すぎるあだ名で呼ぶのはクラスでこの銀髪少女だけだ。

「いんや俺はいいわ。休日も寝て過ごすって決めてるんでね」

何をどう思っているのか誇らしげな笑みを浮かべるラグナへ、俺たち4人から白い視線が向けられる。

一体お前は人の何倍を寝て過ごすつもりなんだと。

「そうかラグナは来ないのか。うーん、それだとチケット1人分余っちゃうな……」

「ん、チケット？ タクマ君、それ何のことですか？」

俺の独り言を耳に入れたミアがくいくいっとブレザーの裾を引っ張る。

「あ、いや、今日の昼にミリオムから貰ったんだよ。これ」

他の奴らも気になっている顔をこちらに向けていたので、俺は生徒証を起動させて綺羅びやかなライブチケットを黄昏色の空に浮かべた。

「お、オイ、それ200枚も売られなかったレアモンじゃ……」

パツと目を大きく開けたラグナがワナワナと言葉を紡ぐ。

あからさまに驚いた言動したのはコイツだけだったが、他の3人も少しは動揺しているようだった。

つか200枚しか売られなかったって初耳だぞ？

その内の5枚も手にしていたなんてどんなマジックを使ったんだ
ミリオムは。

「まさかアンタ、ナニかでミリオムを脅し——」

「してないよ！？ 変な邪推しないでくれませんっ！？」

恐ろしいことを口走りそうになった銀髪少女を止める。

もうほとんど言ってしまったが。

「とにかく、5枚分貰ったから皆で行こうかなって考えてたんだよ」

しかしラグナは部屋に籠って熟睡なさるそうだ。

仕方ない、後でアキラ副会長でも誘ってみるか。

「ハハハッ！ アイリスちゃんのライブを見られるなら、行くしか
無いぜえ！」

「別に無理して来なくていいんだぞ？」

「ゴメンなさいタクマ様俺も連れて行ってくださいお願いします」

夕暮れのオレンジ色に、無駄に形とキレとが良い土下座が溶ける。
その光景に第3男子と女子寮前の時が止まるのだった。

「って、人通る前で土下座すんな！ 俺が何か悪者に見られるだろ
うが！？」

何だこの意味不明な空気は。

誰も突っ込みを入れないので仕方なく俺が動く。

「ふむふむ、Candy Kissの2階ホールで17時から開演ですか」

一方何事も無かったかのように、ミアは俺の生徒証をその小さな右手で持ちライブの詳細を確認していた。

意外なことにトウカも興味深そうにそこへ混ざる。
もしかしてファンなのだろうか？

「――それでは明後日の10時ぐらいにここへ集合しましょう」

ミアは少し思考してから、ラピスラズリの瞳をウインクさせて時間を指定する。

その時間からだとは大体6時間は街を探索できるだろう。

「聞いたかいラグナ、起きなかったら放って行くからね？」

「起きる起きる！ アイリスちゃんのために早起きするぜ！」

俺を案内するために起きろよ。

突っ込みたいことは他にも色々あるが抑えるのだった。

「ま、アイリスの生ライブなんて滅多に見られないし。……楽しみね」

別れ際に聞いたそんな銀髪少女の言葉だと、どうやら彼女もアイリスのファンなのは間違いない。

なんだか意外だけど。

ミアとトウカの2人を女子寮へ見送ると、俺たち男も自分の部屋

へと戻るのだった。

しかしヴェルエスの街か。どんな所なのか少しは調べておかないとな。

うん、日曜日が楽しみだ。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:3 - 3 【ゲートを飛び越えて】

Episode 3 - 3 【ゲートを飛び越えて】

そして迎えた日曜、待ちに待ったヴェルエス街探索の日。

異世界の街と聞くとつい数千年前の中世ヨーロッパを想像してしまいがちだが、

やはりそんな夢は無情にも現実が押し潰してしまう。

昨日適当に見つけた街の写真にはコンクリート製の建物で溢れていた。

そもそも恐ろしく魔科学文明が発展しているのは明確なのだから、この世界が地球よりも劣っているわけがないのだ。

「ん」と、まだ2人は来てないか。って、流石に15分前だし当たり前だよな」

男子寮前の道へ出て辺りを見回し、俺は1人そう呟いた。
陽だまりの中、心地良いそよ風が全身を撫でる。
よかった。今日もいい天気になりそうだ。

「おはようございますタクマ君」

「何でアンタ1人なの？ テオと雑魚ドラゴンは？」

しばらく蒼穹を仰いでいると、

いつの間にか2人の可愛い女の子が声をかけてきた。

「あ、うん、おはよ。アイツらもすぐに来ると思うよ」

ミアと冬霞^{トウカ}に普段と変わらぬ挨拶を交わしていると、俺はあることに気付いて口を開く。

「——やっぱりみんな私服持ってるんだよな」

そう、2人とも俺が今まで見てきた黒のブレザー姿では無かったのだ。

ミアは純白と空色とを基調にした清楚な印象を持たせる服、トウカは黒白のフリル付きの可愛い服を身に付けていた。

「ふふっ、似合ってるかしら？」

「まあな。随分可愛い服じゃないか。似合ってるぞ」

クルリと一回転して不敵な笑みを浮かべる銀髪少女にそう答える。なんだったかなこういうファッション……。ゴシックローリータだっけ？

ミアにも似合っているとフォローしてから自分の衣服について思考する。

元から生徒証^{ナヒ}に登録されていた服装は制服と寝間着だけだった。別にそれでも困らないのだが、皆私服を着ている中に俺だけブレザー姿というのはやはり寂しい。

街に行くついでに適当に購入しておこう。

「あ、そういえば街に着くまで魔物とか大丈夫なのか？」

魔銃に手を添え、俺は2人へ真剣な眼差しを向けそんなことを訊いた。

学園であれほど魔物の討伐を訓練させているのだ。
よほど現実に出現する魔物は危険なのだろう。

するとしばらくの間が空いた後、2人の少女はクスクス笑い出した。

「な、何笑ってるんだよ？ こっちは真剣に言ってるんだぞ」
「クスッ、あはは、すみません。そうですね、知らないんですよ」

前屈みになって目尻を擦るミアは、トウカに目配せして説明を促す。

同じく表情を緩めていたトウカは顔を上げて口を開いた。

「安心しなさいな。人に危害を加える魔物は数千年前に隔離されているの」

「へ、隔離？」

銀髪少女の言葉に俺は一瞬目を丸くする。

「そうよ隔離。色々問題があるそうだから絶滅はさせてないらしいけど」

「うわぁマジかよそれ。全然知らなかった」

予想外の真実に拍子抜けするばかり。

そしてミアからの更なる補足。

隔離されている場所は海を隔てた別の大陸のため、

俺達が魔物にエンカウントする確率はゼロなんだと。

てかよく考えれば別に驚くことじゃないか。

とつくの昔に対策が取られているのは当然だ。

……ん、でも待てよ？

「実際に戦う機会がないのに、なんで魔物と疑似対戦なんかさせてるんだあの学園は」

「ふむ、単に魔法が上達しやすいからではないでしょうか」

「そうね。たしかに明確な『敵』がいた方が全力で殺れるし」

人の悪い笑みを浮かべながら物騒なことを言い放つ銀髪少女。
言ってることは間違ってるのだが、いかんせん可愛らしいその
容姿にそぐわない。

なんだか複雑な心境だ。

「つと、待たせたな3人とも。おつ、今日も快晴だぜ」

「ホントだね。先週は雨が降り続いてたからその分が回ってきたの
かも」

寮前のベンチに座ってまたしばらく空を仰いでいると、
そんな声を上げながら男子2人が男子寮から出てきた。
テオもラグナもカジュアルな服装がよく似合っている。

「よし、これで5人揃ったな」

そう呟いて手元に取り出したナビを見遣る。

確認したところ時刻はちょうど10時を回ったところだった。
集合時間ピッタリである。

「ええ、みんな揃いましたし、早速向かいましょうか」

そんなミアの言葉を合図に、俺達はヴェルエス繁華街へと出発するのだった。

・
…

「なあ、どう見ても学園だと思っただけだなコ」

もう通い慣れつつある並木道を抜けて。

俺がクランメンバーたちに導かれた先は、学園中心塔のエントランスだった。

「ハハハッ！　なぜここに連れてこられたか知りたいかタクマッ――」

「よしそうかお前ライブ行きたくないんだなよく分かった」

「うぎぎ……」と赤毛竜人は押し黙る。

「雑魚ドラゴンの相手なんざしなくて結構よ。時間の無駄だから」
「分かってる。んで結局どうしてここに来たんだけ？　まさか学園の中に街があるってオチじゃないだろうな」

扱いの酷さに視界の端に萎んでいく赤毛の姿が見えるが、アイツのフォローはミアに任せておこう。

「あはは、さすがにそこまで広くないよ僕らの学園は」

苦笑いを向けながら突っ込むテオ。やっぱりそれはないか。

しかし残念ながら俺が他に思い浮かぶことはないし、お手上げだ。

表情だけで皆に説明を促すと、銀髪少女が1人話を切り出した。

「……転移魔法の使用が規制されているのは前に話したわよね」

「ああ、覚えてるぞ。だから使わずにわざわざ徒歩通学してるんだよな」

初日にそんな話をしながらトウカと廊下を歩いたのを覚えている。理由は確か魔法に頼り切って怠けないようにするためだっけか。

「そう。けどある特定のエリア間は転移魔法の行使が許可されているの」

「話が見えないぞ。それは別に今学園にいる理由にはならないだろう」

「チッ（人の話は最後まで聞きなさよバカ、低脳……）」

舌打ちと小声の悪口しつかり聞こえてるぞオイ。

「いいかいタクマ君。代わって僕が続きを説明するね」

トウカとの空気が悪くなったのを感じたのか、テオが横から口を挟む。

うん、いつ見ても爽やかな美男子だ。

「その転移魔法が許可されている場所のことを転移駅、ゲートって言うんだけど――」

彼の説明によると、ゲートは開けた広場や大きな施設に指定されているらしい。

結構たくさんあるそうでヴェルエス地方の中でも50を超えるのだとか。

そこまで聞いた俺は「あつ」と声を上げると、表情を緩めて笑みをこぼした。

「なるほどな、このエントランスがその転移ゲート駅なわけか」

「ご明察。だとすればあとは簡単だよな。どうしてここに来たのか」

テオの促すとおり、もう答えは十分に絞れる。

恐らく学園から中心街まではそれなりに距離があるのだろう。

だから転移魔法を使おうとこの学園内ゲートまで来たというわけか。

「ふふつ、事情は上手く呑み込めたようですね。……と言うか、これも先に教えておくべきでしたか」

悪戯っ子のようにぺろつと舌を出して微笑むミア。

桃色のミニツインテールが可憐に揺れる。

正直えげつなく可愛い。すげえ破壊力だ。

「ん、大丈夫だよ気にしないで。それよりそろそろ行かないか？」

「そうだが、寮を出てからもう20分は経ちまつてるからな」

悟られないように視線を動かしながら次の行動を提案すると、いつの間にか復活していたラグナが元気よく賛同してくれた。

「それじゃ転移の構成式を組み立てるから行き先の座標を教えてください」

基本となる魔法構成式を頭に浮かべ、4人の特に誰ともなくそんな声をかける。

式に少し数字を代入するだけだから1分もかからないだろう。魔法が使えなかった頃でも式の組み立てだけは必死に練習していたしな。

「——って、何またニヤニヤ笑ってるんだよお前は」

「あ、いやゴメンゴメン！ 悪気があるわけじゃないんだよ」

反応がないので視線をやると言葉のとおり頬を緩める4人の姿が。テオが弁明するが、涙まで出るような笑い顔でそう言われてもな……。

「^{ゲート}転移駅での転移魔法はコレを使うのよ」

「また生徒証の機能なのか」

「そ、だから普通の転移魔法に使う構成式と詠唱は不要よ」

横から見慣れた1枚のカードを揺らす銀髪少女を見て溜息をつく。

「使い方は簡単。『^{Gate Access}ゲートアクセス』と行き先の駅名を詠唱するだけ」

「ちなみにこれから向かう駅の名前は『ヴェルエス中央庭園』です。こう——」

そう言ってミアは手本を見せてくれる。

Gate Access
『ゲートアクセス、ヴェルエス中央庭園へ』
「おおっ!？」

その一言を放った直後、落ち着いた光が地面に広がった。
形成された円形の魔法陣を読み解くに、きちんと転移用の式が埋め込まれている。

転移魔法を発動するには普通2分はかかってしまうのに。

「めちゃくちゃ早いな。少し驚いたぞ」

「あはは、文明の進化に感謝だね」

気付けば他の3人も足元に同じ小さな魔法陣を展開していた。
銀髪少女は『早くアンタもやりなさいよ』と鋭い視線を向けている。

Gate Access
『よし、ゲートアクセス、ヴェルエス中央庭園へ』

胸ポケットの生徒証^{ナヒ}に手を触れ短い詠唱を終える。

それを合図に克蘭メンバーたちは魔法陣の中へ。
俺もすぐに習い足を滑りこませた。

すると光の粒子が俺を包み、視界まで白く覆い込むのだった。

・
…

「ふうん、なかなかどうして思ったより綺麗な所じゃないか」

この場所を一言で言い表すなら『噴水広場^{ファウンテン}』が相応しいだろうか。
ザザーッと水飛沫の心地良い音色が心を落ち着かせる。

「名前通りこの広場はヴェルエス地方の真ん中にあるんです。ミミットスクエアからは少し離れていますけど」

小さな歩幅で可憐に先頭を進むミアが口を開く。
彼女の提案で庭園の中を軽く散策してから街へ向かうことになった。

ちなみに『ミミットスクエア』とはヴェルエス中心街の通称だ。

「このまま抜けた先がフラワーコート。あっちには売店が並んでるわ」

「反対方向には確か魔法決闘ができる広場があったよな」

結構な人が行き交う中を進みながら庭園内を散策する。

他の人の服装や庭園の景色は日本のそれとやはり変わらない。
何も知らないでいたらここが異世界だなんて思いもしないだろう。

『んにやにやーっ』

「——んあ？ この声ってまさか……」

どこからか、不意にクセのある鳴き声が俺の耳をくすぐった。

それは日本人なら誰でも一回は聞き覚えのある鳴き声。

思わず立ち止まり、その姿を捉えようと五感のアンテナを張り巡らす。

『にやーっす』

もう一度発せられた鳴き声の方に視線をやると、
緑の茂みからソイツはこちらを伺っていた。

「うわあやっぱり猫か。てか異世界にも普通にいるんだな」

その子はとても可愛らしい白毛の子猫だった。

脅かさないようにゆっくり歩み寄り、屈んでよしよしと頭を撫でてやる。

子猫は逃げずに『ふにゃーん』と目を細めリラックス。

ふかふかと柔らかな感触はなんとも至福の心地を俺に与えた。

「はっはーん。そうかそうか、タクマっちはお猫様がお好きだったのかあ」

「あ……いや、えと、これはその」

耳元で嫌らしく囁くラグナの声で現実へ連れ戻される。

やべえ俺今どんな顔してたんだ!?

「そりやあもう初めて見たわ。アンタの蕩けきつた至福顔」
「あああ聞こえない聞こえないッ!」

と、言いつつもふわふわの猫耳から未だに右手を離せなでいた。
やはり猫は俺にとって少し特別な存在なのかも知れないな。

前の世界で孤独や辛い気持ちを紛らわしてくれたのは……。
アイツら、突然居なくなった俺のこと心配してるかな。
……ん、いや止そう。日本のことはもう過ぎた話だ。

『うにゃうっ。』

——ああでもやっぱり気になる!?

眼前の白猫に、日本へ置いてきてしまった友の姿が霞んだ。
果たしてタイチもミーナもミューも元気でいてくれるだろうか。

「前から思ってたんだけど、タクマ君って意外と表情豊かだね」
「ふふっ、私はとても魅力的だと思いますけど」
「つか何でいきなり泣きそうな顔になってるのよ？」

何やら後ろで克蘭メンバーたちが話していたようだが、
この時の俺はそれを気にしているような余裕はなかった。

「おっ、タクマっち、後ろに面白い生き物がいるぜい」

白猫に勝手ながら『シロ』と名前を付け可愛がっていると、
不意にラグナのそんな声が俺に降りかかった。

「ん〜、面白い生き物？ ひょっとして赤毛ドラゴンのこと——」

軽口を叩きながら後ろを振り向く。

『ブルルウ、フヒュルルツ』

「んなっ、ええっ！？ なななんじゃあコイツはッ！？」

そして、眼前の生物を見てそんな叫び声を上げてしまう。
ソイツは白馬のようで、頭から角を生やしていて。

これ見よがしに立派な2枚の白翼を羽ばたかせていたのだから。

ユニコーン、ペガサス。そんなファンタジックな単語が脳裏によぎった。

-
C
o
m
i
n
g
S
o
n
N
e
x
t
S
t
o
r
y
!
!
-

Ep:3 - 4 【ミミットスクエアへ行こう】

Episode 3 - 4 【ミミットスクエアへ行こう】

どこか神聖な印象を抱かせるユニコーンとペガサス。

いつの昔だったかその違いについて調べたことがあった。

確かユニコーンは一角獣、ペガサスは翼の生えた馬だったと記憶している。

無論どちらも現実には存在しない神話上の幻想動物だ。

が、あくまでもそれは地球という1つの次元体の中の話にすぎないのであって。

「
——フマニミット愛玩動物のユノスス？」

さつき名付けたシロを抱き上げ、耳に入ったミアの言葉をそのまま漏らす。

腕中の白猫は『ふしゃーっ』と眼前の天馬を威嚇していた。

「そう、ユニコーンとペガサスのハーフですよ。ほら、だから翼も角もあるの」

『ブルル、ヒュルルーン』

薄い青の混じったたてがみをミアにうふふと撫でられると、

ユノススは甲高い鳴き声を上げてその場に落ち着いた。

そして俺の顔を覗いて自慢気にその白翼と角を魅せる。

「へえ、ホントだ。おつ、この羽根もふわふわじゃないか」

うーんよく見ればとても頭が良さそうな顔をしているな。
ひょっとして人の言葉も理解できるのかもしれない。

「まあ割とね。『おいで』って言ったら寄ってくるし」

そう言いながらテオも反対側の片羽に優しく触れた。
つとけないけないまた独り言を垂れ流していたようだ。

「つかコイツもしかして野生なのか？」

「ちげえわよ。ちゃんとこの庭園で飼育されてる子。限りなく放し
飼いだけど」

こんなに大きな馬を！？ 酷くずさんな管理だなオイ。

心の中で銀髪少女の答えに盛大な突っ込みを入れてしまった。

「その証拠にちゃんと『レコンキスタ』って立派な名前もあるわ」

「よしそのふざけた名前の発案者をここに連れてこい」

確かスペイン語だっけ。絶対この天馬に関係ない意味だぞ。

……ちよつと響きが格好いいから、か？

その後の道中でミアから聞いた話、愛玩動物ファニッシュトはペットと同じよう
な感覚のようで。

家族や使い魔のように大切に扱われているらしい。
果たして馬をペットと呼べるのかは分からないが。

「しかし猫は知ってるくせにユノスは見たことないなんてな」
「猫と幻想動物と一緒にしないでくれ。頭が痛くなるから」

珍しいラグナの皮肉をそう一蹴りして足を進める。

この世界じゃファニットと一括りなのかも知れないが、こちらから見れば違和感ありまくりなのだ。

下手をすれば魔物と勘違いしてしまいそう。

「ちなみに魔物の定義は『人に致命的な危害を加える生命体』よ。もちろんファニットはその枠に属してないわ」

「なるほど、ね。分かりやすいと言うか何と言うか」

銀髪少女の補足を耳に入れて1人納得する。

そうなるとサメとかライオンも魔物にカテゴライズされそうだ。

あ、それだといつか仮想迷宮ダンジョンにもそういう野獣が出現するかも知れないな。

「あら、あんな所にも可愛らしいファニットがいますよタクマ君」

嫌な想像をしていると先頭を歩くミアが不意にそう手招きした。一体どんな奴だろうと彼女の元へ小走りして目をやると。

『ピーッ、ピーッ！』

な　ん　か　い　た

「……………はははっ、は」

顔のついた丸い球体が飛び跳ねながら変な鳴き声を！？

突っ込みどころが満載の光景に、俺はただ乾いた笑いを漏らすことしかできなかった。

この世界、まだまだ知らない生物がたくさんいそうだ。

すっかり懷いてしまったシロと別れて花畑の道を歩く。

いつまでも腕に抱いているわけにもいかないしな。それにまたこの場所へ来たら会えるだろう。

心地良いフローラルな香りに誘われてか、その花道を歩く人も数多かった。

「見えるでしょあの大きなゲートアーチ。あれが庭園西側の出入口よ」

促された視線の先には確かに巨大な逆U字のアーチが。

ほんわかと暖かな日差しが注がれる花々との風景と重なり、心地良い欠伸を誘う。

「やっとか。めちゃくちゃ広いなココ。学園ぐらいはあるんじゃないのか」

「そうですね、この辺じゃ一番大きな^{ゲート}転移駅かと。他にもお祭りやイベントの会場になることも多い場所ですし」

なるほど、中央庭園の名は伊達ではないということか。

繁華街へのアクセスも悪くないようだし、これだけ人が集まるのも頷ける。

「この先の住宅通りを真っ直ぐ抜ければミミットスクエアに入れるぜ」

「そうか、いよいよなわけだ。楽しみだな」

頭の上で手を組みながら口笛を吹くラグナに答え、俺は随分と現

代風な異世界の街並を想う。

うーん、まずは何の店から入ろう。

・
…

中央庭園から北西に伸びる大通りを歩くこと10分。

俺たち一行は間もなくヴェルエスの中心街、ミミットスクエアへと足を踏み入れた。

さすがヴェルエス地方の中心に位置する商業エリアと言ったところか。

数多くの食料品店、魔法具店、書店、ファッション店、喫茶店などが並んでいる。

中には地球と変わらないような大型のショッピングモールまで建っていた。

大通り沿いをしばらく散策した後、ミアの案内で若者向けのエリアであるアーケード街へ。

そして流されるまま最初に入った店とはあるブティックであった。

「うふふ、似合ってますよ。この新作ジャケットも購入決定ですね」

なんだかご機嫌なミアはそう言っと一枚の紙をジャケットから引き抜く。

これは商品カードと言って、売り物のデータを記したものだ。会計するときに必要らしい。

「はい、それじゃこれが最後だよ。試着よろしく」

「おっけ了解。って、俺自身で服を選んでない気が……」

そう小声で突っ込みを入れつつも、テオが持ってきた衣服に生徒証をかざす。

すると普段どおり制服に着替える時と同じような感覚が全身を巡り、

ふと正面の合わせ鏡を見れば黒髪の自分が知らない服装をしていた。

言わずもかな、この魔科学利器を使うと一瞬で着替えができるのだ！

……うん、やはりこの世界の魔科学技術の高さは何かおかしい。

他にも言語結界や仮想迷宮ダンジョンのことも合わせて考えてみると色々レ

ベルが違いすぎる。

「と仰りますが、実はそこまで難しい技術じゃないそうですよ。

ごく基本的な魔術を組み合わせでシステム化してあるだけですから」

感嘆の声を漏らしていると隣でミアがそう微笑んだ。

確かに魔科学とはそういうものなのだが……。

その組み合わせを発想できる能力こそ俺はすごいと思った。

「おっ、なかなか様になってるじゃねーかタクマっち」

「あらあら本当、馬子にも衣装とは本当ね。クスッ」

少しの間テオとミアの3人で談笑を交わしていると、自分の服を見に行ったラグナと冬霞トウカが戻ってきた。

「今とっても聞き捨てならない台詞が耳に届いたんだが」

強いて言えば銀髪少女の口から。

「羽毛が美しければその鳥も美しいってね」

「何の意図で類語に言い換えてかつしたり顔なのかは知らんけど、絶対友達少ないだろお前」

「はん、残念ながらアンタほどじゃないわ」

言い返せない！？ くっそ微妙に真実じゃねーか。

代わりにギロリとトウ力を睨むとクスクスと冷笑が返ってきた。とてもとても悔しいです。

「はいはいそこケンカしない。タクマ君、自分で精算しておいで」
「うぐ、分かった。これ渡すだけでいいんだよな」
「うん。後は店員さんがやってくれるよ」

前々から思っていたが、テオは空気の変え方が上手だ。
特に対トウ力のいざこざには手馴れているように感じる。

「――ふう、これだけあつたらしばらく服には困らないだろうな」

「どうも、毎度ありがとうございます」

結構広い店内の中央に設置された楕円状の会計カウンター。

俺はそう呟きながら商品カードと生徒証を店員に手渡す。

営業スマイルの男性店員は慣れた手付きで魔法陣を紡ぎ精算作業へ。

「その制服、お客さん本校の生徒さんかな？」

「え、本校？」

いきなり店員さんが話しかけてきたので少し身構えてしまった。
つかあの学園あんなに広いのに分校まであるのかよオイ。

「だってそれ本校の、リユミシアル魔法学園の制服でしょ。

制服のままこの店にいらっしゃる生徒さんは久しぶりに見たものでね」

「ああ、そうなんですか。実は――」

『こないだこの世界に来たばかりで他に服がなかったからなんです』

と、言おうとして止めた。なぜならもう精算作業は終わっていたからだ。

それに言うとそれでまた変な話の流れになりそうだし。

「またのお越しをお待ちしております」

両手で差し出された生徒証をこちらもまた両手で受け取り、店の外で待っていたクランメンバーたちの所へ駆け寄る。

「よしよし、ちゃんと1人でお買い物できたようじゃないか」

「馬鹿にしすぎだろお前。俺をいくつだと思ってるんだ」

軽口を叩くラグナをあしらってナビを起動させ、

早速購入した衣服の中から適当に選んで着替える。

ついでに確認した時刻は正午を過ぎようとしていた。

「なあミア、ランチはどこで食べるか決めてあるのか？」

「へ？ あ、はい、フィオミスという大手の料理店へ行こうかと」

いきなり話を振られたミアは一瞬ビクッとピンクのミニツインテールを揺らすと、

すぐに笑顔の表情を整えてその料理店の名を声に紡いだ。

フィオミス？ どんな料理を取り扱っている店なのだろうか。

・
：

アーケード街を抜け、大通りへと戻ったすぐの所にそれはあった。構えるのは『フィオミス』と丸っこいロゴ文字が大きく刻まれた看板と少し広めの建物。

そこから漂う美味しそうな匂いは、いかにも料理店といった雰囲気を感じ出していた。

休日と昼時が重なったためか、なかなかどうして繁盛しているようだ。

テーブル席へ案内されるまで数分待たされたが、その後もまだまだ空席を待つ人たちの姿が絶える様子はない。

「このメニューは学食のそれと大して変わらないんだけど、とにかく安いんだ」

キンと冷えた水に満たされたカップをそれぞれ口に運ぶと、席の端の方に座していたテオが最初に話を切り出す。

「安いって値段が？ どれくらい——」

「ざつと三割よ。破格すぎて涙が出るわね」

俺の問いに向かい側の銀髪少女はそう答え、配置されたメニュー表を差し出した。

「ふうん、確かに三割とはなかなかだな。どれどれ……」

よつとランチメニューの冊子へ手を伸ばして中身を覗く。
そこには空腹をくすぶらせるような料理の写真がお洒落に飾られていた。

……ほお、カツ丼定食が300円なのか。学食のが400円だから確かにお得だ。

「なるほどね、こう安価だと確かにこの繁盛具合も納得だな」

「今日はまだマシな方ですよ。日によっては学食以上に混むそうですから」

辺りの客を見回してからミアはにこやかにそう告げる。

まあ、納得。何より安いし、食費を浮かせたい人たちはありがたいのだろう。

「——ええつとそれから、タクマ君は？」

「ああ、俺は『フィオミス特製日替わりランチ』で」

せつかくなのでここでしか食べられないようなメニューを注文しておく。

内容は写真を見る限り、多分グラタンだ。きつぱりと断定はできないが。

まあ人気メニューらしいし、きっと美味しくいただけるだろう。

ウェイターは『かしこまりました』と一礼して店の奥へと姿を消す。

「なんか今の店員さ、俺より若く見えた気がするんだが」

「学生のアルバイターだろ。こういう店は学生も多く雇ってるからな」

「ま、私たちのクラスから働きに来ている生徒はいないみたいだけどね」

ラグナとトウカの言葉にそうだったのかと納得し、他の店員を眺める。

うむ、この安価のワケはここにあるのかもしれないな。

学食の人はアルバイトじゃなくて、ちゃんとした食品企業の社員だそうだし。

「そう言えばよタクマっち、この後どこに行きたいトコとかねえのか？ 昨夜熱心にマップ見てただろ」

「えっ、行きたいところか？ うーん、そうだなあ……」

そんなこといきなり訊かれてもあまり思い付くものがないから困る。

大雑把な街の雰囲気を見てみたかっただけだからな。

で、しばらく思考した後俺が口にしていたのは……。

「強いて言えば家具屋かね。インテリア類も少しは揃えたいし」

観光地でもなんでもない、ただのショッピングの延長だった。

いやだつてさ。欲しくなるだろ？ ソファーとか。

「ふふっ、了解しました。昼食の後はインテリア店へ向かうことにしましょう」

そう笑みを浮かべ、ミアは手元に届いた紅茶を啜る。

『私にも選ばせてくださいね』とラピスラズリの瞳が語っていた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:3 - 5 【アイドル アイリス】

Episode 3 - 5 【アイドル アイリス】

「おいタクマっち、オマケの景気付けにこっちのも1つ買っちゃおうじゃないか」

「いらねーよ!? それだけで部屋が埋まるわ!」

4人ほど腰掛けられそうなソファーに手をかけているラグナへ叫ぶ。

何が悲しくてそんなデカイもん買わなければならんだ。

「よいしょっと、これで念願のソファーゲットだな。次は……」

隣の白いソファーの商品カードを引き抜いて呟く。

ちなみに頑張れば2人座れそうな大きさだ。うん、こんなので丁度いい。

「最後に残しておいたカーペットか。爽やか系の色が欲しいかな」

天井に『敷物』とボードに吊るされたコーナーへ足を進めていく。

フィオミスで昼食を採った後、やってきたのは大型のショッピングモールだった。

専門の小売店だけではなく娯楽施設も併設されているそう。

今は3階のインテリアを主に取り扱っているエリアに来ている。

そこが思ったより広くてかつ商品も多くて。

「（もうかれこれ2時間ぐらいいは経つよな）」

みんな最初の方は一緒に品選びを手伝ってくれていたのだが、
いい加減飽きてしまったようでそれぞれ適当に店内を徘徊してい
る。

「ええ、私も派手すぎない色がいいと思います。だから、ええつと
……」

「いいのがあったら教えてくれ」

はいと頷くと桃色の髪に小さな指を絡ませ、ミアは小さく唸りな
がら商品棚を覗く。

そこには20センチ四方のサンプルが色鮮やかに並べられていた。

「——あつ、これなんかどうです？ いい感じの模様ですよ」

しばらく適当に商品を探っていると、少し離れたところから少女
の声が飛んだ。

どれどれと近寄って目をやると、それは水色と白のチェックだっ
た。

「なかなかいいかも。よし、これに決めるわ」

ありがとうとミアに礼を言ってから、

10枚ほどになった束の商品カードを片手に会計場所へ向かう。

結局最後まで隣で手伝ってくれたのはミアだけだったな。
冬霞とラグナはもちろんテオまで自由行動中なのに。
トウカ

「——それでは本日の20時頃に商品をお届けさせていただきます」

ますね」

「あ、はい、よろしくお願いします」

空間転移魔法を使った商品の配達はどうやら無償のサービスらしい。

日本ではかなりの手数料を取られるのに。

……これも魔科学技術の進歩と考えてもいいだろうか。

店内の端に設置してあるベンチへ腰掛け生徒証ナビを起動させる。それにしても今日は随分とたくさんモノを買ってしまったな。よく考えてみれば特に必要じゃないモノも……。

全部置けるかね、10畳もないワンルームだというのに。

「ええっと、うつわ今日だけで10万近く使ってしまったぞ」

ナビから虚空に映し出されたお金の残高を見てうな垂れる。学園から結構貰っているとは言え、荒遣いしてしまったかな。

「問題ないわ、そういうのを買わせるために支援金が出ているわけだから」

「……そうか、ならいいんだが。つかお前どうしたんだソレ？」

いつの間にか隣で冬霞トウカがアイスクリームを舐めていた。

仮にもここはインテリア店ではなかったのか。

「買ったに決まってるでしょ。隣のコーナーが食べ物屋なの」

あげないわよと目を逸らして答える銀髪少女。
忘れていた、ここはショッピングモールだったな。

それからしばらくするとミアがラグナとテオの2人を連れて来て。

「インテリア類も制覇できたようだし、今日のお買い物はこれでお
終いかな」

「ああ、今のところ必要なものは全部買い揃えたぞ」

ミニットスクエアでの長い長いショッピングは幕を閉じた。

「よしよし、それじゃあ最後は今日のメインイベントだな！」

この赤毛竜人、普段よりもテンションが高い気がする。
そんなに楽しみにしてたのかライブコンサート。

「なあテオ、ライブ会場まで距離はどれくらいなんだ？ 間に合い
そう？」

「うん、時間的にもまだまだ余裕があるよ。ここからすぐ近くだし
ね」

「ですからもう少しモール内を見回っていても大丈夫かと」

「ん、分かった。それじゃあ隣の店で少しお茶して行こうか」

トウカのアイスクリームを見ていたらなんかお腹空いてきたし。
ライブまでしばらく美味しい休憩時間としよう。

・
…

大手アイドルプロダクション、キャンディーキッス Candy Kiss 社。

事務所にスタジオ、おまけにはライブホールまで揃っているとい

う。

「——はい確認しました。どうぞライブコンサートをお楽しみ下さいませ」

生徒証にデータとして入っている5枚分のライブチケット。

手早くその認証作業を終えた女性スタッフは、整ったお辞儀をして扉の中へと促す。

「うおっ、やっぱり前の席はコアなファンどもが占領してやがるな……」

我先にとライブ会場へ飛び込んがラグナがうぐぐと唸った。

「別に最前席で観る必要ないでしょうよ。少し遠いぐらいのところのほうが気が楽よ」

「そ、そうだね。熱気でやられちゃいそくだ」

俺とミアも頷いてステージから近くもなく遠くもない適当な席に陣取る。

しかし意外と広いなここ。普通に1000人ぐらいは収容できるのではないだろうか。

「来るのがまだ少し早すぎましたかね。開演まであと30分もありますよ」

「確かに30分って微妙な時間だな。何して待つてようか？」

「——そりゃ妄想して気分を昂ぶらせるのさ。常識だよ転入生くん」

「えっ？ あ、アンタは……」

不意に前から現れたのは見知った顔と声。

以前アイリスのことを熱心に語っていたクラスメートだった。

「お、オイ、なんでお前がこんなところにいんだよ!？」

「愚問だなラグナ。私も参加するからに決まっているだろう」

クイツと光る眼鏡を持ち上げて笑う一人称私男。

うわぁアキラ副会長とビジュアルが被ってやがる。

「さすがクラス一番のアイドルオタクね。アイリスのライブ全制覇する気？」

「もちろんだ。彼女のためなら私は講義も喜んで辞させて頂くつもりだぞ」

「……呆れたわ」

得意の嫌味も効かず、かつ迷いなく言い切られて溜息をつくトウ力。

「タクマ!! ミツルギ、私から言うのも何だが今夜は盛大に楽しむといい。」

「なんせ彼女の歌は……。いや、それは実際に聴いてみてからのお楽しみだな」

「な、なんだよ歯切れが悪い。気になるだろ」

「クククッ、なあにあと数分で分かるさ」

アイドルオタク眼鏡男子クラスメートは嫌らしい笑み浮かべると、結局は何も教えずに颯爽と最前列へと戻っていった。

……いや、何しにこっち来たんだアイツ？

そして数分後。予定された時刻通りにライブは始まった。

『うーっす！ みんな、今日はよく来てくれたわね』

ステージの下から元気よく登場した一人の少女。

薄く白い霧とカラフルなスポットライトがその姿を演出する。

「（あれがこの世界のトップアイドル、アイリスか）」

鮮やかなライトパープルの髪がゆらゆらと揺れて。

パンフレットと同じ艶やかな衣装に身を包むその少女は、遠目ながらも息を呑むほど綺麗だった。

あー、こりゃ歌なしでも人気出そうだわ。

『今日は張り切って10曲以上歌っちゃうから、存分に酔い痴れて頂戴っ！』

マイク越しにこれまたお茶目な声が会場へ響き渡ると、

観客たちが次々にうおおっと歓声を上げる。

ラグナも大声でそれに混ざっていたが、俺を含めた4人は軽い拍手だけを送っていた。

『さあ、時間がもつたいないから早速飛ばしていくわよっ！ 一曲目、“L o v e r S t a r s ”』

ウインクを決めてクルリと一回転すると、激しいメロディーが流れ出した。

彼女の歌声と曲の旋律に合わせて、色鮮やかなペンライトが揺ら

される。

一糸乱れぬその動きは訓練でもされたのかと突っ込みたいほどだ。

『~~~~~』

あれからアイドル様は連続で5曲ほど歌って踊っているのにまだまだ元気そう。

会場の熱気とボルテージをぐんぐんと現在進行形で上げ続けている。

……それにしても。

彼女の歌が始まってから、俺の身には小さな異変が起きていた。さつきから妙に身体の中がそわそわするのだ。

なんとも言えないこの不思議な感覚。一体なんなんだ？

「効いてきたみたいね。彼女の呪歌の効果が」

「は、呪歌だつて？」

横から小さな声で怪しく囁く銀髪少女に、俺も同じく消え入るような声で訊き返す。

いきなり何を言い出すんだコイツは。

「呪歌には魂を癒し精気を与える力があるの。気分の昂りはそのせい」

いや、歌って普通そういうものではないだろうか。つかそもそも。

「呪歌って何なのさ。魔法か？」

「魔法じゃなく稀代な特殊体質らしいわ。先天的の、ね。」

そして普通の歌声とは格が違う。精神安定、疲労回復。その効果は目に見えて歴然よ」

そりゃご利益のあるこった。産まれながらの歌姫ってか。

「なるほど。んじゃさっきアイツが言い含めていたことって、その呪歌のことなんだな」

「そういうことでしょうね。ま、隠すほどのことでもないと思うけど」

「ははっ、確かにそうだな。普通に教えてくれればいいのに」

苦笑を浮かべてから再びステージの方に集中する。

って、ホール内のボルテージがまた一段と上がっている気が……。

「（随分なスタミナと精神力だな。あの娘も、ファンも）」

真面目に感心しながらも、俺はライブを見続けるのだった。

『——はい、みんなお疲れさんっ。楽しんでくれたかな？
このあと1階のエントランスで握手会あるから、ちゃんと来なさいよ』

そう言い残して舞台の奥へ姿を消すアイリス。

すげえなああの娘、歌もトークも完璧じゃねーか。

これに美貌も合わせて考えれば業界トップなのも当然だ。

「……ん、ああ、もう2時間も経ったのか」

大きな欠伸をしながら盛大に拍手を響かせる。

薄暗かったステージにも照明がついて、視界が眩しくなった。

「やっべえマジ最高すぎるよアイリスちゃん……！」

「うん、僕も久しぶりに生で見れてよかったよ」

克蘭メンバーたちも満足しているようで良かった。

俺もなんかスッキリしたというか、気分が良くなったというか。
明日ミリオムにお礼言つとかないとな。

「ねえ、それで握手会行くの？ 他の観客たちはもう行っちゃたわよ」

「えっ？」

うわマジだもう誰もいねえ！？ 行動早すぎだろファン。

ホール内は俺たち5人を残して静まり返っていた。

「せっかく来たんだから行こうか。もつとも最後尾だろうけどね」

「そう、だな。行ってみるか」

まあ握手なんてすぐに終わるだろうし、そう時間も取らないだろう。

で、10分ほど待った後にいよいよ回ってきた俺の順番。

「おっ、キミ、最近話題になってる時期外れの転入生でしょ。本校の」

「——ッ！？ あ、えっ、はい！ なななんでご存知なのでございますか！？」

他の奴らは軽い挨拶だけだったのに、なんか別のことを話しかけられた。

私タクマミツルギ、盛大に取り乱しています。

「ふっふ、私は何でも知っているのだよ」

自慢気に豊満な胸をお張りになるアイドル様。
やべえぞなんかよく分かんが盛大にやべえ。

「（なあ、タクマっちって実は煩惱の塊なんじゃないのか？）」

「（……明日からアイツのあだ名は煩惱鬼神エロカイザーね）」

何やら不穏なヒソヒソ声が聞こえるが今は気にしないでおこづ。
そしてテオとミアの苦笑がすんごく痛いです。

「つとと、あんまり長い話は他のファンに悪いわね。ささっ、握手しましょ」

「ああ、はい」

差し出された柔らかい右手を握る。つて、あれ？
なんかいきなり静かになったなこの人。

「あの……。どうかしたんですか？」

「えっ、いやなんでもないなんでもない！ それより、これでアンタも立派な私のファンなんだからね。次のライブにも絶対来なさいよ」

「は、はい、喜んで。また来ます」

雰囲気が変わったような気がしたが、思い違いか。

外へ出るともう日は落ちていた。けれども街灯に照らされているので明るい。

街並を歩く人は昼間と変わらずにまだまだ多いようだ。

「こんにやる俺のアイリスちゃんにデレデレしやがって」

「そそっそそそんなことないッス」

「嘘。そればかりではなく胸のあたりを舐めるように見ていたわね」

一番近いという転移駅^{ゲート}へ足を進める中、俺は盛大な攻撃をくらっていた。

確かにね、見惚れてましたよ。でも仕方ないじゃない。

「なあ、どうせだし晩飯もこっちで食べていかなーか？」

「駄目だよ、寮でちゃんと用意されてるんだから。」

それに早く帰らないとタクマ君の部屋の模様替えに待ち合わないでしょ」

あ、そうだ20時には業者が部屋に来るんだった！

その前に食事を済ませて部屋にスタンバイしてないと。

俺たちは雑談を交えた駆け足で帰路に着くのだった。

——今日、あの日からちょうど一週間が過ぎようとしている。

寒い銀月の夜は姿を消して。導かれたのは調和の理想郷。

知らない魔法と技術、価値観、食べ物、街、そして人。

良い意味でも悪い意味でも、ちょっぴり刺激的なこの世界は。そう、とっても居心地がいいし何より楽しい。

もう連れて来られた理由なんて。考える必要はないのかもしれない。

・
…

あれから数時間経った21時。
タクマ
拓磨の部屋の模様替えが終わった頃。

「うむむむ……」

遅い時間に女子寮へと戻った1人の少女は、ベットに転がりながら深く思考していた。

「ちゃんといつもどおり全力で歌ったはずなのに、どうしてなのよ」
う

彼にかかった呪いは解け切れていないのか、と。
普段の彼女には考えられないほど元氣のない声を漏らす。

「やっぱり、それだけ強力な呪いだっただてことよね。うぐぐぐ」

そもそもどういう呪いなのかも分からない。
さつき手を握ってみてもその解析は上手くいかなかったのだ。

意味もなく歯をギシギシさせてベットから起き上がる。
ウエイブ
かくなる上は情報管理局に問い合せてみようと考えついた。

「あゝ、でもやっぱり今日は疲れたかも。また気が向いてからにしよう」

が、そう呟いて呆気無く止めた。生徒証を机上に戻して再びベッ
トへ潜り込む。

「ちと早いけどもう寝ちゃお。最近寝不足だったし」

言うやいなや目を瞑って数分後。

久しぶりに彼女は日を越えるまでに眠りについたのであった。

そして結局のところ彼女の計画は失敗した。

もっとも今日という日がタクマにとって羽休めの楽しい休日とな
ったことについては、

十分に意味があつたと考えて間違いないだろう。

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! ! -

Ep:4-1 【彼の姉はトラブル報道部員】

Episode 4-1 【彼の姉はトラブル報道部員】

明けた月曜日の朝。嬉しいことに今日の空模様もまた快晴であった。

もつとも俺がこの世界へ来てから雨の日は一度もなかったのだが。そう考えてみると、雨の降っている風景も見たい気持ちになる。

「よおミリオム、お前がくれたチケットのおかげで昨日は楽しめたぞ」

自分の席へ座るついでにぼっとしていた隣の女子へ声をかける。長いブロンドの髪を持つその少女、ミリオムは振り向いて挨拶を返した。

「ああ、おはよ。そうみたいね、すっかり格好いい服まで買っちゃって」

「……あ、うん？ どうしてそんなこと分かるんだ」

うるさいなと突っ込もうと思ったが、すぐにおかしいと感じて訊き返す。

だって昨日会ってないし。彼女が俺の買った服を知っているはずがないのだ。

「うええっと、それはっ……。そ、そうこれっ、これ見てたから！」

目を丸くしたミリオムは慌てて生徒証から何かを起動させる。

続いて虚空に小さく浮かんだのは。

「これって学園新聞の観覧画面だよな」

「そうよ、昨日のアンタの様子が今朝の記事に上がってたの」

「え、ウソ、昨日のがか!？」

ミリオムの言葉に思わず狼狽した声を上げてしまう。

なぜなら俺にはそんなこと全く知らされていないのだから。

ちなみに学園新聞というのはこの学園の報道部が作っている情報誌だ。

なんでも名前はシンフォニックというらしい。

朝刊と夕刊があって生徒証から記事の観覧が可能になっている。

その記事の内容はこの学園内での出来事や情報、近辺の店舗の宣伝など。

他にも適当なコラム記事とかあって結構ボリュームいっぱいだ。

見ているといい意味で暇つぶしになる。

「——つわあほんとだ。思いつ切り書かれまくってるな」

んで、問題の記事は『編入生の休日』というタイトル。

昨日の朝から昼飯、買い物の様子まで丁寧かつリアルに綴られていた。

「ほら、ここにバッチリ写真が載ってるわ。他にもところどころにね」

「……ひでえな。これはさすがに勘弁してもらいたいぞ」

格好良くもなんともない俺の写真を指差してミリオムが微笑む。

頭が痛くなりながらも数えてみると、その数なんと20枚越え。

つか気付けよ俺、こんな真正面から撮られてるぞ。

いやでもそんな怪しい人は見かけなかったような。俺が鈍すぎるのか？

「それにしても、本人に承諾も得ずこんな記事を作ってもいいの
よ」

もつとも俺が気にしているのはこの点である。

以前報道部から取材を受けて記事を書かれることは度々あったの
だが、

今回のようにパパラッチじみたのはこれが初めて。正直少し不快
だ。

「あゝ、それはこの記者さんが今までと例外なだけね。まったく、
この人は怖わよ」

「うん？ なになにに、2年のテミス＝ベリアルス、先輩か」

ミリオムの言葉に不穏なものを感じながら担当記者の名前を口に
出す。

あれ待てよ、この名前どこかで聞いたような？

・
…

「タクマ君、ミリオムさん、2人ともおはよう」

しばらく黙り込んでいると、少し遅れてテオが朝の挨拶をかけて
きた。

って、さつき朝食時にも会って挨拶したと思うんだけどな。

「別にいいじゃないか何度でも挨拶して。減るもんじゃなし」
「あ、うん、そうか」

何と言つか、コイツも変わったところあるよな。

「それで2人で何の記事見てたの？ 面白いのもあった？」
「それがさテオ、またアンタのがやらかしてるわよ」
「――えっ！？ ちょ、ちよつと見せてねっ」

ミリオムに気の毒な調子の言葉を投げかけられると、テオの雰囲気が変わった。

穏やかだった顔がだんだん曇っていくのが手に取るように分かる。しかも小刻みに震え出して。な、なんか黒いオーラが滲み出てるぞ！？

「ど、どうしたんだテオ……？」

あまりに様子が変わるので記事を黙読するテオへ声をかける。

「これやったの姉さんだ」
「うん、なんだ？」

低く小さな声でテオが何かを呟く。

そして言い直した次の言葉は、俺の耳にしっかりと伝わった。

「このテミス、ベリアルスって記者さ、僕の姉なんだよ……」
「はい、姉って？ ユアシスター？」
「イエス、マイシスター」

何か知らんけどこの世界って英語も通じるんだよな。

アルファベット表記の名称も多いし。って、今はどうでもいい話か。

「ああどこかで聞き覚えがあると思ったらこういうことだったわけね」

なるほどと大きく頷く。ベリアルスが一緒だったんだなと。

テオから以前姉がいるとだけ聞いていたが、こんな形で再び聞くことになるとは。

「あんまり教えなくなかったんだよ。この人ウザいから」

「お前の口からそんな言葉が出るなんて……。一体どんな人なんだ」

妙な興味が湧き、思わせ振りのアイコンタクトを送ってみる。

「そう、一回会ってみる？ どうせまだ近くにいるんでしょ、姉さんっ!？」

伝わったようで、その声を上げ鋭い視線を教室中に張り巡らすテオ。

え、今この中にいるのか。まだ少し早い時間なので教室には10人ぐらいしか居ない。

それにその10人も全員クラスメート。テミス先輩なる人物はいないようだが……。

「あつ、そこだなッ！ ハアッ」

すると見つけたと言わんばかりに端の窓際めがけてチョップを繰

り出す。

いや、そこには何も無いぞ？ と突っ込もうとした瞬間――。

「つとと、危ないじゃないのテオ君ったら。それ当たったら痛いわよ？」

「――っえっ！？ なななんだ！？」

その何も無い空間からあるはずのない女性の声が響いた。

当然びっくりして取り乱す俺だが、落ち付いてとミリオムに肩へ手を置かれる。

「姉さん、いつも言ってるけど少しは自重して。友達が困ってるから」

「ちえ、つまんないの。せっかく張り付いてたのにな」

だんだんと。悪戯な言葉だけを紡ぐ人物の姿が浮かび上がる。

透明人間がその形と色を取り戻すように。これは、閻属性の魔法か。

「にしても、私のステルスをこつも簡単に見破るなんてね。エルザやクリス先生でも手間取るのに」

そして間もなくその人物は完全に実体化した。

テオと同じ翡翠の髪、それを長く伸ばしてポニーテールに結び。

琥珀色の目をニヤリと釣り上げ、悪戯な笑みをテオに向ける。

「不本意だけど姉弟だからね。なんとなく分かつちゃうんだよ」

それに負けじと弟の方も怪しい笑みを浮かべて言い返す。

さすが前いた世界じゃ魔王子息をやったただけはあるな。怖ええ。

「テオ君たらツンツンしちゃってまあお姉ちゃん悲しいわ。ま、今それは置いて」

「——っっ！」

うわ、目が合ってしまった。合わせて同時に悟る。絶対絡まれると。

そして気付いた時にはもうグツと距離を詰められていて。

「どうも編入生のタクマミツルギ君。私の名前はテミスベリアルスです」

「は、はあどうも。弟さんにはお世話になりっぱなしで」

流されるまま言葉を返し、軽く頭を下げる。

間近で見て気付いたがテミス先輩は俺より少し背が高いようだ。

「高等部2年生、学園報道部所属、そして次期部長候補の1人。ま、いわゆるエースってところかしら」

しばらくご立派なテミス先輩の自己紹介が続いて。

それが終わってから俺は無断取材の文句を彼女にぶつけていた。

「——ですから、取材する前か後で一言声をかけてもらえれば文句言いませんよ」

「キミの自然体を追って見たかったの。先に言ったら気にしちゃうでしょ？」

そして帰った後は記事を書くのに必死だったから連絡できなかったわけ」

「こおんのお屁理屈を……！」

見苦しい言い訳をする先輩に後ろでテオがキレかけている！？

「し、しかしどうやって撮ったんです？ 一度もそんな気配は感じなかったんですけど」

もう無断取材のことは捨てて話題を変える。

一応これも気になっていることの1つだからな。

「今使ってたブラインド、姿を消す闇魔法ね。それだけよ」

「カメラは……。やっぱり生徒証ナビですよね」

「ご明察。でも普通のナビと比べたら報道部ウチラの方がずっと質機能は上よ」

そう自慢気に自分のナビを取り出してこちらに向けるテミス先輩。
なるほど、専用に改造してあるってわけね。

「つーことで、今朝の一枚いただきまーすっ」

あつ、しまった油断した！ あまりにも様子が自然だったから。
つか念じるだけで撮れるのか、しかも音もなしとはまあ……。

「ちよつ、もう、いきなり撮らないでくださいよ！」

「やあだタっちゃんそんな眉間にしわ寄せちゃ。もつと笑って笑って」

う、うぜえ……。とは言えず胸の中に抑えて残念な笑顔を作る。
つかタっちゃん呼ばないでなんか虚しくなるから。

「姉さん、もういい加減に……」

やべえテオの黒い邪気が増幅しっぱなしだ。

早くこの先輩を何とかしないと、非常によろしくないことが起きる予感が！？

「——テミス先輩、あまりこの教室で騒ぐようでしたら、また学生会からペナルティを与えますよ」

そんな感じで焦っていると、思わぬ人物から助け舟が入った。
物陰からうっとうと銀髪少女こと冬霞^{トウカ}が姿を見せたのだ。

どうでもいいけどよく考えればコイツもステルス属性っぽいよな。

「うげえ、またうっさいのが出たわねえ。アキラと似て生真面目なんだから」

その顔を見た瞬間バツの悪い顔をして俺から離れるテミス先輩。

「まあ兄妹ですもの。んで、さっさとお引き取り願えます？」

「へえへえ分かりましたよキラークイーン、トウカちゃん」

そして促されるまま廊下側へ歩き出す。

つかキラークイーンで。すごい二つ名だなトウカよ。

「それじゃあタツちゃん、また美味しいネタ期待してるわよん。バイビィ」

「（バイビィって死語だよな……）」

これは流石に言葉に出てしまう。だってねえ、バイビィで。

右手を教室の生徒全員へに振りまき、疾風の如く廊下へ去るテミス先輩。

結局あの人の中で俺の呼び名はタツちゃんに確定してしまったらしい。

・
…

「度々ごめんなさい、愚姉がまたご迷惑を……」

その後テオが大きく頭を下げていた。目尻には涙が浮かんでいる、ようにも見える。

黒いオーラは完全にその姿を消していて、普段どおり落ち着いた様子だ。

……いろいろ苦労してるんだなコイツも。

「本当にごめんタクマ君。今度は絶対に謝罪させるから」
「べ、別にお前が謝ることじゃないだろ。それにあんまり気にしてないし」

なんだかとてもいたたまれなくなつて優しい声をかけるのだった。

「災難ねえ2人とも。ま、中等部の頃からあの先輩はあんな感じだったけど」

「まるで嵐みたいな人だったな。確かにありや怖いわ」

「この学園のトップ争うトラブルメーカーよ。弟はこんなに聖人君子なのにな」

さつきミリオムが言っていたことの意味を理解する。

あのブラインドという闇魔法、気配すら感じる事ができなかった。

そりゃエルザ会長やクリス先生まで手間取らせるって自分で言っ

てたから当然か。

「いつ影から見られても、恥をかくような行動だけは慎まないとな」

なんせ今あの先輩のターゲットは俺のようだし。

あーあ、またいらない厄介ごとが増えてしまった。

「無駄無駄、良い子ぶっててもいつかボロが出るわよ」

「気が滅入ること言うな。月曜の朝から憂鬱にさせないでくれ」

クスクスと晒う銀髪少女をそうあしらって椅子に座り直す。

こうなったら現実逃避。HRまで寝させてもらおう。

「……いつか絶対に、僕が姉さん矯正してやるんだからッ！」

溜息と合わせて意気消沈する俺とは対称的に、

魔王の息子さんは熱い炎を瞳に灯してガッツポーズを組むのだった。

まったく、爽やかな朝の雰囲気はどこへ行ってしまったのやら。
俺の異世界学園生活2週間目はこうして幕を上げるのだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:4-2 【グリーンステップコート】

Episode 4-2 【グリーンステップコート】

テオの姉、テミス先輩が起こしたパパラッチ事件から一日が過ぎ
て。

「なあミア、俺は少々尋ねたいことがあるんだよ。どうか聞いてく
れ」

「あらら何でしょう。どうぞ遠慮せず言ってみてください」

ピンク髪の少女はそう言い放つと立ち尽くす俺のすぐ横へ並ぶ。
今見て気づいたが、今日のミニツインテールを結ぶリボンは黄色
らしい。

「——ここは一体どこなんだ。少なくとも初めて見る場所なんだが」
数秒の間があってから俺はそんな言葉を紡ぎ出した。
その答えは予め知っている。が、どうしても口に出さずには居ら
れなかったのだ。

蒼穹に満ちた空、そこに浮かぶ綿飴のような白い雲。それはいい。
問題はその素晴らしい天気の下、見渡す限り視界に広がる若葉色
であった。

「どこだと言われましても、仮想迷宮ダンジョンですよ。草原型の」

戸惑っている俺を見て楽しんでいるのか、クスクス笑みを零しな
がら答えるミア。

あ、うん、そだね。どう見ても草原ですよっ！

「草原、だよなあ？ 洞窟じゃなくて」

若葉色の正体。そう、それは草である。

足を動かすたびにシャリシャリと音を鳴らすあの草だ。それらが一面に広がっているのである。どこまでも。

ピクニックでもできそうな野原だなあと景色を仰ぐ。

そんな俺の後ろ、少し遅れてダンジョンに入ってきたテオが口を開いた。

「初めての探索実習の時に言っただじゃないか。フィールドはたくさんあるって」

「た、確かにそんなことも聞いたような記憶が……」

だんだん思い出してきたぞ。森の中とか火山地帯もあるんだっけか。

しかしクリス先生も一言ぐらい教えてくれればいいのに。

「転移してからのお楽しみなのよ。どんなフィールドなのか分かるのはね」

「とんだお楽しみだな」

こっちは逆に愕然としてしまったよと銀髪少女の目を見つめ返す。普通に先週までと同じ洞窟ダンジョンに転移すると思ひ込んでいたからな。

そりゃ呆氣にとられてしまうだろう。

狭くて薄暗かった洞窟から打って変わった開けて明るい草原地帯。

果たしてここにはどんな魔物さんが出現してくれるのだろうか。

・
…

今から遡ること数十分前。本日は火曜日、午前中は探索実習である。

朝のHRが終わった後、我々2組の面々は仮想迷宮ダンジョンのエントランスへと集まっていた。

「クリスせんせつ、今日のはどんな感じのプランなんすか？」

「うむ、本日もシンプルに魔物の掃討をもらう。ターゲットはオーガ」ソーサラーだ。迷宮内に20体ほど設置してあるので全て撃破するように」

ホール内の少し高い位置に立ち、クリス先生は大きな答えで男子生徒へ答える。

もちろんその言葉は他の生徒達に対しても当てられたものだ。

「オーガ、ソーサラー？」

金髪の吸血鬼先生の声を聞くのと同時にそんな呟きを漏らす。

オーガといえばあの緑色の鬼みtainな魔物。先週から結構な数を相手にしてきた。

威圧感はこの上なく凄まじいが、実際はそこまで強くない。

それはいいのだが、ソーサラーってなんだろう？

「ソーサラーは魔法使って意味。つまりオーガ」ソーサラーは魔法を使うオーガのことよ」

「へえ、そうだったのか。魔法使いのオーガ……って、え？」

横から飛んできたトウカの補足。

ついノリで納得しかけてしまうところだったが。

「ちょ、ちよつと待てオイ、そもそも魔物って魔法使えんのか？」

「ええ、少しばかりの知性があればね。もっとも魔物が使う魔法なんて高が知れているけれど」

しれつと答える銀髪少女の言葉に耳を傾けつつ頭を捻る。

……想像できないぞ。あんなのが魔法構成式を組み立ててるところなんて。

「くおらまだ私の話の途中で口を閉じろっ！」

長いツインテールをブンブン振り回しながら喝を入れるクリス先生。

ちっこい背丈だけになんとも微笑ましい光景だな。口には絶対出せないけど。

「ゴホンッ、他の魔物も多く跋扈しているので中々ハードだと思え。あと言い忘れたが最後にはボスモンスターを仕留めてくるようにな」

ざわざわとした私語が消えたホール内に再び先生の声が響く。

要は魔物の中からオーガ、ソーサラーを優先的に片付けろと。

ていうかボスモンスターがどんな奴なのかは教えてくれないんですね。

「ところでクリス先生、僕たちは今日もタクマ君のサポートですか

？」

「ああ、そうしてくれ。この一週間鍛えてやったが、まだまだ不安だからな。ふふっ」

テオの質問に口元をニヤリと歪めて晒う担任。ひでえ。

「もちろんクランメンバーからは言葉のアドバイスだけだぞ。前回と同様お前一人で魔物を狩れ」

「え、ちよっと！？ ハードなんですよ、大丈夫なんですか？」

「愚問だ生徒タクマ。ちゃんと他のクランよりはレベルを下げておいてやるさ」

そうは言われてもなあ……。

無事にこの午前を乗り越えたとしても、午後からもまたダンジョン潜りだし。

「なんだか火曜日嫌いになったかも知れません」

「はて、何の話だ？ いや、そんなことより生徒ラグナよ」

察してくださいという俺の声はスルーされ、先生の視線はすぐ隣へ。

「貴様、最近居眠りばかりでロクに講義を受けていないそうじゃないか？ 他の教師一同から苦情が来ているぞ」

「ギクギクッ！？ そ、それはそのの……」

凍てつく眼つきと声に、顔を青くして言葉を濁す赤毛竜人。

うわぁなんかいきなりヤバい雰囲気っばいぞ。

「そこでだ。お仕置き、いや教育的指導としてだな。貴様だけスぺ

シャルな仮想迷宮へ案内してやるっ」

「うをえっ！？ すんませんっ、もうサボりませんからっ！？ それだけは勘弁ッ！！」

「はっははっ！ 戯言は向こうで聞いてやるさ。っと、それじゃお前たち、気張ってこいよ」

「いやあああっ——！！」

自分より遥かに高いラグナの首元、そのネクタイを首輪のようにグイグイ引っ張りながら。

ウインクを決めてクリス先生は1つと魔法陣の中へと消えてしまった。

「いやいや怖すぎるだろ！？ スペシャルなダンジョンって何！？

「天罰が下ったわねえ。日頃の行いが悪いから」

「いやだわあと微笑むミリオムへ、お前も同罪だろうと突っ込まざる得ないのだった。

———ということがあって。今ここにラグナは居ないのである。恐らくキツい折檻を受けているのだろうが、自業自得だな。

「それで何だっけ、オーガなんちゃらを倒すんだよな」

「オーガ」ソーサラーね。大体2時間しかないんだから、さっさと始めなさいよ」

「へえへえ」

トウカに言われるがまま魔法銃を取り出し歩み出す。

うーん、パツと見渡す限りじゃ魔物っぽいのはいないようだが。

「あ、一体見つけたよ。ほらあそこラベスクだ」

思った傍からテオが声を上げる。

ラベスク？ 聞いたこと無い名前の魔物だな。

どれどれと指差された方向を見やると――。

「うげ、ちよなにあれ大トカゲ！？ き、気持ち悪う！？」

「肉食の中型魔獣ラベスク。魔獣種^{ビースト}の中では有名な魔物ですね。噛まれたらすつごく痛いですから、気をつけてください」

笑顔で説明してくれるミアに苦笑いを向けつつ、目でラベスクを捉える。

紫やら緑が混じった肌。不気味というか気味が悪いというか。

「俺ああいうの苦手なんだけど」

「つべこべ言わずに、さっさと仕留めてきなさい」

「――いてっ、蹴るなよ……。ってうわ寄ってきやがった！？」

尻餅を付いた体勢から立ち上がり、ノシノシと迫る大トカゲを魔銃で……。

ん、あれ？ ま、魔法銃どこ行っただ？ 嫌な汗が首筋をつたる。

「オイこらてめえトウカ、お前が遠慮無く蹴飛ばすから銃落としたじゃねーか！？」

瞬時に理由が浮かび、振り向いて銀髪少女をキッと睨む。

アレがないと瞬時に強力な魔力弾を撃てないんですが。

「得物を手から放したアンタが悪いわね。それにわざとじゃないし」

は、反省の色が全く見えない！？
あんにやるニタニタしやがって……。

『グアブルツ』

「うがッ、いたいいたい痛い！？」

しまった後ろ向いてたら右足に噛み付かれた！
ダンジョン内じゃ怪我しないから安心だけど、それでも灼けるように痛い。

「ちょ、誰でもいいから助けっ——」

「あら大変♪」

どうしてそんなにご機嫌な声色なんだよミアは。
全然大変だと思ってるようには聞こえん。

「トウカさん、100パーセント君のせいなんだから……」
「つたく世話の焼ける。こんなの蹴り飛ばしてやりやいいのよ」

頭を抱えて呆れるテオの言葉に促されたのか。

『ブア——ッ』

「んなっ！？」

いつの間に隣に来た銀髪少女は、そう言い捨ててキックを叩き込んだ。
んだ。

吹っ飛ぶラベスクの腹部には何故だか『穴』が空いていて。

「はい一丁上がり。得物を使うまでもないわね」

「は、いやいやいや！？ お前どうやって」

地に落ち光の粒子となって消え行く大トカゲ。

つまりは仕留められたという意味だが、明らかにおかしい。
蹴り一発、身体に穴を開けて殺すとか……。

「そんなの魔法を使ったに決まってんでしょ。ホラこれ」

「……芸が細かいなお前」

つま先を軽く上げ俺に向ける。そこには、先の尖った氷柱が生えていた。

確かにこれで蹴られたら穴も空くハズだ。

「大丈夫ですかタクマ君？ はいこれあなたの魔法銃」

「あ、ありがとミア。まったく誰かさんのせいでいきなり酷い目にあつたよ」

両手で差し出された白銀の魔銃を受け取ると、俺は聞こえるようにそう呟く。

「はて、誰かさんとは一体どなたなのかしら？」

こいつよくもまあ抜け抜けと。

惚けた顔をする銀髪少女に俺は呆れ、テオとミアは苦笑を向けるのだった。

・
…

それからまた数十分ほどの時が過ぎて。

「しつかしコイツらどうして俺しか狙ってこないんだよ？」

「ふむ、先生がそうプログラムしたからでしょうね。私たちをターゲットにしても意味ないですし」

つくづく意地の悪い担任だ。

青の魔法陣を片手で紡ぎつつ頭の片隅では嫌味を浮かべる。

「でも、もう慣れたから別にいいけどなっ。氷結の跳弾ツ！」
Freeze Ricochet

10体近くのラベスクをギリギリまで接近させた後。

そんな魔法名^{ワード}を唱え、冷気の魔弾で一網打尽にしてやる。
間もなく氷漬けになった大トカゲを次の魔法で粉碎した。

「へえ、お見事お見事。やっぱり先生のスパルタは効いたのかな？」

「前よりもずっと質が上がってるじゃないか」

「そりやどうも」

魔銃を握る右手を下ろし、その一言だけを返して目を逸らす。
そんなに真顔で褒められると無性に照れくさい。

「——あつ、やっと見つけたぞ。確かにそれっぽい格好だな」

逸らしたその先に、いよいよ探していたターゲットを捉えた。

オーガ^{II}ソーサラー。姿形はオーガそのもの。

だが身に付けている物が少し違っていた。

魔力媒介のつもりなのか、魔石を埋め込んだ木杖を片手に。
ご立派にローブまで羽織っちゃって。まさに魔法使い^{ソーサラー}だ。

□□□□□——ツ！

睨み合っていると相手から動き出した。
やかましい咆哮を上げ魔法の杖らしき物を振り上げる。

「分かってると思うけど魔法使ってくるみたいよ」
「ああ、そうらしいな」

オーガの紡ぎ出した魔法陣に視線を注ぎこみ、その解析を試みる。
……ファイアボール、小型魔力弾2発、直線軌跡。

おお、確かにすごく単純な作りだな。
どんな攻撃が来るのか容易に想像がつく。

「じゃあこつちも迎撃させてもらいますよつと」

魔銃を構え、魔法構成式を脳内で展開する。
フォーミュラ

同時に空間に霧散する魔力を集めて魔銃へ装填。
ファイアボールよりも威力の高い、あの魔法を紡いでいく。

□□□□□——ツ！

一足先に相手さんが咆哮と共に魔弾を解き放った。
予想通りの赤い火の玉が真っ直ぐ俺の方へ飛んで来る。

もちろん、予想通りだから慌てない。むしろニヤリと口が歪んだ。

「もらったぞ、Fire Boltファイアボルトツ」

高らかにその魔法名を読み上げ、笑みを浮かべたまま引き金を引

く。

ファイアボールの火の玉とは少し違う、先の尖った魔力弾。その数はオーガの放ったのより1つ多い3発だ。

先の2発が相殺し合い空中でバンツと小さな爆発を起こす。そしてほんの数秒後。今度は同じような爆発音と共に、オーガの断末魔が響くのだった。

「ふう、ぶつつけ本番なんとか上手くいったな」

まずは一匹目を倒したことに安堵し、大きく肩を回す。とは言え、あと9匹始末しないといけないんだよな。

「言つとくけど、今日アンタが相手してる魔物は中等部生でも倒せるレベルだから」

「うん知ってたけどね。でもそれを口にするのは野暮ってやつだぞ」
せつかく気合入れて倒しても嬉しくなくなるだろうが。

『グルルギャシェヴウツ!!』
「……うーん、少しぐらい休む暇はもらえないものか」

そう吐き捨て、遠くの方から迫る魔獣の咆哮に耳を澄ませる。のどかな草原に似合わない随分と殺伐とした鳴き声だ。

そんなことを考えながらスーハーと呼吸を整えると、俺は広範囲型の攻撃魔法を紡ぎ始めるのだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:4-3 【緑野のストーンゴーレム】

Episode 4-3 【緑野のストーンゴーレム】

フィールド内のほとんどの魔物たちは俺の攻撃に散っていた。

もう迷宮探索が始まってから1時間半を過ぎようとしているのだから、当然といえば当然だが。

そして今、俺はとうとう10匹目となる最後のオーガソーサラと対峙しているのである。

「サンダーボルト、ねえ。お前らは初級魔法しか使う気がないのか？」

胡散臭い衣装のオーガが編み出した魔法陣を読み解いて。

言葉の通じない魔物に意味もなく語りかけながら、俺も対抗魔法を展開する。

最後くらい味のある攻撃が来ると期待していたのだが。

Crisochene
『深紅の焰閃！』

わざわざ相手の安い攻撃を見て避けるのも面倒なので、速攻で仕掛ける。

銃口より放たれた紅い一閃は、巨体なオーガを焼き切るには十分だった。

気色悪い異形の掃討もやはり慣れてしまえば楽なものである。

「っしや、これでオーガソーサラは全部倒したよな」

無数の光弾と魔法陣とを紡ぎ出してくれた魔銃を腰に戻して呟く。

この世界に来てからお世話になりっぱなしだな。

「ふふっ、お疲れ様です——と言いたいところですが、まだ最後に一戦残ってますよ」

「うっ、そうだったな。まだボスモンスターを倒さなくちゃいけないんだ」

近寄りながら話すミアの声で我らが担任の言葉を思い出す。

前回のフェンリルとは酷い苦戦になってしまったが、今度は一体どんな化け物なのだろう。

「さあそれは僕にも分からないかな。こればかりは先生の気分だし」

「（……果たして気分決めていいものじゃないと思うんだがな）」

すぐに分かるし問題ないよと笑うテオの前で小さな声を漏らした。この探索実習にカリキュラムはないのか。

「——っとうわわっ、な、なんだこれ地震ッ!？」

ボスモンスターを捜す前に休憩をとっていると、いきなり地面が大きく揺れた。

同時に風が吹き乱れ、草木がごうごうと怪しい音を鳴らす。

「どうやら今回のボスモンスター、オーガ||ソーサラーを倒すと出現する仕掛になっていたようね」

目を丸くして慌てる俺とは対照的に、冬霞は冷静に状況を分析し

ていた。

すげえなコイツこんなに地面揺れてるのに仁王立ちかよ。

「え、なに？ それじゃあこの地震と突風はボス登場の演出なのか？」

「ええ。だつてほら、前をよく見てみなさいよ。召喚の魔法陣が」

促されるままに正面に視線を送ると、確かに淡い光を帯びた紋章が輝いていて。

うをおなんかヤバそうな魔物が出てきそうな雰囲気だ。

「うっ、眩し——」

魔法陣から溢れ出す光は徐々に強さを増していき、その奔流が一気に俺の視界を奪う。

クソッ、一体何が出てきやがるってんだ！？

・
…

それはそれは随分と立派な石像であつた。

俺より少し高い2メートルほどの、人の体をモチーフにした灰色の石の塊。

遠目からでもよくわかるほど分厚くて硬そうだ。

「あれが今回のボスモンスターか？ なんか思ったよりシヨボいのが出てきたな」

地震と光の奔流が収まって、気付けば魔法陣のあつた場所に平然と立っていたソレ。

目を見開いたまま最初に声に出たのはそんな台詞だった。

「確かに見た目は迫力に欠けますけど、あれは中々に強いんですよ」
「どういうことだ？」

「エーテルを放つ魔石、有名所ではオリハルコンなのですが、それらをコアにして生まれた魔法生物です。他の魔物とは違って強い魔法を使えますし、何より知能が高いんですよ」

無表情な石像に苦笑を向けながらミアが解説をしてくれる。
つまりは今までとは違う強敵らしいということだ。

「さて、それじゃさっそく当たって砕けてきてもらおうかタクマ君」
「！」

「おう、任せとけ！　って、砕けちゃ駄目だろう！？」

テオの冗談に突っ込みを入れてから前へ駆け出す。
右手にはしっかりと白銀の魔法銃が握られていた。

『ブガルウラ——ッ』

トリガーを引いて牽制の魔弾を数発撃ち込む。

頭やら腹やらに無属性の魔力弾がめり込み、石像は奇声を上げて後方へよろめいた。

「これで倒れてくれれば楽なんだけど、流石に虫が良すぎるよなあ」
瞳を赤く灯し、唸り声を張り上げる相手を目にしてそう呟く。
やはり大したダメージは与えられていないようだ。

そう判断すると俺は急いで後方へ下がり距離を取る。

ミアの言いようでも一筋縄じゃ倒せそうじゃなかったからな。
何とかしてあの石像の重要器官コアと弱点属性を見つけないと。

『Fire Bolt Freeze Ricochettrapezoid』
激昂の火炎弾、氷結の跳弾、紫電の大槍ツ——』

属性の異なる3つの構成式を並行作業で組み立て、相手が攻撃体勢に入る前に颯爽と魔法陣を紡いでいく。

威力は二の次に、発動までのスピードをなるべく縮めるべく集中する。

『^{Go}行け』

10個ほどまでに複製された魔法陣から順に射撃を開始。

赤の螺旋が宙を舞い、鋭氷の雨が降り注ぎ、紫電が石像に直撃していった。

このド派手な攻撃、言うまでもないがこれまでの人生の中で俺の全力である。

というよりそもそも地球でこんな魔法を戦争以外で使ったら拘束されてしまうだろう。

『□□□□□——ツ』

どこから出しているのか声にならない咆哮を上げて。

巨体な石像は遙か後方へぶっ飛ばされた。これは効いただろ、うん。

「これで終わったかな」

腰に手を回して吹き飛んだ石像の転がる場所を見つめる。

どうでもいいがあんな炎や雷の魔弾をぶつけたのに草原から火が上らない。

やっぱり作り物の空間だけあってそこまではリアルに作られていないのかな。

「いや、まだ消滅はしていないみたい。もう少しダメージ与えれば倒せると思うよ」

「ん、そうか。それじゃあトドメをさしてくるわ」

後ろからテオのアドバイスを聞き、俺は石像のもとへ足を踏み出す。

「……そんな上手く事が運ぶとは思えないけどね。私には」

そんな銀髪少女の囁きを耳に入れないで。

・
…

で、その忠告を聞き逃していた俺はしっかり石像の反撃を受けていた。

10メートルほどまで近づくといきなり魔法をぶちかましてきたのである。

「うつくう！ 結構速えなこの魔法！」

疾風の如く、螺旋の軌跡を辿りながら迫る風の刃。

障壁魔法を張るより前に、俺はすぐさま横っ飛びに身体を跳ねさせる。

倒れ込むと同時に横目をやると、さっきまで立っていた地面の草は切り裂かれて宙を舞っていた。

…… ナイス判断だぞ俺。立ち止まっていたらミンチだった。

『ウガア——ッ』

「くっ、また来るのかよ」

安堵する暇なんぞ与えんわと言わんばかりに同じ魔法陣を紡ぐ石像。

一方の俺は奥歯を噛みつつ右手を正面に突き出す。

『Ether Barrier
エーテルバリアッ！』

その手から半透明な光盾を展開させ、足を動かさないまま防御の体勢に入る。

にしてもこの魔法、実際に戦闘で使うのは始めてだが。防いでくれるかな？

そして間もなく無数の魔弾が放たれて。

ビュンビュンと良い音を鳴らす風の刃は再び俺目がけて飛んできた。

あああやつぱり怖い！ もし障壁を素通りされたらと考えると……。

しかしそんな心配は杞憂だったようで。

風の刃はすべて光の壁にぶつかり消滅してしまった。

「はあ、なんとかミンチになる痛みを味合わずに済んだな」

障壁を解き、今度こそ大きな息を吐いて胸をなで下ろす。
相手を見やるとガス欠を起こしたのか、魔法を放つ様子は見られなかった。

「まさかもう終わりなのか？ 急に静かになっちゃって……」

などと半笑いで突っ立っていると。

「ガガガア——ッ！」

「うをつ、なんだなんだあ？」

石像の目の色がもつと濃い緋色に染まり、熱い咆哮を響かせる。
危険だと判断し銃を構えたところで、ソイツは動き出したのだ。

俺は今の今までこの石像は動かないものだと思い込んでいた。
たとえ動いたとしても、かなりのスローペースだろうと。が……。

「□□□□□——ッ」

「んなつ、走ってきたあ！？」

今までののは遊びだと言わんばかりの全力疾走。
右腕を振り上げ、もの凄いスピードで殴りかかれる。

「——ッ！？ オイオイ石像には似合わないスピードじゃね
ーか。中に人でも入ってんの？」

ほとんどゼロレンジと言ってもおかしくない距離で。
意味不明な言葉をほざきながら、俺はギリギリのところで打撃を
かわしていく。

以前対峙した人狼フェンリルよりは遅い動きだが、威圧感が半端

ない。

『□□□□□□——ッ』

「があっ、うるせえ耳元で叫ぶな！？　　ってうわ危なっ——」

地響きのような重低音に頭を揺さぶられ反応が遅れる。

すると直後お腹に大変よろしい具合の衝撃が走り、俺は華麗に宙を舞った。

まるでアニメや映画のワンシーンのように。

「あらら、当たっちゃいましたね。　　っていうかとても痛そうですよ今の」

「うん、結構モロに入ってたよ。　　まあ怪我はしないから安心だけど」

岩の上に腰掛けながらこちらを観るミアとテオはそんな会話をしているのだろう。

芝生のクッションの上でなんとか受身を取り、俺は寝転がったまま空を仰いだ。

いやゝ、痛い。　　お腹すんごく痛い。

出るはずの血も吐き気もないけどやっぱり痛い。

もしこれが仮想迷宮じゃなくて現実世界のことだったら、俺は…

…。

「——　　だっせえわね御剣^{ミツルギ}　　拓磨^{タクマ}　　まさかギブアップなのかしら」

1人ネガティブな思考をしていると、傍らでもう聞き慣れた少女の声が響いた。

少し毒が入っているけれど鈴のように綺麗な声。

「うつせえよ。ただちよつと休憩してるだけさ」

わざわざ人の顔のすぐ真横に立つ銀髪少女に強がりを返す。
つかトウカさん、アンタその位置は色々とマズいのではないか？
非常に言葉で説明しづらいのだが、その、ね。見えてます。

「~~~~ッ!? 見るなッ、死ね! そして何も言わずに忘れな
さいッ」

「ゴメンナサイ」

目を背けようとしたところで気付かれた。

珍しくも羞恥に染めた顔で釘を刺されるが、その言葉はかなり重
く可愛らしかった。

忘れます。水縞ストライプなんて私は見ていません。

「……ったく、心配してやって来たつてのに。とにかく休憩時間は
終わり。今度はちゃんとトドメをさしなさい」

「あつ、そうだアイツは!？」

その言葉を耳にすると、俺は急いで体を起こして石像を探す。
早く迎撃しないとまたやられる!？

「つて、あれ？」

巨体な石像はこちらに追撃するどころか、なぜだか悶え苦しんで
いた。

よく観察すると、その体のあちらこちらにバリバリと電撃が走っ
ている。

これは、雷の拘束魔法か。一体誰が？

「テオは相変わらず甘いわね。先生から手助けするなって言われているのに」

顔に出ていたのか、トウカは俺の疑問に呆れた顔で答える。

その言葉でテオのいた場所を見やると、緑髪の少年はしたり顔で親指を立てていた。

はははっ、グッショブだぞテオ。

「心を鎮めて、よく探して狙いなさい。あのゴーレムの^{コア}重要器官を」

俺は黙って頷くと、トウカの言葉とおり石像へ強い眼光を送る。

そしてすぐに見つけた。エーテルの塊なのだろうか？

漠然としてだが、石像の右胸に何かエネルギー体のようなもの集まっている。

「右胸、だよな？」

「クスッ、あなたがそう思うのならね」

「曖昧な答えだねえ。ま、自分の感覚を信じるけど」

そんなやりとりに2人して口元を歪ませた後、俺は立ち上がって前を見据えた。

もうそろそろいい時間だ。決着を付けなければなるまい。

『^{Enchantment}雷魔力装填、やっぱり最大威力の魔法で仕留めないとな』

指定した属性魔力を手元に集めるエンチャント。

チャージ、すなわち魔導力の増幅に繋がるので以降はより強大な魔法行使が期待できる。

『^{Electrification}いっけえっ、紫電の大槍ッ!!』

よくよく考えてみれば、前回のフェンリル戦もトドメはこの魔法だったか。

まあファイアボルトやフリーズリコシエットに比べると威力は格上だからな。

それに加えてエンチャントの効果も上乘せなので破壊力は十分だろう。

「ガアッ――」

本当にただただ一方的な光の槍が、魔弾が狙った位置へと命中する。

石像の断末魔も耳をつんざく雷音が掻き消して。

人の形をしたそれは、見るも無残な石塊へと姿を変えた。

「これでやっと終わった、か」

砕け散った石像の残骸を蹴り飛ばし、頭部だった場所に腰をおろす。

今回は本当にハードだったな。一日で使うエネルギーを使い果たしてしまった感じだ。

「（とは言っても、午後からはもう一回ダンジョン巡りなんだよなあ）」

鬱憤とした気分の腹いせに、立ち上がって本日世話になった石像の首を蹴った。

が、痺れるような痛みが右足に返ってきたのは言うまでもない。

しかもそのバカ丸出しな行動の一部始終は3人の少年少女に見られていて。

俺は恥^づかしくてただ苦笑いするしかなかった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:4-4 【トラプリング デリバリー】

Episode 4-4 【トラプリング デリバリー】

「黒っぽい空から降り注ぐ炎の槍、炙った紙が溶けるように歪む地面……」

壮大な草原での迷宮探索が終わった次の日の朝。

男子寮の食堂で、俺は赤毛竜人が昨日味わった恐怖体験を語られていた。

「足を滑らして水に落ちたと思ったら、その色が真っ赤でな」

「真っ赤って……。おい、それってまさか血？」

「俺っちも最初はそう思ったさ。だが違った、それはな――」

「そ、それは？」

牛乳の含んだカップを口元へ持ち上げたまま俺は息を呑む。

赤色の液体なんて、他にトマトジュースぐらいしか浮かばない。

「激辛ラーメン Infernoのスープだったんだ！ いやあ、口に入った瞬間マジで死ぬかと思ったぜ」

「……なかなか予想斜め上な真相だな」

俺も一度だけ見たことがあるがそのラーメン、我が担任の大好物である。

とてつもなく辛く、頭がどうにかなってしまいそうなほどの出来なのだから。

聞いた話ではクリスマス先生しか注文する客はいないらしい。

「辛いなんてレベルじゃねえよ。あのちびっ子吸血族の味覚は逝っちゃってるね」

ラグナよ、俺のいた世界には“壁に耳あり障子に目あり”という言葉があつてだな。

と口に出そうとして止めた。俺も偉そうに言える口ではないのである。

「ま、とにかく地獄だつたんだよ。あのお仕置きダンジョンは」「その地獄体験記を朝っぱらから聞かされる俺の身も考えてくれ」「昨日は精神的ショックが強すぎて話す元気もなかったんだぜ」

そう言われれば確かに昨日の午後、無駄に静かだったなコイツ。俺も俺で2本連続のダンジョン探索に滅入っていたから気にかかる余裕がなかったが。

「んで、結局反省はしたのか？ まさか昨日の今日で居眠りはないよな？」

「流石にバカな俺たちもそこまで愚かじゃねーよ。今日は真面目に講義を受けるぜ」

「ほお……」

残してあつた野菜を勢いよく口の中へ掻き込み、綺麗な顔を作るラグナ。

へえ本当に改心したんだ。……それほどまで昨日痛め付けられたか。

「さ、行こうぜタクマっち。今日も楽しい楽しい学園へ！」

「なに一人でテンション上がってんのお前？ 少し寒いぞ」

「えええっ、ノってこないのオ！？ つか何その冷め切った目と

声!？」

ギヤーギヤー騒ぐ赤毛男をさらりと追い越して食堂を出る。

今日はらしくなく寝坊しちまったからな。ま、たまにはゆっくり登校するのもありか。

「（にしても、確かに学園へ行くのは楽しいな。恐らく環境が180度違うからだろうけど）」

「んあ、何か言ったかいタクマっち？」

「あ、いや何でもない独り言だ。それよか時間がやべえ。さっさと行くぞ」

時計を見やると門限まで15分を切つていて。

それまでにHRのある学舎に入れないと遅刻となってしまう。

とてもじゃないがのんびり徒歩通学している余裕はないだろう。

「うげげっ、ちょっと急がねーとな。居眠りもそうだが、遅刻するわけにもいかねえ」

「だな。朝から怠いが駆け足で行こう」

運悪く今日の日差しが夏並みに強かったことを、この時の俺たちは知らなかった。

・
…

そんな朝からあつという間に時は過ぎて放課後。

ブレザー姿の学生たちの雑踏に紛れ、俺は適当に学園敷地内を散策していた。

「あの野郎何が真面目に講義を受けるだ。開始たった10分でダウンとは……」

今日もまた一段とやかましかったイビキを思い出すとそんな文句が漏れる。

お隣のミリオムはやると思っていたが、改心したはずのラグナまで。

バレてまたクリス先生にブチ殺されても知らねーぞ。

「ふむ、中等部ミッドラーの学舎か。高等部グランドラーとほとんど一緒だな」

特にどこに行こうとも考えずに歩いていたので、気付けば場違いな場所へ辿り着いてしまった。

俺より一回り小さな少年少女が目の前を通りすぎていく。

ま、別に用も無いし引き返すか。寮でダラダラしてよっと。

そんな具合に欠伸をしていると、後方から唐突に1人の女性の声が飛んだ。

「おっ、これに見ゆるは崖っぷち転入生タツちゃんじゃない」

「……はははっ、サヨナラ」

振り向いた先の顔を見るや否や、俺は颯爽と足を進める。

正直関わりたくないんだよなあこの人とは。会った2回目だけど。

「まあまあそう言わずにいー。少し先輩の話を聞いて行きなさいっ！」

だがしかし早足で追い付かれ、がっしりと力強く肩を掴まれてしまっ。

「くっ、先に言っときますけど取材はお断りしますよ。テミス先輩？」

「それはまた次の機会。今はちょっと別の頼みごとがあるのさ」

「……聞くだけは聞きます。受けるかどうかは置いておいてですが」

仕方なくそう答えて緑髪先輩に向き直ると、彼女はよしよしと笑っていて。

「なあに難しいことじゃないわ。コレをアキラ副会長に渡しに行つて欲しいの。今すぐ」

「へえ〜。って、そんなの自分で行けばいいじゃないですかっ！」

差し出された茶色い封筒を丁寧に押し返して突っ込みを入れる。

「今私のスクープアンテナがピンピンなのさ。逃せない事件が起きているの」

「んで、近くにいた俺に仕事を押し付けようというわけですか」

「分かっているじゃない。それじゃヨロシク」

「あ、ちよっ!？」

無理やり封筒を握らされ、軽快なバックステップで距離を取られる。

『あ、その中身は見ちゃダメだからね。ではスクープの元へいざゆかん、不可視の消影ッ!』

「くう、しまった逃げられたか……」

ガクツと片膝を地面に落としてうな垂れる。

なにやらまた厄介なことに巻き込まれてしまったな。

「まあなんだかんだ言っただけだけど、今どこにいたんだよメガネ副会長様は」

銀髪少女トウカの兄こと白銀暁。

夜になれば男子寮で絶対に会えるが、どうもこの封筒は今すぐに届けなければならぬ品らしい。

はてさて一体どうしたものか。

「あのミツルギ先輩ですよ？ 副会長さんならきっと生徒会室にいますよ」

「あ、どうもご親切にありがとう」

事の一部始終を見ていたのであろう。

少しばかり頭を捻っていると、苦笑を浮かべた中等部の女子生徒がそう教えてくれる。

「ん、それにしてもどうして俺の名前を？」

「先輩は時期外れの転入生としてここ最近話題になってましたから。学園新聞にも載ってましたし」

「な、なるほどね」

さつきからのチラチラした視線の正体はそれだったわけか。

そうだよなあ。3学期の末に転入してくるなんて不可思議すぎるもんな。

「あ、あの、ラファエルの生成試験頑張ってください。私応援しますから」

「そうだな、留年しないように頑張るよ」

最後に進級試験への激励を貰ってから、俺は生徒会室へと足を進めるのだった。

なかなか可愛い子だったけど、名前訊き忘れたな。

・
…

それから数分ほど。長い長い螺旋階段を上がって、やっと生徒会室の前へと辿り着いた。

「スンマセン失礼します、アキラ副会長はいらっしゃいますかね？」

時刻は16時過ぎ。まだ副会長がここにいることを願って扉をノックする。

すると中から聞き慣れない少女の声が。

「ん？ あー、副会長ならちょっと席を外してるけど、多分すぐに戻ってくると思うわ。中で待ってなさいよ」

「あ、そうですか。なら少しお邪魔させてもらいますね」

その声に安堵し遠慮無く扉をくぐる。

「どうぞどうぞ。って、アンタもしかして2組の転入生じゃないの？ トウカや副会長と同じ世界から来たっていう」

「えっ？」

意外な声ができる方を見やると、一度だけ見覚えのある少女がいた。ブラウン調の髪色に腰まである長いツインテール。

間違いない。一週間前闘技場コロッセオで無双してた女子生徒だ。

「タクマミツルギ君。人族人間の16歳、でしょ？」

「そ、そうですね」

「そんな驚いた顔しないで。私は生徒会に入ってるのよ。アンタのことはそこら辺の生徒よりもよく知っているわ」

目を通していた書類を机の上に置き、椅子から立ち上がって微笑みかけてくる。

この人の名前なんだったっけか。顔はしっかり覚えてるんだけどなあ。

1週間の出来事だったし、その後色々あったから覚えてないのは仕方ないかも知れないが。

「ええっと、名前伺っていいですか？」

「うん私？ アテューリア「ローズハート」よ。リアって呼んで頂戴。クラスはあなたの教室の向かい側、第1クラスよ」

ああ、思い出した。確かにそんな名前だったな。
しかし向かい側のクラスだったとは驚きだ。

「それで、そんな転入生くんが一体何用なのかしら？ 副会長にお話？」

「いえただこれを知り合いから渡すようにと頼まれました」

そう言っって少し質量のある封筒を胸の高さまで持ち上げる。

うーん、重くはないけど一体何が入っているのだろうか。

「なるほど、要はこき使われたと。あ、今さただけと敬語はいらないわよ。同い年だからね」

「ん、そうか。分かったよ」

「さあさあ突立ってないで適当に座ってなさい。お茶ぐらい淹れるから」

こき使われていることはごもつとも。
何も言い返さず、促されるまま会議机の一席に腰を降ろすのだった。

「——へえ、リアさんは混血種なのか」

さっぱりとした味の熱い紅茶。ほのかに花の香りがするそれを頂いてしみじみ言う。

2人で雑談を交わしているとリアさんの種族の話題になったのだ。

「あら異世界から来るとやっぱりそこが気になるのかしら」
「まあ割とな。今までお目にかかる機会がなかったからさ」

お伽話に出てくるような人外が、まさか本当に存在していたとはつい1週間前まで知らなかったからな。
ついでに言うとい世界の存在も。

「でも気にすることあ何もないわよ。天使も魔人も竜もエルフも、人間と大して変わんないしね」

「ああ、それはここでの生活でよく分かったよ」

中には奇人変人もいたが、それは人間でも変わらないだろう。

「んで私の話だけど、混血種ってなんだか分かってる？」

「聞いた話じゃ2つ以上の違う種族の血を引いてる人の総称、だっけ」

「ふむ、まあそれくらいは常識として分かるわよね」

その反対に1つだけの種族の血を引いている、つまり俺なんかは純血種ということになる。

この世界の割合では混血種が圧倒的に多数派。ということを以前クリス先生から聞いた。

「このリユミシアル界以外じゃ真逆らしいけどね。種族対立とか激しいみたいだし」

「なるほど。そういう世界じゃ混血種は忌み嫌われそうだな」

例えば神族と魔族が対立する世界じゃ、そのハーフはどちら側にもいられないだろう。

異世界事情に疎い俺にでもそのくらいは容易に想像できる。そういう意味でも種族対立のないこの世界は理想郷だ。

「……ごめんなさい。ちょっと暗い話になっちゃったわね」

少しばかりの沈黙があった後リアさんが口を開いた。

俺は静かに首を横に振ってから部屋にかかる時計に目をやる。生徒会室に来てから15分近くが経っていた。

「会長も副会長もそろそろ返って来ると思っただけ——」

「ただいま戻りましたわっ！ って、あらあらタクマじゃありませんの。もしかして遊びに来てくれたのですか？」

「生徒会室は遊び場所じゃねーよ。やるなら闘技場コロッセオにでも行け」

ドンツと激しく扉を開け放ち、2人の先輩方が部屋の中へ。

「どうもこんにちは。エルザ会長、アキラ副会長」

席を立て俺は学園生トップのお2人に頭を下げる。

「ふふっ、ごきげんよう。もう学園生活は慣れましたか？」

「はい。大体のことは1人でできるようになりました」

「それは良いことですね。それでここへは一体何をしに来たのです？ 私たちを待っていたようですけど」

長く鮮やかな桜色の髪を揺らし、相変わらず上品な口調で語りかけてくる会長。

手元にあるティーカップを見て察したのか。俺が待っていたことはお見通しだった。

「はい、副会長にこれを。テミス＝ベリアルスという先輩から預かってまして」

「（げっ、もしかしてアレは……！？）そっ、そうかぁ！ わざわざご苦労だったなあ御剣拓磨！」

「……………へ？」

テミス先輩の名前と封筒を持ち出すと副会長の様子が急におかしくなった。

声色は高くなり、何かを誤魔化すように引きつった笑顔を浮かべている。

正直、不自然極まりないですよ。

「ま、いいか。ではこれを――」

怪しいものを感じながらも両手を伸ばして封筒を差し出す。

「ちよつとよろしくて？」

「あっ」

すると横からエルザ会長の手がスツと伸びてきて。

「ギヤアッ!?　なんでテメエが平然と受け取ってんだよ!？」
「中に何が入ってるのか検閲ですわ。どう見てもアキラの様子が変ですから」

会長はそう言い捨てると颯爽と会議机の上へ封筒の中身を滑らせる。

「ん?　こ、これは……?」

中から出てきたのは数十枚の現像された写真と書類だった。
一枚一枚撮られている人物は違うようだが全て学園生のようにで。

「な、なんか全員メガネかけてる気がするぞ?」
「本当ね。これも、こっちも」

しかも書類には名前、在籍クラスなどが載っていて。
総評すると“メガネかけてる生徒の資料”って所だろうか。

「これは一体どういう事なのかしらあ、ア・キ・ラ?」
「どういう事も何もちよつとしたリサーチだ!　他意はないっ!」
「こんなリサーチがあつてたまりませんわあっ!」

鬼の形相をしたエルザ会長と顔を青くしたアキラ副会長。
怒号の勢いで2人は生徒会室から飛び出していつてしまった。

「……つまり、どうことだったんだ?」
「分かっているのは、副会長がどうしようもない眼鏡フェチだとい
うことよ」

「ああダメだ、頭痛くなってきた」

再びお茶を啜るべく席に着く。

これは推測だが、眼鏡フェチらしい副会長。

恐らく彼がテミス先輩にメガネ学園生の写真と個人情報の収集を依頼したのだろう。

「くうく、酷い徒労だった」

「でも私と出会えたんだから、一応良かったんじゃない？ 美味しいお茶も飲めたでしょ？」

「そう、だな。それを考えると――」

同情の笑みを向けてくるツインテール少女を見て思う。

確かに、あながち全てが徒労だったというわけではないか。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 4 - 5 【魔法決闘はお手柔らかに】

Episode 4 - 5 【魔法決闘はお手柔らかに】

「———そういうわけだ、さっさと闘技場^{コロッセオ}へ向かうように」

そう朝のHRを締めくくり、クリス先生は颯爽と教室を後にする。何が『そういうわけ』かと言うと、3組のイングレッド先生が体調不良でお休みなんだと。

その先生は我がクラスで火と土の魔法論理を担当しているオッサン教師。

筋肉質なのを自慢していたし、実際丈夫そうな人に見えたんだがな。

ともかく、その影響で本日は特別時間割が設定されたというわけだ。

「魔法決闘^{ディルナー}か。いつかはやると思ってたけど、果たして俺と同じレベルの奴はいるのかね」

もちろんレベルが低いという意味でな。

対人戦なんてしたことがないから正直不安すぎる。

「うおい転入生、よかったら俺とバトルしようぜっ！」

「ん、ああお前か」

これに見ゆるはクラスメートA。とは心の中以外では決して言わない。

「経験ないから絶対弱いぞ俺。って、まさかそれを狙った新手のイジメか!？」

「ちげえよ! 純粹にアンタの実力がどんなもんか知りたいだけさ」
「……実力ねえ」

軽い冗談を吐いてみるが、さらに真剣な顔で勝負を挑まれてしまった。

うーん、弱いって言ってるのにな。でもま、一応やってみないと分からないか。

「そこまで言うなら別にいいけ——」

「あ、何抜け駆けしてんだデメエ!」

別段断わる理由もないので勝負を受けようとすると、今のやりとりを見ていたらしい別のクラスメートの声が飛んだ。

「そうよ、転入生クンの相手は私が先にしたかったのにつ」

「ええっ!? ちょ、ちょっと待てよお前ら!」

なぜかそんな言葉を並べ、人の机の前へ群がり出すクラスメートたち。

どうやら皆俺との魔法決闘がお望みのようだった。

「何回も言っけど俺は魔法決闘の経験ないんだぞ。前の世界でもな」

思わず席を立て突っ込みを入れる。

そもそも俺は魔法を使い始めてからまだ一週間ちょっとしか経っていないのだ。

コイツらの実力は分からないが、少なくとも俺よりは上なのは確実なわけで。

「ふっふふ、それだと尚更俺らが鍛えてやらねえとな。同じ2組の先輩として」

そのとおりッ！　と周りとクラスメートたちも歪んだ笑みを浮かべる。

……どうやら俺には勝負を受ける他に選択肢がないらしい。

そして早く早くと急かされながらコロッセオへと移動した。

楕円状に造られた巨大なそのスペースは、クラス一同50人にも広すぎるほど。

観客席には当然誰も居らず閑散としているが、関係なしに数十個に分かれたバトルコート内で決闘が始まる。

俺は適当に決めた5人のクラスメートと組手をする事になったのだが……。

「——どうした転入生、それで終わりか？」

4人と戦って4連敗と、それはもう手酷くやられていた。

今が5人目、最初に声をかけてきたクラスメートAなのだが、正直これも勝てる気がしない。

『どりゃっしやいつ、氷結の跳弾ッ！』
Freeze Ricochet

まだいけると数メートル先に剣を構える相手へ射撃する。

「よっこらせつと、甘い甘い。こりやもう観念するしかねえな？」

「クソッ、こんな簡単に……」

これで何回目だろう。乱射された魔弾の嵐を越え、ぐつと距離を詰められる。

相手はキラキラ光るブロードソードを片手に余裕の笑みだ。

「ふんっ、まだ終わってないッ！」

隙を見て最後の抵抗。油断している相手へ魔力弾を一発放つ、が。

「つとと！ 不意打ちたあ危ないねえ。もう少し遅かったら被弾してたよ」

「うげっ——」

横斜めに飛んで魔弾をかわすと、クラスメートAはブロードソードを高く振り上げる。

直後放たれたのはトドメの袈裟斬り。完全に一本技ありだった。

「ん〜、筋は良いんだけどなあ。お前さん全体的に動きが遅えんだよ」

「あつたたた、仕方ないだろ初心者なんだから」

『つか最初から弱いつて言ってただろ』と言い訳するが、それでも少し物足りなさそうな顔をするクラスメートA。

そんな顔で差し出された手を取り立ち上がる。

お馴染みの結界の効果でお互い擦り傷すら一つも付いていない。体が灼けるような痛みはいつになっても慣れないのだが。

「んで、どうなさるよ？ 続けて誰かとやるかい？」

「冗談言え、休憩だ休憩。あと作戦会議をな」

「ははっ、いい案が浮かんだらいつでも勝負受けてやるぞ」

うるせーと笑い飛ばし、俺は石畳のコート内を後にした。

・
…

「にやははっ、いやあお見事な惨敗劇ですな大将！ドンマイドンマイッ！」

「貶すか慰めるかどっちかにしろ！？」

対戦コートを離れるや否や、ミリオムが悪戯な笑みを浮かべて肩を叩いてくる。

反応に困るじゃないか。あと誰が大将だ誰が。

「しかしまさかここまで実力差が圧倒的だとは……」

ちよっかいをかけてくるミリオムを無視してその場に腰を下ろし、眼前で行われているクラスメート同士の魔法決闘を見て呟く。

前々から気になってはいたが、今日実際に打ち合ってみて良く分かった。コイツら強い。

「（第一に地球人と比べて戦闘能力が高すぎる）」

こんな気軽に攻撃魔法や武器を行使できるシステムを開発してるんだ。

バトル慣れしていないわけがない。俺らとは戦闘経験値として大きな差だろう。

ダンジョン探索とかでも毎週身体を鍛えてるんだろうしな。

ちなみに1人女子ともやったが、やっぱり俺より遥かに強い。

「（そしてラファーズ。この魔力媒介は反則級だ）」

それは数週間後に進級課題として俺が生成しなければならない品。どという理屈かはよく覚えていないが、何でも自らのエーテルそのものが魔力媒介となっているらしい。

魔力を操るエーテル自体で構成されているため、魔法行使との相性が最高なのだ。

俺の魔法銃が編み出す魔法を、ラファーズ持ちはその半分の時間でやってのける。

こんなんじゃ……。

「うん、どう考えても勝てる気がしないよ」

溜息と諦めと共にそんな結論が口から漏れた。

少なくとも今の時点で相手にできるレベルを遥かに越えている。

実力差を埋めるにはまだまだ修業が必要のようだ。せめて俺もラファーズを手に入れないことにはお話にならない。

「じゃあさタクマ、次は私しようよつ。たぶん私クラスで一番弱いから」

1人遠い目をしていると、まだ隣にいたミリオムが勝負を挑んできた。

「んー、別にいいけど……。そんなお前にまで負けたら俺は一体？」
「紛うこと無き2組の最弱王ね。か弱い女の子にも負けちゃう」

うをおなにそれ絶対負けられない！？ 最弱王とか格好悪すぎるぞ。

今勝負が終わったばかりのコートへ足を進め、10メートルほど離れてミリオムと対峙する。

白銀の魔法銃を右手に俺は準備完了だ。

「んじゃ、私は少し下準備をしますか」

「下準備？」

『見てりや分かるわよ。トランスダプトッ！』

意味深な言葉を吐きつつ何やら魔法名を詠唱するミリオム。

何の魔法かは知らんが肉体強化系の魔法だと厄介かも。つか勝負が始まる前に使うとか狡い。

「下手な小細工はするんじゃ——って、な、なんだよお前その格好！？」

白い目で忠告の言葉を紡いでいると、突然起こったありえない光景に俺は声を荒らげる。

なぜなら彼女は、ミリオムは。なんとなんと、“変身”していたのだから。

変身。そう変身だ。それくらいしか言葉が浮かばない。

「ふっふーん、驚いた？ きつと初めてでしょう、人間以外の姿を見るのは」

「……そうか、お前は確か。魔族のサキュバスだったな」

先端がスペード状の尻尾と背中から小さく覗かせる黒翼。

そんなモノをしたり顔でこれ見よがしに見せつけてくるブロンド髪の少女。

その姿と俺の中のサキュバスという人外のイメージが、ピッタリと合致した。

「似合ってるじゃないか。その尻尾と羽根」

「あれれ、あんまり驚いてない？ もっとびっくり仰天的なリアクションが見たかったのに」

「アホ、そんなレベルとうに追い越して目眩が起きてるんだよ」

そう頭を抱えて苦笑しながら、俺は視線を闘技場内のクラスメイトたちへと送る。

「お前だけじゃ無さそうだな。その尻尾とか羽根を持つてる奴」

「ええ、この世界じゃリユニアルこういうのは隠すのが常識だから。トランスダプトって変身魔法を使うと人間の姿になれるのよ」

しれっと答えられるが、突っ込みどころが2つある。

どうして隠すのか。そしてなぜ変身するのが人間の姿なのか。

「納得いかない顔ね。ふふっ、別に教えてあげてもいいわよ？」

「勿体ぶるな。こっちは割と真剣に気にかかってんだよ」

「へえへえ」

彼女の口から出たのは随分と単純な理由だった。

まず翼や尻尾などを隠しているのは単に日常生活で邪魔になるから。

そりゃそうだろうな、特に羽根なんかつけてたら通行の邪魔もいところ。

んで次、なぜ人間の姿に変身するのかという話。

これも単純な話で、人間が他の種目に比べて一番特徴がなくシンブルな容姿だったかららしい。

人族人間には尻尾も獣耳も翼もついてないからな。ただそれだけ。

「わかった？」

「ああ、一応は。だがどうして今その変身を解いたんだ？ 何か意味でもあるのか？」

今のミリオムの説明じゃ特にメリットはないよな。

「1つはアンタを驚かして動揺させるため。2つ目はこっちの姿の方が強くなれるからよ。ほんのちよつとだけど」

「……お前、見かけによらずしたたかだな」

ミリオムの考えどおり俺は完全にペースを乱されている。

当たり前だ、いきなり目の前の女の子に尻尾と羽根が生えたら誰でもそうなるだろう。

「（ほんの少しだけ強くなるって言うてるが、それも本当かどうか分からないな）」

実際はかなり身体能力が上がってるかも知れない。油断は禁物だ。

「ままつ、細かいことは気にせず始めましょうよ。テオ、開始コール頼んだわ」

「おっけー。タクマ君、多分負けちゃうと思うけど頑張ってね。それじゃ決闘開始ッ！」

「てめえ縁起でもないことを言うなよっ！？」

妙に真実味のある不吉な予言と共に、付近にいたテオは対ミリオム戦のコールをかけた。

・
…

「最弱王は嫌だからな。本気で行くぞ――」

開始早々、俺は空中に霧散する魔力を一気に魔法銃へと集める。集める属性にはこだわらず、とにかくすぐに攻撃魔法を撃てるように。

「考えたじゃん。先に使える魔力をキープしておくなんて」

「ああ、こうでもしないとお前らには対抗できないからな」

なんせ相手は俺の数倍の速さで攻撃することができるのだ。攻撃が見えてから対抗魔法を練っている間は間に合わない。

「さあこっちは準備できたぜミリオム、さっさとお前も戦闘体勢に入ったらどうだ？」

即発動できる魔力と数個の魔法陣を孕んだ魔法銃。

白銀のそれを右手に構え、数十メートル離れた所に立つ少女へ呼びかける。

「ふふつ、キミの準備が終わるまで待っていてあげたのよ」

「そりゃごく親切に」

笑顔でそう告げてからミリオムは右手に一筋の光を発生させる。

光が収まった彼女の手には、指揮棒のような小杖タクトが握られていた。

「なるほど、それがお前のラファールゼか。それもなかなか可愛いと思うぞ」

魔力を集める先端がハート型になっており、少女らしさを醸し出している。

さっきまで戦っていた相手は皆剣やら槍やら物騒なのばかりだったのに。

「（あの形状だ、とりあえず近接戦にはならないだろう）」

近接戦が苦手な俺にも、攻撃魔法の打ち合いなら隙を突いて勝機はある。

『可愛いからって舐めちゃダメよん。魔火Fire Boltの矢ッ！』

動向を窺っていると、先にミリオムが動いた。

高らかな声と共に虚空でタクトを振り回し、赤の紋章を自身の周囲へ紡いでいく。

「くっ、やっぱり速いな……」

だがさっき戦った奴らよりはまだ遅い。手際よくやれば十分対抗できるだろう。

『炎の槍よ迎え撃て、激昂Fire Boltの火炎弾ッ！』

勢いよく真横へ駆け出つつ、同じ火の攻撃魔法を展開する。追尾性の低いファイアボルトは真正面に立たない限り直撃するこ

とはない。

互いの魔法陣より火の槍がそれぞれ発射され、激しい魔法戦が繰り広げられていく。

「けっ、結構頑張るじゃない。アンタって近接戦じゃなかったらそれなりなのねっ！」

「やつ、はっと。ご明察、お前が射撃タイプで助かったよ」

「それは果たしてどうかしらっ!？」

火の槍を撃ち、また飛んでくるそれをステップでかわして。

暑くて熱い空間で刺激的かつ楽しいダンスを舞う。

いや、あんまり格好つけた表現はしてられないな。

攻撃発動速度は明らかに相手の方が上。このままではジリ貧だ。

『Freeze Ricochet
(氷結の跳弾ッ!)』

そこで場の流れを変えるため、ファイアボルトと重ねて別の攻撃魔法を静唱する。

魔力弾の数ではこちらの方が多いし、一発ぐらいはかすってくれるかもしれない。

「きゃっ、うひゃんっ——!？」

奇襲の氷弾をかわしきれずにミリオムは悲鳴を上げる。

太股や胴体に貫通する魔弾に顔を歪めるが、実際痛みはかなり軽減されているし怪我もしないから安心だ。

ただ相手、しかも女の子の痛がる表情を見ると物凄く罪悪感が湧くだけだ。

だからといって攻撃の手を止めるわけにはいかない。

散弾系が有効と見た俺はさらにフリーズリコシェットの魔法構成フォーミ式を紡いでいく。

「うぬぬぬ小癩な……。こうなったら、えいつ！」

サキュバスの少女は小声で何かを呟くと、華麗なジャンプで大きく空へと舞い上がった。

最初は背中の黒翼で飛んでいるのかと思ったが、どうやら飛行系の魔法を行使しているらしい。

「タクマ、あなたに飛行魔法フライトは使えるのかしら？」

「構成式は知ってるけど習得はしてないな」

飛行魔法には数多く種類があるが、どれもコントロールが難しい。死亡事故も多いので日本では使用に資格が必要なほどだ。

俺も練習すれば習得できるかも知れないが、今すぐには彼女と空を飛ぶことは叶わないだろう。

「ふーん。それじゃあ私が断然有利なわけだ」

ニヤリといつもの小悪魔的な笑みを浮かべ、すうっとタクトをこちらへかざしてくる。

マズイな、完全に形勢逆転されてしまった。彼女の言うとおり地上と上空での戦力差は明らかだ。

「クッ、どうすれば……。って、ん？」

奥歯を噛み締めながら対策を思考していると、ある重大な事実

気付いてしまった。

「お前、そんなミニスカートで飛んでて恥ずかしくないのかよ!？」

あまりにも堂々と飛んでるからこの瞬間まで気付かなかったが…

…。

丸見えだ。俺だけではなく周りのクラスメートたちにも。

「ああ、だいじょぶだいじょぶこれ見せても大丈夫なヤツだから」

するとそんな一言で流されてしまった。なるほど、テニスのアンダースコートのな。

まあ流石にそれくらいは考えてるよなコイツも。

「それにい、私より自分の心配をしたほうがいいんじゃないの？」
「な、なんだって?」

心配して損したと息を吐こうとすると、非常に嫌な予感のする言葉が放たれる。

そつと彼女の方を見上げると、眩い日の光をバックに何らかの攻撃魔法が展開されていた。

それも、かなり強力な。

「ちょ、お前いつの間にそんなモノを!？」

『いやー今の会話中にこっそりとね。さっ、貫け! Buster Light
トニングッ!!』

「や、ヤバい!? エ、エーテルバリ——」

咄嗟に腕を突き上げ魔法障壁を張ろうとするが、やはりほんの少し遅くて。

バチバチと鳴る紫電の刃が、見事に俺の胸を突き抜いた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 4 - 6 【銀髪少女との対峙】

Episode 4 - 6 【銀髪少女との対峙】

優しい陽射しが包む朝の闘技場内に、目立って調子の良い少女の
声が響き渡る。

「やはははっ、さあさあ大人しく参りましたと言いなさいっ！」
「んなっ、くうっ!？」

一瞬の不意を突かれたが運の尽き。
電撃の痛みに蹲っていたところを更なる魔法で追撃されて。
現在背中の上をミリオムに馬乗りされ抑え付けられている、とい
った状況だ。

「くっそぜんっぜん動けねえ……。お前少し重いんじゃないか？」
「ちよっ、失礼しちゃうわね。拘束魔法をかけてるだけなんだから
っ」
「っと失敬それはスマンかったな」

笑いながら謝りつつも、俺は彼女に見えない所で渋い表情を作る。
軽口を叩きつけて隙を作らせようと思ったのだが失敗だ。
重心をさらに強くかけられてしまい、期待とは見事に真逆の行動
を取られてしまう。

「タクマ、あんたはもう完全にチェックメイトなのよ。観念なさ
いな」

人の首筋を細い指でなぞりながら、うふふと妖しい声で語りかけ

てくる。

くそ、確かに反撃はもう無理か。すでに魔法銃も手から離れてしまっているし。

「ま、反抗するなら言いたくなるまでいじめてあげちゃうケド？」

人の悪い少女の声に、嫌な汗が体中からタラリタラリとつたうのを感じた。

「わ、わかったよ。参りました俺の負けでございます」

後方へ首をゆっくり捻り、しみじみとした声で白旗を揚げる。

無論跨っていたサキュバスの少女はニヤリと口元を歪ませ、スピード状の尻尾を満足気に揺らしていた。

く、悔しい……。

こうして対ミリオム戦も俺の敗北という結果で幕を閉じ、俺はめでたく2組最弱王の称号を受け継いだのであった。

うん、まったくもって不名誉な話なわけだが。

「そ、そんなに落ち込まないくださいよタクマ君。現時点であなたが負けるのは仕方のないことなんですから」

闘技場の端で一人黄昏れていると、慰めに来てくれたのか隣にミアが腰を下ろす。

彼女はまだ誰とも戦っていないのか桜色の髪に乱れはなかった。

「わかってる。だけどさ、やっぱりこれは男のプライドって奴がだな……」

初めての慣れない魔法決闘、使用武器の性能差も大きかったが、それでも女の子にまで負けるといふのは結構メンタル的に大ダメージだ。自分が情けないというか何というか。

「ふふっ、あなたも男の子というわけですね」

「……笑うなつての。あれでも割と本気で勝ちに行っただから」

そうとも手は抜いていない。俺は正真正銘全力だった。だからこそ、こつも呆気無く負けてしまったことが悔しいのだ。

「でもま、いい経験にはなつたかな。さてと――」

ゆっくりと立ち上がり制服に付いた埃をぱっぱと払う。

「あら、どちらへ？」

「水分補給にジュース買ってくるよ。ミアも来るか？」

「あ、いえ、私は先ほど行ってきたばかりですから」

そう申し訳なさに手に持つ缶ジュースを見せられる。

残念だと捨て台詞を残し、俺は苦笑したまま闘技場のエントランスへと向かうのだった。

俺の見えないところから、1人の少女がその一連の様子を窺っていたのを知らないまま。

・
…

俺以外には誰もいない閑散としたエントランス。
その片隅にある自販機の1つから炭酸飲料水を購入した。

「ゴク、ゴクンツ、っはあ、生き返るねえ」

ベンチに腰掛けその場で一気に喉へ通す。

初めて買った商品だけどなかなかどうして美味しい。適当に選んだものだが当たりだったな。

うんうんと頷きながら至福の一時を過ごしていると――。

『授業時間中にティータイムとは良いご身分だなあ、生徒タクマ？』

唐突に聞き慣れたサディスティックな声が飛んだ。

「ぶツ――！？ ガハツ、ゴホツ、ゴホンツ」

やばいクリス先生だ！？ と全身が震えた瞬間、思わず口に含んでいたシュワシュワする液体を気管へ侵入させてしまう。

咳き込み涙目になりながらも、俺は弁解をするべく声の方へ振り向いた。

「違っんですよ先生！ これは決してサボっているのではなく水分補給を――って、アレ？」

目をやった先には想像していたのとは違う少女の姿があった。

長い金髪のツインテール吸血族ではなく、短い銀髪のショートカツト。

いつも毒付いた言葉と嫌らしい笑みを浮かべているアイツだった。

「な、なんで冬霞^{トウカ}が？ 今クリス先生の声がしたんだけど……」

「ちよつと声色を変えてみたの。みんなにはすごく似てるって好評なのよ」

「つまりはお前の悪戯だったんだな」

自慢話をし始める銀髪少女を制し、俺は攻撃的な笑みを彼女へ向ける。

心臓に悪い。そしてまだ苦しがつてる俺の気管に謝れ。

「クスッ、まあそんなことは置いておいて少し話があるのよ。大切な」

「また下世話はジョークじゃないだろうな？」

銀髪少女は首を静かに横に振ると、俺の隣に座って話を切り出した。

「私が迎えに行つたときのことを覚えてるかしら？」

「そりゃな、あんな衝撃的な出来事忘れたくても一生無理だと思うぞ」

もう随分と昔のことのように感じるあの銀月の夜を思い出す。幸か不幸かこの銀髪少女、白銀冬霞と出会ってしまった夜。そしてこの世界へと導かれた夜でもある。

俺の歪んだ人生がさらに歪んだあの日を忘れられるわけがない。

「そういえば確かお前、俺の魔力弾を涼しい顔で無効化してたよな」
「あんなショボいの別に私じゃなくても防げたわ。それこそ中等部の生徒でもね」

「……そうかい」

だが俺はそのショボい魔弾で人を殺してしまっているのだ。自信を持って言える不可抗力だったが、やはり今でもなんとも言

えないモヤモヤが続いている。

「今だから教えてあげるけど、アンタが殺したと思ってるチンピラ、あれ人じゃないのよ」

「――なっ!？」

それはあまりにも唐突だった。そして耳にしたこちらは驚きのあまり呼吸を忘れる。

心を読まれ、かつ到底信じられない言葉を不意に叩き付けられたのだから。

「な、何を突然言い出すかと思えば。あれはどう見ても生身の人間だったぞ」

「まあ普通信じないわよね。いいわ、証拠を見せてあげる」

「証拠だって?」

そう言うとき疑いの目を向ける俺から少し距離を取り、トウカは赤紫の瞳を細める。

『踊れ、ダンタリオンの幻影』

魔法名だろうか。ただその一言だけを紡いで指を鳴らした。

直後彼女のすぐ右横に黒い魔法陣が浮かび、怪しい光漏らす。

半信半疑のままその様子を窺っていると。

「ばっ!？　そ、そんな、まさか本当にお前が……」

その魔法陣の中から姿を現したのは、紛れもなくあの夜に俺が殺したはずのチンピラだった。

と言っても襲ってきた3人の中のリーダーらしい金髪男だけだっ

たが。

「コレは人工精霊^{ホムンクルス}。感情はないけど私の念じたとおりに動いてくれるお人形よ」

銀髪少女が口にしたホムンクルスという単語。

日本で使われていた式神と同じだな。だが果たしてこんなリアルに作れるもんだったか？

俺の知ってる話じゃせいぜい小動物に似せられる程度だったような……。

「んっ、なるほどそうか。この世界の魔法技術を使っているんだな」
「ご明察。闇の幻影魔法をベースに構成しているわ。あなたも2週間あれば習得できるんじゃないかしら」

「そうだな、興味もあるし今度先生に相談してみるよ。それよりも」

――

ロボットのよう動かないチンピラを一瞥し、今度は銀髪少女へ鋭い視線を向ける。

結局、彼女がこんなものを使って俺に近付いてきた理由がわからない。

「とりあえず騙したことを謝っておくわ。こんなことでもしないとあなたが私に着いて来てくれるか分からなかったから」

「……地球との踏ん切りを付けさすためにやったってことか」

こちらが質問するより先に発せられた彼女の声である程度のことを悟る。

つまりはこのホムンクルスを使って、さも俺が殺人を犯したように勘違いさせたんだ。

俺の心を、こちらの世界へ持って来やすいように。

「怒ってる？」

「そりゃ少しはな。でもやっぱり感謝もしてる、かな。やり方は汚いが結果地球から逃れたのは正解だったし」

この世界に来て俺のエーテルは復活したし、魔法も使えるようになった。

それだけじゃない。たくさんの人たちと出会えることもできたのだ。

「ただ、どうしても気にかかってることはあるぞ」

「何かしら」

「お前のことだよ。白銀冬霞」

「なぜお前が迎えに来た？ 他の異世界出身の奴の話じゃ、迎えに来るのは外世界統括機関ギルドって組織の人だそうじゃないか」

この世界は異世界から優秀な人材を引き抜いてるのだが、それを担っているのがギルドという組織だそうぞ。

他にもいろいろ活動しているそうだが、それは置いておいて話を戻そう。

あの夜俺のもとに現れたのは眼前の少女。つまり、ただの学生である。

「私が学園長に頼んで得た例外よ。あなたを迎えに行くのは私。そう4年前に約束したもの」

「4年前の約束、か。やっぱりお前はあの夜より前に俺と縁があるんだな？」

「クスッ、薄々は気付いていたはずでしょう？ 記憶は綺麗に飛ん

でるみたいだけどね」

トウカは否定しない。俺の記憶がないことも既に知っているようだ。

なら、こちらから言うべきことはただ一つだろう。

「教えてくれトウカ。4年前一体俺に何があった？　そして、お前と俺はどういう関係だったんだ？」

彼女の右手を両手で包み、目を見て真剣に問い掛けた。

「……それはまだダメなの」

数秒だけ躊躇ったあとそう告げられてしまう。

どうしてだ、俺が知ったらそんなに不都合なのか？

「だけれど――」

「え？」

「ほんの少しだけなら、あなたに真実を見せてあげられるわ」

どうということだと訊き返す暇もなく。

トウカは空いている左手に光を収束させると、静かにそれを俺の額に触れさせた。

・
…

「な、何をしたんだ？　別に何も起こらないんだが」

「狂ったあなたの感覚を元に戻しただけ。これであなたは事の異常さを認識できるはず」

失敬な、誰が狂ってるか。しかも一体何の異常だよ。

「簡単なことよ。地球は、日本は、果たして魔法が使えないくらいで差別される世界だったかしら？」

少女の口から出たその質問。果たして答えはなんだろう。きっと、さっきまでの俺なら間違いないイエスと答えていた。だが……。

「うつ、な、えっ！？ あ、あれ？」

俺の頭の中に浮かんだ答えは、ノーだった。

あの世界で、地球で、日本で。魔法を使えない程度であんな酷い差別を受けるわけがない。

特に人権運動が活発だった日本じゃむしろ俺は保護対象のはず。

ありえないのだ。全世界から俺一人がバッシングされるなんて。なんでだ、どうして。俺は今の今までこの異常さに気付かなかつた！？

「分かったでしょう？ 地球の人間とあなたの感覚は狂わされていたの。この4年間」

「く、狂わされてたって、一体誰がそんなことをっ！？」

「あなたを迎えに行く前に殺したわ。ま、そのことは今考えなくていい」

彼女のゾクツとする言葉遣いに背筋が凍る。

あの夜と同じ恐怖感を抱いて言葉に詰まっていると、突然。

さっきまで渋い表情を覗かせていたトウカが、不敵な笑みを浮か

べてこう言った。

「どうしても真実が知りたければ、奪い取ってみなさい。あなたの力で」

「……ど、どういう意味だよそれ？」

「要はこれ以上のこと知りたくば、魔法決闘^{デイルーナ}にて私を倒せ。ということよっ！」

いやいや、声を張り上げてそう言われても……。

どうしてそんな結論に辿り着いてしまうんだ。

「もういいや、お前じゃなくてアキラ副会長から聞くよ」

呆れて大きな溜息を吐き、もっと早い解決策を選ぶことにした。
あの人はコイツの兄さんなんだし、きっと詳しく話が聞けるだろう。

「甘いわね、そんなのとづくに口止めしてあるに決まってるでしょう」

「おいおいマジかよ」

一番現実的な突破口を防がれてしまっていた。

「フンッ、なら上等だ。やってやろうじゃないか。魔法決闘」

「あんたミリオムにすら負けてたじゃない。今の力で私に勝てると思ってるの？」

「うっ、そ、それは……」

無理、だろうなあ。さっきクラス最弱になったばかりだし。
それに加えて多分コイツは恐ろしく強いんだろう。

身に纏ってる雰囲気というかオーラというか、とにかく弱そうには見えない。

「——ま、そういうわけで楽しみにしているわ。あなたと激しく美しく、一緒に戦踊を舞える日をね」

「大切な話つてのはそれだけか。俺は混乱しただけだぞ?」

「それでいいの。その謎を紐解くために、あなたは必ず強くなってくれるから」

そう背を向けて闘技場内へ戻って行く銀髪少女。

小さなその後ろ姿を見送りながら、俺はぎりぎり彼女に届く声で言ってやる。

「そうだな。いつか本当にお望みどおり、お前を倒してみせるぞ。
白銀冬霞」

その言葉に銀髪少女は一瞬だけ歩みを止めたが、振り向かずすぐに行ってしまった。

どう考えても理不尽この上ないのに。滲み出るはずの不安や怒りよりも。

この時なぜだか妙に嬉しく、そして俄然やる気の湧いた俺がここにいた。

少し彼女の毒にあてられすぎたのかも知れないな。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 4 - 7 【それでも進む時の中で】

Episode 4 - 7 【それでも進む時の中で】

夕暮れに空はだんだんとその色を失い、教室は薄い茜色へと染ま
っていく。

そんな空間の端、俺は静かに目を閉じて深く思考していた。

もちろん午前中に交わした冬霞^{トウカ}とのやり取りをである。

少し間を置いて考え直してみても、やはり謎が多すぎるのだ。

一体誰が、何の目的で俺や地球人たちの意識に干渉したんだ？
なぜ学園長やトウカはそこまでして俺をこの世界へ導いたんだ？
そしてトウカとアキラ副会長は、俺とどんな関係にあつたんだ？

「（……ダメだ、わからない。あんなのじゃ全然足りないよ）」

大きな溜息を吐いて机に伏し、元氣のない黒髪をボサボサと掻き
むしる。

少なすぎるのだ。俺の持っている知識量だけでこれらの謎解きを
するのは不可能に近い。

「——あ、あのっ、タクマ君、私の声聞こえますか？」

今のところ魔法決闘でトウカを倒すのが唯一の道なのだが、やは
りそれも厳しいだろう。

なぜなら俺の戦闘スキルも魔力媒介も最弱レベルなのだから。
この世界の奴らと対等に戦えるまで成長するには、果たして何ヶ

月かかるのやら。

「ど、どうしましうつ、返事が返ってきません……」

「ああ、こりゃ重症かもな。ミリオム、てめえが変身までしてしゃやり出るからだぞ」

「私のせいだつて言いたいわけ！？ 私はただ尋常に勝負しただけなんだからっ！」

はあ、本当にどうしよう。昨日までは昔のことって振り切れてたのに……。

やっぱり気になる、知りたい。複雑な俺の周りの世界は一体どうなってるのか。

「って、ん？ どうしたお前ら、いつからそこに」

騒がしいなと顔を上げたところに、よく見知ったクラスメートの姿が写った。

なぜか泣きそうな顔になっているミアと、口争いをしているラグナとミリオムだ。

「いつからって、HRが終わってから今までずっとたぜ。やっぱり気付いてなかったのか？」

「あ、ああスマン、少し考え事があったな。つい上の空だったみたいだ」

「やっぱりっ！ どおりで私たちが話しかけても完全スルーだったのね」

呆れた目をする赤毛竜人とサキュバスを苦笑いで誤魔化しつつ自分に戻る。

思えば確かに、さっきから話しかけられていたような気はしてい

ただ。

「それで、一体何を考えていたんですか？　かなり深刻な様子でしたけど」

「えっ、べ、別に大したことじゃ……」

「つまらないことではここまで上の空にはならないと思うんですけどねえ」

小さなミニツインテールを揺らして怪しむミアを見て、一瞬トウカとのことを話そうと思ったが、結局口には出せなかった。

なんせ俺自体まだこの件の全容は把握しきれていないのだから。

「もう、どうせ今日の魔法決闘のことを気に病んでいたのでしょうか？」

「ま、まあ大体はそんな感じだな」

トウカとのこと以外は見透かされていた。いや、誰でも分かるよな。

「朝に言ったじゃないですか。あなたが今負けるのは仕方のないことだって」

「そうだぜ。逆に超初心者タクマっちが勝っちゃうほうが大問題だ」

「うっ、そうかもしれないけど……。ん」

うなだれながらチラツと横目で突っ立っていたミリオムを捉える。それでも、普段のほほんとしているコイツに負けたのはかなり悔しい。

「へえ、そんなに悔しいんだ。私に負けたコト」

「か、勝手に言ってるっ！」

「うふふ、拗ねられちゃった」

嫌らしくニタニタと微笑む少女から、そつと視線を外して俺は帰りの支度を始めるのだった。

・
…

そして少し黒みのかかった空の下の帰り道。

寄るところがあるらしいミリオムとは別れたが、代わりに途中で会ったテオと合流し、ミアとラグナの4人で帰路に着いていた。

「そついえばラグナ、前から気になってたんだが、お前つてドラゴンなんだよな？」

「おうよつ。ま、正確に言えば火炎竜族ボルケーノドラゴンだけだな。それがなんだつて？」

ボルケーノつて確か火山だっけか。なるほど、言われてみれば髪の色とかもそれっぽい。

「いや、今日のミリオムみたいにお前も変身とかできるのかなつて」

魔法決闘やトウカの件はもちろん、やはりこれも非常にインパクトのあることだった。

羽根とか尻尾とか獣耳とか、とてもとても興味深い。

ましてや竜人として人間の姿をしているドラゴンラグナの本当の姿なんて尚更だ。

「当然できるけど、こんな人通りの多い所や狭い場所じゃ無理だぜ。

いい迷惑だ」

「そ、そんなに本来のお前は大きいんだ？」

「個人によってピンキリだけどな。それでもみんな小さな民家ぐらいの大きさはあると思うぜ」

おおつ、こりゃ俺のような地球人が想像していたドラゴンと同じっぽいな。

今はどこからどう見ても人間そのものだが。

「へへっ、まっ、そういうわけでお楽しみはまた今度な。近いうちに見せてやるよ」

「楽しみにしてるぞ。……あ、背中とか乗ってみてもいいか？」

「おう、いくらでもいいぞ。ただし、昼飯ぐらいおごってくれたらの話だけどな」

金取るのかよ。なんて現金なヤツなんだ。

心の中でそう呆れつつ、今度は視線を右側に歩く2人に移す。

「んじゃあミアとテオはどんな感じなんだ？ 確か2人は天使と魔人だったよな」

「あら、今度は私たちに探究心の矛先が向けられちゃったみたいですよ。ふふっ」

可愛らしく笑うミア。天使族である彼女のイメージは白い翼や輪っかなんだろうか。

魔人のテオは……。ん、なんだろう。よくわからないかな。

「僕らは君が期待してるほど珍しい姿じゃないと思うよ。ちょっと羽根が付いてるだけだから」

「いや、俺にとってはそれだけでもかなり珍しいんだけど……」

乗り気ではないテオへ『見てみたい』とさらに強い眼光を送ってみる。

「いいじゃないですかテオ君。別に減るものではないんですし」

「もう、仕方ないなあ……。僕はあんまりあの姿になるの好きじゃないんだけど」

「ははっ、夕飯のおかず何か分けるから頼むよ」

別にいらないうと断れてしまいが、結局は渋々やってくれるそう
だ。

石畳の道の端で足を止め、俺とラグナは少し距離を取って2人の
変身の様子を見守る。

『トランスダプト』

間もなく2人は静かに聞き覚えのある魔法名を詠唱すると、一瞬
だけ眩しい光の奔流を作り出す。

反射的に目を閉じ顔を背けていると、同時に強大なエーテルと魔
力の渦が身体をよぎるのを感じた。

「——んっ!？」

ゾクツとする悪寒に思わず目を見開くと、そこには。

「ハイ、お望みどおり変身を解いたよ。これが魔人^{プリマス}族と天使^{エンジェル}族の本
当の姿さ」

「お、おおっ！　すげえな、めちゃくちゃ綺麗な翼じゃないか」

ミリオムの小さなものとは違い、輝くテオの黒翼は4つに分かれていて。

そこには魔族という単語から想像できる邪悪な気配は一切なく、とても立派で格好良く見えた。

「えへへっ、今みたいに褒めてもらえるのなら、たまには開放してみるのがいいかもですね」

天使族、ミアの翼はテオのものと同じく大きな4つの羽根に分かれていた。

意外にもその色は予想していた純白ではなく、彼女の髪の色と同じ桜色だったが。

とにかく2人が持つ大翼は想像していたものよりずっと流麗だった。

うん、少し我がままを言っても見せてもらった甲斐はあったな。

「魔族の羽根は大抵黒色が多いんですけど、天使族の羽根は個人によって違うんです。大抵髪の色で決まるそうですよ」

「ちなみに混血種族の奴はランダムで特徴が出るそうだよ」

「ふーん、やっぱり俺の知らないことって沢山あったんだなあ……」

異世界での常識を授けてもらいながら歩いていると、あつという間に寮の前まで辿りついてしまった。

もちろんテオとミアの2人はとっくの昔に人間の姿へと戻っている。

「ふふっ、それでは皆さんまた明日。では」

「ああ、また明日な」

小さく一礼をして女子寮へと姿を消すミアを見送り、俺達も部屋へと戻るのだった。

「（探してみれば他にも面白い姿をしている奴がいるかも知れないな）」

後で食堂にいる男共にでも見せてもらおうか。

ま、尻尾や獣耳とかは女の子が付けている方が目にはいい気はするのだが。

・
…

夕飯も風呂も終え、特にすることもなく暇を持て余す午後10時過ぎ。

寮の2階にはかなり広めなレクリエーションルームがあり、この時間帯はここで過ごすのが大半の寮生の日課となっている。

「そついえばあの芸人も消えたよな。最近全然見ねえもん」

「あんな寒いギャグばっかしてたら消えて当然だっつーの。それよりこれを見る、今日もアイリスちゃん最高だぞッ！」

「へえへえ。あつ、そついやまたアイリスの新曲出るんだってな」

生徒証から情報番組やバラエティ番組を見たり、いつもどおり他愛も無い話をしたり。

どこから仕入れてきたのか大量のお菓子持っている先輩からお情けを頂いたり。

とにかく全体的から見れば、今日もこのリュミシアルは平和らしい。

「そつえばさ、さっきの変身で思い出したんだけど――」

塩味の効いたスナック菓子を頬張りながら、はっとしてテオは話を切り出す。

「トウカさんさ、実は昔髪を伸ばしてたんだよ」

「へっ!？」

それは忘れかけていた銀髪少女の話題。

その不意な登場に俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「なんだテオ、それ俺っちも初耳だぞ。――ってことは、ミッドフュー中等部の頃の話か？」

「うん、確か2年の夏前ぐらいだったかな。長い上品な髪だったんだけどねえ……」

近くにいたラグナが混ざると、緑髪の少年はしみじみとした声でそう眼を閉じる。

「それを今のショートヘアにしたわけか。なるほど、そりゃ確かに変身だな」

髪は人の印象を決める要素の1つだしな。

彼女の髪がどれだけ長かったかは知らないが、いきなり短くしたのは大きなイメージチェンジだったらしい。

「でもどうしてだ？ その言い方じゃトウカっちの髪型は似合ってたんだろ？」

「それがさ、魔法決闘とか魔物と戦うのに鬱陶しいからだって」

おいおいそんな理由で切ったのかよ。後ろに結ぶとか他にも選択肢はあっただろうに。

「ははっ、そりゃトウカっちらしいな。さすがキラークイーンだぜ」

「そうだよな。思えばあの頃からトウカさんは強かったよ」

「……………ん？」

甘く冷たいジュースを口に運んでいると、2人の会話に違和感を抱いた。

「なあ、稀に皆トウカのことキラークイーンって呼んでるけど、アイツってそんなに強いのか？」

そもそもキラークイーンってなんなんだ。

どう考えてもあまり穏やかな称号ではないようだが。

「……………ありや強いつてレベルじゃねーぞタクマっち。あの小悪魔は最強だ」

「も、もっと具体的に教えてくれ。それだけじゃ大雑把すぎる」

少し含みを持たせるようなラグナの答えに首を傾げ、次の言葉を待つ。

「具体的ねえ。そうだなあ、成績も戦績もこの学園の学年首席なんだよ彼女」

すると隣から耳を疑いたくなるようなテオの言葉が届いた。

ちよ、ちよっと待て。学年首席って、500人近くいる1年生の

トップってこと……？

「それに加えて去年の魔法決闘大会じゃ、圧倒的な実力で一年の部優勝さ」

「魔物だろうが人だろうが、9割の相手は瞬殺されるぞ。んで、付いたあだ名がキラークイーンだぜ」

「んな、んな……」

したり顔でクスクス笑う銀髪少女の姿が目には浮かぶ。

やべえなにそれ聞いてないぞトウカ！ お前そこまで強い奴だったのかっ！？

「ち、ちなみに対等に勝負するにはどれくらいの实力が必要なんだ？」

頭を抱えながら恐る恐るそんなことを尋ねてみる。

「うーん、上級生や大人でも彼女に勝てる人はかなり少ないと思うよ」

「ああ、勝てそうなのはエルザの姉貴かあのちびっ子吸血族かねえ」

あの天才生徒会長様と鬼畜教師レベルにならないと無理なのか。だ、ダメだ、本格的に目眩がしてきたぞ……。

「ん？ どうしたんだいタクマ君？ 顔色が悪いように見えるんだけど」

「いや大丈夫だ。気にしないでくれ」

「言っとくけどアイツとだけは決闘すんのやめとけ。心が折れちまう」

何かを見透かしたような赤毛竜人の声と目は珍しく真剣で。
俺はコクリと頷いてから別の話題を振ることしかできなかった。

トウカよ、どうやらお前と同じ位置に立つにはまだまだ時間がかかりそうだ。

そんな声にならない俺の嘆きを嘲笑うかのように、異界の夜は更けていくのだった。

越えなければならぬまた別の障害を、これでもかと携えて。

M a g i c a l R e v o l u t i o n

C h a p t e r 2 E n d

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! ! -

キャラクター紹介 02

Magical Characters Chapter 2

ここまでの簡単な登場人物まとめです。

・
…

【リミシアル魔法学園 高等部1年】

—— 主人公、所属クランメンバー

—— タクマミツルギ（御剣 拓磨）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、16歳
出身次元体：地球、日本

「黒髪黒眼、旬な学園転入生、前向き主人公」

稀に他人をからかったりする癖があるも基本的にはまともな主人公。

魔法の才能はあるが、現在の実戦順位では最底辺クラスだと判明した。

たくさん課題を抱え込みつつ、今日も彼は異世界リミシアルでの学園生活を満喫することに。

—— トウカシラガネ（白銀 冬霞）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：地球、日本

「銀髪少女、キラークイーン、底知れない少女」

よりいつそう謎が深まってしまった不思議系メインヒロイン。
過去に主人公と縁があり、彼の知らない秘密を知っているようだが……。

実は学園高等部の1年生首席で、学力も戦闘スキルもトップクラスの天才少女。

―― ミヤナールムシアクウナ（ミア）

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、16歳
出身次元体：リユミシアル

「桃色ミニツインテール、小動物系少女、健気な天使」

健気で面倒見のいい天使族の少女。
天然系に見えるが実はかなり鋭い感性の持ち主のようだ。
本来の姿になると背中に桜色の翼が出現する。

―― ラグナヴァオレリウス

種族種目：竜族、火炎竜族 性別年齢：男性、推定150
出身次元体：不明

「ツンツン赤毛、バカ気味竜人、ムードメーカー」

好きなものは睡眠と女子である少し頭の残念な竜人。

他にも生活指導対象、成績不振な問題児だがなんとか学園生活を送れている。

普段は人間の姿だが、本来は大きく雄々しいあのドラゴンである。

—— テーオ＝ベリアルス（テオ）

種族種目：魔族、魔人族 性別年齢：男性、16

出身次元体：不明

「爽やか緑髪、魔王子息、世話焼き気質」

日々主人公の生活をサポートをしてくれる知的な魔人族の少年。
これからも世話になることが多いかも知れない。
人間への変身を解くと背中に4つの黒翼が出現する。

—— クラスメイト、他一年生

—— ミリオム＝ハイソール

種族種目：魔族、サキュバス族 性別年齢：女性、16歳

出身次元体：不明

「右隣のクラスメイト、サキュバスな眠り姫、ハイテンションガール」

主人公に興味を持っているのか近くにいたことが多いサキュバス

の少女。

魔法決闘ではクラス最弱だったが、初心者の主人公を打ち倒す実力は持っていた。

人間形態を解くとスペード状の尻尾と小さな黒翼が現れる。あとよく寝る。

――アテューリア＝ローズハート（リア）

種族種目：混血種族 性別年齢：女性、16歳

出身次元体：リュミシアル

「茶髪ツインテール、真面目系少女、生徒会役員」

初めて登場した混血種の少女で、生徒会役員を務める優等生。嫌味のない口調や雰囲気から育ちの良さを感じさせる。同じ生徒会のトウカやミアとは友人らしいが……。

【リュミシアル魔法学園高等部 上級生】

――生徒会役員

――エルジイルム＝シアクウナ（エルザ）

種族種目：神族、天使族 性別年齢：女性、17歳

出身次元体：リュミシアル

「ハイパー生徒会長、学年首席、お嬢様口調」

天才なのだが会議にはややサボり癖のあるお嬢様系生徒会長。
年下にはお姉さんぶったり見栄を張ることがある。
アキラ副会長にはそれなりの好意を抱いているらしいが……。

―― アキラⅡシラガネ（白銀 暁）

種族種目：人族、人間族 性別年齢：男性、17歳
出身次元体：地球、日本

「生徒会副会長、クール眼鏡、眼鏡フェチ」

トウカと同じく主人公について何かを知っているらしい人物。
エルザ会長に手を焼いたり焼かれたりしている。
眼鏡をかけている女性を見ることに至福を感じているらしい。

―― 他上級生

―― テミスⅡベリアルス

種族種目：魔族、魔人族 性別年齢：女性、17歳
出身次元体：不明

「緑髪ポニーテール、ミスパパラッチ、トラブルメーカー」

自称報道部エース、次期部長候補なテオの姉。
物事にとってもアグレッシブな性格で、トラブルを起こすこともし
ばしば。

今日も彼女はスクープを求めて学園敷地周辺を飛び回る。

【その他の人物】

―― 学園関係者

―― クリスティーナ・ムーンライト（クリス）

種族種目：魔族、吸血族 性別年齢：女性、不詳
出身次元体：不明

「金髪ツインテール、ちびっ子担任、真祖の吸血族」

1年第2クラスの担任だが、特に担当教科は持っていない。
毎日午後の授業時間を使ってひ弱な主人公を鍛えている。
主人公の進級試験は彼女が担当するらしいが……。

―― トウルシファナ・リリス

種族種目：不明 性別年齢：女性、不明
出身次元体：不明

「謎多き学園長、艶やか美人、おっとり口調」

2章では登場していないがきつと主人公のことを見守っていたはず。

普段は学園長室で書類を片付けていることが多いらしい。

— その他の人物

— アイリス

種族種目：不明 性別年齢：女性、16

出身次元体：不明

「薄紫ロングヘア、スーパーアイドル、発育満点」

Candy Kiss プロに所属しているリユミシアル界の人気アイドル。

透き通るような凛々しい唄声とけしからん美貌（胸）の持ち主。どこかの学生なのは確実だが、本当の正体を知る者はファンの中にも居ないようだ。

・
…

Ep: 5 - 1 【越えるべき課題と】

Episode 5 - 1 【越えるべき課題】

初めての魔法決闘から数日の時が過ぎた土曜日ディルナの朝。

いつもは教室でクラスメートたちと雑談を交わしているはずのこの時間帯に、俺は教務員室にいた。

正確にはその広い空間の端。まるで一服するために作られたようなスペースにである。

「……………ん」

視線をチラツと横へずらしてみれば、たくさんの教師たちが忙しく動いている。

その光景を目で追いながら、俺は目の前に用意された白いカップを口元に触れさせた。

「（ズズツ、ん、えっ？ なんじゃこりや、変な味だなあ）」

予想と違った味と風味に顔をしかめつつも、構わず喉へ通す。

不味くはない微妙な味なのだが、分かるのは初めて味わう奇妙な飲み物だということ。

紅茶に近い気もするが果たしてどうなのだろう。

「……………ふはあ、呼び付けたくせに待たせてすまんかったな生徒タクマよ」

「あっ、おはようございます 크리스先生」

ローブのような白衣を纏い、長い金髪を2つに束ねたちっこい少

女。

その声を耳に入れるや否や傾げている首を戻して朝のあいさつを交わす。

同じ白いカップを手にしているのを見るに、どうやら彼女も同じものを飲んでいるらしい。

「うむ、おはよう。では早速だがこうして呼び出された理由はわかるかな？」

このクリス先生から呼び出しの連絡をもらったのは昨夜のこと。メールにて『明日の8時10分に職員室へ来い』とだけあった。理由は明記されていなかったが、大体の予想は付いている。

「はい。進級試験、のことですよね？」

「ふふつ、よしよしちゃんと覚えてはいたようだな」

どうやら当たっていたらしい。ま、そりゃ覚えてもいるだろう。その試験のために、俺は毎日あなたからハードな鞭を打たれ続けたきたのだから。

「……ラファエゼを生成すればよかったんですよ。やり方がよく分からないのですけど」

いつまでも満足気な笑みを浮かべている担任へ話の続きを促す。

「それを今から説明しようとしていたのだよ。ま、もっとも魔法のように明確な数式や呪文があるわけではないがな」

「ええ、知り合いからも“感覚的なもの”とだけは聞きました」

「その通りだ。身体に巡るエーテルを片手に集め、さらにそこから外へ押し出す――」

そう言葉を紡ぎながら、クリス先生は横へ伸ばした右手へ光を収束させる。

光の粒子は色を赤く染め、やがて一本の長い槍へと姿を変えた。

「言葉の上では簡単だが、やはり慣れるまでは厳しいものがあるだろうな」

担任はニヤリと顔を歪ませて顕現させた物騒なものを霧散させる。その紅い瞳は『お前もやってみればどうだ?』と語っていた。

「そうですねえ。もし今できたら楽なんでしょうけど」

たった今先生がやったように右手を伸ばす。

そして目を閉じ、身体に流れるエーテルを感覚で捉え、その手へ集めていく。

こうやって集中している間に、少しエーテルとラファーズの話をしよう。

まず生物の生命力と定義されている原初の力。それがエーテルだ。そして唯一魔力をコントロールできる力でもある。

それによって人は魔法を行使できるし、また生命活動をしているのだ。

一方ラファーズとはこのリミシアル界が開発した魔力媒介。エーテルを体内から取り出し、そのまま物体化させたものがそれだ。

魔力を制御するエーテルそのものが媒介になっているため、普通材料にされている魔石や金属よりも相性がいい。

そんな大層なもの作るのが俺の留年を回避する唯一の道らしい。そう、つまり時期外れの転入生である俺への進級課題なのだ。

で、今それを試しに実践しているのだが……。

「くうぬうつ、右手に集めたのは良いんですけど、これを押し出すってどうすればっ!？」

とてもとても苦戦していた。

右手にかかる不可思議な圧力に表情を歪ませる。

「そのままさ。体の外へ押し出す。まあそこが感覚で難しいところなんだが」

「ちょ、適当すぎますよっ! はあ、はあっ、ぐぬぬ……」

理不尽なアドバイスに仕方なく従って、必死に溜まったエーテルを押し出そうとする。

くっ、なんか変な汗出てきたけど拭っている余裕なんぞない。

そんな頑張りのおかげか僅かながら小さな光が右手に集うが。

「——あいたッ!? い、いてえ……」

同時に俺の集中力も切れてしまい、直後ビリッと痺れるような痛みが襲った。

恐らく圧力をかけていたエーテルの反動が何かなのだろう。

「ふん、まあ世の中そんな都合良くは行かないということだな」

「ええっ!?! やらせておいてそんな言い方は非道いですよ、まっ

たく」

最初から期待していなかったかのようなちびっ子担任へ非難の声を上げてやる。

「はて、私は一言もやれとは言っていないぞ？」

「いやいや思いつ切りそんな目をしていたじゃないですか」

惚けないでくださいと残っていた謎の飲み物を一気に飲み。
ううっ、やっぱり御世辞にも美味しいとは言えない味だ。

「ほお、お前それがいけるクチか。やっぱり変人だったな」
「……どういう意味ですかそれ？」

聞き捨てならない台詞に俺は鋭い眼光を担任へ放つ。

「これは私が気に入っている紅茶なのだが、誰に淹れても不味いだの泥水だの大不評なんだよ」

さ、流石に泥水とまでは行かないと思うが……。
つか紅茶で合ってたのかコレ。

「中には戻した奴もいたな。まったく、この上品な味が分かんとは可哀想な奴らだよ」

「事情はわかりましたけど、何で俺が変人呼ばわりされないといけないんですかっ！？」

「普通の人は一杯飲んだだけでダウンする。だがお前はそれを全部飲み干したときた」

クククと嫌らしい笑みを浮かべて空になったカップを指す金髪少

女。

ひ、非道い。変人扱いはまた別として、そもそもそんなものを飲ませるなんて。

俺は運良くそこまで不味いとは感じなかったが、少し味覚が違ったら大変なことになっていたんだ。

「クククツ、まあ変人というのは冗談としてだ。話をもとに戻そう」

くそ、文句の1つも言わせないつもりか。

試験の話に戻ればこのことで口を挟み辛くなる。

「ラファアーゼ生成のやり方だが、今お前が試した方法で合っている。僅かながらエーテルが外に漏れただろ？」

「本当にちょびつとでしただけだね。本当にあと数日で作れるようになるんでしょか？」

「問題ない。私の熱心な指導のおかげでお前は十分に器を満たす身体になったはずだ」

「ね、熱心な、指導……」

ほとんどは仮想迷宮に送り込まただけで、直接魔法を教わったのは数回しかないような。

「ゴホンツ、とにかく最終段階まで来たのだよ。後は仕上げをするだけさ」

「仕上げ？ それってどういう？」

俺の白い視線を咳払いで誤魔化して、気になる一言を吐いた担任へ尋ねる。

「そうだな。単刀直入に言えば、私と魔法決闘をしてもらっ」

「……………へ？」

思いも寄らない言葉に間抜けな声を漏らしてしまう。
どういうことだ？　なんで先生と決闘することにな？

「簡単なことさ。お前ををこれでもかと痛め付けるんだよ。意地で
モラファーズを顕現させなければならぬほにな」

「えっ、なんですかその体育会系のノリはっ！？　今の方法をもつ
と反復練習するとか——」

「魔法とは違って感覚的なものだから、練習して習得できるとは限
らん。しかもかなりの時間が必要になるだろう」

な、なるほど、たしかに3学期というタイムリミットまでもう数
週間しかないのだ。

それに失敗した時に返って来るあの激痛。毎回耐えられそうにな
い。

下手をすれば倒れてしまいかも知れないだろう。

となれば、必然的に……。

「先生にボコボコにされるしかないんですね」

「そう嫌な顔をするな。もちろん結界の中でやるから怪我はさせん」

いや、でも痛みは味わうことになるでしょ？

そんな誇らしげに言われても全然安心感が湧かないぞ。

「とにかく実施日は来週の水曜の午前。授業はパスで、HRが終わ
つたら直接私と闘技場^{コロッセオ}へ向かうぞ」

「……………わ、わかりました」

「ふふっ、楽しませてくれることを期待しているぞ。生徒タクマ」

ゾクツとする眩きを耳に入れながら、俺は朝の教務員室を抜けるのだった。

・
…

「——ということがあったんだよ。ん、モグ」

その日の昼休み。今日の昼食は食堂ではなく天気の良い屋上でとることになった。

広げている弁当やパンは学園塔の購買通りで買ってきたものだ。

「なるほど、では来週が正念場になるんですね。ふふつ、頑張ってください」

今朝のことを簡単に話し終えると、ミアがそんなエールを送ってくれる。

可憐な天使の笑みは今日も健在のようだ。

「ありがと。だけど頑張っとうにかできることなのかねえ。かなり不安なんだが」

「そうね。少なくとも今までの迷宮探索なんかよりずっと痛い目に遭うと思うわ」

「あ、あんまり怖いこと言わないでくれよ……」

対照的に銀髪少女はいつもどおり人の悪い台詞を吐く。

今思ったのだが、こういうところ彼女は少しくリス先生に似ているかも知れないな。

ちなみにあの日以来、このトウカとの距離は特に変わらないでい

た。

「そういえば、お前らはどうやってラファールゼを習得したんだ？」

炒飯のようなパラパラしたご飯を吞み込んでから、眼前の3人へ口を開く。

前にも誰かに訊いたような気がしたが、もう一度でも損はしないだろう。

「どうやってって、別に特別な訓練はしてないよ。強いて言うなら気付けば作れるようになったって感じかな」

顔を見合わせるとテオが代表してそんな言葉を返す。

むむむ、やはりどこかで聞き覚えのある曖昧な答えだな。

「あ、でもそれは数年この世界で生活していたらの話だと思うけどね」

「そんなことだろうとは思ってたよ。はあ、やっぱり先生の言うとおりにはないと駄目なのか……」

あの人と魔法決闘なんて嫌すぎる。そもそも決闘になるのかすら怪しいものだ。

おとぎ話のなかでも吸血族はかなり強く描かれていたからな。というかそもそもあの人教師だし。

「ふんっ、少し痛いぐらいで留年しないで済むんならいいんじゃないの？ 怪我もしないんだし。楽なもんよね」

「お前関係ないからって無茶苦茶言ってくれるなよっ！？」

心無い銀髪少女にそう白い視線を返してやるが……。
本当にどうでも良さそうな顔で蒸しパンを頬張っていらっしやっ
た。

くっそ、いつか絶対にギャフンと言わせてやるぞ。

「はいはいどうどうっ！ 落ち着いてタクマ君、そしてトウカさん
は煽らない」

黒い雰囲気に包まれそうになったところで魔王様の仲裁が入る。
俺は馬かという突っ込みも言う元気も起こらなかった。

落ち着いた色の石畳と木々の緑、そして名も知らぬ色鮮やかな花
々。

暖かな日差しを浴びながら、たくさんの学生がその道を歩くのが
覗けて。

あれからしばらくの後、俺は落下防止の為に張られた透明な魔法
障壁越しに1人外を眺めていた。

この屋上に上ったのは初めてではないが、こうゆつくりと景色を
見下ろすと新鮮な気持ちになる。

「（にしても、今日も相変わらずいい天気だなあ。おっ、綺麗な鳥
も飛んでる——）」

見上げた蒼天を駆ける青い子鳥に、この前同じく空を舞っていた
ミリオムの姿がふと頭によぎった。

そういえば、この世界は日本と違って飛行魔法の年齢制限がない
んだっけ。

高等部生なら皆使えるみたいだし、近くに習得しておかないとな。

「アンタ、あと10分で昼休み終わるわよ。そろそろ戻った方が――
――って」

そんなことを考えていると、後ろから銀髪少女の声が響いた。

「ちょっと、何ボーツとしてるのかしら。面白い物でも見つけたの？」

「あつ、いや別に。ただ空見てたら飛行魔法使えるようになりたいな
なつて思っただけだ」

呆れ気味な表情を作るトウカへ考えていたことを正直に話す。
ミリオムでも習得していたのだから、どうせコイツはさぞ余裕な
のだろう。

「……それなら、教育係に相応しい奴がここにいるわよ？」

『私はできるわ』という皮肉が飛んで来るかと思っただけだった。
少し間を置くと、銀髪少女は後ろを向いてその赤紫の眼光をテオ
へと向けたのだ。

えっ、テオがか？ それってどういう……？

奥でははと小さな笑い声を漏らす彼に、俺は訝しげに首を傾げ
る。

そして視界の端、天空を舞う青い小鳥はもっと高く蒼穹へ舞い上
がっていた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:5-2 【この蒼天を駆けたくて】

Episode 5-2 【この蒼天を駆けたくて】

開けられた窓から穏やかな風が吹き込む放課後の廊下。

教室から出た俺とテオはコツコツとその道を進んでいく。

目指している先は学園中心塔4階、仮想迷宮の入り口だ。ダンジョン

「しかし本当に驚いたな。テオがそんな有名人だったなんて」

「そんな、ほんのちよつと顔を知られているだけだよ」

またまたご謙遜を。そのちよつとが凄いことなんだろうに。

照れてはにかむ緑髪の男子生徒へ心中でそんな突っ込みを入れる。

さきほどの昼休み、銀髪少女トウカの提言で俺は彼に飛行魔法を教わることになった。

というのにもちゃんとした理由がある。

それは少し遠い話から始まるのだが、まあ聞いてもらおう。

このリユニシアル界には魔法を使ったスポーツが数多く存在している。

地球ならば怪我人死人が続出するようなものばかりだが、この世界にはそれを防ぐ空間結界がかなり発達しているため安心してプレイできるのだ。

例えばその中でも最も分かりやすいのは魔法決闘だろう。

結界がなければただの殺し合いであって、スポーツにはならない。他にも球技やら格闘技やらいろいろあるみたいだが、今は置いて

おいて話を戻そう。

そんなスポーツの中に飛行魔法を必須で使うものがある。

フルム
大空疾走という名前で、簡単にいえば飛行魔法で競うスピードレースらしい。

コースは仮想迷宮に作られているため、もちろん事故で怪我をしたり死んだりすることはない。

そして、なんとテオはそのスポーツの選手、しかも大会の常連入賞者なのである。

つまり彼は飛行魔法のプロフェッショナル。
教えてもらうにはこの上ない熟練者だろう？　それが理由というわけだ。

ま、別に教師の誰かに教わっても良かったのだが、彼の方が楽しくできそうだしな。

「つかなんでそのこと黙ってたんだよ？　今日だってトウカが教えてくれなかったら俺知らないままだったじゃないか」

「べ、別に隠してたわけじゃ……。なんか自慢みたいでしょ？　自分から言ったら」

「まあ確かにそう取れなくもないな」

もつともな意見である。そりゃ自分からは言い辛いかな。

「ま、とにかく今日はよろしく頼むよ。テオ先生」

「うん、任せて。絶対飛べるようにしてあげるからさ」

そう爽やかにウインクを返してくるのを見るに、やはり自信はあるようだ。

わざわざ時間を割いてもらうのだから、こちらも気合を入れて頑張らないと。

そんな決意を胸に、仮想迷宮入り口へのポータルをくぐるのだった。

入った先は独特の雰囲気のある色鮮やかなホール。
中にはもうたくさんの学生たちが迷宮へと繋がる魔法陣へ飛び込んでいた。

「早く来たはずなのにやたら混んでるな。皆そんなに魔物を狩るのが好きなのか？」

「あはは、まあいい運動にはなるからね。それにストレス発散にも」「な、なるほど」

そんな会話を交わしながら受付へ向かう。

仮想迷宮は放課後の間解放されているのだが、その運営は生徒会が担っているらしい。

役員に言って、ダンジョンを作るナビを借りる仕組みになっているのだ。

「あら、誰かと思えば転入生クンとテオじゃない」

「うん？ あつ、リアさん」

受付にいた数人の生徒会の面々の中から、1人見知った顔の少女が声をかけてきた。

以前生徒会室で紅茶をご馳走してもらった彼女だ。

あの時と変わらず長い茶髪のツインテールを靡かせている。

「あ、あれ、2人とも知り合いだったのかい？」

「ええ。つい最近縁があったのよ」

少し驚いたような声を出すテオヘリアさんはナビを手渡しながら
そう答えた。

そのやり取りの様子を見るに、どうやら2人も顔見知りのようだが……。

「——へえ、中等部の時のクラスメートだったんだ」

実際に尋ねてみるとそんな事実が分かった。

ちなみにトウカやミア、ミリオムも同じクラスだったそう。

「そゆこと。だからあなたの面白い情報もたくさん入ってくるのよね」

「ど、どういうことだよそれ？」

「ふふっ、例えばこれから飛行魔法をお勉強する、とかかしら」

えっ、なんでそのこと知ってんのこの人？

悪戯な笑みを浮かべる少女へハテナマークを浮かべていると。

「どうせトウカさんから聞いたんでしょ？ それ以外に発信源なし」

「あらら、テオにはバレちゃってたか。まっ、そういうことよ」

彼女の言葉に髪の毛を掻いて溜息を吐く。

またアイツが元凶か、あの性悪銀髪少女め。

「んで、リアさんがわざわざそれを俺に言ってきたってことは何か

意味あるのか？」

「鋭いわね転入生。そうよ、君のためにちょっとサービスをしておいてあげたの」

「サービスだって？」

少し得意げな顔をしている彼女の視線を追う。

その先はテオが手にしているナビへと向けられていた。

「あつ、ホントだ。もうエリア設定されてるよ」

「ってことは、まさかサービスって、先にダンジョンを作ってくれたってこと？」

「大正解。飛行魔法には最適のエリアなのよ、そこ」

自慢気にそう言い放つリアさんに軽く礼を言ってから、俺とテオはダンジョンへと転移するのだった。

わざわざ仕事中に用意してくれるとは……。

うーん、生徒会の仕事って暇なのかねえ？

・
…

「……………で、どこなんだよここは」

魔法陣へ飛び込んだ先に広がっていた景色に1人そんな言葉を漏らす。

見渡す限りスカイブルーな背景色とまるで果てのない空間。

そこかしこに半径2メートルもない浮島があつて、その下にはフワフワと浮かぶ白い雲が。

恐らく高所恐怖症の人が見たら卒倒するような光景だろう。

「どこかの浮遊島エリアをモデルに作ったみたいだね」

特に驚いたような様子もないテオの言葉にもう一度景色を見渡してみる。

浮遊島、天空に浮いている大地と島々。

どという原理でこうなってるんだよ。完全にファンタジーじゃないか。

何だかんだ言って今までの地球にも探せばありそうなエリアだったのに。

今回のこれは、明らかに洞窟や草原を凌駕していた。

「つか落ちたりしたらどうなるんだよコレ」

「――試してみたらいいんじゃないかしら。えいっ」

「え、その声リアさん？　ってうわあっ!？」

楽しそうな声の茶髪ツインテールに背中を強く押されてしまった。いや、そもそもなんでアンタまでダンジョンの中に入ってきてるんだ!？

そんな突っ込みや悲鳴を上げる暇もなく、俺の体は重力に従って頭から落下していく。

「（ちよっ、いくら仮想迷宮でも地面に墜落したらヤバいんじゃない…）」

怪我はしないと言っても、それなりの痛みを感じる仕組みになっている。

多分、いやかなりのダメージを受けることになるのではないだろうか？

体中に受ける風の抵抗に目を瞑りながら、そんな恐怖心を抱いたが、なぜか急にごうごうと吹き付ける風が止んで。

同時に体がフワツと浮いたような奇妙な感覚に包まれた。

「あ、えっ……？」

ゆっくりと目を見開くと、また不思議なことに緑の芝生に寝転がっていた。

あ、あれ？　ここは地面じゃないか、一体どうなってるんだ？　混乱する頭で体を起こしてみれば、目の前にニツコリと微笑む突き落とした張本人が。

「ほら大丈夫だったでしょ。落ちると途中でここに帰ってくるように作られてるの」

「だからって、いきなり突き落とさなくてもいいだろうっ！？」

彼女の言葉で状況を理解し、咄嗟に非難の声をぶつける。

まったく、どこかの銀髪少女のような真似をしてくれるな。

「そ、そんな怒らないでよ。言葉で説明するより早いと思ったからね？」

ね？　じゃない。下手をすれば高所恐怖症患者になってたわ。

「それで、どうして着いてきたんだ？」

「そんなの面白そうだからに決まってるじゃない。ああ、生徒会の仕事なら大したことないし大丈夫よ」

いやそこまで聞いてないけど。つかやっぱり暇なんだな生徒会。

「——よし、じゃあ早速始めようか。タクマ君これ持って」

そんな俺とリアさんのやり取りに苦笑いを向けながら、テオはそう言っ一本の長い杖を手渡してきた。

どうやら空間魔法を使っ取り出したらしい。さっきまで持ってなかつたからな。

「う、うん。ええっと、なんなんだこれ？」

1メートルはありそうな漆黒の杖を両手に受け取り、何なのか尋ねる。

よく見れば先端に丸い翡翠色の魔石が埋め込まれていた。

「スカイロッド。飛行魔法をサポートするための魔法具だよ」
アーティファクト

「飛行魔法のための魔力媒介？　ってことは、これに跨っ飛ぶわけだな」

「そっいうことさ。いきなり素手で飛ぶのは難しいからね。ま、君なら数時間でそれなしでも飛べるようになると思うけど」

『さあ乗っってみて』と彼に促されるままロッドに跨った。

お尻を付ける場所は少し広くなっいて、とりあえずは座りやすい。

「じゃあ次は魔法構成式だ。安定感のあるやつを用意しておいたよ」
フォーミュラ

さらに彼は生徒証を起動して、そこから紋章と式とが記されてい

る画面を見せてくる。

俺はロッドに跨ったまま顔だけを寄せてその式を頭に並べた。

「（なるほど、やはり飛行魔法らしく風の魔力を使うみたいだな）」

うん、大丈夫だ。全然難しいフォーミュラじゃない。

せいぜいファイアボルトやフリーズリコシエットと同じレベルの魔法だろう。

「どうだい？ わからない所とか問題はないかな？」

「おう、多分行けると思うぞ」

「そう良かった。それじゃ発動させてみてくれるかい」

了解と返して、ロッドの先端を握る両手に力を込める。

『まずは、Enchan風魔力装填………』

飛行魔法を行使する前の最初のステップ。

大気中の魔力の中から風属性のそれを集め、身体へと纏せて。

『安寧の風、飛べない小鳥に其の翼を授けよ、アーレクラージュ！』

覚えたばかりの式を頭に展開させ、記してあった呪文をそのまま詠唱した。

そしてロッドを握る両手から集めた魔力をその中に浸透させていく。

それと同時に翡翠色の魔石から小さな輝きが放たれて。

「お、おおっ、飛んでる！？」

フワッとロッドが浮かび上がり、ほんの数十センチほど足と地面の間に隙間ができた。

「よしよし、ちゃんと成功したみたいだね。後は君の感覚でコントロールできるはずさ」

「そうなのか？ やってみるよ」

頼りなくふわふわ浮かぶロッドに身を任せ、浮遊島の上をゆっくりと旋回してみる。

なるほど、頭に浮かべた方向とスピードで飛べるようだ。

「ん、案外簡単にできるもんなんだな……。もう少し苦戦するかと思ってた」

そんな言葉を漏らしながら、ロッドを2人の前で静止させると。

「これで終わったわけじゃないよタクマ君。まだまださ」

「そうよそうよ。せめてこんぐらいは飛べるようにならないとねっ！」

「えっ、なに？」

横からそんな声を放ち、リアさんが媒介を使わずに飛行魔法を發動させる。

そして瞬く間に数十メートルの高さまで舞い上がって行ってしまった。

まあ確かに、飛行魔法というぐらいだからあのくらいは飛ばないとダメか。

「追いかけないのかい？ いい練習になると思っただけど」

「あ、ああ。わかってる……」

ただ見上げているだけの俺に尋ねてくるテオへそう答え、渋々両手に力を込める。

怖いなど弱音を漏らすわけにも行かないし。

俺はリアさんのいる天空に狙いを定め、飛翔の命令をロッドに下した。

すると見る見るうちに高度が上がっていき、浮遊島に立つテオが小さく見えてくる。

蒼穹から吹き付ける風も強さを増していった。

「（うう、やっぱり結構怖いかも。人間って本能的に高いところは苦手だしなあ）」

下を一望して震えながらも、なんとかリアさんの傍まで辿りつく。ロッドに跨る俺とは違い、素手で空を舞うその少女は悪戯な笑みを浮かべた。

「ふふっ、ビビりながらも来たわね。どう初めて空を飛ぶ気分は？」

「最高な心地だよ。よって決してビビってなんかいないぞ俺は」

「……トウカの言うとおり、分かりやすい男だわアンタ」

ぐっ、分かっているとも。今俺の顔が引きつっているくらい。

「ま、それは別にいいとしてさっさと慣れなさい。スカイロッドぐらい軽く扱えないと素手じゃ飛べないし」

「そりゃそうだけど、そんなすぐには無理だよ」

少し高いところで短いスカートを揺らすリアさんにそう返す。この高さで静止しているだけでもういっぱいいいのだ。

「それじゃあ慣れるように訓練しないとね。ていつ！」

するといきなりリアさんに強めのデコピンを喰らわせられてしま
う。

「いてっ！？　ちよっ、いきなり何すん——」

「ふふん。悔しかったら私に追いついてくることね」

片手を伸ばして捕まえようとするもすり抜けられる。

振り向くと舌を出して挑発する茶髪ツインテールの姿が。

「なるほど、上等だッ！」

妙なやる気に駆られた俺は、同じくニヤリと口元を歪ませてロッ
ドに力を込める。

次の瞬間、天空に俺という軌跡が軽やかに描かれた。

「……あはは、リアさんに指導役取られちゃったな。でも大丈夫が、
初期段階は彼女に任せても」

そんな光景を下方の浮遊島から見上げていたテオは、苦笑してそ
う呟くのだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:5-3 【自信を持つて】

Episode 5-3 【自信を持つて】

無数に散らばる浮遊島と果てしなく高き蒼の世界。

夢のようでそうではない、そんな空間を俺は駆けていた。

蒼穹より吹き付ける風に短い黒髪を撫でられながら。

「——どりやつせえいッ！」

そんな掛け声を合図に頭の中で加速の命令をロッドへ下す。

同時に翠の魔石は光を放ち、魔法杖はそのコマンドを静かに受け入れた。

ビュンビュンと風を切る音とその抵抗がだんだんと激しくなっていく。

この空飛ぶロッドに跨ってから、かれこれもう数十分は経っただろうか。

リアさんとの“空中追いかけっこ”は未だに続いていた。

「ふうん、結構追い付いて来られるようになったじゃない。成長した？」

急加速で迫る俺の気配を察してか、少しスピードを落としたリアさんがこちらに目をやって尋ねる。

彼女の長い茶髪ツインテールは流れる風に大きく揺れていた。

「ま、お陰さまでな。これの扱いには大体慣れたよ」

不敵な笑みと汗とを浮かべながら言葉を紡ぐ。

落下に似た急降下、ジェットコースターのような宙返り。

そんな複雑な軌跡を描きながら空を舞う彼女の後に続くのはそれはもう大変だった。

見よう見まねでやってみたが、軽く10回はバランスを崩して墜ちてしまったからな。

だがやはり人間やってやれないことはない。

何十回もトライしている間に体が自然に覚えてくれる。そして…。

「油断したなりアさん。これで捕まえたぞっ」

「ひゃっ!？」

その証拠が今のこの状況。

ロッドを彼女の横へと並ばせ、右手を伸ばし、小さな肩に力強く触れる。

リアさんは可愛らしい悲鳴を上げると口元を歪めて視線をこちらへ向けた。

「ふふっ、やるじゃない。これなら次の段階に行っても問題なさそうね」

「次の段階ってロッドなしか？ 素手で飛ぶなんてちょっと不安だな……」

「なに弱音吐いてんのよ。これから本番だつてのに」

そう、ここまでは前半戦。ゴールは媒介なしで空を飛べるようになることだ。

テオ曰く、ロッドを使いこなせるようになれば簡単に習得できる

らしいが。

日本じゃかなり難しいと言われていただけに、やはり少し気が引けてしまう。

そんな一抹の不安を胸に抱きつつ、最初にいた少し広めな浮遊島へ降り立つ。

追いかけてここを下から観戦していたテオは、ロッドに跨る俺を見てにっこりと微笑んだ。

「いやぁお帰り。下から見てたけどすっかり鍛えてもらったみたいだね」

「まあそうらしいな。思わぬ助っ人のおかげで気付いたら自然にマスターできてたよ」

そう横目でツインテール少女を一瞥して黒のロッドをテオへ返す。

「へえ〜。なら転入生くん、素敵なお礼を楽しみにしてるわね」

「えっ、なにそれ今ので受講料取り立てるつもりなのか!？」

「あらあら本気にしないで冗談よ。じゃ、私はそろそろ仕事に戻るから、続き頑張りなさい」

リアさんは小悪魔な表情を浮かべると芝生の地に魔法陣を紡ぐ。

そしてこちらが礼を言うのも待ってくれないまま、その光へと消えてしまった。

「（ええーっと、暇じゃなかったのか？ 生徒会の仕事……）」

結局どっちなんだと突っ込みたい。

初めて会ったときは落ち着いた雰囲気でお嬢様っぽい感じの人だ

と思ったが、今日ので少しイメージが変わったかも。

無邪気なミリオムと不敵な冬霞トウカを足して割った、みたいな？

ま、それはどうであれ今度会ったらちゃんとお礼を言っておこう。

「——よし、それじゃあ早速続きを頼むよテオ」

「あ、うん。別にいいけど休憩はしなくていいのかい？」

「そんなに疲れてないから大丈夫だ。それに鉄は熱いうちに鍛えておいた方がいいだろ」

やる気に満ちた眼光を送り、少し得意げな顔をしてみせる。

今ならロッドを使った飛行の感覚が鮮明に残っているからな。

その応用である“媒介を使わないで飛行”も案外上手い具合に成
功できるかも知れない。

加えてこの仮想迷宮ダンジョンが使える時間はあと数時間しかないのだ。
それまでには習得できるように気合を入れないと。

・
…

「魔法構成式はさつき詠唱してもらったのと同じだよ。ただ魔力を
送り込む場所が違うだけ」

向き合うテオがそう説明しながら実際に手本を示す。
すると爽やかな緑髪を靡かせる彼の全身へ、優しい風の魔力が収
束していくのが分かった。

なるほど、ロッドではなく自分の体に魔力をエンチャントするわ
けか。

『行くよ、アーレクラージュ!』

そして魔法名を唱えると、穏やかな笑みを浮かべる彼の両足がフワッと地から放れる。

「……こんな感じ。空中での動きは君がさっきロッドを使ってた感覚と同じさ」

「うん、分かったやってみる」

方法を理解した俺は早速目を閉じて魔力のコントロールに集中する。

体内のエーテルを駆使し、空中に霧散するそれを体に纏わせるのだ。

ちなみに魔法自体はさつき行使したのがまだ持続しているため新たに詠唱する必要はない。

「タクマくん、そんなに力はいれなくてもいいよ。リラックスしてね」

「あ、ああ……」

「そうそうその調子。後は魔力が霧散しないように安定化させるだけだ」

テオのアドバイスを受け止めながら、徐々に魔法を発動へと近付けていく。

右手の甲には金色の小さな魔法陣が浮かび上がり、微かな光を漏らしていた。

よしよし、いい感じじゃないか。

「なあ、そろそろ行けそうな気がするんだが」

「そうだね。僕もこれくらいで十分だと思うよ。さあ、飛んでみて」

テオの言葉に頷き、その場で軽く小さなジャンプをする。

先ほどのリアさんとの追いかけてで研ぎ澄まされた飛行の感覚を抱きながら。

すると――。

「……わっ、いきなり成功！？　なんか普通に飛べたぞ？」

「あはは、そりゃ構成式もやり方も感覚も間違っていないからね。成功して当然さ」

「そ、それはそうかもしれないけど」

左右前後に軽く飛行のテストをしながらうーんと唸る。

なんとというか、その、あれだ。拍子抜け。

何回も言うが、日本での“空を飛ぶ魔法”は年齢制限があるくらい難しくって危険なのだ。

数年間命懸けの訓練をしても絶対に習得できるとは限らない。

そんな魔法を、俺は1時間も経たない間に習得してしまったことになるのだから。

「え？　んー、たぶんそれは君がいた世界の魔法構成式がイマイチな出来だったんだよ。不完全な構成式じゃ当然不安定な魔法しか行使できないからね」

呟くように疑問を漏らすとテオがそんな言葉を返してきた。

なるほど、確かにそう考えれば納得できる。

どおりでこの世界じゃ中等部の生徒でも簡単に習得できるわけだ。

「それでどう？　ちゃんと上手くコントロールできるかい？」

「ああ、大丈夫だ。飛翔も静止もちゃんとできるよ」

改めてこの世界と地球との差に感心している間に、もう十分に飛行魔法をコントロールできていた。

加速したり宙返りしてみたりするとすごく気持ちがいい。

「それはよかった。よし、じゃあ練習がてらもう少し高いところまで飛んでみようか」

まるで自分のことのように喜んでくれる彼の提案を受ける。

10秒もかからない内に高度を上げ、数えきれない浮遊島を一望できるところまで来た。

ロッドに跨っていたときは恐怖心で見る余裕もなかったが、今もう一度見下ろしてみるとなかなかの絶景だ。

「はあ、幻想的な景色だなあ。現実にもあればいいんだけど」

「――へっ？」

目を細めてそう感嘆の声を漏らしていると、隣のテオが素っ頓狂な声を上げた。

あれ、俺は今何か変なことでも言っただろうか？

「あの、タクマくんさ、もしかして浮遊島って現実には存在しないって思っちゃってたり？」

あー、分かった。分かったぞ。理解してしまった。

苦笑を浮かべるテオの顔と言葉から考えて、もう確実だ。

「その物言いはあるんだな、浮遊島」

「う、うん。そりゃもう盛大にね」

互いに小さな汗を額に浮かべてそんな言葉を交わす。
参ったな、こんなファンタジックな光景が現実にあったとは。
……いや、それ以前にそもそもここは異世界だったか。

「ほらここ。この大きい大陸がそれさ」

生徒証の機能にある世界地図とガイドマップ。

その南東にある、大きく“ミラルム”と表記されている大陸をテオが指差した。

地図を見るにこの学園のあるヴェルエス街より数倍は面積があるように見える。

「これが浮遊大陸ミラルム……」

そのエリアをタッチすると何枚かの大きな写真が虚空に浮かぶ。
無論それらはすべてその大陸の風景であつた。

それは島ではなく大陸。

何がどうなっているのか、明らかに巨大な大地が浮いているのだ。
その浮遊大陸の周りにはたくさんの浮遊島も写っている。

「すげえ、高い建造物もいっぱいある。上には普通に人が住んでるのかよ」

俺は夢中になって地球には存在しなかった“浮遊大陸”のガイドや写真に目を通す。

隣の空中に浮かぶテオが苦笑しているが今は構わないだろう。

『リミシアル南東の海洋に浮かぶ浮遊大陸ミラルム。賑わしい街並が続いているが、一方で自然が非常に豊かであり“空中庭園”とも呼ばれている。また過去は天界であったため、古代神族の城塞や遺跡が数多く存在する』

すらすらとそんなガイドを読んでいると、一つ気になる単語が出てきた。

「……なあテオ、ここに書いてある天界って何のことなんだ？」
「え？ あっ、そうか、君はその辺のことともよく知らないんだっかね」

トントンと俺に肩を叩かれたテオが一人納得して口を開く。

「天界っていうのは簡単にいえば神族の住んでる国のことさ。同じように魔族は魔界、人族は人界、竜族は竜界だよ。もっともこの世界じゃ全部1つにまとまってるけどね」

「へえ、そうだったんだ」

ということは、昔はこの平和な世界にも種族対立があったわけか。やっぱり戦争とかが勃発していたのかな？

ま、その辺はまた人に尋ねるか歴史書でも見ておこう。

青空の中で寝転がるようにしてガイドの続きに目をやる。

『よって随一の観光エリアとされている。また一年を通して地上よりも気温が涼しく、夏には避暑地としても最適——』

文字の横には白を基調にした神秘的なお城と本当に涼しそうな常緑の空中庭園の写真が添えられていた。

おおつ、すごいな。なんだか行きたくなってきたぞ。

「あはは、転移門^{ゲート}を使えば一瞬で行けるよ。それこそ国境なんてないからね」

「そうだったな。よし、余裕ができたら行ってみるか」

「あつ、そういえばミアさんの実家ってミラルムにあるらしいよ。今度お宅訪問していいかって訊いてみたら？」

実家っておい。なんだ、あの娘は遠路はるばるこの学園に入学してきたのか？

ガイドを見る限りミラルムにも大きな学校はあるはずだけど……。

「君は気付いてないかも知れないけど、リユミシアルって世界そのものの名前が付いてるとおり、トップレベルの進学校なんだよココ。僕たちみたいに異世界から来た転入生は別だけど、元々この世界の生まれの人は入学試験を受けないといけないんだから」

疑問の色を浮かべる俺を察してテオは少し真剣な顔で言葉を紡いだ。

おいおい、ずっと大きな学園だとは思っていたがまさかトップ校だったとは。

「そ、それは知らなかったな。つか俺らは入学試験受けなくていいってのはどうして？」

「異世界からわざわざ連れてこられるんだから、基本的にハイスベックなんだよ異界生は。だから試験はパスで、適当な学校に入学や転入ができるわけ」

「んー、異界生がハイスベックねえ……」

目を細めて再びむむむと唸ってみせる。

確かにこのテオやトウカは頭よさそうだし、実際に優等生だが、同じ異界生でも講義をいつも寝て過ごしてるミリオムとラグナは余りそうには見えないぞ？

「そ、それはあの2人がサボってるだけで、やる気を出せばきっと凄い、はず。……うん」

テオよ、視線がめちゃくちゃ乱れてるぞ。
どうやらあの2人に関してだけは例外のようだな。

「と、とにかく、基本的にはみんな輝くモノを持つてるの。君もその異界生の端くれなんだから、ちゃんと才能はあるさ」

「果たして本当にそうならいいんだけどな」

「嘘は言ってないよ僕。実際に飛行魔法、短時間でちゃんとマスタ―できてるじゃないか。もっと自信を持って！」

そうニコツと見ていて嬉しくなる笑みを向けてくれる。

「……そうだな。ありがと、何かよく分らんけど来週の試験頑張れそうだ」

「ははっ、タクマくんなら絶対合格できるさ。まあ少しは痛い目に遭うだろうけどね」

「ト、トウカじゃないんだからお前まで怖いこと言っなよ!？」

少し黒い声に非道いぞと突っ込みながら思考する。

「（この世界に来て最初の壁だな）」

せっかくクラスにも馴染めてきているのだし、やはり留年はしたくない。

テオやトウカの言うとおり辛い戦いになるのだろうか、何としてもこの進級試験を乗り越えなければ。

頑張ろうと改めて気合を入れてから、手元にある生徒証^{ナビ}で現時刻を見やる。

「もう夕方か。いい時間だ、撤収しようぜ」

「おっけ了解、お疲れ様だったねタクマくん」

「お前こそ。今日は本当に助かった、ありがとう」

そんな礼の言葉をかけてから浮遊島エリアの仮想迷宮^{ダンジョン}を離れる。魔法陣で転送された先のホールに付くと、早速受付にいるリアさんへナビを返した。

「——ふうん、無事に成功したんだ。ま、最初にやった私の指導のおかげよね」

彼女にも報告してお礼を言うと、少し気恥ずかしそうにどこかホッとした表情を浮かべてくれる。

世話になった2人には今度昼食代でもおごらないといけないな。

割と真面目にそんなことを考えながら、茜色の光が差し込む帰り道を歩いていた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:5-4 【進級試験を突破せよ!】

Episode 5-4 【進級試験を突破せよ!】

ついにやってきてしまった進級試験当日の朝。

「こ、これは不吉だと言えないぞ……」

今日の天気は少し雲行きが悪いようで、灰色に染まった空が薄暗い。

この世界に来てから初めて見る空模様である。

いつも無駄に晴れていたのになあ。よりによってこの日に曇るなんて……。

「あつ、おはようタクマくん——ってなんか元気なさそうね?」

「おいおい運命の日にそんな辛気臭い顔すんなっつーの。もっと気合入れろって!」

ぼんやりと教室の窓の外を眺めていると、何人かのクラスメートたちにそんな声をかけられる。

「辛気臭い顔で悪かったな。こっちはプレッシャーで押し潰されそうなんだよ」

天気もまるで狙ったみたいに暗いし、と重い息を吐いて言い返す。

どうして清々しい気分になどなれようか。

それどころか緊張と不安が高まっていくばかりである。

「た、確かにいつもより空が暗いとは思うが考えすぎだろ。杞憂つてやつだ」

「果たしてそうならいいんだけど」

小さく唸る俺に氣にするなとクラスメートAが笑いながらバンバンと肩を叩く。

つか痛い。くそ、なんだか余計に心配になってきたぞ。

「——あら、辛気臭い間抜け面。朝っぱらから嫌なモノを見てしまったわ」

窓から離れて自分の席へ向かおうとすると、今度は透き通るような少女の声が飛んできて。

クラスではちっちゃめの身長に赤紫の瞳と銀の髪。

反射的に振り向いて見ればその主が嫌らしい笑みを浮かべていた。

「ぐっ、お前こそ朝から不快なご挨拶だな。冬霞^{トウカ}さん？」

「わかつて言ってるわ。ちなみに一応は本当のコトよ、鏡でも見てみなさい」

「そんなに酷いのか俺の顔は……ってそうじゃない！」

ブンブンと顔を横に振って銀髪少女から目を逸らす。

まったく、朝っぱらから嫌なモノを見てしまったのはこちらの方だ。

「挨拶はそれだけか？ 冗談以外の用がないなら俺は行くぞ」

どうせ無いのだろうし、その言葉を紡ぎながら足を動かす。が、2歩ほど進んだところで右の手首が温かく柔らかな感触に包

まれた。

なんだと驚いて目をやればトウカがその小さな手で握っていて。

「待ちなさい。少しアンタに伝えておくことがあるわ」

鋭い眼光を見るに、どうやら今回は冗談ではないらしい。

妙な緊張感に唾を呑みゆつくりと俺はトウカへと向き直る。

「もしアンタが今日の進級試験に落ちてしまったら、大変なことになる」

「そりゃそうだ。留年なんてして誰かさんの後輩に成り下がったら毎日苛められそうだし」

「ふん、そんなチンケな問題じゃないわ。もっと大変なことよ」

割と真面目に考えていたことをバツサリと否定される。

本当に俺にとっては大変なことなんだけどな……。

「じゃあ何なんだ。そのもっと大変なことでやらを教えてくれよ」

嫌な予感がしながらも話の続きを促す。

すると周りに聞こえないようにするためか、トウカは俺の耳元に顔を寄せ――。

「とっても簡単なお話。留年なんかしてこれ以上私と実力差が付けば、アンタは一生私に勝てなくなるわ」

小さな小さな声でそんなことを囁いた。

なるほど、それは確かに大変なことじゃないか。

魔法決闘で彼女に勝たなければ、俺の消えた記憶と一連の謎は闇

の中のままなのだから。

「そうだな。ははっ、絶対合格しなきゃならん理由が増えたよ」

「ふふっ、それでいい。だいぶマシになったわ」

天気なんて関係なく頑張らないといけないなと笑っていると、吹き出すように銀髪少女が小さく咳く。

何がマシになったって？

「アンタの顔よ。さっきのはせつかく来た福が逃げるほど酷かったもの」

そ、そんなにか？ 確かに少し元気が無いような顔だったかも知れないが……。

背を見せて去っていくトウカを見送りながら、マシになったという今の顔がどんなものだろうかと思像する。

もちろん明確な答えが出るわけもなく、早々に朝のHR開始のチャイムが響くのだった。

「——今日も特に連絡事項はないのでHRはこれで終了だ。今日も一日大切にな」

摩くのは2つに束ねた長い金のツインテールと純白のローブ。

トウカと同じくちっこい背をした吸血族の担任はそう告げて俺に目配せをする。

真紅に染まった瞳から届いたメッセージは“来い”というシンプルなものだった。

「おつ、転入生様のご出陣だぞ！ 通られるその道を開ける下衆どもめ」

よいしょと重い腰をあげるとクラス中から激励と冷かしが混ざったような声が飛ぶ。

なんだろう、この嬉しいのに苦笑いが浮かんでしまう現象は。

「正念場だぜタクマっち。サクツと合格しちまえ……ぐがぁ」

「まあ適当にやってりやなんとかなるわよ。すう」

席の両側から半分寝ているラグナとミリオムの応援が聞こえる。笑みに歪んだ口元と半開きの瞳は覗けるが、お前らこっという時ぐらい体を起こしてくれよ。

視線と声援が向けられるままクリス先生の待つ廊下へ出た。

「さて生徒タクマ。運命の日だが気分はどうかな？」

「はい。正直さっきまでかなり不安でしたけど、アイツらのおかげで何とか頑張れそうです」

小さな笑みを浮かべて静かに教室の扉を閉める。

「ククツ、それはいい。なかなかどうして期待してよさそうじゃないか」

「ええ、留年はしたくないですからね。アイツらの後輩になるのも嫌です」

「そうか。よし、それでは早速闘技場^{コロッセオ}へ向かおう――」

少しそんな会話を交わしてから移動しようとする、急に閉めたばかりの扉が激しく開かれる。

ビクツと体を震わせてなんだと振り返れば、中からよく見知った顔が姿を覗かせた。

「ミア？ ど、どうしたんだよそんなに急いで」

トウカやクリス先生と同じ背に桜色のミニツインテールを揺らして。

ミアのいきなりの登場に先生と困惑していると、小さな汗を頬に浮かべたその天使はこちらを見据えた。

「い、いえタクマくんに大切なメッセージを伝え忘れていたので。2組全員からの伝言です。あなたが合格すればとっても楽しいご褒美を用意する、だそうですよ」

それだけ言うといつもの可愛らしい笑みを浮かべ、颯爽と教室の中へと戻って行ってしまふ。

な、なんだったんだ？

「楽しいご褒美って一体何でしょうね？ もう少し具体的に教えてくれればいいのに」

「ふふっ、合格してからのお楽しみということだな。ちなみに私も何なのかは知らんぞ」

「そ、そうなんですか。うーん、気になるなあ」

2人で謎のご褒美について考えながら、ゆっくりとコロッセオへの道を歩いていた。

・
…

第2クラスの教室を出てから数分後。

あれよあれよという間にコロッセオへと辿りつく。

ほとんどの学生たちは各々の教室で1時限目の講義を受けているため、屋外はとても静かなものだった。

「——よし、これで入って来れんだろう」

壮大な円形闘技場の真ん中で深呼吸していると、そんなクリス先生の声が耳に届く。

どうやら何かの魔法を使っていたようだが……。

「何をしていたんです？」

「いやなに、授業をサボって覗きに来るような馬鹿どもが入って来れないように結界を張っておいたのさ」

「ああなるほど……って結界を！」

あまりにもしれつと言うものだから流してしまいそうになってしまった。

地球では全く解明されていなかった光魔法。

その性質として空間操作や障壁魔法があるのだが、その難易度は他の魔法を遥かに凌駕している。

俺もこの世界に来て少しだけ知識を得たけれど、本当に小規模なものしか扱えない。

闇魔法も合わせて授業について行けないしな。

とにかくもそんな高度な魔法をこの巨大なコロッセオ全体に施したとなると……。

「（正気の沙汰じゃねえ。いや、やっぱり教師だけはあるってこと

かな」

すげえと感心しつつもこれから始まる進級試験に身震いをしてしまふ。

だってこんな人と魔法決闘するんだぞ？ どう考えても怖すぎる。

「さっ、準備も済んだことだし早速進級試験を始めようじゃないか生徒タクマ」

「は、はい。わかりました」

そんなことを考えている間に楽しそうなクリス先生の声が飛ぶ。
ぐっ、いよいよか。

「それで具体的に俺はどうすれば？」

「先週に言ったとおり私と魔法決闘するだけでいい。まあもつともお前は私の攻撃魔法に当たらないように逃げまわるしか無いわけだから、これと言って決闘にはならんのだがな」

ニヤリと相変わらず嫌らしい笑みを浮かべながら中央の一際大きなコートへ足を進める金髪少女。

決闘にもならない、か。この先生もなかなかキツイこと言うてくださるな。

言い返せないので乾いた愛想笑いで彼女の後に続いていく。

さて、歩いている間にこの進級試験の内容をもう一度おさらいしておこう。

目標はエーテルの高密度顕現体、通称ラファーズの生成だ。

先生と魔法決闘を行い、痛みというシンプルな刺激で生成できる力を呼び覚ます、らしい。

失敗すれば4月から新一年生として留年になってしまいが、逆に合格すれば転入前の単位とは関係なく二年生へ進級できる。

「（トウ力を倒すためにも留年するわけにはいかん。絶対に合格するぞ）」

そんな決意を抱いてクリス先生から数メートルの距離を取って対峙する。

一昨日ミアから教わった空間魔法で魔法銃を取り出し、戦闘の準備は完了だ。

「準備はいいようだな。ならばさっそく――」
「えっ、ちょっ!？」

試験開始の合図がかかるまでと力を抜いてリラックスしていると、唐突にそんな声が響く。

嫌な予感に目を見開けば、いつのまにか展開された青い魔法陣と妖しく微笑む金髪少女の姿があった。

おいおい嘘だろお!？

「ぐうつ、うつ!」

障壁魔法を張るという反射的な行動も間に合わず、紋章より放たれた氷の刃が俺の全身を貫通していく。

直後全身に襲い掛かる灼けるような痛みにギョツと顔をしかめた。

「ちょっと先生、いきなり攻撃なんてメチャクチャじゃないですかっ!？」

「ふふっ、なら今のが試験開始の合図にしよう。さあ続けるぞ」

俺の非難をそう一蹴りして、ちびっ子教師は次なる魔法を構える。こちらの回復を待ってくれる気はさらさら無いらしい。

『くっ、遮断せよエーテルバリアッ！』

「なんだそのペラッペラの障壁は。防御体勢のつもりか？」

来るべき魔弾に光の障壁を張る俺を見て、クリス先生はつまらなそうな声を漏らす。

彼女は溜息について詠唱を放棄すると、拳を握り――。

「こんなもん魔法を使うまでもないな」

「――んなッ！？」

そんな、バカなことが！？

目の先に突き立てられた小さな拳に目を疑う。

先生の放った右ストレートは、あろうことかエーテルバリアを突き破ったのだ。

「グッ、ガハッ、ゴホッ！　くっそいつてえ……」

それだけではない。俺はその衝撃で後方へ吹き飛ばされる。

受身を取ることも叶わずに全身を強く打ちつけてしまった。

まったく、あのちっちゃな体のどこからこんなパワーが出てくるんだ？

「ははっ、こりゃ予想してたよりはるかに圧倒的ですね。開始1分でもうバテバテですよ俺は」

「そう言っなよ。まだウォーミングアップだろう？」

悲鳴を上げる体に鞭を打って立ち上がる。

すると金髪の吸血族少女はすぐ遠いところで腕を組んでいた。
いや、俺がこんなところまで殴り飛ばされただけか。

「それに私も生徒相手に本気は出さないよ。あくまでも初歩的な魔法しか使わんから、精一杯抵抗してくれ」

「そりゃ言われなくても抵抗しますけど、ラファール生成はどうするんです？」

「もっと痛めつけてボロボロになってからだな。いい頃になったら指示を出そう」

なるほど、その指示が来るまでは先生直々の実戦訓練ということか。

勝てる気など全くしないが手加減はしてくれるみたいだし、少しぐらいは抵抗できるかも知れないな。

『さて、お喋りはこのあたりにしておいて続きだ。貫け、蒼穹の魔雷』
Lightning

思考する俺を他所に先生は魔力媒介もなしに素手で魔法陣を編み出した。

暗い大空に浮かび上がる巨大な紋章はバチバチと紫電を光らせる。

「（……上空からの電攻撃。速く動かないと撃ち抜かれちゃうな）」

魔法陣から読み取れる構成式からその攻撃パターンを把握すると、こちらもすぐさま対策を実行へ移す。

『翼を授けよ、アーレクラージュ』

先週テオから教わった飛行魔法をかけ、急いで地を蹴り駆け出した。

これを使えば数倍の速さで移動できるしライティングもなんとか撒けるはずだ。

すると案の定さっきまで立っていた位置に激しい魔雷が突き刺さる。

少しでも判断を誤ったり遅かったりしていたら直撃していたな。安堵すると同時に右手に握る魔銃に力を込めた。

「次はこっちの番ですよ先生ッ！」

大きな声でそうクリス先生へ宣言し、飛行魔法の付加された体で高く空へと舞い上がる。

瞬く間に電撃を生み出している魔法陣の傍へ接近すると、まずそれをチャージしていた魔力弾で破壊した。

「ほお、破ったか。というか知らん間に飛行魔法を習得していたのだな」

消滅した魔法陣を見てクリス先生はそんな感嘆の声とニヤリとした笑みを浮かべる。

これで少しは成長したと思ってもらえたかな。

「まだまだ行きますよ、Enchan Aqua水魔力装填……」

数十メートル上空に陣取り、白銀の魔銃へ水の魔力をエンチャントしていく。

同時に脳内であの得意な魔法構成式を組み立てて――。

『氷精の宿いし飛礫よ、我が仇敵を切り裂き屠れ。氷結の跳弾ツ！』
Freezericchohet

高らかに強化の呪文とその魔法名を詠唱してトリガーを引く。

直後生成された氷の飛礫は隙間ない密度でクリス先生へ襲いかかった。

「（最大限の強化もしたし、一発ぐらい当たってくれればいいのだけど……）」

迫る氷の魔弾に未だ腕を組んで嫌らしい微笑を続けるクリス先生。一抹の不安とでも言っべきか。その余裕な態度に嫌な予感が胸をよぎる。

対抗魔法で弾かれるか、それとも簡単に結界で防がれる？

そんな数多くの可能性を頭に浮かべながら俺は追撃の魔法を構えていた。

直後、目の前で起こるありえない現象に度肝を抜かれるのを知らないまま。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:5 - 5 【吸血姫より愛の鞭を】

Episode 5 - 5 【吸血姫より愛の鞭を】

地上の金髪少女を覆うように上空へ展開された青の魔法陣。
その紋章より放たれた氷塊の魔弾が音もなく一気に降り注ぐ。

「（まだ、動かないのか？）」

数メートル上空で静止しながら相手の動きを静かに伺う。

一体どうするつもりなのだろう？

結界を張るにせよ対抗魔法を行使するにせよ、早く魔法式を編ま
ないと間に合わない。

それなのに、この人は腕を組んでただ嫌らしく笑っているだけだ。

瞬く間に先生と魔力弾の距離は縮まっていくばかり。

そしていよいよ先頭の氷弾が彼女の体を捉えようとした、その時
――。

「えっ、なに！？」

思いがけないことが起こった。

クリス先生へ直撃する寸前で、氷の刃が突然ピタリと静止したの
だ。

しかもその後ろに続く残りの魔弾まですべて空中で動かなくなっ
てしまう。

な、なんだ？ 一体何が起こって――。

「ふふっ、そう驚くなよ。ただ私の固有結界に防がれたというだけの話だろう?」

「……固有結界、ですか」

楽しそうに見上げる金髪少女をキッと睨みつけて思考する。
固有結界といえば、無意識的に生成される魔力障壁だっけか。

「ああ。そして固有結界で防がれた魔法はその行使権が相手に移るのだよ」

「うわぁそりゃ非道いですね。その魔力弾全部先生に乗っ取られたというわけですか」

「そのとおり、こんなふうになっ!」

高らかなクリス先生の掛け声で俺の目の前にあつた魔法陣が先生の手元へと転移する。

続いて彼女に向けられていた氷の刃の先端が、ぐるりと俺へと向けられた。

こ、こりゃマズいんじゃないか……?

『まあとにかくは逃げるしかないよな。ファイアボルトツ!』
Fire Bolt

追撃のためにチャージしていた火炎弾を数発撃つてから後方へ飛ぶ。

あの最大限に強化された氷の魔力弾、恐らく岩でも砕けるレベルだ。

先生は容易く受け止めたみたいだけど、当然そんなもの俺の魔力障壁では防ぎ切れん。

だからできるだけ遠いところで回避するしかないだろう。

「甘い生徒タクマ。いくら逃げようとこんなに量があるのだから……。避けられんさ」

全速力で空を駆けていると、そう宣言するクリス先生の念話が頭の中で響く。

「くっ、もう来やがったか？」

嫌な予感に後ろを見やると氷の刃はすぐ後ろまで迫っていた。飛行魔法で加速してるのに。くそ、速すぎるだろ。

思いつ切り真横に進行方向を変えて魔弾をやり過ごす。

そのまま外れた氷の飛礫はコートに張られた結界にぶつかり消滅した。

だが安心は全くできない。先生が操れる魔力弾はまだ腐るほどあるのだから。

「えいつ、やつ、はっ——っ！ ふう、キリがないな」

「ほお、なかなかどうして頑張るじゃないか。そろそろ当たってくれてもいいのだぞ？」

「んなもん全力でお断りですよ」

キツパリそう言い放って延々と襲い来る魔弾を空中でかわしている。

こんなもん当たってなごたまるか。いくら結界の中でも直撃した時の痛みは計り知れない。

「だがこれで終わりさ。試験合格のためにもここでダメージを受け

ておけ」

そう言ってパチンと先生が指を鳴らすと急に氷の飛礫がその軌道を変える。

5つほどの氷塊は今までの直線ではなく螺旋状に迫ってきたのだ。

「んなつ、ちょ、こんなの避けられ——！？」

体を捻るだけでは避けきれないと判断し急いで降下するも、やはり遅かった。

自分で生成した氷弾は滑らかに俺自身の右胸を突き抜けてしまう。

「ぐあッ！？」

直後襲い来る激しい痛み顔に顔を歪め降り立った地に跪く。

この結界内ではいかなる攻撃も体をすり抜けるだけで負傷しないが、ただ痛みだけは感じる。

それも体が内側から灼けるような嫌らしいモノだ。

「ハア、ハア、結構ダメージ受けちゃったな……」

「だがまだまだ動けるだろう。あと数十分は頑張ってもらうぞ」

「そんなちよつとぐらい休憩を——ってそれじゃ意味ないんだっとな」

いつの間にか目の前に立つちびっ子教師へ文句を言おうとして止める。

どうやら俺はもつと追い込まれないとラファールゼを生成する力が覚醒しないらしい。

果たしてその前に痛みのショックで失神しなければいいのだが。

・
…

クリス先生との魔法決闘が始まってもう一時間の時が経つ。
気付けば灰色の空もその雲の切れ間から僅かに陽の光を覗かせていた。

「（しかし本当に勝てる気がしないとはこのことだな）」

被弾の痛みが残る体に鞭を打ち、もう一度先生との距離を十二分にとって対峙する。

あれから何回も攻撃を仕掛けてみたが、どれもヒットせず返り討ちだ。

たった今もファイアボルトの爆風に吹き飛ばされたばかりだし。

「ふふっ、どうした？ 随分とくたびれた顔じゃないか」

「どうしたも何も……」

アンタがやったんだろうに。

クククと嫌味な笑みを浮かべる彼女にもう何度目かわからない溜息を吐いた。

「つか先生、もう十分にダメージを受けましたよ俺。そろそろ次の段階へ進んでもいいんじゃないですか？」

「いや、まだ僅かに足りぬ。あと一発ぐらい喰らってもらおうか」「うつそ！？ ちょっ、これ以上やったら本当に倒れちゃいますって！」

流石にもう終わりだろうと尋ねたのに予想外の答えが返ってきた

な。

くそ、まだ続けさせる気なのかこの鬼畜教師め。

「そう言うな。たまにはそのくらいの無茶も必要だろう。お前は若いのだから」

「へえへえ」

見た目ギリギリ中等部生のアンタに若いって言われても説得力がアレだけど……。

ん、いやもう何も言つまいよ。

「ここまで気張った褒美だ。最後は私の得意な闇魔法を見せてやる」

「うげっ、それ今のところ一番の苦手分野なんですけど」

「そうかそうか。ならば補習という意味でもちょうどいいな」

あからさまに不満な顔をしてみたが逆効果だったようだ。

口元をニヤリと歪ませたクリス先生は早々に魔法構成式を組み立てていく。

漆黒に染まる闇の魔法陣。その不気味な紋章は瞬く間に少女の足元へ展開していった。

『いつぺん死んでみる気で避け切ってみせろ。闇夜の煉獄に散れ、
月下影刃ッ！』

「ぬわッ!?!」

今は朝ですよと突っ込もうとしたが、全身を包む黒い予感にすぐさま横に地を蹴る。

最近は思考より先に感覚で動いてしまうようになったな。

だがその感覚と行動は何も間違つてはいない。
なぜなら今さつきまで俺が立っていたところには――。
地に映える影より伸びた真っ黒な何かで、四方八方から突き立てられているのだから。

「ちよつとあれ当たつてたら串刺しじゃないですか。趣味悪いなあ」

必死に走りながら苦笑を浮かべる。

闇魔法、ね。光と並んでその知識が欠けている俺にはあまりよく分からない魔法だ。

「ふふふ、第一波は無事に避けてくれたか。まだ元気に動けるようだし、やはり今一度踊つてもらおう」

「そんな勝手に決めないで――つてうぎゃあッ!？」

先生の足元の小さな影が怪しく蠢き、長い槍となつてこちらへ飛んでくる。

急いで地に伏せ頭のすぐ上を突き抜けていくそれを紙一重でやり過ぎした。

「つたく、こつちの体力はもう全然残つてないつてのに！」

「絶対イジメですよねこれ。最後にこんなえげつない魔法を――」

「ふん、何を言う。これが俗に言う愛の鞭さ。そういうわけでもう一発ッ！」

「くっそもう何なのこの人!？」

愛の鞭でオイ。

悪魔のように晒いながら攻撃を放つその姿はどう考えても悪者にしか見えませんよ。

しかしそんな文句はあいにく受け付けていないのか。

影の刃がありとあらゆる方向から解き放たれ、クリス先生の猛攻は止むことなく俺を襲う。

長い。いつまで持続してるんだこの攻撃魔法は。

「（いい加減このままじゃジリ貧だぞ……）」

もともと疲労の溜まっていた俺のステップはすでにその爽快さを失いつつある。

ギリギリでやり過ごせている今のうちに何か別の手を考えないと。

……とは言ってもこうやって逃げまわる以外何ができる？

精神的に飛行魔法はもう使えないし、当然強大な攻撃魔法も撃てない。

つかそもそもあのちびっ子先生には俺の攻撃全ツ然効かないし！

「うをおやべえ何も思いつかねえ！？」

結局口から漏れたのはそんなお手上げの言葉。

ヤケクソになって適当な魔力弾で迎撃してみるも、その黒い闇に吞まれて相殺すら叶わない。

「ちいッ、ダメか」

「ふむ。どうやらこれ以上長引かせても意味はなさそうだな」

終わりにしてやるかというクリス先生の声が耳に溶けてから数秒後。

体力の限界に動きの鈍さが許されないレベルまでに達してしまう。

「うつ、しまつ——！？」

そうなってしまえば後はただただ一方的。

影の刃は静かに俺の体を捉え切り裂き、そして刺し貫いていく。痛みと悪意の闇に視界が黒く染まる中、僅かに覗けたのはそれはそれは満足そうな担任の笑みだった。

クリス先生、やっぱりあなた悪者の顔に見えますわ。

・
…

金髪少女の必殺攻撃に地へ伏せられてから数分後。

「あいたたた……。もう、ほんつとくに容赦無いですね」

あれがミンチにされるとき痛みか。もう絶対に味わいたくないな。

そう心の中で呟きながら眼前に立つクリス先生をじっと睨んだ。

「阿呆、こんなもんで音を上げてどうするか。お前より年下の女生徒でももう少しは粘ってくれるぞ」

「うぐつ！？　そ、それを言ってしまうないてくださいよ」

ギロリと光る深紅の瞳とキツイ言葉にもはやぐうの音も出ない。嘘だと信じたいが、やっぱり本当のコトなんだよなあ。

「まあいい。それより進級試験はまだ終わっていないぞ。さっさとラファールを顕現させてしまえ」

「あつ、そうでしたね」

あまりにも激しすぎる魔法決闘に本来の目的を忘れていた。
そうだ、まだ進級試験は終わっていない。

「でも本当に成功できますかね？ 正直めっちゃ不安なんですけど」
ゆっくりと立ち上がりながら隣の先生へ尋ねてみる。

「ふふっ、さあてどうだかな。私はこれ以上ない最高級のお膳立て
をしてやったつもりだが、最後はやはりお前の気力次第だろうさ」

「気力次第とはそれまた曖昧な」

「ま、私を含めせいぜい皆の期待を裏切ってくれるなよ。タクマ」
ミツルギ」

耳元でそれだけ言い捨てると、クリス先生は小さな手で俺の背中
を押す。

そして集中の邪魔になるからと後ろへ下がって視界から消えてい
った。

「（……期待、期待ね。あんまりされても困るんだけど）」

彼女の言葉に少し嬉しさを感じながら、俺は気付かれないように
頬を緩めるのだった。

「すう、はぁ……。よし、やるぞ」

数回大きな深呼吸をして瞳を開ける。
あともうひと頑張り。全力を出せばこの試験を突破できるはずだ。
そう強く覚悟を決めてから右手を真っ直ぐ前へ伸ばす。

「まずエーテルを体の一点に集めるんだったよな」

先週クリス先生に教わったことを思い出すようにして小さく呟く。すると生命力であるエーテルは俺の意思によって静かに収束を始めたのだが――。

「（あ、あれ？）」

なんだ、この妙な感じは？

前に職務室で試した時とは手応えが全然違う。

あの時と比べてはるかに多くの量のエーテルが手の先に集まっていくのだ。

……先生の愛の鞭、本当に効果があつたんだな。
最後まで疑っていてスンマセンでした。

クリス先生へ謝罪の言葉を心中で紡ぐとすぐさまエーテルの操作に集中しなおす。

「よし、あとはこれを体の外へ押し出せば……」

熱を秘めた右拳に力を込めると、これまた苦戦していた前回が嘘だったかのようにエーテルが体外へ放出された。

白い光の粒子なり圧倒的な勢いで溢れ出していくエーテルの嵐。
そこから発生させるエネルギーは空間に霧散する魔力を激しく揺さぶった。

「うつ、くう……。あと、もう少しでっ！」

ラストスパートと言わんばかりに更なるエーテルを外へと押し出す。

もう右手なんかは灼け溶けてしまいそんな感覚だ。

「なんか知らんがこれは行ける予感！ うおおッ！！」

大きな声で叫びながら、最後の力を振り絞る——その時だった。進むエーテルの嵐は爆発的にその勢いを強め、真っ白に視界を塗り替え潰す。

くっ、身体全体が熱い。視界も焼けたみたいに何も見えないぞ……。

そんな困惑も束の間、次第にうつすらとだけ目に落ち着いた景色が戻ってきて。

「——ッ！？ これ、は……」

右手に残る何かの感覚に視線を飛ばすと、そこには——。
一本の、ほんのりと青みのかかった細身の長剣が握られていた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:5 - 6 【夢幻の予感】

Episode 5 - 6 【夢幻の予感】

天空より降り注ぐ陽の光に輝く青白色の長剣をじっと見つめる。
いつの間にか暗雲は蒼穹に塗り潰され、空は紛うこと無き快晴に
変わっていた。

「これが俺のラファーズ……か。なんだ、魔法銃じゃなかったんだ
な」

てつきり今の今まで銃ロケットか魔法杖だと思い込んでいたのだけど。
それがまさかこんなたいそうな刀剣が出てくるなんて……。

射撃系の攻撃魔法が得意で近接戦に滅法弱い俺には到底似合わない
魔力媒介だろう。

「うーん。って、あれ？」

どうしたものかと戸惑いの笑みを浮かべていると、ふとあること
に気付いた。

「（少し軽すぎやしないかこれ？ ぶんぶん振り回せるぞ）」

軽量化の付加魔法も行使していないのに、1メートルはありそう
な細身のそれは重さを全く感じさせない。

ベタに言えば羽根のように軽いといった具合だ。

むむ、こんなので剣圧の方は大丈夫なのだろうか？

ま、別に今それはいいとして――。

「なんとか終わりましたよクリス先生」

「うむ、よかるう。生徒タクマ・ミツルギの進級試験、その合格を認めようじゃないか」

「ありがとうございます！ いやあよかった合格できて」

何の文句を付けられることもなく後ろに立つ金髪少女からその2文字を貰えて頬を緩ませる。

ふう、なんとかこれで最初の壁は突破できたな。

「それで先生、これからどう——ぐっ!？」

どうしようかと口にしようとする、いきなり視界がぐにやりと歪む。

全身の力が抜けてしまい思わず冷たい石畳の上に崩れ落ちた。
か、体が動かない？ 一体なにが起こって!？

「つとと、おいおい大丈夫か？」

「す、すみません。急に目眩が……。それになんだか、眠く……」

駆け寄って支えてくれる先生へ意識をつなぎ止めて言葉を紡ごうとする。

しかし襲い掛かる強烈な目眩と眠気に自然とその気力も失せてしまふ。

結局抵抗の甲斐も虚しく、俺の意識は早急に深淵の闇へと落ちていった。

「——なるほど、少しエーテルを放出しすぎたか。全く世話のかか

る坊やだ」

倒れ込む黒髪の少年を支えながらクリスはやれやれと溜息をつく。意識を失ったせいかな、彼がたった今生成した剣状のラファールは光の粒子となつて霧散していた。

「ま、コイツは後で部屋に運んでおくとして……」

健康的な寝息を立てるタクマを静かに地へ寝かせて顔を上げる。紅い瞳を細め、クリスは一見何もない空間をギロリと睨みつけた。

「見つかっていないとも思うか？ いい加減出てこい不良ども」

「……あっちゃー、やっぱりバレてましたか。いやはや参ったねえ」
「ホントです。テミスの隠密魔法も大したものではありませんわね」

クリスの威圧感のある声に2人の少女は観念したのかその姿を現す。

鮮やかな桜色の髪を持つエルザと長い緑髪を一つに結ぶテミス。
闇魔法で姿を消していたようだが、このクリス様にはお見通しだったようだ。

「まったく、結界まで破つて覗き見とはご苦労なことじゃないか？」
「それは申し訳ありません。わたくしたちのいつもの悪い癖ですわ」
「そうそう。こんな面白そうなイベントがあるのに、この私たちが動かない理由ないじゃないですか」

2人のまるで悪びれてない様子にクリスは心底呆れる。

さしずめテミスは学園新聞に載せる写真やら映像を撮りに、そしてエルザは単なる興味心で侵入して来たのだろう。

「（こおんのバカタレどもめ。ふふっ、少し灸をそえてやらんとな）」

そう決めるや否や呆れ顔から一変、クリスは不敵な笑みに表情を歪ませる。

すると目にも留まらぬ速さで彼女の手から黒の魔力弾が2人へ解き放たれた。

いきなりの襲撃に当然エルザとテミスは目を見開く。

「————えい、やつ、はぁあッ！」

が、さすがエリート学園の学生会長と言ったところか。

間一髪エルザは透き通った声を上げて魔弾をすべて弾く。

手にはその髪と同じ鮮やかな桜色の映える長剣が握られていた。

「あらあら、今のも俗に言う愛の鞭なのでしょうが先生？」

「……そうさ。お前もよく知っているだろ、昔から私は教育熱心のだよ」

「それはもちろん。中等部の頃から大変良くしていただいていますわ」

迫る闇を切り裂いたエルザはけろりと笑みを浮かべて剣を霧散させる。

当然ながら金髪少女のチツと大人気ない舌打ちがコートに響いたが。

「さてさて美味しいネタはたくさん頂いたことだし、このテミスめはそろそろ撤収しますかね。それでは失礼クリス先生」

そう横から口を挟んだと同時にその姿をくらますパパラッチ。
恐らく部室に籠って学園新聞の夕刊記事を練り上げるつもりなの
だろう。

もはや彼女に今日の講義を受ける気などあるはずもない。

「ちっ、アイツめ逃げたか。まあいい、お前もさっさと教室へ戻れ
エルザ」

「あら、よろしければお仕事お手伝いしますわよ？」

しかし颯爽と命令を無視してエルザはそんな提案を口にした。

「タクマ、いつまでもこんなところで寝かしておくわけにはいきま
せんし」

そしてクリスの足元に寝転がる黒髪少年を細い目で見る。
つまりは彼の面倒をみたいという要求なのだろう。

「そのことなら心配いらん。今から直接私が部屋に送り届けて――
――」

「いえクリス先生は学園長に試験結果をお伝えしなければなら
ないでしょう？　ですから彼のことはわたくしにお任せ下さい」

「……はあ、言っても聞く耳なしか。わかったよ、生徒タクマのこ
とは頼んだぞ」

これ以上は時間の無駄だと判断したクリスはそれだけ言って闘技
場のエントランスへ歩き出す。
セオ

その後姿を一礼して見送ると、エルザは優しくタクマを腕の中へ
と抱き込んだ。
クロッ

「うつふ、さあ行きましょう。こんなところに寝ていては本当に風邪を引いてしまいますから」

くすくすと微笑みながら、撫子色の髪を靡かせる少女は転移の魔法式を編み出す。

そして抱きかかえる少年とともに魔法陣の中へと消えてしまった。

本来は転移^{ゲート}駅以外で転移魔法を使用してはならないのだが、彼を運ぶため今回は特別であつたという。

・
…

真っ白。何もかもがとにかく白い。

目の前に広がる世界はどう表現しようとも白すぎて、ましてや深淵の黒も同然だ。

そんな中ふわりと宙を舞っているような感覚が心を揺らす。

あるのか無いのか動かない体に、寝起きのようにぼんやりとした頭。

そして極めつけはこの不思議空間ときた。これではまるで……。

「（……夢、なのかな？）」

ああ、夢だ。むしろこんな状況が夢以外にあつてたまるものか。

おぼつかない頭でそう確信すると共に、純白の世界が小さく揺れた。

何もない夢幻の空間に僅かな色がぼうつと浮かび上がってきたのだ。

この真っ白で虚無なる世界へ意味を付け足すように。

そしてうつすらと赤い色に染められて現れた景色は、一面のお花畑だった。

この鼻をくすぐるのは甘い香りはその花のものなのだろうか。
どこまでも果てなく広がる庭園とクラクラする甘い香りに何か懐かしいものを感じる。

俺は、この場所を――。

「――ッ!? ってあれ、ここは？」

何かを思い出そうとしたその時、無意識に俺は上半身をガバツと起き上がらせていた。

見渡せばふかふかのベッド、純白のソファやカーテンが目映る。

間違いない。ここは俺のよく見知っている場所だ。

「俺の部屋……。でもどうしてここで寝てるんだろう？」

髪の毛を掻きながら自分の置かれている状況を整理する。

ええっと、どうなってるんだっけ。確かラファエを生成してから……。

「あらあら、案外早めのお目覚めだったようですねタクマ。ご機嫌よう」

「あ、はいご機嫌よう……って、エ、エルザ会長!？」

動きの遅い寝起きの頭で思考していると、これまたよく知る美人

が部屋の奥から現れた。

腰まで届く濃い桜色の髪。この学園の学生会長にしてミアのお姉さんだ。

そんな人がなんで俺の部屋にいるんだ？

「うふふ。まあまあ落ち着きなさい。今から説明してあげますから」
「は、はあ……」

イマイチ現状の把握が追いついていない俺をベッドの上に座らせたまま、エルザ会長は近くにあった純白のソファ―へ上品に腰掛ける。

そして綺麗な瑠璃色の瞳を開くと、相も変わらず丁寧なお嬢様言葉を紡ぎ出した。

「——あつ、そうだったんですか。すみませんお手数をお掛けして」

会長に言われてだんだん気を失う寸前の記憶が戻ってきたが、彼女曰く俺は試験終了後の数分も経たないうちに気絶してしまったらしい。

なぜエルザ会長がそのことを知っているかというと、面白そうだということで実は試験の様子を物陰からずっと見ていたそう。

最後にはクリス先生に見つかり呆れられたそうだが、先生に代わってわざわざ俺をここまで運んでくれたと言うわけだ。

「いえいえ。それより体の具合はどうです？ 頭痛や痛む所は？」
「ん、ちよつとだけ怠い気はしますけど特に問題はないですね」

その言葉を聞いた学生会長様はよかったですわと微笑む。

気怠いのも寝起きのせいだろうし、それもすぐ良くなるだろう。

「ちなみにその目眩ですが、恐らく原因は急なエーテルの消耗だと思われるます」

「エーテルのですか？」

「はい、今日は不慣れにも大量に放出してしまったようですからね。身体が拒絶反応を起こしたのでしょう」

なるほど、ラファールを生成するのに無茶すぎたか。

そこに魔法決闘の疲労も重なって目眩という形で返ってきたんだろっな。

「こんなところで状況の把握はできましたか？」

「おかげさまで。本当にわざわざありがとうございます」

ベッドの上に正座しながら頭を下げる。

やっぱりいい人だなあエルザさん。まあ授業をサボってまで覗きに来るのはどうかと思うけど。

しかもクリス先生の張った結界を越えてなんて——。ん、待てよ？

「（あの結界魔法、遠目から見たただけでかなり強力だったような……）」

結界とは他者からの干渉を防ぐためのもの。

そりゃ強力じゃないわけがない。その術者があの鬼畜ちびっ子教師なら尚更だ。

そのはずなのに、このエルザ会長はそれを……越えてきたのか？

「うふふ、わたくしは学生会長ですから。いくらクリスマス先生が施しになった結界でも簡単に素通りできるんですよ」

「どんな関係があるんですそれ」

学生会長だからってアンタ。

少し誇らしげに富んだ胸を張る会長に苦笑いを向けておく。

しかしどんな手を使ったのかは別にせよ、実際破ってきたんだよなこの人。

やはり冬霞^{トウカ}やクリスマス先生同様なかなか手強い相手らしい。

いつかはこの学生会長様とも魔法決闘する機会があるのだろうか。

・
…

その後もしばらく談笑を交わしていると、あっという間に正午を跨いでしまっていた。

流石に午後の授業までサボるわけにはいかないのか、学生会長様はもうお帰りのようで。

「――それではわたくしは学園へ戻ります。あとお昼ごはんのことですが、寮母さんが用意してくださるそうなので30分には食堂へ向かってくださいね」

「30分ですね、わかりました。それではまた今度」

「ええまた今夜に。うふふ、待ち遠しいですわねえ」

「へ、今夜？」

一礼して扉をくぐるエルザ会長を見送っていると、奇妙な言葉が頭に残る。

今夜だって？ 一体どういうことだろうか。

尋ねようと思って顔を上げるも、既に扉は閉まってしまっていて、わざわざ呼び止めるのも面倒なので、首を傾げつつも部屋の奥へと戻る。

単なる聞き間違いだったのかもしれないし、あまり気にしないでおう。

「少し早いかも知れないけど、あと数分したら食堂へ行こうかな」

特にすることもないし退屈だからな。

ガラス張りの窓から覗ける蒼い空を見上げ、そんなことを呟いた。

そしてこの頃には、つい先程まで見ていた夢のことなど綺麗さっぱり忘却の彼方へと飛んでしまっていた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:5 - 7 【親愛の宴と祝福を】

Episode 5 - 7 【親愛の宴と祝福を】

エルザ先輩が部屋を去ってから数分後。

しわの入った制服を部屋着に着替えた俺は、寮の食堂へ向かい昼食をとっていた。

朝と夜は大勢の男子生徒で賑わっているのだが、学園のある昼間、つまり今は見る影もなく閑散としている。

「ふう、ご馳走様でした。わざわざ作ってもらってありがとうございます」

そんな広い食堂の端、たくさん盛ってもらった炒め物やサラダを余すことなく堪能した俺は、頬を緩ませて眼前の女性へ頭を下げる。午前中に激しく体を張ったためか、普段より自分でも驚くほど食が進んだ。

「いえいえお粗末さま。それにしても、少し多すぎるかと思ったんだけど綺麗に平らげて。おばさんちよつとビックリよ」

「あはは……。結構お腹空いてましたから」

「そりゃいいこと。タクマちゃんぐらいの年頃が一番の食べ盛りだからねえ」

空になった食器を片付けながら優しく微笑むのは大体30代後半ぐらいの女性。

少しふくやかな体に純白のエプロンを纏うこの人をアマリエさんと言う。

彼女は我が第3男子寮の寮母さんの1人で、何か知らんけど入寮

した日から気に入られている。

「しかしアンタ合格できてよかったじゃないの。エルザちゃんに担ぎ込まれて来たときはつきりダメだったのかと思ったけど」
「そうですね、何はともあれ無事留年せずに済みました」

冷水の注がれたグラスに口をつけ、改めて安堵の声を漏らす。
無理無茶無謀なクリス先生との魔法決闘を気張った甲斐はあったようだ。

「それで今日はこれからどうするつもり？ 報告とかで学園には行かないの？」

「えっ？ ああ、大人しく部屋で休んでますよ。エルザ会長にもそう言われましたんで」

「……そう、それじゃまた後でね。あつ、今日の夕食はすんごいから期待していいわよん」

はいと軽く会釈をして俺は席を立ち自室へと足を進ませる。
ご馳走なのだろうか。唯でさえここの食事はハズレが無いから楽しみだ。

「——ホント、面白くて良い子が入ってきてくれたわ。うふふ」

黒髪の少年が食堂から見えなくなるのと同時に、アマリエのそんな呟きが漏れる。

彼がこちらへやってきて一ヶ月が経とうしているが、寮や学園生活に馴染んでいるのは一目瞭然。

それはこの寮母の目から見ても十二分に明らかだった。

こりゃ今夜はなかなか盛大なパーティーになっちゃいそうねえ
く、と。
クスクスと笑いながら、アマリエは寮母の仕事と宴の準備に戻る
のだった。

・
…

食堂から部屋に戻ってからあつという間に時間は過ぎてしまつて
窓から覗ける空はまだ青いが、日はそこそこ傾いているように見
える。

「ん、もうこんな時間か。そろそろ帰ってくる頃かなアイツら」

15時過ぎを示す生徒証^{ナビ}の時計を目にして漏れる欠伸と背伸び。
ベッドに寝転がりながら教科書やローカルな情報誌を読んでいる
ともうこんな時間になってしまった。

学園も終わった後だろうし、用事が残っていない学生たちは寮へ
と戻ってくるだろう。

「ずっとここに籠ってるのもアレだし、表に出て出迎えてもしよう
かな」

ひよつとしたら既に帰ってきてるのかも知れないが、外の空気を
吸うためにもいいだろう。

そんな思い付きでベッドから跳ね起き、早速銀のドアノブに手を
かける。

「うをお！？ なな、なんだなんだあ！？」

すると同時に、ドンドンドンツと無駄に荒々しいノックが響き渡った。

突然のことに思わず仰け反って尻餅を付いてしまふ。くそ、いてえ。

「え、ええつと。ど、どちらさまでしょうか？」

「どちらさまってお前、ラグナ様だよタクマっち」

恐る恐る扉の向こうへ声をかけてみると、よく知っている男の声とその名前。

同じクラスメートにして克蘭メンバー、寮の部屋は向かい同士の赤毛ドラゴン。

なんだお前ラグナかよ。驚かせやがって。

「つたく、何でまたそんな激しいノックを――」

立ち上がり呆れながら扉を開けると、その先の光景に一瞬だけ言葉を失う。

なぜなら扉に先の廊下には、ラグナだけではなくクラスの20人ぐらいが集まっていたのだから。

しかも女の子もいる。男子寮なのになここ。

「ど、どうしたんだ？　こんなに大勢で」

2、3秒フリーズしていた舌を動かし、少し引き気味に声をかけてみる。

「どうしたとは失敬ね。倒れたって言うからわざわざ様子見に来てやったのに」

「あはは、でも普通に元気そうで何よりだよタクマくん」

言い方が気に食わなかったのか不機嫌な冬霞トウカと朗らかな笑みを浮かべるテオ。

つまりはみんな心配してわざわざ来てくれたようだ。

「まあな。少し眠ったら見ての通りだ。あとちゃんと試験も受かったぞ」

「はい、ちゃんとクリスマス先生から聞きましたよ。おめでとうございます」

うふふと天使の笑みでミアがお祝いの言葉を贈ってくれる。それに続いて他の奴らからも同じような言葉や拍手が届いた。ん、なんか少し感動かも。

「ありがとみんな。とりあえず留年はせずに済んだんで、新学期からもよろしく」

「くうく、こっちは期末試験が来週に迫ってるっていうのに!」「ホントだぜまったく」

余裕な俺の挨拶に、ミリオムとラグナが膨れている。

そう。俺はあの試験で2年生へ上がったのだが、こいつらにはそれぞれ受講している科目のテストがあるのだ。

その結果、つまり総合成績が悪ければ……。言っまでもない。

もっとも聞いてかつ見た話、我がクラスの留年候補はこの2人ぐらいらしいが。

「その話は置いておいてさミアさん。そろそろ例のこと話したら?」「ええ、そうですね。タクマくん、今朝話していたご褒美のこと覚えていますか?」

「あ、ああ覚えてるぞ。内容はサッパリだけど……」

阿呆2人を無視する方針で、話題が朝から気にかかっていたことへと変わる。

なんでもクラス一同からの褒美だっただけか。

「ふふんっ、喜ばなさいタクマ。歓迎会よ歓迎会！今夜はオールナイトで宴なのっ！」

「いや、まったくもって意味分かんないから」

割り込んできた上に意味不明なミリオムへ突っ込む。
そもそも歓迎会って誰の——あつ。

「もしかしてそれ、俺のなの？」

「アンタ以外のだったら一体誰のだったんのよ」

「返す言葉もございません」

気付くのが若干遅れた俺に呆れた視線を送る銀髪少女。

なるほど、その歓迎会がご褒美だったわけね。

さっきエルザ会長が言ってた『また夜に』ってのも恐らくこのことなのだろう。

「うふふ、そういうことです。では私たちは会場や料理の準備をしますので、タクマくんは呼びに来るまでここで待っていてください」
「あ、ちよっと待って。そんな悪いし俺も——」

そう言い残して立ち去ろうとする皆を引き止めるが、いきなりトウカに口を塞がれる。

当然目を丸くして藻掻いていると、彼女は静かに瞳を覗き込んで語りかけてきた。

「あなたは主賓なの。この意味が分からないほど馬鹿じゃないわよね？」

銀髪少女だけでなく、周りの奴らからも降り注ぐ威圧感に黙って頷く。

確かに俺が手伝いに行ったら意味ないよな。

「……わかったよ。ここに籠って大人しく暇潰しときます」
「分ければよろしい」

トウカとそう話をつけると、部屋の前に溜まっていたクラスメイトたちが散っていく。

「ねえタクマ、暇なら私が一緒に遊んであげ——」
「君は僕たちと会場の飾り付けだよねミリオムさん？」
「うげっ！？ わ、わかってるわよ……」

黒いオーラを纏わせるテオの肩を叩きに、ミリオムはしょぼんとした表情を浮かべて頂垂れた。

どうやらサボろうとしていたみたいだ。にしても飾り付けて……。

嬉しいけど、そんな大仰にやってももらわなくてもいいんだけどなあ。

「それじゃあ頃合いになったら僕が呼びに来るから」
「あ、ああ。わかったよ」

テオに引きずられていくサキュバス少女を眺めて苦笑を浮かべながら、扉を静かに閉める。

こりや大人しく情報誌の続きでも読んでおくべきだろう。
歓迎会、ね。なかなか嬉しいことしてくれるじゃないか。

・
…

笑顔の圧力で自室に幽閉されてから早夕飯時。

部屋に籠っているのは退屈かと思いきや、度々人が遊びに来ていたので意外にもそうではなかった。

特に地獄の進級試験の感想をもう何十回語らせられたことが。

そんなこんなの中に準備は終わったらしく、今やっとテオとトウカの2人に歓迎会の会場へと連れられたところだ。

「（こりやまた盛大にやってくれてるなあ）」

この俺、タクマ＝ミツルギの学園歓迎会はやはりこの第3男子寮で行われていた。

普段は暇な男子生徒たちがくつろぐ、あの無駄に広いレクリエーションルーム全面を使って。

どうやって用意したのか、ホール内には色鮮やかな装飾で輝いている。

嬉しいけど少し気合入れすぎだろ。しかも……。

「なあ、なんか人の数多くないか？」

顔を寄せ隣のテオへぼそっと囁く。

歓迎会というものだからてつきりクラスメートや知り合いの同級

生、先輩ぐらいかなと思っていたのだが、明らかに見覚えのない人とかもたくさん集まってるぞ。

「ははは、宴会の匂いに集まってきたんだろうね。それとも君の有望かな？」

「んなまさか。それはあるはずがないわよテオ」

「……それは俺が否定することだと思うぞ」

横から颯爽と口を挟む銀髪少女に突っ込みを入れながら会場の中を進んでいく。

トウカと相変わらずなやり取りしていても、すれ違う人に笑顔の会釈は忘れない。

「あつ、きたきた！ こつちよん本日の主賓様」

「待ちくたびれたぜタクマっち。さあさあ楽しもうじゃないかこの大宴を！」

しばらく歩いていると、部屋の真ん中らへんから元気な少年少女の声が耳に届いた。

ミリオムとラグナだ。つかアイツらもう何か飲み食いし始めてるし。

「うわぁ非道い、もうやつちゃってるのこの人たち？」

「あうつ、私も止めたんですけど……。ごめんなさい」

阿呆2人に呆れた目を向ける俺達にミアが頭を下げる。

いつも真面目だなこの娘は。

気にしてないよとミアに声をかけてから、どうやら俺が座るべきらしい席に腰を下ろすのだった。

それからしばらくした後、エルザ会長から乾杯の挨拶を促されてしまい全方向から注目を浴びていた。

くそ、もしかしてと恐れていたことが起きてしまった。

こういつの苦手なんだよなあ……。

「ええっと、その、こんな素敵なパーティーを開いてくれてありがとう。嬉しいよ、これからもよろしくお願いします。で、いいのかな？」

とは言いつつもしつかりやる。が、横に座るトウ力が一言。

「言っちゃ悪いけどセンスもクソないくらい普通ね」

「う、うっさいよッ！？　って、あ……」

咄嗟に出た銀髪少女への突っ込みに早速しまったと後悔。

やべえ今のめちゃくちゃ恥ずかしいぞ。

しかし皮肉なことにも大きな笑い声が会場全体から湧き上がり、それを合図に歓迎会は始まってしまった。

んー、これは結果として良かったのだろうか？

複雑な気持ちでグラスの中のシャンパンを喉へ通す。

日本じゃダメだがリユミシアル界では中等部を卒業すれば飲酒しても良いそうだ。

最初は戸惑ったが、異世界だからの一言で解決してしまうため何も言つまい。

ちなみに俺は少しならいいけどあまりゴクゴクは飲めない。

こんなところで酔うのもみっともないし、自重しておかないとな。

「ん、あれは？」

ピザっぽいものを頬張りながら、一段と騒がしい方向が気になって視線を送る。

するとそこには大画面のスクリーンに今日の進級試験の様子が映し出されていた。

無論、クリス先生にボコボコにやられている俺の図である。

あれ誰が撮ったんだ？ いや、こんなことするのは1人ぐらいしかいないか。

「ご、ごめんっ！ これまた姉さんが勝手に……」

「お前が謝るなって。まっ、ちょっとは恥ずかしいけどな」

申し情けなさそうな声を出すテオにそう笑顔を見せながら画面を見つめる。

やはりテミス先輩らしい。エルザ会長と一緒に来てたんだな。

ちょうど今は先生の爆撃魔法を必死になって避けているシーンだ。地面に赤い魔法陣が刻まれて、数秒経ったらそこが大爆発。

目に見えたらすぐ逃げないと間に合わな——あっ、爆炎に巻き込まれた。

『今日は本当にお疲れ様でした』

華麗に宙を舞う俺の映像を見ながら、酔っていない学生たちはそう微笑みかけてくれる。

その一方、酔ってるラグナ達は……。

なんかもう大爆笑していらっしやる。人生幸せそうだなアイツら。

早いものでもう21時を回ったが、人が減ることはなく代わりに次々と美味しそうな料理が運ばれてくる。

そんな会場の中心から見渡してみると、この宴会を楽しむ皆の様子がよく分かる。

エルザ会長率いる学生会組はすぐ隣で談笑にふけっているし、テオはアマリエさんたちの仕事を手伝っている。

ラグナとミリオムは――例の映像をまだ見ているようだ。
一体何周見るつもりなのだろう？

ま、なにとはともあれ俺だけじゃなく皆楽しそうで何よりだ。

「なによ、一人でニンマリして。何か面白い奴でも見つけた？」

「まあ、な。とってもいいものだよ」

「……そう」

話しかけてきたトウカはそれ以上何も聞いてこない。

「それよりグラスが空だぞ。ほら注いでやる」

「珍しく気が利くわね。うふふ、ありがたく頂くわ」

微妙な空気になったのと他に相手が見当たらないのでこの銀髪少女と乾杯することに。

気に入った透明な紫紅色のお酒を手に取り、丁寧にグラスへと満たしていく。

この世界に来るまでは失ってしまっていたけれど。

気付かないうちに俺はもう取り戻してしまっていたようだ。
とても眩しくて、そして何よりも大切なモノを。

なにか熱いものを胸に抱きながら、グラスの中身を喉へ通した。

「ん、美味しい」

「——ッ!? そ、そうか。そりゃ良かったな」

稀に見る銀髪少女の悪意のない笑みに、少しドキッとしてしまった。
た。

うーん、少し酔い始めちゃってるのかな俺。

そして賑やかで温かく長いこの宴は、まだまだ終わりそうにはない。
い。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 6 - 1 【心の剣を携えて】

Episode 6 - 1 【心の剣を携えて】

清々しいまでの朝。かかとを鳴らして学園へと続く石畳の道を進んでいく。

蒼穹より降り注ぐ陽の光は穏やかなはずなのに、自然にギョツと目を細めてしまう。

まだ目覚めてからそんなに時間経ってないしなあ。

「あはは、なかなか眠たそうだねタクマくん」

整った緑髪に乱れなく着飾った制服、男から見ても文句なしの好青年。

相変わらずそんな感じで隣を歩くテオが爽やかに微笑を浮かべる。どうやら不意に出た大きな欠伸を見られてしまったらしい。

「ん、そうかも。やっぱり昨日は寝るの少し遅かったしな」

「僕もだよ、会場の後片付けに1時間近くかかったからねえ」

お互い欠伸の仕草をしてからやれやれと大きな溜息をつく。

昨晚の歓迎パーティーは日が変わってから1時間ぐらいの後に再開になった。

流石にこれ以上はと解散するように寮母さんや学生会からの指導が入ったのである。

次の日、つまり今日は通常通りに学園と授業があるのだから。

あの雰囲気じゃ本当に夜中を通り越して朝まで宴会を続けそうなのりだったからな。

主賓の俺がいなくなる訳にはいかないし、あのくらいの時間帯でお開きになったのが救いだ。

「……あーもうっ、もつと楽しめたかったのにあんなに早く終わるなんてつまんないわ」

「ミリオムさんよ。お前はひたすら酒に吞まれて酔いつぶれてただけだろうが」

前方で少し不機嫌そうに呟いたブロンド髪のお嬢さんにそう突っ込みを入れる。

最終的にはトウカとミアの2人がかりで女子寮へと連れ戻されて行っただけ。

「ぐっ、酔ってなかったわよ！　ほんの少し気分が良くなっただけで――」

「（それを酔っていると言っんじゃないのか？）」

顔を赤くして言い訳を垂れるサキュバス少女。

果たして昨晚の最後の方の記憶が残っているのかどうかすら怪しいものだ。

魔族のお二人とそんなお喋りをしつつ、できるだけ近い道を通って学園内の高等部学舎前へと辿りつく。

そこからは早いもので、螺旋階段を淡々と上りあつという間に教室の中へ。

見渡せば昨晚は同じく遅かったはずなのに、クラスメートの半分以上が教室内に揃っていた。

「おはよ、昨日は本当に楽しかったよ。だから、ええっと……ありがとな」

その言葉を皆に伝えたいのと妙に気恥ずかしい気持ちとのジレンマに駆られながらも、一応は大きな声で言っておく。

が、やはりその途端どうにも居た堪れない心情になってしまい、さっさと後方の自席へと駆け込んだ。

「おつ、自分で言つてメチャクチャ照れてやがるな」

「うふふ。ホント顔真っ赤じゃないの、タクマくん？」

「……くっ」

クスクスニヤニヤと楽しそうに笑う周りを伏せ目に見て舌打ち。

その中には特に付き合いのあるトウカやミアも混ざっていて、ますます顔が赤く染まっていくのを鏡なしでも自覚する。

くそ、そのまま堂々としていれば良かったか。

そんなしょうもない後悔をしつつ、談笑に花が咲かされている教室を小さな笑みを浮かべて眺めていた。

何はともあれ、ちゃんと言葉に出せて良かったな。

「——ようしお前らさっさと席につけよ」

聴きなれた鈴の音のチャイムが心地良く鳴り響く。

それと同時に小さな手をパンパンと叩くクリス先生の姿が見えた。

「あの先生、どうして昨日歓迎パーティー来なかったんすか？」

「そりゃ私も行きたいのは山々だったのだから。いろいろ仕事があったのさ」

「なるほど。それじゃあ仕方ないですね」

気付いた生徒がそれぞれ自席に着く中、最前列のクラスメートAが放った質問に苦笑して答える先生。

そう言えば確かに昨晚姿が見えなかったな。

もつとも、教師である彼女が来ていたら少しややこしいことになっていたかも知れないが。

……いい意味でも悪い意味でも盛り上がっていたわけだし。

「さてと、昨晚はさぞお楽しみだったんだろうが、今日からは気を引き締め直して各々やるべきことを――」

ゴホンと彼女の咳払いが響いたのと同時に朝のHRが始まる。

ちなみにHRとは遅刻者欠席者の確認、連絡事項や小話を担任がする時間に違いない。

「うん？　おい生徒タクマ、隣の阿呆はどうした？」

「んえっ！？　と、隣……？」

その小話をボーッと聞いていると唐突に声をかけられる。

思わず驚いて取り乱すも、左の空席を一瞥してすぐに何のことが理解した。

「（ああ、ラグナのことね）」

あの阿呆ドラゴン、もといラグナは恐らくまだ布団の中だろう。歓迎会が終わった後も自室に数人の酒豪を集めて飲み続けていたらしいからな。

ちなみにエルザ会長も混ざっていたらしい。

それは置いておくとしても、まあ気の利くフォローもできないわけ。

「——そんな感じでまだ寝てるんじゃないかと」

「呆れたな。誰か起こして……って、できたなら皆そうしていたか」

先生は言葉通り心底呆れた表情を浮かべ、これまた大きな溜息を漏らす。

そう、部屋の前で呼びかけてやっても簡単に起きてくれるような奴ではないのだ。

「よし、こりやまたお仕置きせねばならんな。ふふふ」

あんまり激しいのは止めてあげてくださいね、と。

黒い微笑を浮かべる彼女に口を出せる勇者などこの教室にはいなかった。

いや、同じくクククと邪悪に微笑んでいる銀髪少女はあえて言わなかったのかも知れないけれど。

……とにかく、寮に戻ったらまずラグナの安否を確かめないとな。

・
…

そのままラグナが教室へ現れることはなく、授業時間だけが過ぎて早くも時は昼休み。

学園食堂で美味しく昼食をとった後、適当に歩いていると担任に呼び止められていた。

「ええっ、まだ昼から迷宮探索続けさせるんですか!？」
「そうあからさまに嫌な顔をするな。もっと意地悪したくなるだろう」

ニヤリと嫌らしい笑みを浮かべて長い金髪ツインテールを揺らす。
その口からたった今聞き捨てならない台詞を吐かれたような気がするが……。

「いや、だってもう進級試験は終わったでしょう? どうしてまた」
「たわけ。まだお前はラファールゼの扱い方を知らんだろうが」
「えっ? そ、そりやまだ顕現させただけですけど……」

無駄だと察しつつ文句をぶつけてみるも、やはりそんな一言で返り討ち。

頭に浮かぶのは昨日生成したラファールゼ、あの淡い青色をした長剣。

確かに俺はまだあれの扱い方を全く知らない。
刀剣なんて触ったのも昨日が初めてだしな。

「じゃあ文句ないだろう。お前が手にしたのは銃ではなく剣なのだから、今までとは違う立ち振る舞いが自ずと必要になってくる。それに私はお前のことを想って言ってるんだがなあ。ふふっ」

更に追い打ちをかけてくる鬼畜な吸血ちびっこ教師。
くそ、そんなこと言われたら首を振ることなんてできないじゃないか。

「……ぐ、わかりました。場所は仮想迷宮エントランスでいいんですね?」

「ククッ、良い子だ。待っていてやるからしばし残りの休み時間を
楽しめ」

肩をポンポンと叩いてから背を向けて去っていく悪魔。
見た目はとても可愛らしいのに、どうしてあんな……。

いや、そんなことはいくら考えても無駄だろう。

それより心配なのはこれからのダンジョン探索である。

あれはものすごく疲れるし、ラファールゼを上手く扱えるのかも不
安だ。

「うふふ、頑張ってくださいね。タクマくん」

物陰から見ていたらしいミアが優しい声で応援してくれる。

心癒される天使の笑みを向けてくれる彼女だけが、今の俺の心の
救いであつた。

それから何をするでもなく昼休みを浪費してしまつて。

不安な気持ちを抱いたまま俺はクリス先生のいるエントランスへ
と向かつた。

すると既に先生はダンジョンへと続く転移魔法陣を用意していて。

今回はどんな所かと尋ねる暇さえなくその中へと押し込まれてし
まつた。

「————よつとつと。ん、ここは……懐かしい洞窟だな」

先生が用意した魔法陣を抜けた先、すなわちダンジョンは見覚え
のある場所だつた。

俺が始めて入った長い長い迷路のように入り組んだ洞窟状の仮想迷宮だ。

この学園に転入して戦闘に慣れるまでの一週間はここで修行していたっけ。

『その通りだ。だから出現する魔物も弱いばかりだから安心だろう?』

ナビから映し出されたモニターにクリス先生の小顔が映る。

確かにスライムやゾンビ、オーガみたいな戦闘力も知能も低い奴らだったな。

「それでも不安なのは変りないですよ」

『その不安を乗り越えてこそ得られるものがあるのだよ』

「へえへえさいですか。ん、はぁッ!」

画面の向こうで遠い目をするクリス先生を一瞥し、気合を入れて右手に力を込める。

エーテルを手元から押し出すと、拍子抜けするほど容易く光の長剣がその姿を現した。

「うわっ、ホントだ。一度成功すれば次からは簡単に出せるようになるんですね」

「前にそう伝えただろうに。つまらん杞憂をしていたようだな」

安堵する俺と対照的に呆れ気味な金髪少女。

もし今顕現させることができなかったら進級試験の合格は取り消しだろうからな。

クリス先生の言葉を疑っていたわけではなかったのだが、少し心配だったのだ。

「では私は紅茶を啜りながら見物させてもらおう」

「えっ、ちよっと！？ コレの扱い方教えてくださらないんですか！？」

「ふふふ、知らないか生徒タクマ。剣は相手を叩き斬るためにあるのだよ」

誰でも知っているそんなことは。わざとやってるなこの人。俺が知りたいのは取り回し方や剣術のテクニクなのに。

『心配するな、まずは何でも手探りでやってみろ。それでもダメなら私が助けてやるさ』

「（……やっぱいい加減だな）」

『何か言ったか、ああん？』

画面越しに覗けた閻魔大魔王を思い起こさせるまでの恐ろしい気配に思わず身震い。

死んでも聞かれる訳にはいかないので惚けて誤魔化す。

さっ、変に詮索される前に次の行動に移ろう。

「せいっ、はっ、とうッ！」

とりあえずはデタラメに空を斬ってみる。

羽根のように軽いそれは明らかに速いスピードで振るうことができた。

『……ほう、思ったよりなかなか速い剣筋じゃないか』

「めっちゃ軽いんですよコレ。威力あるのか甚だ疑問です」

珍しく感心した顔をするクリス先生へそう笑いかける。

いくら早斬りができても剣圧がなければ意味が無い。

『ふむ、切れ味を確かめたいなら前の方にちょうどいい標的があるぞ』

「標的って……ま、まさかっ!？」

覚えのある既視感に前方へと目を凝らすと、そこには青い球体が。

「な、なんだスライムか。柔らかさそうであんまり斬れそうじゃないんですけど」

鈍いスピードでこっちに迫ってくる相変わらず可愛い魔物。心が痛むのであまり戦いたくないのだが、居合わせた以上倒さねばならない。

「お前に恨みはないが、覚悟してくれ。でいやッ!」

渋々掛け声を上げてスライムの体を右から左へと切り裂く。

シュパンツと景気のいい音が鳴って、青い球体は文字通り一刀両断になってしまった。

おおっ、すげえめっちゃ斬れるじゃないこの長剣。

光の粒子となって消えるスライムを見送り、感慨深く右手に光るそれに見惚れた。

「うん、とにかく今日はこの剣を振って魔物を斬ることに慣れようか」

剣技やテクニクはまた今度でいいだろう。

よし、そうと決まればさっさと先へ進も――。

「――ッ!？」

足を踏み出そうとした瞬間、遙か遠い暗闇の奥から何か強大な力を感じた。

な、なんだ今のは？ 魔物、だろうか？

気のせいかも知れないが、あの先生のことだから何かヤバい魔物を用意したのかも知れない。

一応その辺も気を付けて進まないとな。

淡青色の聖剣をしっかりと握り直し、俺は薄暗い洞窟の奥へと駆け出した。

- C o m i n g S o o n N e x t S t o r y ! ! -

Ep: 6 - 2 【ホライズンブルーの軌跡】

Episode 6 - 2 【ホライズンブルーの軌跡】

セピア色の灯火が怪しく照らす不気味な洞窟。

その狭く長い通路にはあとほんの少しの魔物しか残っていないなかった。

じりじりと俺が迫っていくと、前に蠢く影はやはりその牙を剥いて襲い掛ってくる。

「——やつ、でえいッ！」

飛びかかってきたスライムをタイミングよく真上から斬り落とすて。

さらに両手の中の長剣を右に持ち替え、今度は足を跳躍させて奥に潜んでいたもう一匹を薙ぎ払った。

美麗に光る淡青色の軌跡が滑らかに虚空へと映える。

「ハア、これでこの通路は全部か。とりあえず対スライムは楽勝だな」

淡い光となつて消えていく魔物の姿を振り返り際に見ながら呟く。何と言つてもたつた一撃で戦闘不能に追い込めるんだからな。

相変わらず動きも単純で鈍いし、こちらがダメージを受けることはまずない。

おかげでダンジョンを進み始めて数十分、対峙したスライム相手に剣での大まかな立ち回り方は習得することができた。

この分なら今日は苦勞することなく——。

『□□□□□——ッ！！』
「ん、この咆哮って確か……オウガか？」

唐突に暗闇の奥から届いた獣の叫び声に思わず身構える。

この先もスライムばかりだったらと考えていた矢先にこれだ。
アイツを相手にするとなれば、少し気合を入れ直さないとけないな。

小さく溜息を吐いてから剣を握り締め、グネグネと折れ曲がる細長い通路を進む。

するとやがて視界の奥に開けた小部屋のような場所が映った。

「（ま、ここらへんに数体いると考えるのが妥当かねえ）」

伏せて慎重に中の様子を伺うと、予想通りあの巨人はいた。
暗緑色の皮膚に2メートルは下らない巨体。

最初に見たときはその威圧感に圧倒されたものだ。

「（数は……3体か。できれば魔法銃で一気に奇襲をかけたいところだけど）」

今回はなるべくこの剣主体で戦うことが目的なのであつて。
あまり魔法銃に頼るわけにはいかない。だけど……。

あの中に真正面から斬りかかっていくのは気が引けるな。つか嫌だ。

「（一体だけ魔力弾で潰すか。残った2体は……気合で斬るしかないよなあ）」

そんないい加減な作戦を立つつ、時空間操作魔法で小さな亜空間を再現する。

早々に左手を中へ突っ込んで白銀に輝く魔法銃を取り出した。

「よし、いくぞっ！」

気合と適当な魔力を銃口に込めて魔弾をチャージ。

そして物陰から完全に無防備なオーガへ目掛けて解き放つ。

激しい爆発音が響き、腹に命中した巨人は真後ろに吹き飛んでいった。

突然のことに狼狽える2体のオーガの隙を見逃さず、俺は考えるよりも早く地を蹴る。

「せいっ、たあぁッ——！」

飛行魔法で小さく身体を浮かせ、自分より倍はある巨体を袈裟斬りにする。

本来ならば切断面から血やらグロテスクなものが飛び散るのだろうが、あくまでもこの仮想迷宮の魔物は“作り物”なのでその心配は必要ない。

代わりに美しい光の粒子が溢れ、その白に包まれ消え行くだけだ。

『グヴァルルガア、フウガア——ッ！！』

「っとと！？ 少し余韻に浸る暇もくれないんだなっ！」

その視界の端で最後の一体が大きく腕を上げるモーションが見えた。

太い腕、手の先には鋭く凶爪が光る。無論餌食になるわけにはい

かない。

振り下ろされた爪を剣先で弾き、一步下がって間合いを取る。

「やつ、とおりやつ、ハアッ！」

大きくバランスを崩したオーガへ三段斬りを叩き込む。

右腕を飛ばし、真横へ斬り裂き、そして最後に強く斬り上げる。

その必殺剣はすべて致命傷になったらしく、緑の巨人は虚しい叫びを上げて崩れ落ちた。

「……はあ、はあ。ゼロ距離でやり合ったのは初めてだけど、なかなか怖いねえ」

短いけれど激しい戦闘に肩で息をしながら吐き捨てる。

そりや今まで“ある程度の距離をとっての攻撃魔法”だったからな。

リアル化け物を至近距離にして当然の感想だろう。

『ふふふ、そういうお前も随分と軽く剣を振るえていないか』

近くの岩に腰を降ろして息を整えていると、胸ポケットの生徒証ナヒに通信が入る。

クリス先生からだ。やっぱりモニタリングされていたらしい。

「まあ不思議なもんで。敵を前にすると体が自然に動くと言いますか」

『そうか、ならば特に問題はないようだな』

「え、ええ。一応のところは……」

あははと苦笑しながらも、自分の放った言葉に1つ疑問が頭に浮かんでいた。

スライムと戦っていた時は気にならなかったが、たった今オウガと対峙した時。

あまりにも剣の扱いが上手く出来過ぎているように感じたのだ。頭がすごいスピードで回って、本当に体が自然に動いたように。

なんか剣の上達、少し早すぎやしないだろうか？

単に才能と片付けてしまえばオシマイだが、どうも釈然としない。

『ん、どうした浮かない顔をして』

「えっ！？ あ、いや――」

咄嗟に何でもないですと続けようとした口を閉じる。

この先生なら何か知っているかもしれないな。

そう踏んで、代わりに俺は疑問の言葉をクリス先生へと紡いだ。

『ふむ、それはそんなに難しい話ではないぞ』

剣を振るっているときの僅かな違和感について話してみると、先生はそんな言葉を返してきた。

ということはやはり何かしらのワケがあるらしい。

『生徒タクマよ、お前の持つその剣は一体何でできている？』
「何でできてるって……」

少し間をおいてから出された問い掛けに頭を働かせる。

高密度エーテル顕現体、ラファーズ。

言葉の通り個人のエーテルを魔力媒介として実体化させたものだ。

「俺の記憶と理解が正しければ自分のエーテルの塊ですよネ？」

「ああその通りだ。なら次、そのエーテルとは何だ？」

「そりゃ魔力に干渉できる霊的な物質で、生物の生命力じゃ……あ
っ」

知っている知識を振り絞って答えていると、途中ではっと気付いた。
た。

今言葉にした通りエーテルは生命力であり、魂と言い換えてもいい。
い。

つまりラファエ、俺のエーテルで構成されているこの剣は……。

「俺の心、魂でできた剣なんですね」

「気付いたようだな。そうだ、お前の魂なのだから扱えないわけがないのだよ」

声だけで嫌らしく笑みを浮かべている金髪少女の様子が目に浮かぶ。
ぶ。

そうか、原初的に知っていたんだな俺は。この剣の扱い方を。

そういうことなら、以前冬霞^{トウカ}がテオが話していた『扱えないラファエを生成した者はいない』というのも納得だ。

『ま、あくまでも感覚的なものだけなのだな』

「つまり完全には習得できていないってわけですか」

『そういうことだ。ほら、分かったらさっさと進め。急がないと時間内に終わらんぞ？』

音声通信を切ったのか、それだけ言うと少女の声は途絶えてしまった。

「……まったく、本当にキツイ人だな」

苦笑いを浮かべて腰掛けていた岩から立ち上がる。
なるほど、魂の剣か。

心の中で小さくそう呟いて、淡青色のセイバーを見つめていた。

・
…

立ちほだかる魔物を斬り払い、あるいは魔弾で撃ち抜いて。
光る長剣と魔法銃を手に暗い闇を駆け抜けていく。
そうやっているうちに気付けば洞窟のかなり最深部まで近付いて
いるようだった。

というか、そろそろ終わって欲しい。

「ええっと時間はと……ん、あと30分ってところか」

生徒証^{ナヒ}に映し出された数字に小さな笑みが自然と浮かぶ。
あともう少しでこの仮想迷宮から解放されるのだからな。

「（にしてもやっぱりこの剣すげえわ……）」

ここまで来る途中に魔物相手にいろいろ実験していたのだが、この剣の特徴をいくつか見つけた。

まず刀身がある程度の長さまでなら俺の意思で伸び縮みが利くこと。

最長で2メートルほどだが、巨大な敵を斬るときには使えそうだな。これは元が霊的な物質であるエーテルならではの特徴だろうな。

んで次。この剣を握っていると、身を守る固有結界が強化されるらしい。

さっきもオーガの爪を喰らいそうになったとき、触れる寸前で魔法障壁が発動して跳ね返したのだ。

エーテルバリア並の耐久度はあるのかも知れない。

攻撃を捌き切れない時や不意打ちはこれで防げそうだな。

そして最後に魔法との相性。

刀剣の形をしているが一応これも優秀な魔力媒介だからな。当然魔力をエンチャントして魔法を行使することができる。

例えば火の魔力を付与して剣身に炎を纏わせることも可能だ。魔物に関わらず生命には致命的なダメージを与えられそうだし、これから使っていくことは多いだろう。

ちなみに射撃系の攻撃魔法についてだが、どうやら一点収束型の射撃には大きな適性があるらしい。

エレクトリックスピアやチャージ魔力弾はこの剣で行使した方がいいだろうな。

その逆にファイアボルト系の散弾型はあまり向いていないようだけど。

ま、そこは魔法銃で補うから問題ない。

「……って、思ってる間にもうゴール地点みたいだな」

ラファールゼのことに向かっていた気持ちを現実の風景へと連れ戻す。

辿り着いたのは洞窟最深部と思われる広い空間。

「（いつものパターンなら、ボス級の魔物が雑魚の大群が召喚されるはずなんだけど）」

今日は果たしてどちらだろうか？

もつとも、かなり疲れるからどちらも嫌なのは違いないが。

「……あ、れ？ 何も起こらない？」

しばらくセイバーと銃を両手に身構えていたが、虚しい風だけが吹き付ける。

む、これは一体どういうことだろう？

もしかして今日はこれでオシマイとか？

ちょうどそんな甘い考えが頭を支配し、安堵の息を吐こうとしたその時だった。

『クククッ、残念だな。まだ迷宮探索は終わっていないぞ生徒タクマ』

「うわぁっ!？」

唐突に悪魔の凜々しい声が俺の心臓を突き刺した。

くそっ、一体なんなんだこの人は!？

毎度毎度絶対わかってやっているな……。

とまあ言いたい文句は山ほどあるが、ここは心を落ち着かせよう。

「ゴホンゴホンッ、終わってないってどういうことでしょうか？」

『よく見てみる、このダンジョンにはまだ続きがあるのさ』

「——ッ！？　なんですって？」

クリス先生の言葉に目を丸くして前方の闇を見やる。

すると確かに、一本の細い通路がまだ奥へと続いていた。

「（これ以上まだ奥があったのか。知らなかったな）」

どうやら緩やかな上り坂になっているらしい道に目を細める。

今まで探索してきた洞窟型ダンジョンの最終地点は全部この広いホールのような空間だったのに。

さらにその奥があったことなんて、今までで初めてのことだ。

『そういうわけだから、あともう少し頑張ってくれ』

「ああッ、ちよっと!？」

黙っていると一方的に通話を切られてしまった。

どうやら進むことしか俺に選択肢はないらしい。

・
…

「ッ、熱ッ——!？」

最後の道に足を踏み出すと、ある異常が俺の身に襲いかかった。さっきまで冷たかった吹き付ける風が熱風に変わっていたのだ。それだけじゃない、気温が高くなったのを確かに感じる。

「（火の魔力が、暴走している？）」

どういうことだと精神を集中させると、一応の理由は推測できた。

この付近の火の魔力がすごい勢いで暴れ回っているのだ。
普通魔力というのは非常に緩やかなスピードで大気中に漂っているものなのに……。

となれば、奥にいたのであろう魔物がその原因となっている可能性が高い。

おそらく火を操る、結構強大なヤツだ。
俺に対処できるのかは……わからない。

「あの光は……地上に出られるのか？」

妙に憂鬱な気分で見やると白く輝く光が覗けた。
吹き込む熱風に目を細めながら、俺はその光の先へ足を進めた。

「こりやどう考えても嫌な予感しかしませんね。はてさてどんなえげつない魔物が出てくるのやら……」

優雅に紅茶を飲みながらモニタリングしているのだろう担任へ聞こえるように呟く。

薄暗い洞窟を越えて待ち構えていた場所は赤の空間だった。

地は焼けた土で焦茶が広がり、見上げる空は夕焼けのように赤く染まっている。

——いや、そんな穏やかな感じじゃないな。

まるでこの世の終わりのような、禍々しく血生臭い赤色にだ。

「熱い、な。ここはどういった場所なんだろう？」

いつの間にか額に浮かぶ汗を拭って焔獄を探索する。

と言っても、見渡すかぎりは特に怪しい物はないようだが。

しかし火の魔力の暴走はかなり激しくなっている。

確かにいるはずなんだ。何かとんでもない奴が。

……できればお目にかかりたくないし戦うのも嫌なのだが。

『□□□ッ、□□□ッ——！！』

「——ぐッ！？」

しばらく歩いていると唐突に耳を覆いたくなるような咆哮が襲い来る。

あまりの怖気に顔をしかめながら辺りを伺った。

くそ、どこにいる？ どこからくる？

『□□□□□□——ッ！！』

「う、上か！？」

再度聞こえた熱い咆哮に首を上げる。

飛行する魔物なんて初めてだな。まったく面倒な——。

「んな、ななななっ！？」

直後目に映った敵に俺の思考は停止。

地が揺れるような咆哮を放ったそいつは、やはり燃える空にいた。

数十メートルはありそうな全身を宙に浮かせこちらを見下ろす。
聖炎を思い起こさせる美しい真紅の鱗と対の大翼。
それでいて思わず後ずさってしまうほどの威圧感。

「チツ、こんな奴と戦えて仰るんですか先生はっ！」

金髪少女へ非難の声を上げてからセイバーの柄を力強く握り締める。

俺の心の緊張に反応したのか、その剣はより鮮やかなホライズンブルーに染まっていった。

こりゃ、もう一頑張りとかそういうレベルの相手じゃない。

空を飛ぶ、大型の飛行生物。

そう、眼前の敵は紛う事無き竜ドラゴンだった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:6・3 【ドラゴニックファイト！】

Episode 6・3 【ドラゴニックファイト！】

紅蓮に染まった空に重なるおっきな赤き影。

この世の果てと言っても何ら不自然ではない炎獄で、俺とソイツは対峙していた。

睨みつける目の横を浮かんだ汗がたらりと流れ落ちていく。

「（しかしドラゴンとは参ったな……。どうしろってんだ）」

すぐ前方の上空を豪快に羽ばたく巨大な赤竜。

少しは冷静になった頭を回転させてどうするべきか思索してみる。もっともこの大型飛行生物の習性や攻撃の手数を俺は全く知らないが。

あいにく本物のドラゴンを目にしたのはこれが初めてなのだ。竜人とは毎日顔を合わせているんだけどなあ。

「（おいおい何も思い付かないぞ）」

辛うじて頭に浮かんだのはヤツの攻撃手段ぐらい。

恐らく近接しているとあの鋭い爪か牙で斬り裂いてくるだろう。あとこれは勝手な想像だが、何かしらの攻撃魔法も行使してきそうだ。

炎のブレスを吐いたりな。おとぎ話の中じゃザラにある話。

『ガフウツ、キシヤアルルウ——ッ！』

「チツ、時間切れってか」

結局芳しい作戦は浮かばないまま状況は動き出してしまった。
人の数十倍は下らない巨体が奇声を上げて地上に降り立つ。
その衝撃で地は揺れ、衝撃波は熱風と成して強く俺へと吹き付けた。

「うぐっ!？」

咄嗟に両腕で顔を覆ってその場にしゃがみ込む。

砂塵が激しく舞い自然と視界を奪われてしまった。
くっそ少し動くだけでこの迫力なのか。

「(いよいよヤバいな。とりあえずは牽制でもしてみるか?)」

このまま立ち呆けていても埒が明かないし。

それにここはあくまでも仮想の空間だからな。

たとえ鋭い爪で斬り裂かれようと頭から丸かじりにされようと、
死なない。

それは今までにもこの身を持って体験済みだ。

ただしそれなりの痛みを伴うのは違わないけどなッ!

半分ヤケになりつつも、前方にいろであろうドラゴンへ魔銃を構える。

しかし視界を閉ざしていた砂嵐が徐々にその激しさを失っていく
と――。

「ん、あ、あれっ? どこいった?」

殺気立った気配も、そのシルエットすら。
まだ微妙に砂塵で視界は遮られているが、いたはずの赤竜が姿を消していた。

「（ええつと、一体どうなってるわけ？）」

再び混乱し始めた頭をなんとか冷静に保って意識の網を集中させる。

あの巨体がほんの数秒で消え去るなんて到底考えられない。
仮に上空へ飛び立っていたとしても敵である俺をまだ狙っているハズだ。

他にもたくさん事態を浮かべながらドラゴンの気配を探す。
くそ、こっちはもう疲れきってるんだから勘弁して欲しいもんだ。

「——んあ？ なぁに人生に疲れ切った顔してんだよタクマっち」

「う、うるさいよッ！？ って、え？」

どこからか聞こえてきた失敬な男の声。
反射的にそう言い返すと同時に俺は目を見開いて辺りを見渡す。
すると先程までドラゴンがいた地に、見知った顔がニンマリとこちらを覗いていた。

「ちよっ、ラグナ！？ お前どうしてここに……」

少し高めの身長にツンツンと立たせた真紅の髪。
こいつ、昨日酒に吞まれて今日は絶賛欠席中じゃなかったのか？

「ハハハッ、話せば長いがまあいろいろとあったんだよ」

「……はあ？」

元気に言い放った赤毛竜人にハテナマークを浮かべる。
つかあまりの超展開ぶりに付いて行けない。

ドラゴンがいきなり消えたと思ったら、今度はラグナが颯爽と現れた。

まるで入れ替わるように……って、うん？ 待てよ。

「ラグナよ、つかぬ事を訊くがもしかして今の赤いドラゴンって…

…」

「ああもちろん俺だぞ。どうだ、お望みの真竜形態を見たご感想は？」

「やっぱりお前かあッ！」

きつぱりと笑顔で答えるラグナに膝から崩れ落ちる。
何をやらかしてくれてるんだコイツは。

「な、なんだあ？ 今日はやけにテンション高いなお前」

「少なからずともお前のせいだぞ。緊張感溢れる空気をぶっ壊しやがって」

こつちがどれだけ神経を尖らせていたと思ってるんだ。

「……はあ、もういいよ。んで？ 本当にどうしてここにいるんだよお前」

「なんかカマボコみたいな目になってんぞタクマっち」

「茶化すな疲れてんの。だから早く説明」

正確には呆れ疲れている目だが。

シリアス感が一気に崩壊してしまった仮想迷宮で、俺は大きな溜息を漏らした。

「実はな、昼前にクリス先生が俺を寮まで叩き起こしに来てよ」

「そりや大事件だな」

「ああ。鬼の形相でこっぴどく教育的指導をなされたさ」

そりやそうだ。酒に吞まれて寝過ごし欠席なんて醜態、あの担任が許すわけがない。

朝も『お仕置きしてやる』と黒い呟きを漏らしていたしな。

「それで罰として、この仮想迷宮で魔物の相手をさせられてたってわけさ」

「なるほど。俺はそれと同じダンジョンに送り込まれてたわけね」

ラグナはこの地上で、俺はその地下で迷宮探索をしていたのか。先程まで魔力が乱れてたのは上でラグナが強力な魔法を行使していたからなんだろう。

なんだかつまらんオチだ。

「じゃあもう戻ろうぜ。見た限りじゃこのエリアの魔物は全部倒したんだろ？」

「おおっと、確かにそうだがまだ帰るわけにはいかねえな」

帰還用のポータルを呼びだそうとする俺をラグナが制する。
な、なんだ？ まだ何かやることでもあるのだろうか？

「気付けよタクマっち。俺はお前がここへやって来ることを知ってたんだぞ？」

言いながら赤毛竜人は後ろに下がって俺と距離を取る。

そしてこちらに目を向けると、真紅に輝くロッドを2つ両手に構えた。

あれは……わかる、ラグナのラファーズだ。

何て言うんだっけこの形の武器……トンファー、だっけか？

とにかくも、今からラグナがやろうとしていることには見当がつく。

「なんだ、剣のお相手でもしてくれるのかい？」

「そういつこった。先生はお前の実力を、俺を使って確かめさせたいそうだぜ」

なるほど、だから同じダンジョンに。

サプライズはいいから先に説明して欲しかったな。

「それに俺も前々からタクマっちには興味があつたしな。ラファーズを手にして覚醒した力、存分に魅せてくれ」

「んな過度な期待はやめろって。いかんせんまだまだ未熟者なんですね」

苦笑して俺も一旦消していた自分のラファーズを再現させた。

薄い青に光る剣先をラグナに向け、戦闘準備の完了を告げる。

思えばラグナと魔法決闘するのはこれが初めてだ。

「さあ遠慮はいらないぜ。全力で打ち込んで来いタクマっち！」

「ああ、言われなくてもっ」

魔法銃を亜空間へと戻し、セイバーだけを両手に携えて地を蹴る。そして言われた通り全力で剣を振り下ろした。

「どりゃああッー!」

「んっ、やるな。なかなか重い剣圧だぜ」

「そりゃどうもっ!」

2つのロッドを盾にしてその一撃を受け止めるラグナ。こちらは構わず続けざまに剣の乱舞を叩きこんでいく。

「やつ、ハアッ、でえいつ!」

剣先で淡青色の軌跡を描きながらラグナに挑む。

もともと体力を消耗している俺が、まともにやってコイツに勝てるとは思えない。

だから、荒削りでも雑でも全力の攻撃を仕掛けたのだ。

「でもまだまだ甘い。俺はお前の剣筋が読めるぜ?」

「くっそ全然当たらん……」

が、やはり戦闘経験の差が違うのか。

いくら剣撃を飛ばしてもラグナの顔は余裕のままで。

息の続く限りの連続攻撃はすべて見事に弾かれてしまった。

流石に不利を悟った俺はすぐさま飛行魔法の効いたバックステッ
プで大きく距離をとる。

なんとかして次の策を練らないとな。

『じゃあ次は俺から行くぜ。火魔力装填』

Enchanfire

「——くっ、魔法か!?!」

しかしそれを待つてくれるわけもなく、早急に追撃態勢へと入る

ラグナ。

双方のロッドの先端に極小の陣が浮かび、火の魔力が集まってい

く。
やはりあのトンファーも魔力媒介として使えるらしい。

「（アイツどんな攻撃魔法を使うつもりだ？）」

攻撃魔法と一口に言ってもその属性、系統は数多い。
死角からの襲撃系魔法かあるいは正面からの射撃魔法か。
またその場合には散弾型か一点収束型か。それとも……。

「（相手の手数が分からない以上、どの可能性も捨てられないか）」

せめて分かるのは火属性の攻撃だということだけだ。

故に、ここは万能な障壁魔法を張っておくしか選択肢がない。

「なるほどエーテルバリアか。賢明な判断だが、それで俺の炎を掻き消せるかな？」

「な、なんだって？」

「こういうとき。燃やし尽くせ、Fire Bolt炎竜の矢羽ッ！」

突き出されたラグナのロッドから無数の火の矢が解き放たれる。

見た限りでは普通のファイアボルトと変わらないが……。

「ん な っ —— ！ ？ 」

次の瞬間、自分の視力を疑うような光景が広がっていた。
地についた火矢は普通そのまま消えてオシマイなのだが、ラグナの放ったそれは違う。

触れた焦地から爆炎が吹き上がったのだ。

よく観察すると緋弾に込められた魔導力、つまり破壊力がまるで桁違い。

これもつファイアボルトじゃないぞ。もっともつと高度な攻撃魔法だ。

『てめえラグナツ、これ対軍用レベルの攻撃魔法じゃねーか!?!』

降り注ぐ爆炎を必死に障壁で防ぎながら念話を飛ばす。
程度つてもんを知ってくれ。

『はははっ、俺は火の魔法だけは大得意でな。この分野だけはトウカつちを抜かして学年主席なのさ』

『しゅ、主席つてお前……』

『まあ他のお勉強は、からっきしだけどなあッ!』

情けない叫びと共に一際大きな火炎弾がまっすぐ俺へと迫る。
くっ、これは避けられないぞ——!?!?

「うわああッ!!!」

容易く結界を破壊した火炎弾が俺の前で炸裂する。

無論爆炎の衝撃波に吹き飛ばされ地に転がされてしまった。

「（いたた、こりゃ想像以上の力だな……）」

火魔法の成績が学年主席とは初耳だった。

普段はあらゆる面で馬鹿丸出したが、意外なところもあったんだな。

——なんて感心している場合じゃない!

「おつ、立ち上がったか。どうする、まだ続けるかい？」

「当たり前。これで終わりなんてお粗末にもほどがある。せめて一発喰らってもらうぞ」

「ふふふつ、いいぜいいぜッ！ その言葉を待ってたんだッ」

負けじと吐いた俺の台詞に心底嬉しそうに笑い出すラグナ。
すると今度は相手の方から跳びかかるように近接戦を仕掛けてきた。

2つのロッドを器用に操って複雑な突きを繰り出してくる。

「ハアッ、どりゃあッ！ ほらほらもつとスピード上げないと間に合わないぜ？」

「——ッ！？ ぐ、やつ、せあッ！」

青玉のセイバーと紅蓮のトンファーがぶつかり合うたび魔力の花が舞う。

真紅の軌跡を描くロッドはかなり速く、それでいてとてつもなく重かった。

しかもそれが2つ不規則に打ち込まれてくる。

こちらは一本の長剣でそれらを対処して行かなければならないため正直キツイ。

「（こりや見事なまでにギリ貧だな。隙を突いて反撃しないと……）」

迫る攻撃を息を乱さぬように剣で弾き返しながら目を細める。
今こそなんとかラグナの動きに付いていけているが、いつまで持つかどうか。

「オラオラオラッ！」

「うっ……あぁっ！？ き、キツイ……」

そればかりかさらに加速していく突きに思わず本音が漏れる。
くそったれ、このままじゃダメだ。
やっぱり自分から斬り掛かりに行かないと！

そう強く思うのと同時に、俺の体は颯爽と動き出していた。

「うおおおっ、どりゃっしやいいッ！！」

「つとと！？」

ロッドを弾いた直後、けったいな気合と共にラグナの首元へ剣を突き出す。

いきなりの反撃に赤毛竜人は目を丸くするが、バックステップで避けられてしまった。

だがしかし俺の反撃はまだこれからだ。

「いくぞラグナっ、せあ——ッ！！」

「ククッ、受けてやるぜタクマっち。来やがれ！」

二人で笑い合ってから俺は淡青色の聖剣を振り上げる。
大きな袈裟斬りから入り、中段に薙ぎ払ってから足元を突く。
そんな速斬りの連続攻撃が今の俺には繰り出せていた。

「えいつ、やつ、ハアアッ！」

最大の威力とスピードで打ち込んだ剣を弾き返されながらも、諦めずにホライズンブルーの軌跡を紡ぎ続ける。

まさに完全捨て身なフルパワー連続攻撃。

その甲斐あってか徐々にラグナの顔色から余裕が消えていく。

「（よし、なかなか手応えはあるみたいだなっ）」

俺の体力も時間も残り少ないことだし、そろそろ決着を付けよう。
そしてなにより、たった今良い策が思い付いたのだ。

胴体にセイバーの先を繰り出したのと同時に大きな回し蹴りをく
れてやる。

が、あまりにも分かりやすいモーションなのであっさりとかわさ
れた。

だけど構わない。いきなりのバックステップにラグナは態勢を崩
している。

そう、僅かなこの隙。これこそが俺の狙いだった。

神速の如きスピードで長剣を片手に持ち替え、空いた手に魔法銃
を召喚させる。

その白銀に光る銃口を、しっかりとラグナへ向けて。

『貫け、氷結の散弾ッ！』
Freeze Ricochet

この世界に来てもう何度も使った攻撃魔法を詠唱。

速さ重視のチャージで破壊力には劣るが、数十の魔力弾を解き放
った。

「おおおっつ、こいつあまた大量だぜ！？ 捌き甲斐があるッ」

反射的に迫った氷弾を2つのロッドで叩き潰していくラグナ。
よしっ、案の定かかりやがった！

魔弾の対応に夢中で他の防御が手薄になっている今こそ、最初で最後のチャンス。

まあ早い話、フェイントだ。

左手の魔法銃を亜空間へと戻し、俺はセイバーだけを両手に構えて地を蹴る。

「セア——ッ!!」

「なっ、うげっ!? くっそそつちが本命かよオイ!?」

「ハハッ、気付くの遅えよ。悪いが決めさせてもらっぞラグナッ」

驚愕の表情を浮かべる赤毛竜人をそう笑い飛ばして。

戦闘不能を狙った必殺剣を、本日最大威力で横薙ぎに繰り出した。

「そうは……さ、させるか、よおッ」

「な、わぁッ、しまっ——!?!」

しかしまだ詰めが甘かった。

ラグナは間一髪、左手のロッドで振り回された剣撃を防いだのだ。ま、まずいつ、このままじゃ……!?!?

「今のはかゝなりヒヤッとしたぜタクマっち。でも今日は、俺の勝ちだな」

「——ッ」

その言葉が耳をかすめた瞬間。

流れるようなラグナの右カウンターが、しっかりと俺の腹を捉えていた。

重い一撃が固有結界を破り、意識が飛んでしまいそんな衝撃が体を巡る。

「がはっ、ゴホッ!?　ぐあ……」

痛みに手放してしまった淡青色の長剣が光の粒子となって霧散する。

つまりそれは俺の戦闘不能。敗北を意味していた。

「（うぎぎぎ、今は絶対決まったと思ったのに……）」

胸に溢れる悔しさを噛み締めつつ。

俺は熱のこもる大地へ静かにゆっくりと崩れ落ちる。

その少し芝居がかった倒れ方に、目の前で見ていた赤毛竜人は軽く吹き出していた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:6-4 【一難去って、また……？】

Episode 6-4 【一難去って、また……？】

俺が異世界出身だからそう感じるのかは別として。

この魔法学園の教育カリキュラムにはユニークな点が多々ある。

例えばダンジョン「ロイヤル」バトル迷宮や闘技場を使った実践かつ実戦的な授業がそれだ。

しかも高度な結界空間魔法の影響で負傷の心配はなく安心安全。

このリユミシアル界ほどテクノロジーが発展していない地球では、再現できたとしても精々バーチャルゲームぐらいのレベルだろう。

まあその話は置いておくとして、他にも午後の講義科目が少し特殊だ。

と言うのも科目が選択制であり、通常よりハイレベルな授業が行われているそうぞ。

普通の魔法講義だけじゃなく薬学や錬金術などの魔科学もあつたっけか。

どちらにせよ、生徒たちは自分の興味や適性に合った勉強に励むことができる。

いつもその時間帯はクリス先生に鍛えられている俺も新学期、つまり2年生になってから参加できるとのことだ。

流石にどの講座を受けるかはまだ決められていないけど。

んで話を戻すと生徒たちはそれぞれの講義室へ移動しなければならぬ。

そりゃ講座は数十あるし場所分けしないといけないからな。

「（そういうわけで今この教室には誰もいないわけだ）」

自席の机に突っ伏してそんな自己解決を心の中で呟く。

授業終了のチャイムが鳴った直後の静寂な第2クラスの教室。

ここに居るのは鐘の音より先に戻った俺とラグナだけであった。

「しっかしホント、なかなかやるじゃなねえかタクマっち」

隣の席の赤毛竜人が不意に口を開く。

ちらりと目をやると自分と同じようなダラダラ態勢だった。

「そりゃどうも——」

「まっ、俺様の方が一回りも二回りも上だったけどな！」

「……さいですかい」

褒めてくれているのかと素直に喜ぼうと思ったたらこれだ。

眠気と呆れに大きな欠伸が漏れる。

さきほどの迷宮探索の最後、唐突に現れて魔法決闘ディルナーを挑んできたラグナ。

長剣型のラファールゼを使った決闘に初めてながらも全力をぶつけたのだが、惜しくも敗れてしまった。

クリス先生は『今の段階では上出来だ』と満足気だったけれどやはり悔しい。

「もつと強くなっていつか絶対にぶっ倒してやるからなラグナ」

「へへっ、そりゃ楽しみだぜ。もつとも——」

俺の宣言に上半身を起こし、紅い瞳でこちらを捉える赤毛竜人。

少しだけ真剣そうながらもラグナは笑みを浮かべて言葉を紡いだ。

「ラファールゼを手に入れたことでタクマたちは今までよりも格段に強くなってるぞ。今ならクラスの連中の数人は倒せるかも知れねえな」

「ん、それは言いすぎじゃないのか？ 流石に一日で皆を越えられたなんて……」

「ははっ、確かにそうかもな。でもミリオムぐらいなら余裕だと思うぜ」

小さく唸りながら名前が拳がった少女を頭に浮かべる。

確か俺が来るまではあの娘がクラスで一番弱かったんだっけ。まあ1週間前に負けましたけどね俺。

……今なら勝てるのかなあ？

「たっただいまっって、ありや？ なあに男二人で見つめ合ってるのよ気色悪いわねえ」

「あっ、ミリオム。戻ってきたのか」

噂をすればなんとやら。

唐突に教室へ現れたのはそのサキュバス少女ご本人だった。

ブロンドの長い髪を揺らしてこちらを白い目で見つめている。

どうやらとてつもなく嫌なことを想像なされているらしい。

「えっ、ラグナ？ なんだキミ生きてたんだね」

「あら私もてつきりクリス先生に八つ裂きにされているのかと」

誤解を解こうと思ったたら今度はテオとミアが戻ってきて。

気付けばもうクラスの皆が続々と教室へと帰ってきていた。

「まあ確かに先生にはぶっ殺されたが、それより楽しいことがあったな」

クククと口元を歪めながら俺に視線を向けるラグナ。

その怪しげな言動に興味を惹かれたらしい奴らが寄ってくる。

……コイツ、俺との決闘について話すつもりだな。

自然と赤毛竜人の行動が読めた俺は、誰かに聞かせるように大きな溜息を漏らした。

「——ってな感じでタクマっちと一戦交えてきたわけだ」

で、結局そんな俺の予想は見事に大当たり。

寄ってきたクラスメートたちにラグナは現在に至るまでの経緯を得意げに語っていた。

「それでどっちが勝ったのかしら？ ああ、拗ねてるアンタの顔を見ればわかるわね」

「拗ねてない！　つかてめえトウカ、お前今絶対分かってて言ったよな！？」

「さあて、なんのことかしら」

相変わらず癖の悪い銀髪少女に噛み付くが軽くあしらわれてしまふ。

くそつたれめ、いつか絶対ギャフンと言わせてやるぞ。

「あはは……でも凄いじゃないですかタクマくん」

「そうだよ。もう対人戦で使えるほどラファールを扱えるようになったんだね」

「ま、まあな。一応は接近戦でも困らないようになったよ」

暴れる気持ちを抑えてからテオとミアに向き直る。

まったく、この教室で俺の心に平穏が訪れるのはこの2人と話している時だけだ。

「——なあタクマよ、これから一緒に闘技場で爽やかな汗を流さないか？」

しかしそんな平和も束の間、遠回しに魔法決闘を申し込んでくるクラスメートA。

ラグナの語りに血でも騒いだのだろうか、その瞳はギラギラと輝いていた。

「……いや、頼むからそれだけは勘弁してくれ」

「むう、それは残念」

フルフルと首を振りながら答えると肩を落とされてしまう。

しかしこちらら迷宮探索とラグナとの決闘ですっかり満身創痍。今日はもう剣を振おうという気持ちにはなれなかった。

「しかしどうするよミリオム、もうタクマたちはお前を越えてるかも知れないぜ？」

「ふうん面白いじゃない。いいわ、明日の実戦授業で相手になってあげるっ！」

ビシッと人差し指をこちらに向けてニヤリと微笑むサキユバス少

女。

おつ、こりゃ俺からリベンジを申し込む手間が省けたぜ。

「ああ、今度は負けないからな」

あの時とは違って俺はラファールゼを手に行っているし、更に多くの魔法を学んだ。

だからこそ強い意志込めて彼女にそう返すのだった。

・
…

「ハア、ハア、はぁ……あと一階か」

コツコツと大きな螺旋階段の上に足を踏み出していく。

ここは学園の中で最も高い7階建ての塔、通称中心塔と呼ばれている場所だ。

学生会室や職員室、食堂のある名前通り学園の中心部である。

さらに4階は学園内の各地と空間転移魔法のポータルで繋がれておりアクセスはまあ悪くない。

実際この俺も高等部の学舎からワープしてきたしな。

……それでも、3階分を足で上がるとすれば結構くる。

最初は駆け足だったスピードも次第に衰え今ではすっかりスローペースだ。

そう、俺は今最上階の学園長室へと向かっている。

と言うのも先ほどこんな出来事があったからで……。

それはHRが終わって放課後になったばかりのことだった。

「——あぁと待て待て生徒タクマ」

「ん、何でしょうかクリス先生？」

特に学園でやることはないので早速寮に戻ろうと廊下に出たところ、後ろからちっちゃな少女に呼び止められる。

彼女は危ない危ないと2つに束ねた金髪を弄りながら。

「つい伝え忘れていたが学園長が呼びだそうだ。今すぐ行け」

「……ハイ？」

そんなことをのたまってから颯爽と先生は去ってしまった。
用件も教えられないまま、俺はぜえぜえと息を切らして螺旋階段を上っているわけだ。

「（一体何の用なのかねえ？ ホント珍しい）」

というか転入日以来会っていないような気がするぞ。
もっとも出向くような用事はこれと言ってなかったのだけど。

うーん、何か嫌な予感がするんだよなあ……。

「ま、そんなこんな言ってる間に着いたわけだが」

長い螺旋階段を越えた後に整然とした回廊を進むとあつという間で。
目の前に立つ魔法で“学園長室”と文字が浮かんでいる木製扉。

懐かしいなあ、一ヶ月ほど前トウカに連れてこられた場所だ。

「あらいらっしゃいタクマ君。待っていましたよ、さあさあこちらへ」

ノックを済ませて部屋に足を踏み入ると、やはりあの女性はいた。

腰まで伸びる黒髪を靡かせこちらを見ながら優しく微笑んでいる。

「どうもお久しぶりですリリス学園長。お会いするのは初日以来ですよね？」

「ええ、かれこれ2週間ぶりと言ったところでしょう」

「……早いものですね。おかげさまで上手くやって行けています」

感謝の気持ちを込めて一度深く頭を下げてから対談用の席に着く。

「そのようですね、先生方や学生会の皆さんからも伺っていますよ。進級試験も無事に合格できたようで何よりですわ」

反対側に座る学園長はそう言っとうふふと頬を緩ませる。

やはりこの人には何でもお見通しのようなだった。

「——ええつと、それで学園長。今日俺を呼んだのは一体？」

しばらく自分の生活状況を報告してから気になる本題を突く。
このまま世間話をしていたら日が暮れてしまいそうだな。

「うふふ、別に深刻なお話ではありませんので安心して下さい」

「そうですか？ ならいいんですけど……」

「あつ、でも少しは頑張ってもらわないといけません」

安堵の息を吐こうとする俺を学園長の声が遮る。
思わず咳き込んでしまい、その様子を見てクスクスと彼女はさらに話を続けた。

「来週に期末試験が控えているのはご存知ですね」
「そりゃもちろん。俺も参加しますから」

3月の初めにある学年最後の実力試験。
各人が取っている授業講座のほとんどが対象で、進級にも大きく関わっている大切な試験らしい。

確か俺は午前中に受けている魔法学や数学だけでよかったはずだ。
もつともクリス先生の取計らいで俺は試験の結果に関わらず進級できるそうだけど。

「やはり平均点より半分はとらないと留年とか？」
「いえいえ、そういうわけじゃないんですよ。確かにそうしていた
できればこの上ないのですが」
「あはは……」

まあ無理だろう。特に闇光の魔法講義は完全に遅れをとってしま
っているからな。
魔科学の分野も地球にはなかった技術があって結構マズい。
それらの穴は今後の補習で何とか埋めていかなければならないだ
ろう。

しかし点数のことじゃないのか。なら学園長は一体何を？

「1つだけ特別な筆記試験を受けてもらいたんですよ」

考えていると、学園長はそう言って一冊の薄い本を手渡してきた。タイトルには『リユミシアルの手引き』とある。これって……。

「名前の通りこのリユミシアル界の基本知識が記されている学生用の資料です」

「はい、見たことありますよコレ。ナビの中に入っていましたから」

確かこの世界の政治体制や組織、地理的なことまで割と詳しく載っていたはずだ。

もともと学園生活が慌ただしくてじっくりとは目を通していないが。

最後の方のページには簡単な問題も合わせてあったはず……って。

「まさかこの問題集の部分を試験にする、とか？」

「あら、察しのよろしい。この試験は最終日に実施するように手配しておきますわ」

うわぁマジなのか。

薄いといっても50ページはある本を片手に引きつった笑みを浮かべてしまう。

最終日ということは、残された時間はあと1週間と数日だけだ。

この本の中の知識で俺が持っているのは3割がいいところだろうし……。

「（こりやなかなか厄介だぞ）」

特に地名なんて全然知らない。

というか俺はそいつの覚えるのが苦手な方なのだ。

魔法関連は結構すんなりと頭に入るんだけどなあ。

「やはりこの世界で生きていく以上、その程度の知識はあって当然のものですから」

「わかってますよ。一生懸命覚えてきます」

「うふふ、頑張ってくださいね」

ま、なんとかなるだろ。

どう考えてもあのラファール生成試験よりはマシなはずだし。

「それではお話はこれだけですか？」

「ああ後……いえ、やはりこれはまた別の機会にしておきましょう」
「ちょ、ちょっと何ですかそれ。めっちゃ気になるんですけど!？」

ものすごく意味ありげだったぞ。

「そうですねえ、1つ言えることは……何か異常を感じたときは障壁を張っておくといいでしょう」

「はあ、よくわかりませんが実践できるようにしておきますよ。
では失礼しました」

「ええ。何かあればまた呼びますね」

そもそも異常ってなんだ、と訊いても答えて貰えなさそうなので部屋を後にする。

今は試験に向けて勉強しないとな。将来のためにも。

この時俺は学園長の言葉の意味を全く理解していないまま、すっかり茜色に染まった大空を高い窓から見上げていた。

そんな御剣拓磨と同じ夕暮れを黒髪の女性も目を細めて覗いていた。

誰に話しかけるのでもなく、ただ彼女は静かに呟く。

「もうそろそろ時が満ちる頃。気を付けるのですよ、タクマくん」

それは彼に襲い掛かる本当の意味での戦い。

今までとは違う、命を賭けなければならぬほどのもの。

彼にはあまりにも荷が重すぎるかも知れないが。

ただ、あの黒髪の少年が上手くやってくれることを。

不安になるような言葉とは裏腹に彼女は確信していた。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep: 6 - 5 【負けてばかりじゃ――】

Episode 6 - 5 【負けてばかりじゃ――】

「――ええつと中央政府と治安維持局、それから外世界統括機
関の3大組織を合わせてトリニティ、だったか？ ……うん、よ
しよし合ってるな」

学園長から新たな試験課題をもらった次の日の朝。

いつになく早く教室へと辿り着いた俺は穴埋め問題を解きながら
時間を潰していた。

試験範囲の問題数は100を超えるのだから、暇な時間を割いて
暗記していかないと。

「（にしてもやっぱり地理が覚えづらいなあ）」

流石にすべての山川や島、街の名称ではなく有名所だけが問われ
ているのだが、やはりそれでもキツイ。

大陸の形を始めとしてゼロから覚えなないといけないのだから。
こればかりは何度も地図を確認するしかないようだ。

正直こういう系の暗記は苦手なのけど……。

他の異世界出身の奴らは既に通った道。俺も負けてはいられない。

「んっ？ ああ、もうこんな時間か」

不意を突いた心地よいチャイムの音。ホームルーム開始の予鈴で
ある。

集中しているとあっという間に時間は過ぎ去ってしまうもんだ。

大きな欠伸をしてから半目で辺りを見回すと机に向かうクラスメイト達の姿が映る。

やはり試験が直前に迫っているだけあって皆勉強しているようだ。まっ、両隣に寝ている赤毛竜人とサキュバス少女は別らしいが。

「おい、ラグナにミリオム。お前ら試験勉強はいいのか？」

「んえ？ 私は週末に本気出すから心配はご無用よ」

「同じく俺もだぜ。追い込まれてからのほうが燃えるдарお？」

両サイドから眠たそうな口調で返って来るそんな声。

こっちも人を心配している余裕はないが、何だか不安になってくるな。

「——さあお前ら注目、朝のホームルームを始めるぞ」

半ば呆れていると、今度は逆に凜とした少女の声が教室に響く。気付かないうちにクリス先生が訪れていたようだ。

「（今日は確か実習訓練があつたよな。気合入れないと）」

また今回もたくさん勝負を申し込まれているわけだし。なんとか先週の雪辱を晴らすことができればいいな。

今日も頑張れよと笑みを浮かべるちびっ子教師の言葉に耳を傾けつつ、俺はそんな闘気を胸に抱いていた。

・
…

魔法工学と錬金魔術の講義が終わった後、瞳に映る景色は教室ではなかった。

見る者を圧倒させる壮大な楕円状のドーム——コロッセオ闘技場。

内部は色鮮やかに洒落た造りに仕上がっており学園自慢の施設だという。

午前後半の授業はこのコロッセオを舞台にした魔法決闘の実戦訓練だ。

もっとも各自それぞれ戦いたい奴と戦うだけなので授業とは言えないかも知れないけど。

「それじゃあいつも通り昼休みまでフリーバトルな。んでこの講座、実は今日で1年生最後だから頑張れよ」

そう男性教師が合図をするのと同時に人が動き始める。

つか今日が最終日だったのかよこの講座。

まあ2年生になってからもあるだろうから気にはしないが。

「（最後は最後だしね。少しぐらいはいい結果を残さないとな）」

よしッと気合を入れて昨日最初に勝負の約束をしたあの少女を探す。

ええっと、どこいったんだアイツは……？

「——つりや！　うふふ、さあてワタシは誰でしょう？」
「ぬわっ!？」

目を細めて人混みの中を覗いていると、不意に後ろからギュッと抱きしめられる。

何事だと首を回せば真後ろにしてやったりと微笑む少女が一人。

「なんだミリオムそこにいたのか。あんまり驚かせないでくれ……」

「甘いわね、驚かせたくてやったんじゃないの。クスクス」

「まったくワケが分からん。おかげで変な声が出たぞ」

体を捻って拘束を振り解こうとする前に、パツと腕を放して距離を取るミリオム。

くっ、妙に素早いヤツめ。

小さな溜息を吐いてふと視線を戻すと、既に彼女は戦闘態勢に入っていた。

可愛らしげな黒翼と尻尾を顕現させてサキュバス化。

さらにタクト状の黒きラファールゼもその手に握られている。

「さあさあ、アンタがどれくらい強くなったのか見せてもらうわよ」
「もちろんだ。こないだの借りをたっぷり利子付きで返してやる」

お互い楽しそうにそう言い放って最寄りの戦闘用のコートへ歩き出す。

「おうおう早速来たか。おーい皆、タクマっちのリベンジが始まるぜ！」

「ちよっ、何当然のように人寄してんだお前は」

「へへへっ、いいじゃねーかよ別に。見られて興奮するだろ？」

石畳のコートへ立つ姿を見たラグナが嫌らしく笑う。
これから決闘するのに興奮させてどうするつもりだ。
いや、そもそも俺はそんな変態じみた性癖はないし。

「って、言ってる間にみんな集まっちゃったわよ？」

「恥ずかしいなあ。勘弁してくれよホント」

ミリオムの声に視線を横にずらすとまさに言葉通り。
クラスの大半、いやほぼ全員がコートの周りに佇んでいた。
その中には当然トウカやミア、テオの姿も紛れていて。

しかもなんか端の方で先生まで興味深げにこっち見てるし。
こりゃみつともないところは見せられないぞ……。

『ハアッ!』

刀身が青白く光るその長剣に加え、片手には白銀の魔法銃を。
苦笑いの顔に冷や汗を垂らしながら俺も声を上げて武器を構える。

もうラファールゼの顕現は呼吸をするかのようにお手の物だ。

「ジャツジはこのラグナ様が務めるぜ。さあ二人とも準備はいいか
?」

「見ての通りよ」

「俺もだ、いつでも始められるぞ」

「良い返事だぜ。んじゃいざ尋常に、決闘開始ッ!」

ラグナのどでかい声を合図に俺とミリオムの目が光る。

彼女は早くも空へと舞い上がり得意の攻撃魔法を詠唱し始めた。
アイツは武器の形状から考えても近接向きではない。

なら、ここは剣を持つてる俺が一気に叩き込むべきだろう。

『翼を授けよ、アーレクラージュッ!』

俺も早急に飛行加速魔法を詠唱して自身の身体能力を向上させる。
テオからもらったこの魔法、早速使う機会が来たようだ。

『まずは一発目行くわよ！ 燃え尽きなさい、魔火の矢ッ！』
Fire Bolt
「（おっ、これは何とか障壁で防げそうだな）」

空から降り注ぐ火炎弾の魔導力を見て笑みを浮かべる。
少なくとも昨日喰らったラグナの爆撃よりは数百倍マシだ。
俺はエーテルバリアを左手に展開して迫る魔弾に挑む。

すると読み通り張られた光の壁に触れた火炎弾が消滅していった。
よっしゃこれで！

「行くぞミリオム、セア——ッ！！」
「んなっ！？ ちょ、ちょっと待ちなさいよ！？」

誰が待つものかと。

慌てた声を上げるミリオムへ念話を飛ばしてやる。
ニヤリと口元を歪め、俺は光るセイバーをまっすぐ彼女へ突き立てた。

「勝負ありじゃないかいミリオムさん？」
「ぐ、ぬぬ……」

俺は鋭い剣先を彼女の細い首元で静止させていた。

ここは例の結界空間魔法の中なので負傷の心配はない。
だから別にこのまま叩き斬ってやつても良かったのだが、やはり
女の子が相手じゃどうもやりづらいからな。

それにどちらにせよ、俺の勝利は揺るがないだろう。

「……牽制で前みたく射撃戦に持ち込むつもりだったのに、まさかそれを打ち消して突っ込んでくるなんて」

驚きまた感心したような瞳をこちらに向けるミリオム。
どうだ、結構いい具合に一勝目を飾れたんじゃないか？

「でも、まだまだ甘いわねタクマっ！」
「——なッ！？」

心の中でほつと胸を撫で下ろしていると、いきなり少女の鋭い声が飛んだ。

目を見開くと黒いタクトを振り上げているミリオムの姿が映る。
こ、こいつ！？

「まだまだ私は戦えるしね。はっ、せいやッ！」
「ぐっ、危ねえっ！？」

鞭のように迫る指揮棒を咄嗟に引き抜いた剣で弾く。
チッ、なかなか重いな。このタクト近接戦でも使えたのか。
唐突な反撃に不利を悟った俺は一旦地上に降りて体勢を整え直すことに。

「あはは、残念だったねタクマくん。ミリオムさんはギブアップしないみたいだよ？」
「そうらしいな。まあ今のは確かに俺が甘かったわ」

すぐ後方のコート外から飛ぶテオの声に苦笑いを浮かべてうな垂れる。

こりゃ心を鬼にしても叩き斬っておけば良かったんだ。

「ミリオム、次は容赦無く斬り伏せるからな」

「嫌ねそんな怖い目しちゃって。もっともアンタに次はないけど！」

キツと宙に浮かぶサキュバス少女を睨みつけて身構える。

次の瞬間彼女の持つ漆黒のタクトから複雑な紋章が浮かび上がった。

早速次の手を撃ち込んでくるつもりらしい。

「これは……闇属性の攻撃魔法だな？」

『ええ、そして私の必殺技よ。果たしてアンタに見切れるかしらね、
Demon Bullet
淫魔の黒夢ッ！』

高らかな魔法名^{ワード}の詠唱と共に漆黒の魔弾が解き放たれる。

咄嗟に魔法陣に含まれる構成式を見た限りじゃ、どうやら追尾性のある魔力弾みたいだが……。

なんて考えている間に3つの黒弾はすぐ目の前に！？

「飛んで撒くしかないかッ」

足早に地を蹴り未だに継続している飛行魔法で空中へと回避。

しかしミリオムの魔力弾も同じように方向転換して俺へと迫る。

「いくら逃げても無駄無駄あ！ 大人しく被弾しちやいなさいな」

「チィッ！？」

宙で高スピードの動きをして避けてみるが、3つの魔弾はミリオムの言う通りしつこく後に続いてくる。

くそめ、これじゃあ埒が明かない。

「（さっきみたいに障壁で打ち消せればいいんだけど……）」

今回の魔法は前のファイアボルトと比べて魔導力が大きすぎる。彼女曰く必殺技とはどうやら過言じゃないようだ。魔力属性も俺の苦手な闇だしねえ。

全力で障壁を張っても貫通されてしまうリスクの方が高いだろう。

「となりや、コレを使って対処するしかないよな」

激しい風の中、右手に光る長剣を見やって小さく呟く。少し不安だけどこの剣を、自分を信じるとしよう。

「——どおりやあぁッ!!」

魔弾の一つが真下を掠めた直後、俺は腹の底から咆哮を上げて長剣を振り下ろす。

返ってくる確かな手応えに込める力をさらに強めて。バレーボールのような黒弾を、そのまま真つ二つに斬り分けた。

「うげっ、嘘お!？」

その光景を真正面から見ていたミリオムの口から叫びが漏れる。クラスメートたちがいる地上からも大きな歓声が耳に届いた。よっし成功! 次のも上手くやるぞ。

「せえい、やあぁッ!!」

今度は両サイドから同時に襲いかかってくる2つの魔弾。俺はまず右手側の方に加速し、横薙ぎに剣を振るう。

破れて消滅する魔弾を確認してからすぐさま逆に方向転換。

すぐ目の前まで迫っていた最後の一つを真上に斬り上げた。

「ククッ、今度こそ決めさせてもらうぞミリオム」

高速で動かしただ体をそのままに、長剣を振り上げてただ呆然とする少女へ駆ける。

するとその彼女はハッと慌てた色を顔に浮かべて。

「あわわ……ギ、ギブギブッ！ 私の負けよタクマ！？」

「ふうんそうかい。でも、この一撃だけは貰っておけッ！」

その言葉を放った直後、勝負は決まった。

青白色に輝く刀身は今度こそ彼女の体を捉えたのだ。

もっとも、結界の中だから彼女の体をすり抜けたただけだけど。

「いつつつ……。ラグナの言うとおり、本当に負けちゃったわね」

しかしやはり灼けるような痛みは感じるようで。

笑みを浮かべながらもその顔は少し苦しそうだ。

「ふらふらだなオイ。大丈夫か？ ほら」

そのままでは流石にいたたまれないので体を支えてやる。

「ん、大したことないわよこれぐらい。でも……ありがとう」

何だか照れくさそうに微笑むミリオム。

む、そんな顔をされてはこっちも気恥ずかしくなるじゃないか。

「（ま、でも無事に初勝利を飾れて良かったな）」

途中ヒヤッとすることが続いたが上出来だろう。

この調子で次の相手ともいい勝負ができればいいんだけどね。

……少し休憩が欲しいかもだけど。

熱くなる心の興奮が確かに残る中、クラスメートたちの歓声に溢れる地上へゆっくりと降りていった。

- Coming Soon Next Story ! ! -

Ep:6-6 【少しは近づけたかな？】

Episode 6-6 【少しは近づけたかな？】

珍しい次期に異界からやってきた転入生、ミッルギ タクマ御剣拓磨。

そんな彼が初めて得た魔法決闘の勝利から少しばかりの時間が過ぎた頃。

「あら、また勝負するんですかタクマくん？」

「もう一戦だけな。時間的にはこれで最後になりそうだしっ」

「そ、そうですね……頑張ってね」

黒髪の少年はおうと楽しそうに答えて足早にコートへ駆け出していく。

その後ろ姿を目で追いながらミアはそよ風に桜髪を揺らされていた。

「あはは、結構火が付いてるみたいだね彼」

「少し張り切りすぎている気もしますけど。もう7人目ですよ」

ロッドに跨りながら真上を浮遊するテオへ言葉を返しながら。

少女は亜空間から小さな椅子を取り出して静かに座す。

どうもこの魔人と天使は2人ともその場で次の勝負を見守るらしい。

「相手は……アッシュくんか。彼のラファールゼは確か大剣だっけ」

「ええ。戦績も悪くなかったと思いますから、タクマくん苦戦するかも」

「同じタイプの武器でもやっぱり熟練度が違うからねえ」

確かにラファアーゼは本人に最も適した形状の魔力媒介だ。
その使い方もある程度は原初的に理解し習得している。

だが、テオの言うとおり熟練度としての差は当然付いてしまう。

少なくとも1年以上は己のラファアーゼと付き合っている彼らと、
つい先日創り上げたばかりのタクマとではどうしても距離が開いて
しまっているのだ。

もちろんこれは戦闘だけではなく、日々の経験値についても言え
ることだが。

「そういう意味ではなかなかやるよねタクマくん。今のところ3勝
3敗だしさ」

「ですなええ。昨日のラグナくんの話、私は正直脚色かと思ってた
んだけど」

「いやあ実は僕も。少し大げさに言う癖があるからねラグナは」

そんな談笑を交えつつ。

2人は石畳のコートで青白色の長剣を構える少年に視線を向け直
す。

——もう試合は始まっていたのだ。

「飛ばしていくぜ。俺の太刀筋、どこまでお前に見切れるかな！」

「さあね。まっ、できるところまで受けてやるよ」

最初に攻撃を仕掛けたのはアッシュであった。

身の丈ほどある巨大な両手剣を軽々と振りかざし、相手の首を狙
って斬り掛かる。

だがしかしタクマはその軌跡を手に持つ剣でしっかりと受け止め。

「ふん、随分と軽い攻撃だな。これくらいなら余裕だぞ？」

相手の大剣を難なく弾き返してそう軽口を吐いてみせた。

その姿にアツシュは片目を閉じて後ろへ下がり、体勢を立て直す。

「……なるほど。やはり先週とはまるで別人みたいだ」

「ああ、このラファアーゼのおかげで接近戦の手立てもできたからな」
「ククッ、いいねいいねえ。その調子でもっと俺を楽しませてくれ
やッ」

嬉しそうに口元を歪ませ、今度は素早い連続斬撃を解き放つアツシュ。

タクマはハッと目を見開くと先程と同じように長剣でその軌跡を捌いていった。

刀身から魔力の火花が飛び散るほどの攻防は、さぞ互いの腕に強い衝撃を走らせていることだろう。

「まるで別人……ですか。確かに言われてみればごもつともですね」

そんな決闘の様子を腰掛けながら眺めるミアは感慨深げに小さく頷いた。

ラピスラズリの瞳に映るのはやはり先週までのタクマではなかったのだ。

「（ラファアーゼの覚醒に影響されたのは分かるけど……想像以上の成長具合だわ）」

基礎的な身体能力や相手の動きへの反応速度。
そして身を守る固有結界と魔法を行使するスピードに魔導力。

彼のそんな能力はこの世界での平均的なレベルにまで向上しつつある。

ラファールゼを持たず、主要武器が魔法銃だけだった先週末までのタクマ。

克蘭メンバーとしてその戦い方を多く見てきたミアやテオには彼の成長具合がよく見えていた。

「——もつとも、まだまだ荒削りと言ったところだけだね」
「んえっ!？」

アッシュの斬撃に必死になって対抗しているタクマの姿に少しだけ見入っていると。

腰掛けるミアの背後から不意に彼女のよく知る声が届いた。

「トウカじゃない。さっきまで姿が見えなかったけど？」
「向こうのほうで挑戦を受けてきたのよ。20秒で終わらしてきたわ」

右手に光る黒い短剣を光の粒子に戻して。

まったくつまらなそうに吐き捨てながらミアの隣へ並ぶ銀髪少女。どうやらこの1年間で彼女に勝てたクラスメートは一人もいなかったらしい。

「久しぶりに私が相手になろうか？ 最近あまり体動かしてないから」

「んー、めんどいしパス。今はアイツの戦いを見させてもらうことにするわ」

「……あっそ」

振られてしまったか、と。

残念そうな溜息を春風に寄せ、ミアは意識をコートの中へと戻すのだった。

・
…

本日最後の相手をしてきているのはアッシュというクラスメイト。

実は心の中で勝手にクラスメイトAと変なあだ名を付けていた彼だ。

このアッシュとは先週にも戦ったけど、確か全然勝負にならなかったんだよな。

でも今回は何とか相手の動きについて行けてはいる。

「なかなかいい反応だ転入生。ハッ、せえい！」

「くっ……」

次々と繰り出されるのはギラギラと光沢を放つ刃。

そのモーシヨンに合わせて手の中の長剣で弾き返すのだが、そろそろ限界に近い。

彼の剣は速いだけではなくかなりの重さもあつたからだ。

剣と剣がぶつかり合うたびにその握る手がだんだんと痺れていく。最初の軽い一撃が挨拶つてのはどうやら本当だったみたいだな。

「（にしてもジリ貧だ。いい加減流れを変えないと……！）」

そう決め込むや斬撃を受け流した直後、タイミングよく回し蹴り

を放った。

アッシュは甘いなと笑みを浮かべてバックステップ。難なく避けられてしまう。

——だが、構わない。

この距離なら手を伸ばせばッ、届くから！

「喰らいやがれッ！」

「——っおっ、やっべえっ！？」

伸ばされた刀身が横薙ぎに繰り出される青白色の軌跡。

目の前に迫る光景にアッシュは余裕の笑みを崩す。

その次の瞬間、リーチの長い斬撃は惜しくも相手の腹を掠めた。

「あ、危ねえ……もう少して持つてかれるところだったぞ」

お腹を摩りながら危ない危ないと笑みを向けてくるアッシュ。

くっそ外したか。どうもダメージはあまり受けていないらしい。

「少しは気を使って当たってくれてもいいんじゃないのかい、アッシュ殿？」

「そりや無茶な注文だぜ旦那。俺はそこまで甘くない男なのさ」

「……ハハッ、そりや残念」

そんな冗談を軽く交えながら。

お互い距離を取り、息が整うまで少しばかりの休憩タイム。

「ん、そろそろ決着付けないと授業時間が終わっちゃうな。……よしっ」

間もなく生徒証の時計を確認するとそう漏らして立ち上がるアシユ。

そして黒のブロードソードを天に掲げ、ニヤリと表情を歪ませた。な、何だかすつごく邪悪なことを考えているような顔だなオイ。

「じゃあ時間切れってわけで引き分けにでもするか？」

「アホかねお前は。そんなわけないだろう」

「で、ですよ……」

嫌な予感に少しふざけてみるも、あつさりと流され勝負が再開される。

「ずっと斬り合いつても味気ねえし、最後くらいは派手に決めてやる」

「派手って、お前一体何を――」

尋ねようとした瞬間、天を向くアシユの大剣に火の魔力が宿った。

ただ轟々と燃え盛る赤がその巨大な刀身に纏わり付いていく。なるほど、派手ってのは魔法剣技のことね。

「さあどうする転入生？ 俺は次の一撃で決着を付けるつもりだが」
「どうするって、迎え討つしかないだろうに」

構える長剣へ相手と同じ付加魔法を行使しながらそう吐き捨てる。エンチャントされた火の魔力が青白い刀身を炎の色に染め上げた。

「なんだ、別にギブアップしてもいいんだぞ？」

「嫌だよ。一年生最後の決闘がそんな終わり方なんて恥ずかしい」

「それもそうか。じゃ、恥にならないようせいぜい足掻いてくれッ」

！
」

観客もいるしと首を横に振る俺をその大きな瞳に映して。
アッシュはそんな決め台詞を張り上げ、颯爽と地を蹴り駆け出してくる。

「んなこと言われなくてもっ」

こちらもただ突っ立っているだけなんてありえない。
振り下ろされる火炎剣の軌跡を読んで俺も横に刃を繰り出す。
すると炎を纏った剣と剣が重なり、同時に光る火粉が激しく飛び散った。

それらは危うく顔や手の肌に付着しそうになるが、不可視の障壁によって遮られる。

身を守る固有結界はこのくらいのダメージなら打ち消すことができるのだ。

「やるなあ転入生、いやタクマ。たった数週間でここまで力をつけるとは」

「ぐっ、そりゃクリス先生に随分と鍛えられたしなっ」

爆ぜる魔力のすざましい圧力を両手に感じながら。
まだまだ余裕を覗かせるアッシュに強気な顔と言葉を返してみせる。

だがしかし相手のブロードソードは確実に俺の剣を押し返してきた。

こ、こりやなかなかキツいかも。
少なくともこのままの状況では勝利が見えない。

「フッフッフ、残念だがそろそろ潮時だぞ」

「ぐぬぬぬ……い、いや、まだ少しばかり手はある」

「なんだって？」

口から漏れた俺の言葉にハテナマークを浮かべるアッシュ。

するとそのせいか彼の剣圧が少しだけ弱くなったのを感じた。当然、俺はこの隙を逃すまいと思い付いた反撃へ体を動かす。

強く握る長剣を右手だけに任せ、空いた片手に小さな塊を召喚させた。

白い光りに包まれて手に宿ったそれは白銀の魔法銃。

「へへっ、忘れたか？俺の武器はラファールだけじゃないッ！」

まだこれが残っているんだ、と。

不敵に口元を歪めつつ早急に周りの魔力をチャージする。

この距離じゃ流石に外すわけがないだろう。

「まっ、いいアイデアだが……俺の攻撃の方が速いと思っぜ？」

「——ん なっ！？」

魔力の装填は完了し、あとはトリガーを引いて魔弾を解き放つだけ。

そんな瞬間にアッシュの握るブロードソードがさらに赤く燃え上がったのだ。

やがてその炎の先端は丸い魔力弾へと姿を変え、こちらへ一斉に襲い掛かる。

「覚えとけよタクマ。剣にはこういう使い方もあるってな！」

アッシュの声を合図に至近距離で炎の魔力弾、つまりはファイアボルトが炸裂。

その強大な衝撃に俺の固有結界は破れ、体ごと真後ろに吹き飛ばされてしまった。

「（く、くそつ、また相手のほうが一枚上手だったわけか！？）」

アイツは剣にエンチャントした魔力を魔力弾として再利用したんだな。

当然俺のように魔法銃で一から魔力を集めるより速いわけだ。

これは良い経験と言つか、発見をさせてもらったな。

「うぎゃっ！？ つゝ、いててて……」

そんな反省をしているとあつという間に地面へ転がり落ちて尻餅をつく。

受身を取るぐらいの余裕はあったけど、流石にこれ以上は無理っぽい。

なので青白色に輝く剣を光の粒子へ戻し、俺は潔く参りましたと白旗を掲げる。

偶然にもその声に続いてチャイムが鳴り響き、最後の実戦授業は幕を閉じたのだった。

「（でも、少しは互角に戦えるようになってきたんだよな）」

3勝4敗という今日の戦績に俺はそんな確信を胸に抱いていた。

今のアッシュやラグナのようにまだまだ届かない相手もいるけど。なんとかミリオムぐらいなら越すことができたんだ。

時間はあり余っているのだし。少しずつ、今の差を埋めていけばいいだろう。

そして、いつかはあの銀髪^{トウカ}少女に――。

「おいタクマっち！ そんな所に突っ立ってないで、さっさと飯食いに行こうぜ？」

「あつ……い、言われなくてわかってるっての！」

いかんいかん、少し自分の世界に入り込んでいたか。
闘技場のエントランス前で大声を張り上げるラグナの姿が目映^{コロッセオ}る。

さらによく見るとトウカにミア、テオもその隣に佇んでいて。

どうやら今日は克蘭メンバー全員で食堂へ向かうらしいな。
今日は随分と張り切ったことだし当然お腹は一段と空いている。
何の定食を選ぶかは決めていないが、どれでも箸はよく進むことだろう。

「（こういつ時ぐらいは試験のことを忘れていたいな……）」

そういつわけにもいかないと知りつつも。

暖かな春の陽射しとそよ風に包まれる中、俺はみんなの元へ地を蹴っていた。

M a g i c a l R e v o l u t i o n

C h a p t e r 3 E n d

-
C
o
m
i
n
g
S
o
o
n
N
e
x
t
S
t
o
r
y
!
!
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0366q/>

マジ レボ！ ～剣と魔法と革命と～

2011年11月6日10時37分発行